アーマード・コア
ブレイブ ニュー ワールド

ARMORED CORE
BRAVE NEW WORLD

神野淳一



神野淳一

アーマード・コア
ブレイブ ニュー ワールド

ARMORED CORE BRAVE NEW WORLD



Armored Core: Brave New World
By Junichi Kamino

Please refer to this link for full-colour scans of the cast, art, and more. imgur.com/gallery/CoUTUWb

Info about the novel: taptroupe.neocities.org/archives/acbrave

CONTENTS

PROLOGUE
【プロローグ】

レイヴンは迫り来る砲弾の嵐を予見し、全力で回避・旋回機動をとっていた。

しかし無数の着弾が愛機の装甲を削り、衝撃が彼の内臓と脊髄を激しく揺さぶった。機体は一瞬、動きを止め、更なる砲弾を呼び込んだ。それでもレイヴンは対戦機を視野に入れようと足掻いたが、無駄に終わった。機体コントロールがロックされ、ヘルメット・マウント・ディスプレイ（HMD）に色鮮やかな《LOSE》の文字が浮かび上がった。

「クソが！」

その言葉は自身に向けられている。

既に勝者は自ら愛機の肩の上に乗り、観客にアピールを始めていた。

レイヴンはヘルメットのシールドを上げることすら出来ず、ただ俯いた。

機体ロックが解除され、レイヴンは自陣のゲートに機体を歩かせる。

勝者は光を浴び、敗者は暗闇に退く。それは約束されたこと。

闘技場（アリーナ）。

それは鴉たちが翼の誇りに懸けて雌雄を決する舞台。単結晶チタン・ナノカーボン複合材の機体をぶつけ合い、高密度エナジーと重元素弾とミサイルで互いを叩きつぶす、時に生死を分かつことすらある過酷な戦場。そしてそれこそが二千年前のローマ時代から変わらない、闘技場の本質かもしれない。

アリーナでの試合の合間にレイヴンは戦場に向かった。
この時代、アーマード・コア（AC）と呼称される人型兵器が戦場を支配している。その多くを『レイヴン（ワタリガラス）』と呼ばれる傭兵が駆っていた。一つの軍事超大国が絶大な影響力を持つ勢力地図は消え、今は多極化した勢力がモザイク画のように複雑な色を形成している。そんな中で民間軍事会社は市場を広げ、世界情勢の一端を担うほどになっていた。レイヴンはそれらの軍事会社に属し、またはフリーで世界を駆け巡っている。
ＡＣは機体を外部拡張し、汎用性を持たせるように発達・進化してきた。各種の専用部隊を維持出来る各国家軍に対し、傭兵はバックアップをほとんど望めない。その為ＡＣは単機で作戦行動を行えるよう、コストを犠牲に汎用性と拡張性を重視し、開発されている。今回のように交戦が見込まれる探索ミッションならば、索敵・巡航・戦闘能力をミックスした機体を構成（アセン）して、ほぼ自力のみで任務に就けるという訳だ。
レイヴンは平坦な荒野を二脚駆動で淡々と進んでいく。低軌道衛星からのデータはこの周辺に敵戦力があることを指し示していた。
『聞こえるかレイヴン？　警戒領域に入る。トラップも考えられる。気を付けろ』
指揮をするのは同じ民間警備会社から派遣された管制官だ。
「了解。警戒を続ける」

レイヴンは抑揚のない返答をする。
今の彼を支配しているのは、アリーナでの敗北だった。任務中に引きずるのは良い傾向ではない。が、それが分かっていても、あの敗北が脳裏から消えない。
(落ち着け。いつものようにやれば良い)
一度集中力を失うと、坂道を転げ落ちるように己を失うこともある。今の彼は正にその状態だった。
不意にアラートが鳴り、榴弾がＡＣの足下に着弾。乾いた大地を浅く掘り返した。
「迫撃砲か」
空を見上げると無数の白い煙が放物線を描いて落下を始めていた。
アドレナリンが急激に分泌されるのがわかった。
レイヴンは一分の隙もない操縦で榴弾の雨をかわし、迫撃砲の位置を探る。
(炸裂範囲から言って歩兵だな)
歩兵用の迫撃砲程度でＡＣを破壊出来ないことは誰でも知っている。囮か誘導目的、または時間稼ぎだ。どこかに機動兵器がいる……そう、ＡＣが出て来るかもしれない。
「まだ何か見つからないか？」
『待て……来た！　圧縮型燃料電池反応。ＡＣが起動した。長距離砲の射程に入るぞ』
ＨＭＤにＡＣを確認。先制の一撃が放たれていた。曳光弾のような予測砲撃線が現れ、レイヴンはそ

れを見て直撃を避ける。空中で近接信管が作動し、衝撃で機体が揺れる。レイヴンは怯むことなく突撃し、自機の間合いに持って行く。

回避、そして射撃。武器の間合いを読み、隙が生じないよう最大限気を払いながら敵機をロック。

（当たれよ）

レイヴンはトリガーを引いた。銃弾は敵機に着弾し、装甲を抉る火花を生じさせる。

弾が切れ、装弾の間合いに入る。

『気を付けろ！　四時方向、援護が来た！』

管制官の声にレイヴンは周囲を窺う。目の動きに反応してＨＭＤが四時方向を示す。もう一機いた。

目前のＡＣはブレードを振り上げており、後方からはライフル弾の予測砲撃線が迫っていた。

万事休すか。

そのときだった。

『レイヴン！　目の前に集中しろ！』

管制官と異なる声。レイヴンは援護のＡＣをレーダーに確認。彼はその声を信じ、ブレードが振り下ろされるモーションだけを見つめた。

（超至近距離だ……かわせないな。だけどこっちもありったけ叩き込めるぜ）

銃口を敵機に突きつけ、右腕武器のトリガーを引く。

（この戦いだけを考えろ。それが戦場での正義だ）
レイヴンは機体と一体化し、目前の敵機の破壊だけに集中した。

「よぉ。無事で何よりだったな」
彼にアドバイスをくれたレイヴンは自機の肩に乗り、肉声で声を掛けていた。
敵のＡＣ二機は戦闘能力を失い、白い煙をか細く上げていた。どこかで見たような光景だった。
援護してくれたのは、皮肉にも先日彼が敗北を喫したレイヴンだった。あのときは顔を見られなかったが今は違う。コクピットをオープン状態にすると、レイヴンは陽光を浴びた。
「ああ。お互いな」
レイヴンはヘルメットを脱ぎ捨て、敵であり戦友であるレイヴンを見つめた。自機の肩に立つレイヴンは彼の姿を認め、微笑んだ。
「あんただったか。奇遇だな」
「ああ。確かに奇遇だ」
「またアリーナに戻るんだろう？」
「当然だ」
「待っている」

「今度は、負けない」

この時代、鴉たちは片時たりとも羽を休めていない。

戦場で死肉をついばむ鴉と蔑まれるレイヴンたちは、今日も戦い続けていた。

彼らは戦いの中でしか生きられないのかもしれない。

第一話

TOKYO FRONTIER

【トーキョーフロンティア】

見渡す限りの緑の海の中から、長細い金属の棒が突き出してきた。そして数秒後、それは現れたときと同じように静かに緑の海に消えた。
『サーティ、敵機は見えたか？』
若い男の声がヘルメット内に響いた。
「いや。だが支援部隊は見つけた。いつの間にか後方に回り込んでいたようだな」
サーティと呼ばれた男は低い声で応え、コクピットのコンソールに張り付けてある写真に指をやった。小さな女の子が二人。中央に男が一人。男は若かりし頃の彼だ。女の子たちは彼の娘だろうか。
『それは重畳。さすがベテランレイヴン』
「お前のバックアップがあってこそだ」
『本当は娘の方がよかったんだろう？』
サーティは首を小さく横に振った。
「理由は話したとおりだ」
『謎の戦闘ユニットか？　娘を危険な目に遭わせたくないのは分かる』

「弟子の試合日程に重なっていたしな。あいつにはミルキーが必要だ」
『ああ……あの女の子か』
「あれが女の子なんて珠か。まあ、可愛いところもあるか」
サーティは鼻の頭を指で撫で、また写真に目をやった。
「済まないな。またお前を戦場に引っぱり出してしまった」
『らしくない物言いだな。他ならぬサーティの頼みだ。来て当然さ。それに退屈が過ぎていたしね』
「俺もお前も同じ人種ってことだ。炎の中に生きなければ死人同然のな」
『確かにそうかもしれない。それが僕自身の、戦場に戻った理由なんだろう』
少し間が空いた。
『データ解析が終わった。まずいな。後方部隊にＡＣがいる。起動した！』
「大した問題じゃない」
サーティは四本の脚を広げて自機の機体高を低くし、前進を始める。相手のアセンは不明。射程圏内までは慎重に前進するしかない。ジグザグに歩きながら数百メートル進むと、レーダーに反応が現れた。それと同時にグレネード弾が飛来。視認前だ。密林を焼き払い、燻し出す意図だろう。グレネード弾は大木に命中し、激しい炎と眩い光が周囲に放たれた。そのあおりを受けて機体の温度が激しく上昇を始める。熱帯雨林は高温多湿で機体冷却には不利だがイエローゲージで留まった。

今度はこっちの番だ。

赤い光点を正面に向け、ブーストアップ。機体を軽く空中に翻らせる。

ＨＭＤにマーカーが現れ、幾重にも生い茂った緑の中に中量二脚を確認する。機体が再び緑の海に潜るとグレネード弾が頭上を通過した。

「好きなだけ無駄弾使ってくれ」

敵機との距離を詰め、跳び、ロック。有効射程内の中で最も弾丸が収束された間合いで、両腕マシンガンを放つ。中量二脚に複数着弾を確認。着地した後、機体を側面に滑らせる。サーティはそれを二度繰り返し、中量二脚は距離を詰め始めた。

「まだ青いな」

敵の武装が不明なまま接近を試みるのは無謀だ。中量二脚はブーストアップし、まるで息継ぎをしたいかのように、緑の海の上に出る。サーティはそれを待っていた。

「長物は隙が大きいから使いにくくてなあ」

肩部〝主砲〟の砲身が閃光に包まれ、一瞬の後、前方に青い閃光が放たれる。青白い光は熱帯雨林の木々を焼き払いながら上空に到達し、中量二脚を直撃。そして着弾点を中心に大きな青い光球が生じ、中量二脚は動きを止めて、墜落同様に着地した。サーティはその隙に機体を滑らせて敵機の射界外に移り、マシンガンを連射する。中量二脚は射界を確保しようともがいたが、彼はもう蜘蛛の巣に囚われた

虫だ。大した反撃も出来ずに最後は戦闘不能になった。

『相変わらずお見事』

「お前と違って現役なんだ」

『何言ってんの。歳を考えなよ、歳を』

「バカいえ。まだ中堅だ」

『言ってな。今の内に補給ベースを叩こう……い、いや、待て！　何か来る！』

「例の奴か？」

ＨＭＤに映るレーダーに光点が生じ、それは急速に距離を縮めていた。

『支援を回す。無理はするな』

「分かった」

サーティはそう応えながらも、高揚している自分を見つけていた。

謎の戦闘ユニット。戦場では良くある話だ。二十世紀、実験中の新兵器がＵＦＯに間違えられたのもその一例だ。自分自身そんな新兵器の開発に関わった経験もある。しかし今回の奴は単なる新兵器の域を超えた凄まじい戦闘能力を発揮し、見た者を完膚無きまでに叩きつぶすと聞いていた。

（一体どんな奴だよ、オイ）

謎の戦闘ユニットは近距離まで来た。

（大口径レーザーが怖くないのか？）

熱帯雨林の枝葉の間に黒い物体を視認。サーティはそつなくそれをロックし、トリガーを絞った。稲妻を数本束ねたような青い光条が緑の葉を焼き、黒い物体を直撃。サーティは次の間で機体を上昇させ、吸い込まれるように青空に躍り出た。

「なんだ……これは」

それは冷戦時代の巨大戦闘機ほどもある物体だった。異様なほど巨大な推進器を機体上部にマウントした〝それ〟は、空力を無視して絶大なパワーだけで宙を駆けている。黒光りする装甲と機体各所に散見される真鍮の輝きが、サーティの網膜に焼き付いた。

〝それ〟は大空を端から端まで駆け抜けたかと思うと、急旋回で戻ってきた。まだこっちの機体降下が始まっていない。それほど僅かな間だ。サーティは武装を切り替え、マシンガンで〝それ〟を迎撃する。だが黒光りする装甲は雨のように降り注ぐ重密度弾をことごとく弾いた。

機体が緑の海に潜り、地面を踏みしめた後、ようやく大口径レーザーにエネルギーが装填された。サーティは直上を旋回する〝それ〟をロックすると、もう一度レーザーを見舞った。放たれた膨大なエネルギーが〝それ〟を直撃し、青白い光球となって膨れ上がる。だがその直後に異変が生じた。

異変としか言いようがなかった。

青白い光が止んだとき〝それ〟の代わりに人型兵器が出現していたのだから。

黒と金に彩られた異様な機体だった。
機体装甲の輝きがサーティの目を奪ったそのとき、〝それ〟がミサイルを斉射した。
『後退だ！　後退するんだ！』
無線機から声が聞こえた。
（アスマ……お前がいてくれてよかった）
機体は爆風に吹き飛ばされ、ジャングルはミサイルの業火に焼き尽くされる。
黒と金色の人型兵器は炎の向こう側で再び飛行形態をとり、空に舞い上がった。
サーティの四脚が指揮車の前に姿を現したとき、アスマは心から奇跡だと思った。彼の救援に向かっている支援部隊は、まだ接触予定エリアにすら到達していない。サーティの反応が途絶えた後、アスマは即座に帰投プログラムを発信・作動させた。それが功を奏したのだ。機体が無事ならパイロットの生還確率は高い。コクピットユニットの固定ボルトを爆破して排除すると、アスマは衛生兵を押しのけて融けて歪んだハッチを開けた。
「サーティ、無事か？」
しかし返事はなかった。アスマが恐る恐る中をのぞき込むと、コクピットは血の海と化していた。すぐに内部装甲の破片が彼の腹部を貫いているのだと分かった。アスマはコクピットに滑り込み、耳元で

幾度も彼の名を呼んだ。サーティはアスマの声で意識を取り戻し、小さく顎を上げた。死を悟った男は、最後の何かを紡がずにはいられなかったのだろう。アスマの顔を見つめると、言葉を繰り始めた。

「アスマ……知っているよな？　このジャングルは、人の手で作られたってことを……」

「なんで今、そんなことを」

アスマはサーティの顔をのぞき込もうとした。だがヘルメットのシールドは彼の血に染まり、叶わなかった。アスマはサーティの言葉を遮る術を、理由を、思いつかなかった。

「人がジャングルを焼き払い……作物を育て、土地が痩せ……人が、動き、再び……大地に緑が、溢れる……人の世もそうあるべきだ」

「ああ。いつも言っていたろう。『俺たちはジャングルを焼き払う炎だ』って」

「でもな……娘たちには言っていなかったような気がするんだ……何故かな」

「大丈夫だ。僕が、伝えるから」

サーティは安心したように面を上げる。そして血に濡れた指をのばし、写真に触れた。

三人の笑顔の写真だ。

彼と二人の娘たちの写真だ。

ヘルメットのバイザーの下、サーティの口元が微かに緩んだように思われた。

「サーティ」

アスマは指先で写真に触れ、項垂れた。
「約束だ」
そして男は静かに瞳を閉じた。

ミッション［1］

「ようしボク。しっかり掴まっていろよ」
「〝ボク〟じゃない。ワタシは女の子だ」
「そうか。サーティが小僧って言っていたから男の子だと思っていたよ。男の子にしては可愛過ぎるなあと思っていたよ」
「えぇえ？」
「はは。大丈夫。すぐ後方から援護が来る。それまで持ちこたえられればね」
「大丈夫！　ワタシ、運だけは強いんだ！」

「それは心強い。それならさしずめ、君は僕の勝利の女神って訳だ」

☆　☆　☆

「勝利の女神、か」
アルプスタンドの最上段から深月はぼんやりとアリーナの試合を眺めていた。
（あのとき、油断さえしなければこの決勝の舞台にいたのはワタシの方だったのに）
幾度かそう心の中で繰り返している内に、勝敗は決した。夕陽に染まる勝者のACは誇らしげだ。勝者には栄光が約束されている。この新人トーナメントの優勝者には一〇位のランカーへの挑戦権が与えられる。一方、一次予選の敗者には下位のボトムリーグとの入れ替え戦が待っていた。
「……ミヅキ？」
背後の声に深月が振り返ると、パステルカラーで身を固めた、お人形のように愛らしい少女が心配げに深月を見つめていた。
「ミルキー。心配掛けてごめん。彼女の状態はどう？」
深月は穏やかな声を作って応えた。
「私の手じゃ負えそうにないわ。やっぱり専門のメカニックを雇わないと」

「専門のメカニックか」
　深月は深くため息をつく。ミルキーは小さな拳を固め、笑顔を作った。
「二人でやればなんとかなるよ」
「そう言ってもう二ヶ月になるけど……」
「レギュラーリーグに上がったばかりで五連敗はかなり危機的状況よね……パパが生きてればなあ」
　ミルキーも俯いてため息をついた。
「ワタシたち、師匠に頼りすぎていたね」
　二人の少女のため息は止まらない。
「……ダメだ。帰ろ、ミルキー」
「うん」
　深月が立ち上がるとミルキーは腕を絡ませる。深月はいつものように少しだけ困った顔をして、二人で帰路を急いだ。

　深月ら〝ダブルハート〟のガレージはトーキョーフロンティア（TF）の外れにある。アリーナからやや距離がある分、家賃は安い。それでもミルキーの父親、深月の師匠であるサーティが半年分を前払いしていなければ、とうに追い出されていたはずだ。駆け出しのレイヴンはタダでさえ金がかかり、アリーナを

戦うには更に金がかかる。高位ランカーだったサーティのお陰で、デビューした頃は彼女らにもスポンサーとスタッフがいたが、彼の戦死が確認されるとすぐに撤退してしまった。

世間の風は冷たい。金に困って整備もままならず、対戦するACに対応したアセンが出来ないようになると後はずるずる落ちていくしかない。ガレージに戻っても、そこにかつての活気はなく、ハンガーに収まる傷ついた愛機〝ウィクートリア〟を見上げ、深月はまた深くため息をついた。

「アリーナやめてミッション入れる？」

ミルキーが諦め顔で言う。

「志半ばで引くと師匠に怒られそうだ」

「そうねーパパ、怖いもんね」

「とにかく入れ替え戦に勝てば首の皮一枚繋がるんだ。踏ん張ろう」

「うん。ミルキーは前向きなミヅキちゃんが大好き！」

「……ワタシ、女の子なんだけど」

「こんなに格好良いのにね。一目見たときから私の王子様なんだけどなあ」

ミルキーにピタリと抱きつかれ、深月は苦笑いする他ない。

そんなとき、不意に乾いた金属音がガレージに響きわたった。深月は胸のホルスターから拳銃を抜き、ミルキーを下がらせる。そして安全装置を上げ、音がした方に銃口を向けた。

「出てこい。撃つぞ！」
「済まない。鍵が開いていたんでね」
整備用測定器の陰から、男が一人、両手を上げて現れた。
「あなた、誰？」
長身痩躯の、端整な顔立ちの青年だった。
「アスマ・グリーンフィールド。元レイヴンだ。以前、サーティと同じ部隊にいたんだ」
「パパの戦友？」
ミルキーが物陰から姿を現した。
「やあお嬢さん。二、三回会っていると思うんだが、覚えてないかな？」
「お生憎様。パパは知り合いが多かったからいちいち覚えてないわ」
「それは残念。そっちは……」
「深月……ダブルハート」
「そう、深月ちゃんだった」
アスマと名乗った男は銃口を向けられたまま、にっこり微笑んだ。
「何をしに来た？　師匠ならもういないぞ」
「知っている。僕は彼が戦死したときに管制官をしていたからね。ここに来たのは、彼に君たちのこと

を頼まれたからなんだ。事後処理に時間が掛かってね。やっと来られた」

「二ヶ月も？」

「ああ。サーティを倒した奴はただ者じゃなかったからね」

アスマは目を伏せた。

「当たり前よ。パパは最強のレイヴンの一人だったんだから！」

「良く知っている。多分、君たちより」

アスマは目を伏せたまま応える。

「……信用出来ない」

深月は拳銃の狙いをアスマに定める。

「ミッション・レコーダーは雇い主に回収されていてね。遺言は聞かせられない。信じないのは君らの自由だが、彼の機体がもうすぐ到着する。話はそれからでも良い」

「パパの機体が……」

ミルキーは身体をこわばらせた。深月は拳銃を収め、そんな彼女の肩を後ろから抱いた。

「大丈夫……ワタシがいるから」

アスマは小さく頷いた後、二人から目を離し、今度はハンガーを見あげた。

そして小さくＡＣに向かって言った。

「久しぶりだな、お前」
ガレージに届いたコンテナの山は中身の全てがＡＣパーツだった。腕部のエンブレムを確認し、ミルキーは静かに泣いた。彼女を落ち着かせた後、深月はアスマを問いただす。
「どういうこと？　まるで新品じゃない？」
「その通り。ほぼ新品さ……破損個所はサンプルとしてはがされたから」
「師匠は何と戦ったんだ？」
アスマは困ったような顔をして、自分より頭半分低い深月と目を合わせた。
「それがね、僕にも分からないんだ」
「説明になっていない」
「守秘事項というやつでね」
「あなた、やっぱり信用出来ない」
「会ってすぐに信用して貰おうとは思っていない。それより感謝して欲しいな。入れ替え戦にＡＣの返還を間に合わせたんだぞ」
アスマはまたにっこり微笑み、一方の深月は真っ青になって頬を手で押さえた。
「まずい。アリーナ本部のマシンチェックの時間は……明後日の一二時だ！」

「四八時間を切っているじゃないか。負けてから手つかずなんだろう？」
「普通なら絶対間に合わないから焦っている。どうしよう？　急いでメカニックを頼まないと。でもそんな金ないし、ミルキーはあんなだし……なに笑ってるのさ！」
アスマは手を当てて、緩んだ口元を隠していた。深月はそれが気に障り、拳を固めてアスマにかざす。だがアスマは動じない。
「ここに新品同様のパーツがあるし、優秀なメカニックはいるし、間に合うよ」
「どこにメカニックがいる⁉」
アスマは自分を指さした。
「これくらい余裕だよ」
アスマは脳天気な笑みを浮かべ、深月は深い疑いの眼差しを向けた。
「金はない」
「それは知っている」
「じゃあ何が目的なんだ？」
「だから、サーティに君たちのことを頼まれたって言っただろう。僕は君たちをこのＴＦリーグの上位ランカーにするために来たんだよ」
アスマは穏やかな笑みを崩さない。

「ダメよミヅキちゃん。こんな男の言うこと信じちゃ。男なんて女を利用することしか考えていないんだから。パパのことも口実に違いないわ。何が目的!?」
深月の背後から声がした。振り返ると目を真っ赤に腫らしたミルキーがアスマを睨み付けていた。
「この〝ダブルハート〟のディレクター（監督）になること」
「言ってくれるわね」
ミルキーは、アスマにガンを付ける。
「分かった。ならこういうのはどうだい？　今回の入れ替え戦は僕の考えたアセンと作戦でいく。もしそれで負けたら僕が一年間、下位リーグだろうとメカニックを無償で務めよう」
「もともと負ける気はない」
深月もアスマを睨み付ける。
「でもアリーナ本部のチェックに間に合わなかったらそれどころじゃないだろう」
「分かった。アスマさんとやら、乗ったわ、その話」
ミルキーは深月の前に出る。
「ミルキー！　良いの？」
「勝ったら僕がディレクターだよ」
「もちろん。背に腹は代えられないわ」

「さすがサーティの娘だ。肝が据わっている。さて、決まったとなれば時間が惜しい。僕は早速作業に取りかかるよ」
アスマはそう言うと自分の荷物らしきトラベルケースから白衣を取り出し、羽織った。
妙に様になっていると深月は変に感心した。
「お嬢ちゃんは現状使えるパーツを洗い出して。僕は機体の損傷チェックをする。時間がない。急ごう」
「仕方ないわね」
ミルキーは無精無精作業に入り、アスマはハンガーに向かう。残された深月はアスマの背中を見つめながら、その場に立っていた。それに気づいたのか、アスマは振り返った。
「君は休んで。試合で疲れているはずだ」
「だけど……人手が足りないだろう?」
「僕に任せておいてくれ。君のアリーナでの記録は飛行機の中で見てきた。君が起きたときにはアセンと作戦案が出来ているはずさ」
深月はゆっくり俯いた。
「……分かった」
「なら、ゆっくりお休み」

深月が久しく聞いたことのない言葉だった。
不思議に落ち着いた。
負けた日の夜は悔しくて眠れないのが普通なのに、今、ベッドに入ったらすぐに眠れそうな気がした。
(シャワーを浴びてぐっすり休もう)
深月は小さく頷いて応えた。
「お休みなさい」

深く、短い睡眠をとり、ガレージの隅の仮眠室から出ると、コアの修理が終わっていた。アスマは携帯端末のキーボードを叩きながらコーヒーを飲み、ミルキーと話をしていた。
「無理よ。相手は下位リーグのトップで勢いがある。慣れたアセンが良いわ」
眉をひそめるミルキーを前に、アスマは余裕でカップに口を付け、深月に目をやった。
「やあ、おはよう」
そうは言っても時計はまだ三時過ぎだ。
「あ、う、うん。どうしたの二人とも」
「武器腕のマシンガンと小型ミサイルで十分だっていうのよ、この男」
ミルキーが機体構成案(アセン)を深月に見せる。

「……武器腕は攻撃力はあるけど、装甲と装弾数の面でマイナスが多いわ」

「だが今の君には良いと思う。僕が見たところ、連敗の原因は勝っていたときのリズムを忘れていたからだ。ここで悪いリズムをリセットするためにも必要だ」

「小型ミサイルは弾切れ時の保険？」

「その通り。正直言えば腕の整備まで手が回らない。照準に関わる精密部位だから手を掛けたいんだ」

「そういうことなら分かったわ」

「ミヅキちゃん……大丈夫？」

ミルキーは心配そうに寝起きの深月を見上げた。深月は頭をかきながら応える。

「この人に任せたんだから。腕の整備に時間がかかるってのも本当だと信じるしかないでしょう。ワタシもレイヴンよ。やるわ」

アスマは満足そうに頷いた。

「これから君はコアにこもってシミュレーションだ。マシンガンのリロード感覚を身体で覚えてくれ。それとオーバードブーストは禁止だ」

「ＯＢ禁止？　ＯＢが売りのコアだぞ？」

「君はＯＢ発動までのラグをうまく処理出来てない。今度の対戦相手もその隙を期待しているはずだ。それを逆手に取ってＯＢは使わなければ、相手に隙が生まれる」

「筋は通っているわね」
ミルキーが悔しそうに応じた。
「分かった」
深月はハンガーに据えられたウィクトーリアのコアに収まり、システムを起動させる。シミュレーションプログラムは既に機体構成案（アセン）の状態に変更されていた。後ろからアスマが顔を出し、言った。
「対戦相手のデータも入っている。僕もがんばるから、君もしっかり頼んだよ」
「言われるまでもない。ワタシの戦いだ」
「その通りだね。失礼した」
深月は少しの間、言葉を失った。
コクピットの中に、いつのことだったか、鼻をくすぐった匂いが漂っていた。
深月は平静を取り戻し、言葉を紡ぐ。
「礼は勝ってから、言う」
「大丈夫。絶対に勝つさ。相手は格下だし。その上、君は強運の持ち主なんだから」
深月はその言葉に驚き、急いで振り返った。だがアスマは地面に飛び降りた後だった。
唇に指を当て、深月はあふれ出しそうになる言葉を押し殺した。

トーキョーフロンティアには三つのアリーナがある。地下の旧発電所を転用した〝アンダーワールド〟。海上の浮遊構造体をまるまる一隻使った〝メガフロート〟。そして東京湾埋立地の中央に位置する〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟だ。入れ替え戦は〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟で行われる。竣工から既に数十年を経ているが、内戦終結後のリニューアルを機に、今では世界中からレイヴンが参戦する第一線のアリーナに生まれ変わっていた。

そしてつい数ヶ月前、新鋭のレイヴンとしてこの舞台で入れ替え戦に臨んだ深月が、今は逆に挑戦を受ける立場となっていた。

深月の機体〝ヴィクトーリア〟は武器腕のマシンガン＋小型ミサイルとシンプル化されていた。最初は戸惑った深月だったが、二〇時間以上シミュレーターをこなした結果、どうにかモノにした。

しかしアリーナの地階部、主に機体制御をバックアップする管制席に着くミルキーは緊張を隠せない。

一方、アスマはその席の後ろで一人のんきな顔をしている。

ミルキーは露骨に不満の表情を向けた。

「大丈夫なんでしょうね？」

「君はいつものようにやってよ」

缶コーヒーを片手にアスマは微笑む。

ゲートが上がり、対戦する二機が舞台に姿を現した。

対戦機は中量二脚で、マシンガンとミサイルを装備している。そこまでは彼がシミュレーションしたとおりのアセンだ。だが、左手武器を見て唇を曲げた。
「左腕に射出型ブレードねえ。ご苦労なこった」
「スポンサー企業が開発中のじゃない?」
「多分ね。当たりにくいが当たればタダじゃ済まない。ミヅキ、くれぐれも接近時に隙を見せるなよ」
『レーザーブレードをかわすつもりでシミュレートしている。問題ないはずだ』
深月から落ち着いた返答があり、アスマは缶コーヒーに口をつけた。
アナウンスの後、バックスクリーンのシグナルが点灯を始める。その数秒の後、アリーナにマシンボイスが響きわたった。
『READY GO!』
二機のACは弾けるように動きだし、互いの距離を詰めた。
深月は小ジャンプをしつつ、マシンガンの射程に対戦機を捉えた。確実にロックしたことを確認すると深月は攻撃を開始。機動中の射撃だ。曳光弾の列が波打って見える。
《HIT》
深月は対戦機に突撃。対戦機はマシンガンを深月に向けて放ち、ウィクトーリアは空中で被弾して高度を下げたが、バランスは維持出来た。

（実弾用シールドのお陰かな？）

深月はアスマが選んだアセンに感謝する。腕武器のマシンガンのリロードが行われ、曳光弾が途切れる。それは深月には目を閉じていても分かるタイミングだ。しかし対戦機はこれまでの深月の対戦データからOBに入ると予測したのだろう。ここぞとばかりにマシンガンの雨を降らした。

だが今日の深月は今までと違う。着弾寸前に機体を翻らせ、対戦機の頭上を跳び越える。空中で方向転換、着地、ブーストアップ。対戦機の側面を捉えた。

『ミヅキ！　ロケット弾！』

「分かってる！」

対戦機が方向転換をしている間に、深月は機関銃弾を叩き込み、リロードの間でインサイドのロケット弾を発射した。それとほぼ同時に対戦機は正面を向き、射出型ブレードを振り下ろす。直後、ウィクトーリアは大きな物理的衝撃を一点に受けて激しく震動し、ジェネレーターが緊急稼働を始めた。

（しまった！）

だがその代わり相手もロケット弾を回避出来ず、炎に包まれた。

（相手にもダメージを負わせたんだ。気持ちを切り替えろ！）

深月は斬撃の衝撃から立ち直ると腕武器マシンガンを連射。ジャンプして間をとり、対戦機に再びロケット弾を叩き込み、戦いの帰趨は決した。深月は機体の軽さで対戦機を翻弄し、確実にダメージを与

え続けた。ミルキーは残弾に応じて質量バランスを更新し、エネルギー管理をしながら、落ち着き払った声で深月に声を掛ける。
『最後まで気を抜かないで。マシンガンの残弾が尽きるわ。ミサイルに切り替える』
「了解」
対戦相手はまだ士気を失っていなかった。深月は小型ミサイルの射程ぎりぎりの距離で対戦機をサイトに収め、ロックを続ける。対戦機はデコイを放ちながらミサイル攻撃に応じるが、デコイに騙されなかったミサイルが直撃し、動きを止めた。
「……終わった、か」
久しぶりの勝利だが、実感はない。
一方、管制席ではミルキーが深月の分まで大喜びしていた。
「やった！　ミヅキちゃんが勝った！」
ミルキーは管制席から飛び上がると、隣で佇んでいたアスマに抱きついた。
「これでレギュラーリーグに残れるわ！」
抱きつかれつつも、アスマは苦笑を隠せず、ミルキーは不満そうに言った。
「何よ。こんな可愛い女の子が抱きついてあげてるのよ。少しは喜びなさいよ」
「……はい」

アスマは笑顔を作ったが、その間もモニターから目を離さなかった。
モニターの中、深月はコクピットから姿を現し、防護壁越しの観客の歓声に応えていた。
勝者には勝者だけが放つ輝きがある。深月は今日、その片鱗を見せていた。
アスマは口の中だけで囁いた。
「サーティ……僕の生涯最後の約束は、果たせるかもしれないよ」と。

ミッション［2］

深月の放ったマシンガンの一撃が対戦機の頭部を破壊して勝敗が決し、トーキョーフロンティアのアリーナ〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟が歓声に包まれた。下位を低迷していた深月たち〝ダブルハート〟は下馬評を覆して二八位戦に勝ち、二ヶ月ぶりの再浮上を果たした。
続いて上位戦が行われ、歓声は頂点に達する。このアリーナのトップランカーが登場したのだ。
シグナルが点灯すると黒いＡＣ〝ノワール〟は疾風怒濤の攻勢を見せ、対戦機は瞬殺された。

アスマはその動きを見て深く頷き、ミルキーとともに管制席を後にした。

〝ウサギが牙を剝いた〟

ネットではこう記事にするところもあった。〝ウサギ〟とはウィクトーリア頭部の二本アンテナを揶揄したものだ。〝ダブルハート〟は少女二人の色物チームとして、以前からコアなアリーナファンから中傷の対象になっていた。

しかしそれらを気に留めることなく、深月とミルキーは祝勝会の準備をしていた。会場はガレージの片隅。ミルキーはアップルパイを、深月はローストチキンを焼いた。アスマはその様子を見つつ、機体の整備をする。試合の直後だ。やることは山ほどある。通常、一機のＡＣに七人のメカニックが必要と言われるが、それをアスマは一人で完了してしまう。尋常でない早さだ。

「最初の一回でセッティングが出るなんてこと普通はないわよ」

ミルキーがアスマに目を向けた。

「元レイヴンと言っていたけど、クリプトニュームではメカ担当だったのかな」

「パパと同じ、数少ない生き残りだろうけど……メカニックで後方にいたのかもね」

ミルキーの父、サーティが所属していた傭兵部隊クリプトニュームは数年前に壊滅し、解散していた。

一段落したのか、アスマは手の油汚れを落とすとテーブルまでやってきた。

「美味しそうだね」
「ありがとうございます」
ミルキーが棒読み口調で答えた。
「料理を作るのは任務に出ているとき以来だから、口に合えば良いけど」
深月は強ばった笑顔を浮かべた。
「匂いで分かる。きっと美味しいよ」
アスマは大人だった。
ささやかな祝勝会が始まり、アスマがローストチキンを口にしたのを見届け、深月はようやく本当の笑顔を浮かべた。
「あなたのメカニックとしての腕は認める。でも勝ったのはミヅキちゃんの実力だから」
ミルキーは不満を露骨に顔に出す。
「もちろんそうさ」
アスマの屈託のない笑顔に、ミルキーの調子は狂う。深月は小さく首を横に振る。
「ワタシはアスマの力が大きいと思っている。正直、助けられてばかりだ」
「いや。最後は君自身の力さ」
アスマはシャンパンを口に付ける。

「勝利の美酒だ」
ベタで気障な言い回しだが、深月はアスマが言うと不思議と許せる気がした。
テーブルの上があらかた片付いた頃、深月は気になっていることをアスマに尋ねた。
「次は二七位戦になる？」
「いや。その前に上位ランカーとエキシビションで戦えないかと思っている。力の差を、今の自分の力を知ることはとても重要だ」
そしてアスマは二人の少女を交互に見た。深月は照れて目を逸らし、ミルキーはアスマを睨み返した後、唇を開いた。
「無理よ。たとえエキシビションでも上位ランカーが二〇位台後半のランカーと試合を組んでくれるはずがない」
「そう。普通なら……ね」
アスマは目を伏せ、耳を澄ませた。
「お客様だ」
アスマは立ち上がり、外に出た。二人も後を追うとガレージの前に大型のリムジンが停まっていた。
「そろそろ来ると思ってたよ」
リムジンの後ろの扉が開き、男が一人降り立った。痩せた身体に藍色のスーツ姿。歩き方にも品があ

る。ある種、映画スターのような趣だが、その顔は異様なほど大きなバイザーに隠されていた。
深月とミルキーはその男を知っていた。
「〝オルクス・ノワール〟卿」
〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟の覇者はアスマに歩み寄ると恨めしそうな言葉を投げた。
「三ヶ月も経ってから俺に知らせるなんて、冷たいにも程があるぞ。〝サード〟よ」
「あなたが〝ナイン〟という確証がなかったんだ。今日、動きを生で見て確信した」
「この〝クリプトニューム〟のバイザーだけで十分だろうに」
ノワール卿はバイザーの下で笑い、アスマを小突いた。アスマは少年の笑みで応えた。
「サーティは？」
「こちらです」
アスマはガレージの中にノワール卿を招き入れ、サーティのＡＣの前に案内した。
「そうか。お前だけ戻ってきたか」
戦友は四脚ＡＣを見上げた後、深々と項垂れ、十字を切った。
「生き残りは私とお前だけになったな」
「そうですね」
「サーティの娘たちか」

トップランカーは後ろで様子を窺っていた二人を振り返った。
深月は背筋を伸ばし、ミルキーは彼女の陰に隠れるようにして立っていた。
「鴉山深月です」
深月隠された素顔を見通すかのようにノワール卿をまっすぐ見つめていた。
「ミルキーです。父の戦友だったんですね」
ミルキーも顔を正面に向けた。
ノワール卿は小さく会釈するとアスマを振り返り、声を発した。
「アスマ。心得た。彼女たちの相手になろう」
アスマは小さく頷き、深月とミルキーは時間が止まったかのように固まった。
「感謝します」
「サーティへの手向けだ。私からも彼女たちに贈り物をしなければなるまい？」
「ええ……〝ナイン〟。僕があなたをそう呼ぶのも最後かもしれませんが」
アスマの言葉を聞くとノワール卿はガレージを後にし、待っていたリムジンに乗り込んだ。
「スケジュールが詰まっていてな。明朝七時、〝メガフロート〟で待つ」
「万全の体勢でお伺いしますよ」
「楽しみにしている」

リムジンは去り、残された三人の間に不可思議な空気だけが漂った。
ただ一人平然としているアスマが、軽く言った。
「明日の七時だそうだ」
何が起きたのか理解しきっていないミルキーは、一拍おいてからきつい調子で応えた。
「なんでそうなるのよ！」
「頼んだ方としては仕方がない」
「いやそうじゃなくて、どうしていきなりトップランカーとエキシビションマッチが決まるのよ。準備も何もあったもんじゃない」
「万全の準備をしたところで彼に到底及ばない。胸を借りるつもりでやれば良い」
それを聞き、深月がようやく応えた。
「分かったわ。〝サード〟」
「彼女はやる気のようだよ」
「私だってやる気がない訳じゃないわよ」
ミルキーは眉をつり上げたままテーブルに戻った。少女二人は後片づけを始め、アスマはＡＣハンガーに戻る。そして一段落つくと深月はＡＣハンガーに来た。
「新型のパーツ？」

後片づけの僅かな間にウィクトーリアの腕部と脚部が換装されていた。腕部はノーマル、脚部は軽量級。どちらも深月が見たことのないパーツだった。

「そう。僕が開発に加わっていたものさ。これで君らしい戦い方をさせて上げられる」

「ワタシらしい戦い方？」

「ああ。ＯＢを使った機動戦をね。君はサーティの真似をする必要はない」

アスマはセッティング作業を続け、深月を振り返らなかった。

「アスマはＡＣの開発をしていたの？」

「ああ。ちょっと前まで現役だった」

「でもやっぱり〝サード〟なんだよね」

「そうさ。クリプトニュームの隊員番号は単に空き番号順さ。深い意味はない」

アスマはコクピットから気のない返事を返した。深月は言葉に出来ない想いを口に出来ず、こう言葉にした。

「明日、頑張るよ」

「君は勝利の女神（ウィクトーリア）なんだから大丈夫さ」

「……うん」

深月はハンガーから飛び降り、先にガレージを出たミルキーを追いかけた。

アスマは身体に残るアルコールを心地よく感じながら、少女を見送った。

早暁。西の空はまだ闇の色を残していたが、東の空には鮮やかな光が生まれつつある。

東京湾の海面に漂うメガフロートの上、ACキャリアからハンガーアウトする機体があった。〝メガフロート〟はトーキョーフロンティア建設時に使われた浮遊構造体をアリーナに転用したものだ。その初期には機体操作を誤って海中に墜落するACが続出したことで知られている。

『落ちるのは勘弁してよ。整備が大変だから』

管制室のアスマから無線が入る。

「ミルキー、アスマがいじめるよ」

『お財布を預かる身としては以下同文』

「ミルキーまでそう言うかな～。りょぉかい。せいぜい頑張るわ」

深月は不思議と可笑しな心持ちになった。以前はまるで余裕がなかったが、今はミルキーとアスマの二人がついていてくれていることを感じる。

「さあ、行こう。ウィクトーリア」

深月は愛機に声を掛け、自らの士気を鼓舞し、トップランカーを待った。

指定時間の一五分前、甲板のエレベーターから黒いAC〝ノワール〟が姿を現した。

『準備は良いか？　〝ダブルハート〟』
深月にノワール卿の声が届いた。秘匿性の高い、作戦時用の短距離赤外線通信だった。
『サーティの娘たちよ。どれほどのものか私に見せてくれ』
そしてアリーナのシグナルが点灯し、エキシビションマッチが始まった。

四五秒。それが〝ノワール〟と〝ウィクトーリア〟の戦いの全てだった。初めての、不慣れなアセンだからとか、そういうレベルの差ではなかった。
トップランカーの攻撃は、火力による絶大な圧力として深月に襲いかかった。リニアライフルとミサイルの命中率は限りなく一〇〇％に近く、圧力が止んだときには背後をとられ、左腕のレーザーブレードが大気をプラズマ化するほどの呻りを上げていた。
どうにか深月は攻勢の圧力から逃れ、ライフル弾を数発命中させたが、それまでに奪われたアドバンテージを挽回するにはささやか過ぎた。嵐の海のような衝撃にもまれ、深月にとって長い時間が過ぎた後、モニター類が赤く点灯する。ウィクトーリアはシステムダウンする直前だった。
そのタイミングで再び赤外線通信回線が開かれ、ノワール卿の声がした。
『サーティは良い育て方をした。君たちは間違いなく化けるだろう。だが戦場には出るな。真実は時に残酷だと知るだけだぞ』

ＨＭＤがブラックアウトし、同時に赤外線通信も切れた。
ノワールはウィクトーリアの動きが完全に止まる前に背を向けた。
深月は暗いコクピットの中、しばらく考え続けた。
『大丈夫？　怪我してないよね？』
ミルキーの声に深月は我に返った。
「う、うん。ノワール卿の最後の言葉がどういう意味か考えあぐねてしまって」
『え、何のこと？　ミヅキちゃん』
管制席にはノワール卿との交信が届いていなかったらしい。
『彼はなんて言っていたんだ？』
アスマのやけに落ち着き払った声に深月は違和感を覚える。
「真実は時に残酷だと、言っていた」
『そうか』
「アスマ……心当たりがあるのか？」
『今、話せることでもない』
やはりアスマは何かを知っていた。ミルキーのサポートでウィクトーリアのシステムが回復すると、深月はキャリアまで戻り、傷ついた機体をいたわりながら横にした。

「信じたい……いや、信じるよ」
深月はそう、独り呟いた。

ガレージに戻るとアスマは最初にウィクトーリアの通信ログを確かめた。深月にとってこの対戦の勝敗は問題ではなかった。アスマが明らかに秘密を持っていることが問題だった。だから深月はコクピットまで上ったアスマをじっと見上げていた。
しばらくするとアスマはコクピットから降り、神妙な表情で二人を呼んだ。
「最初に断っておくが、僕はサーティの仇を討つ気はない。彼は戦場で死んだ。レイヴンである以上、それは覚悟の上だった。そう思うからだ」
当然だという表情で深月は頷くが、実の娘であるミルキーはそうはいかない。
「状況次第ね。パパを倒したのが『何者』だったのか、まだ聞いていないし」
「確かにそうだな。僕にも詳しいことは分からないが、サーティを倒したのは正体不明の〝規格外〟の戦闘力を持った奴だ。そして僕にはその機体の動きに見覚えがあった」
深月はその間で口を開いた。
「オルクス・ノワール卿」
「その通りだ」

深月は三白眼でアスマを睨んだ。
「何故、最初に話してくれなかった？　ワタシが怯むと思ったのか？　それとも怒りに我を忘れ、復讐に走るとでも思ったのか」
「やっぱりあなたを信用出来ないわ」
ミルキーも同じようにアスマを睨んだ。
「最初に話さなかったのは、確証もないのに数少ない友人を疑うような言葉を口にしたくなかったからだ。隠す気はなかった」
アスマは二人の視線から逃れるように目を伏せた。深月もまた、目を伏せた。
「ここに来れば何かを掴めると思ったのも事実だ。だけどサーティに代わって君たちをトップランカーにしたいという気持ちもある」
「……これからどうするつもり？」
ミルキーがきつい調子で問う。
「やはりオルクスは何かを知っている。だから僕らに忠告をした。『今ならまだ退けるぞ』とね。逆説的に言えば、僕が知りたかった真実への扉が見えてきたのかもしれない。でも実際にその扉をノックするかどうかを決めるのは君らなんだ」
アスマは面を上げた。

深月はまっすぐアスマを見ていた。
「決まっている。逃げない。真実から逃げたら残った人生は嘘の人生になる」
「パパの無念を晴らす。それだけよ」
「分かった。僕は引き続き君らの力になろう。それがサーティの遺志だから」
アスマは嬉しそうに微笑みを浮かべた。
どう応えようかと深月が逡巡している間に、携帯端末のメール着信音がした。確認すると任務斡旋会社からの緊急依頼だった。
「まるでここを見ているみたいね」
ミルキーは肩をすくめ、苦笑する。
「依頼を受ける？」
アスマが少女二人に訊いた。
「ああ」
「当然」
それを聞くとアスマは二人に背を向けて、ウィクトーリアの修理にとりかかった。

天敵、犬猿の仲、呉越の仲、水火の争い。

仲の悪さを表現する言葉は古今東西、数限りなくある。ゼラとティフィンの間柄はそのいずれを使っても良い関係だが、もっとしっくり来る表現がある。それは〝くされ縁〟だ。

ゼラがL・Aのレギュラーリーグに上がったばかりの頃、上海リーグとの交流戦でティフィンと出会った。そのときは惜敗したが、次に彼女が上海に行ったとき、リベンジを果たした。それからマスコミが面白く書き立てるようになり、因縁のマッチメークの一つとなった。

太平洋を隔てて十試合。お互い希少な『美少女レイヴン』としてしおらしく振る舞っていたのも今は昔。今となってはマスコミの前でもお互い地を見せて、対抗心を剥き出しにしている。昨夜の記者会見でも彼女たちは激しい舌戦をかわした。

「負けてあげて良いのよ。もちろんこれ次第だけど」

ゼラはお金のジェスチュアをして、唇に指を当てる。

「ホントぅ？　嬉しいなあ」

ティフィンは満面の笑みを浮かべる。

「意味分かってんの？」
ゼラが眉を跳ね上げた。
「だって記者会見の場で八百長もちかける人がいる訳ないもの。投げキッスくらいで負けてくれるならいくらでもするよ」
「誰があんたなんかのキスなんか！」
「俺にくれ～」
記者の一人が声を上げ、ティフィンは投げキッスをする。会場はどっと沸き、会見は終わった。控え室で二人は反目し、そのまま別れた。
前哨戦で勝ったティフィンだったが、翌日の本戦で勝ったのはゼラだった。
ゼラは白星を先行させ、会見での屈辱を果たしたのだった。

自称美少女レイヴンたちも一人の傭兵である以上、戦場に出ることもある。今回の任務地はインド・カシミールの急峻な山岳地帯。人型機動兵器の不整地走破性能がいかんなく発揮される場所だ。報酬も魅力的な額だった。レイヴンはアリーナでの戦績次第で任務が斡旋されることになるのだが、今回は結果としてそれが露骨に出ることになった。
「なんであんたがここにいるのよ！」

集合場所のベースキャンプで、ゼラは愛機『タイクホワイト』のコクピットから頭を出し、赤い機体『イクセス』に向けて美少女にあるまじき罵声を浴びせた。
「斡旋されたからいるだけだよ。ゼラちゃんもそうなんじゃないの?」
ティフィンはチューブ入りのお茶をすすりながら答えた。
「あなた、私をなめてる?」
「だって私たち、同じくらいのランキングなんだから、同じ任務が斡旋されても不思議はないよ」
正論だった。
「とにかく、私と同じ任務につくからには失敗は許されないんだからね!」
「わかってますって」
ティフィンは一方的にハッチを閉め、ゼラは苦い気持ちでACを睨んだ。危険な任務というのに、僚機がこれでは先が思いやられそうだった。
今回の任務は行方不明になったレイヴンの探索だ。EUアリーナの高位ランカーで、タイトルマッチが迫っているのに任務に出て、行方不明になったという。カシミールは国境を接する三つの国と反政府ゲリラが入り乱れる激戦地だ。場合によってはマッチ前の高位ランカーを斡旋することもある。気になるのは当のACのデータが該当機体との接触時にオープンになることだ。タイトルマッチに対する八百長・妨害等の対策と考えれば、無難な措置ではある。

日が落ちた後、ACが隠れられる谷間でキャンプを張り、レーション缶を温めながらゼラは嘆いた。
「でもなんでこうなる訳？」
「仕方がないじゃない。対空ミサイルが配備されてて高々度支援しか出来ないっていうんだから。地上戦力は私たちだけだっていうし」
ティフィンはレーションのデザートから食べ始め、ゼラは目を細くして応える。
「分かっているわよ。でもね、二人っきりで野営なんて聞いてないんだからね」
「男の人の方がよかった？」
「そんなこと言ってない！」
「私はゼラちゃんと一緒で楽しいけどな」
「楽しい？」
「うん。ゼラちゃんは？」
「なんであんたと一緒で楽しいのよ」
「私は、楽しいよ」
「私はね、あんたみたいな極楽頭と違うの。私は一流のレイヴンになって、名前を世界に轟かせなくっちゃならないんだから」
「ふーん。そうなんだ」

「あんたはどうなのよ」

「私は『イクセス』が維持出来ればそれで良いんだ。ACを維持するのはお金がかかるから。戦わなくて、ACが壊れないお仕事でお金が稼げると一番良いんだけど」

「なにあんた、AC偏愛者？」

ランタンに照らされたティフィンは少し悲しそうに微笑むだけだった。ゼラはその意味を分かろうともせず、言葉を続けた。

「私はね、レイヴンになるためだけに生まれたの。親父もレイヴンでね、子どもは欲しいけど結婚はしたくないって、どっかの女に金で子どもを産ませたの。それが私。だから私は一流のレイヴンになって、親父に応えないと生まれてきた意味がない。そしてあのクソ親父を見返してやるのよ」

ゼラはティフィンを見据えた。

「お父さんはまだ生きているんだ？」

「戦場で片手と両足失って、今はリハビリでサイバネティックの訓練中。また戦場に戻るんだってさ。根っからの戦争屋よ」

「良いね、お父さんがいて。私は生みの親の顔を覚えていないから」

「……レイヴンやっているならそんなに珍しくはない身の上ね」

「そうだね。でもね、お母さんはいたのよ。私を育ててくれた、肝っ玉の据わったAC乗り。イクセス

はお母さんの形見で、棺桶だから、ずっと一緒にいたいの」
「そ、そうなんだ」
「ゼラちゃんとマッチメイクされるようになってね、私、本国の方でも注目度が上がったの。小さいけどスポンサーもついて、CM出演したり、ずいぶん楽になった。みんなゼラちゃんのお陰だと思ってるよ。記者会見のときはごめんね。腹立ったでしょう」
「何言っているのよ。演技に決まっているじゃない。あんなのショーなんだから」
「そうだよね。でも、ショーだと分かっててもやっぱりゼラちゃんに嫌われるのイヤだな。だって同い年の女の子とこんな風に話せるの、ゼラちゃんだけだから」
ティフィンはレーション缶で紅茶をいれ、ゼラに差し出した。
「あ、ありがとう」
ゼラははにかみつつ熱い紅茶を受け取り、ティフィンは微笑み返した。
「今日からはお友達になれるかな」
「それとこれは別よ。友達は『なるもの』なんかじゃないんだから」
ゼラは再びレーションに向かい、ティフィンは普段と違う、ちょっと寂しそうな笑みを浮かべた。
日が出ると二人は出立し、急峻な山岳地帯を省燃費ペースで進んだ。高位ランカーの任務エリアに

入ったのは正午頃になった。途中、ＭＴとＡＣの残骸を何機か発見し、簡単な調査をした。ほとんどの残骸は新しく、三ヶ国の正規軍とゲリラの機体が入り乱れていた。激戦だったことが窺われたが、無線の電波は飛び交っておらず、今のところ戦線は小康状態にあるようだ。今がチャンスだった。

ゼラとティフィンは無人探査機を飛ばし、その間に昼食をとる。二人がゼラとっておきのメイプルシロップでクラッカーを食べていると、無人偵察機が帰ってきた。無人偵察機のデータは大当たり。敵味方識別装置(IFF)なしのＡＣが一機。ほど近いテーブル状台地の上にいることが判明した。ＩＦＦ無しの機体はゲリラが相場だが、レイヴンも任務によっては登録しないこともある。

「行くよ、ティフィン！」

「そんな慌てなくても」

ティフィンはＡＣに乗り込み、ヘルメットを被ってＨＭＤのスイッチをオン。システムを起動させてテーブル台地に急ぐ。イクセスのブーストを噴かし、僅かな突起を辿って切り立った崖を登る。

数秒後、頂に到達すると岩石の平原が現れた。その中央にＡＣが一機立ち、その周囲にまた何機かの残骸があった。

「なに……あれ？」

そのＡＣはまるで中世の騎士のようなデザインをしていた。そもそも右腕にランスのようなものを装備している。見たこともない装備だ。ティフィンは信じ難い光景に目を奪われたが、ゼラから返ってき

た言葉は、彼女の想像の範疇から大きく外れていた。
『く、そ、オ、ヤ、ジ、があああ！』
ゼラが駆るタイクホワイトはブースト圧を上げ、弾けるようにして騎士型ACに向かっていった。頭に血が上っているらしい。
「ええ？ ゼラちゃんのお父さんなの？」
『ははは！ ゼラ！ お前が現れるとは想像していなかったぞ』
騎士型ACから返答があった。
『あんたは大人しく病院で寝てろ！』
タイクホワイトはリニアカノンの発射態勢に入ったが、騎士型ACは容易に間合いを詰め、ランスでタイクホワイトを強打した。
「……射出型ブレード？」
ティフィンがデータ検索をすると、ACは〝エヴィデンス〟、レイヴンはシンサと分かった。彼はEUアリーナの元トップランカーで、現在は任務中の負傷でアリーナを退いていることになっていた。
タイクホワイトはランスの打撃を受けて一瞬動きを止めたが、すぐに間合いをとった。
『どうりで捜索対象のデータがぼかされていた訳よ。大人しく病院に入っていろってのに！』
「あのーお父さん。試合が近いのでアリーナに帰らないとならないようですよ」

ティフィンが思いっきり気の抜けた声でシンサに声を掛ける。

『断る！　俺はまだ本調子ではない。力を取り戻したとを実感するまで調整を続ける！』

「みなさん困っていますが」

『他人の言うことを聞く親父じゃないから。あの趣味の悪い機体を見れば一目瞭然でしょう!?　私なら親父を連れ戻せると踏んで任務を依頼したみたいだけど、依頼人は親父のこと分かってないみたいだね。何が何でも任務を遂行する。機械四肢をつけたばかりで私に勝てると思うなよ！』

『わはは、よくぞ吠えた！　我が娘よ！』

「お二人とも冷静になって下さい」

ティフィンが間に入ろうとしたが、二機のＡＣに睨まれて、躊躇する。二機に挟まれる形になったエヴィデンスは間を取ると、大きくランスを掲げた。

『レイヴン道大原則！　売られたケンカはもれなく買うこと！』

「うわ〜〜その台詞、著作権的にアウトです。ゼラちゃんのお父さん」

『病院送りにしてでも連れ戻す！』

「それじゃ任務失敗だって」

『娘よ！　全力で掛かってこい！』

タイクホワイトはエヴィデンスと距離をとり、マシンガンを掃射。しかしエヴィデンスは背中の追加

ブースタとスタビライザーを駆使し、最小限の被弾で間合いを詰める。
『わはは、甘いわ！』
『そんなの承知の上！』
エヴィデンスのランスがタイクホワイトを貫いたその刹那、タイクホワイトのリニアカノンが火を噴く。互いの攻撃の衝撃で弾けるように間合いが生じ、二機は姿勢制御が回復すると同時に次の攻撃を睨んで対峙する。
「そんな……実の親子で戦うなんて、絶対に駄目です」
ティフィンは懇願の言葉を投げかけるが、二人は聞く耳を持たなかった。
戦況は明らかにゼラに不利。シンサのランスは確実にタイクホワイトを行動不能に追いやりつつある。
ティフィンは覚悟を決めてイクセスのブースト圧を上げた。
「二人ともやめて下さい！」
イクセスのブースト圧が最大に達すると対決する二機の間に割って入った。
エヴィデンスはランスを、タイクホワイトはマシンガンを放っていた最中だ。
両方の攻撃が直撃し、イクセスはすさまじい衝撃に包まれた。
『ティフィン！』
動きを止めたイクセスをかばい、タイクホワイトはエヴィデンスの前に立ちはだかった。

『よくも私の僚機（ダチ）に手を出したね！』

「……ゼラちゃん……」

『騎士の情けだ。時間をやろう』

エヴィデンスもまた動きを止めた。

『ティフィン、大丈夫？』

「うん。ゼラちゃん。もう戦うのやめて。話せば分かるよ」

『いいや。止めんぞ。リハビリの最後を飾る最高の戦いになりそうだ。娘よ、再開だ。なんなら二機同時でも構わないぞ』

『ほらね、親父はこういう奴なのよ』

「分かった。フォーメーションを組もう」

『エヴィデンスの高機動ブースタは発熱量が多いわ。ティフィンはいつものアレを使って親父の動きを止めて』

「分かった。勝とうね、ゼラちゃん」

『もちろん』

『作戦会議は終わったか？　では行くぞ！』

エヴィデンスは再始動し、二機を同時に視界に入れるように距離をとった。どちらに突撃を仕掛けて

くるかまだ分からない。ゼラとティフィンは射撃で牽制しながら、突撃に備える。エヴィデンスの動きは素早く、かつ省エネルギーペースだ。

「巧いなあ」

『感心するのはリプレイのとき！』

ゼラの叱咤にティフィンは自らエヴィデンスの正面に立った。

『その心意気も買った！』

エヴィデンスはＥＣＭを発射して援護のゼラの目を潰し、イクセスにランスを突き立てる。

「私じゃかわせないけど！」

ティフィンが内蔵ナパーム弾を放ったのとほぼ同時にランスの先端がイクセスに達した。その激しい衝撃にイクセスのシステムがパニックを起こす。耐Ｇユニットを通り越し、鈍い衝撃波がティフィンを襲い、頭蓋の中の脳がシェイクされ、文字通り無数の星が見えた。

『無駄にはしないよ！　ティフィン！』

ゼラの声を聞いたのを最後に、ティフィンの視界はブラックアウトした。

気がつけば目の前にゼラの顔があった。

「よかった、気がついて」

ゼラは大きく胸をなで下ろした。どうやら着陸中の救急医療ヘリの中らしい。ゼラの後ろには派手な装飾のパイロットスーツを着た男がいた。一目でゼラの父親と分かった。

「良かった。戦うの止めてくれたんですね」

「私が勝ったのよ。ティフィンのナパームがエヴィデンスを熱暴走させてくれたお陰でね」

「まだリハビリ中ということだな。むう。私としたことが」

シンサはバツの悪そうな顔で苦笑した。

「もう支援部隊が来てる。後は回収作業だけよ。安心して。麓に降りたら精密検査しないとね」

ゼラがティフィンを安心させるように微笑むと、彼女は一筋の涙を流した。

「え、どうしたの？　まだどこか痛いの？　ドクター呼んできてよオヤジ！」

ティフィンは首を横に振る。

「ううん。嬉しかったんだ。ゼラちゃんが私を友達だって言ってくれて」

ゼラは不可思議そうな顔をすると、思い出したようにポンと掌を合わせた。

「そういやそんなコト言いましたっけ」

「言った」

「当たり前じゃん。友達なんてさ、なるものなんかじゃない。なっているものだよ」

ゼラは立ち上がり、そっぽを向いた。分かりやすい照れ隠しだった。

「うんうん。お前に友達が出来たのも私のリハビリのお陰だな」
「オヤジは黙ってろ！」
ゼラはシンサをド突き、父親の腕をとると救急医療ヘリから降りた。
ティフィンは二人の背中を見ながら、指で涙をすくった。

一週間後エヴィデンスはタイトルマッチに勝利し、トップランカーの座を見事奪回した。

ミッション〔3〕

「オムライスが食べたい」
ミルキーが目を細めて呟き、いつもの悪い癖かと深月は額に手を当てた。気分屋なところがあるミルキーだが、特に不機嫌なときは自分の好物を要求する。指揮車のセッティング作業は中断を余儀なくされた。しばらくすると大型ヘリからの荷下ろしを終えて、アスマが指揮車に戻ってきた。アスマは深月

に理由を聞くと微かに笑って外に出ていった。

数十分後、彼は卵とタマネギを手に戻ってきた。急峻な山岳地帯に展開している最中だ。見渡す限り人家はなかったから、どこから食材を手に入れたのかは、謎だった。軍用ストーブの火を点け、厚い鉄板を上に載せる。それから慣れた手つきでタマネギを刻み、バターで炒め始める。十分後にはもうオムライスが出現していた。しかも二人分。

「味は期待しないように」

アスマはそう言って携帯端末を手に取り、任務のデータを読み始めた。あっけに取られた二人はしばらくしてからオムライスに手をつけた。戦場で食べるには十分すぎるお味だった。

アスマの手にある携帯端末の画面には二人のレイヴンが映っている。二人ともなかなか可愛い十代の少女だった。それに加え、二人とも深月と同レベルのランカーだ。

「さて、これはどう読み解くべきか」

アスマはまた微かに笑みを浮かべる。

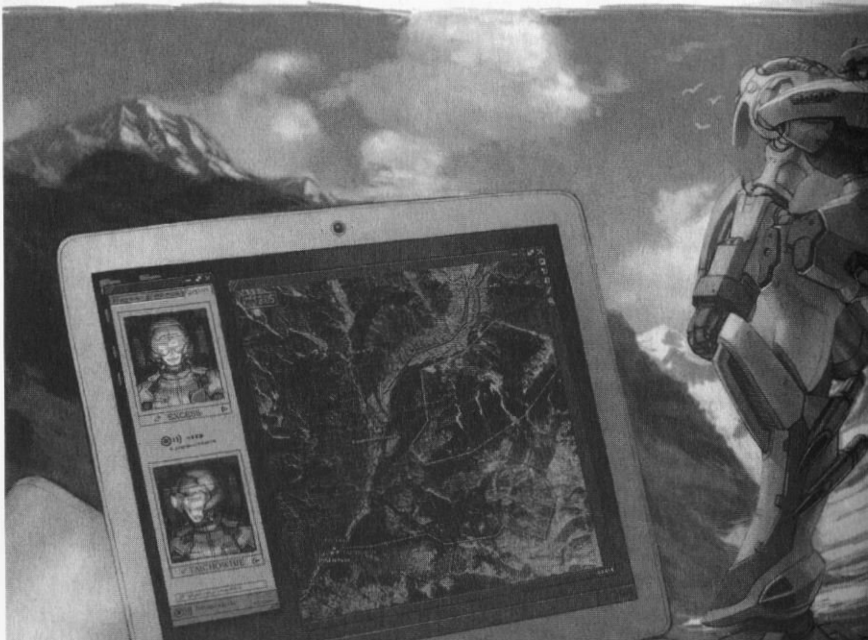
大型ヘリが現れ、上空を旋回し始めた。

こちらの少女二人はオムライスが載っていた皿を手にそれを見上げていた。

爆音の中、ミルキーが小さく言った。

「ごちそうさま」





任務は撃墜されて山頂部に墜ちた無人偵察機の回収だった。回収に向かったこの国の正規軍は反政府軍の猛反撃にあって戦況は膠着し、レイヴンの出番となったのだ。

任務を受けた三人のレイヴンが集合すると、アスマは複雑な笑みを浮かべた。

「こんにちは、ゼラです」

黒髪ツインテールの少女がアスマに手を差し出す。アスマは冷静に握手をかわした。

「ティフィンです」

もう一人はレイヴンとはとても思えないセミロングの少女だった。彼女は深月と握手をかわした。

「今回はアスマさんが管制官をしてくださるんですよね?」

目をキラキラさせながらゼラが言った。

「その役目はワ、タ、シ」

腕組みをしながらミルキーが二人の少女レイヴンに目をやった。

「すっごく素敵な男性お二人とチームなんて、ミルキーさんが羨ましいです」

ティフィンが天然の笑顔でミルキーに話を振り、ミルキーも本物の笑顔で答える。

「分かる? でもミヅキちゃんは私の王子様だから手を出さないでね」

「い、いや、ワタシも女の子だし」

「え〜〜ショック〜!」

アスマはそのやりとりを目にして、本当に頭痛がしてくるようだった。

（違う。このノリは、断じて違う。この場をどうにか仕切らなければ……）

そう誓うアスマだったが、それを実現に移すだけの気力が今の彼にはなかった。

任務説明の後、二脚ＡＣが三機揃い、作戦を開始する。

反政府軍の妨害が予想されるとはいえ、ＡＣ三機による作戦は大仰だ。正規軍の無人偵察機群のデータだけでもオペレート可能かと思ったが、アスマは念のためＶＴＯＬの準備を依頼した。機体が見えなくなってから指揮車のチェックを兼ねて交信を開始する。

「こちらダブルハート〝ミルキー〟です。感度どうですか？　状況をどうぞ」

『こちらウィクトーリア〝ミヅキ〟。感度良好。異状なし』

『イクセス〝ティフィン〟。同様です』

『タイクホワイト〝ゼラ〟以下略。今回は簡単な任務よね』

「そうとは限りませんよ。注意して下さい」

「余程重要な情報がその偵察機に残っているのか、それとも……」

アスマは呟く。

「それとも？」

「いや。なんでもない。何か変わったことがあったら逐一教えてくれ」

『了解。みんな、分かった？』

ミルキーの声は明るい。だがその一方、アスマは少し浮かない顔をしていた。

「任務は半年ぶりなんだ。お二人は？」

深月は同年代のレイヴンが珍しいこともあって回線を開いていた。

『私はアリーナと半々かな。ゼラちゃんとはついこの前も任務で一緒だったの』

『その節はどうもご迷惑をお掛けしまして』

ティフィンの声に対してゼラの言葉はどこか白々しかった。

『ゼラちゃんのせいじゃないし』

「はは、仲が良いんだね」

『別に良くないから』

『え～ゼラちゃん～冷たい』

深月は自然に笑った。もし自分が学校に通っていたらこういう会話が日常に溢れていたかもしれない。

そう思うと少し寂しくなるが、深月は今の自分の境遇を不幸とは思わない。

今の自分があるから〝サード〟とも再会出来たのだから。

ミルキーのナビゲーションで三機は山岳地帯を進む。

歩兵部隊を動員しての捜索と異なり、ＡＣによるそれは柔軟性がある。ジャンプを使って着地可能な平坦地を探し、一気に数百メートルを進む。それと同時にスキャンを行い、正規軍の各種データバンクとリンクしている後方指揮車でデータを再構成、検討する。山岳の反対方面では正規軍と反政府軍の戦闘が続いている。

少し経って、正規軍が飛ばしている無人偵察機から指揮車にデータが送られてきた。

「アスマ、良くない報せよ」

ミルキーがデータを示す。

「反政府側もレイヴンを雇っていたか」

データには大型ヘリから降ろされるＡＣ二機の画像が含まれていた。アスマはデータを三機に転送し、作戦を練った。

「よう、久しぶりだな」

大理石のような輝きに身を包んだ二脚ＡＣがハンガーごと大型ヘリから降ろされている。その隣でも同じように、真っ赤な二脚ＡＣの搬出作業が進められていた。

コンテナに腰掛けているスキンヘッドのレイヴンに、いかにもその風格を感じさせる長身のレイヴンが声を掛ける。
「なんだ。レヴァインか」
応えるレイヴンもまた、雰囲気がある。
「ご挨拶だな。ディモス・ガモスよ。でかいスポンサーがついたらしいな。噂になっているぞ」
ドライバースーツを着込んでいる二人のレイヴンは、値踏みするように互いを見た後、苦笑した。
「俺の実力を買う企業はまだまだいるさ……といっても相変わらず見せ物の珍獣扱いだがな。それよりあんたも無事で何よりだ」
ガモスは拳を固めて突き出し、レヴァインもそれに応えて拳を合わせた。
「早く終わらせて、呑もうぜ」
「同感だ……今回の敵役は娘っ子三人だというじゃないか。少し遊んでやろう」
「ああ。セットアップ、早く済ませろよ」
「あんたもな」
二人は挨拶を済ませ、お互いのスタッフと打ち合わせを開始する。
数十分後、二機のACが状況を開始する。彼らにとって数の不利は問題ではない。それがレイヴンというものだとでも言わんばかりに、まだ見ぬ三機のACに向かって、飛んだ。

「稜線を挟んで平行して進んでいるようだな。仕掛けてくると思う?」
深月の問いにゼラが応える。
『数はこっちの方が多いわ。その前に先制して叩きたいわね。武装の画像解析出来た?』
ミルキーからの返答がある。
『マシンガンとミサイル主体、キャノンもあるわ。フレキシブルに対応させたいみたい』
『ゼラちゃんはライフル装備だし、ゼラちゃんが支援射撃で私が攪乱するのが良いかな。その間にミヅキちゃんが先行して無人偵察機を回収する。敵が動けば背後を突けるし』
『ティフィン、悪くない作戦だ。無理は禁物だけどね。向こうは三機で来ていることを知っていて二機で来ている。ということは相応の腕利きということだ』
アスマが無線に割ってはいる。
「それならば三機で叩いた方が良いんじゃないのか?」
『殲滅戦ならば僕もそうする。だが今回の目的は別にあるからね。ゼラとティフィンは不利になったら後退。絶対だ。良いね』
深月は頷き、残る二人も同意する。
『ミヅキちゃん!　相手が仕掛けてきた!』

大音量のミルキーの声が深月の戦闘スイッチを入れた。
二脚ACが一機、山脈の稜線を越えて、その姿を見せていた。アリーナでの名は『オルトリンデ』。ワールドリーグ上位ランカーの一人だ。大理石色をしたそのACは背部のキャノンで三機をばらけさせると無線をオープンにした。
『小娘ども、俺が相手になってやる！』
「なめられたものだ！」
深月は激高して大理石色のACに照準レーザーを向けるが、それをゼラが制した。
『ミヅキ！　作戦を忘れないで！』
深月は冷静さを取り戻し、目的地へ先んずるべく、OBを発動させる。
『なめられたのはこっちの方だな』
レヴァインは自らより遥かに格下の二機を相手に、戦闘を開始した。
『悔しいが言い返せない』
『でも、負けない。ゼラちゃん、行くよ！』
少女二人は任務を全うすべく、ベテランレイヴンに立ち向かって行った。
もう一機のACはウィクトーリアに先行していた。逆にこっちが足止めを喰った形になり、深月は焦

りを覚えた。

『相手はベテランなんだからカッカしたら負けだよ、ミヅキちゃん』

ミルキーが無線で指示を出し、深月の頭を冷やしてくれる。

『ここからじゃ状況が分からないって、アスマはＶＴＯＬで出たわ。もう少しの間がんばってね』

「ありがと、ミルキー」

『おっと、二人のサポートしなくちゃ』

ミルキーからの無線は切れた。一人になると少し不安になる。しかし相手は格下のこっちから仕掛けてくるとは思っていないだろう。先手を打つかどうか深月はしばしの間、逡巡した。

そんな時、突然ウィクトーリアが爆発に巻き込まれた。

（浮遊爆雷！　先回りされていた！）

深月は機体を上昇させ、浮遊機雷が散布されていると思われる空域から離脱。だがその頭上に先行していた敵機がいた。

『甘いな！　後輩！』

赤い二脚機体は機関銃弾の雨を降らせ、ウィクトーリアの装甲を削った。その間にアリーナの登録名が判明。こともあろうに深月が所属するＴＦアリーナの上位ランカー『シルヴィーユ』だった。

「でも負けない！」

深月はリニアライフルで応戦するが、シルヴィーユは巧みな機体操作でヴィクトーリアの背後に回り込もうとする。
「速い！　でもノワール卿ほどじゃない！　見える。でもどうする？」
回避機動に専念し、辛うじて敵の弾が収束するエリアからは逃れるがこのままではジリ貧だ。
『ＯＢで距離をとるんだ。いつも練習しているようにノーマルブーストと組み合わせて。隙を見せちゃ駄目だよ』
アスマの声がヘルメットの奥から響き、深月は上空を旋回するＶＴＯＬを視認した。
（アスマが来てくれた）
そう思うと力が湧くと同時に深月は冷静さを取り戻した。そして視界外を跳んでいるシルヴィーユの位置を脳裏でシミュレート。ＯＢを発動させる。
「速さなら、絶対に負けない！」
深月は距離をとり、マシンガンの射程外で大きく旋回。リニアライフルの照準にシルヴィーユを収め、数発ヒットさせた。
「お返しだ！」
『やるな、後輩。この次が楽しみだ』
シルヴィーユから愉しそうな返答があった。

『ガモス、頃合いだ』
レヴァインからの無線が入った。
『ああ。面白かった。状況完了。じゃあな、お嬢ちゃんたち』
そう言い残すとシルヴィーユは戦闘を中止し、山岳斜面の遥か下方へと降下していった。
「……どういうことだ？」
『最初からこういうシナリオだったということさ』
アスマの声は冷静だった。
『ミヅキ、聞こえる？　こっちの敵機は後退していったわ。どういうことかな？』
ゼラから無線が入る。
「どうもこうも。これって下位ランカーのテストってこと？」
『そうだ。トーキョーフロンティアに帰ればまた動きがあるってこと』
アスマの言葉はまだ裏があるらしいことを示していた。
『まずは任務優先だ。深月。頼んだよ』
深月は頷き、今は疑問に思わないよう、作戦に集中することにした。
その後は無事に無人偵察機を回収し、任務は完了した。ゼラとティフィンとは補給で訪れた地方都市

で夕食を共にし、別れた。
「またどこかで会えるよね」
似た者同士、お互いに少し共感を覚えながら、それぞれの帰路についた。
トーキョーフロンティアに戻ると、普段と変わらない日々が続いた。ただ、まだ次の対戦相手は決まっていなかった。
任務から帰って来て以来、アスマはガレージに泊まり込みを続けていた。忙しいこともあるが、理由は「ホテルに帰るのが面倒だから」ということらしい。ガレージにはシャワーはあるものの、独立した部屋はない。だからアスマはハンガー前にテーブルと仮眠用ベッドを並べ、そこで寝ていた。
深月が朝早くガレージに来ると、アスマは普段からは想像がつかないようなだらしがない風貌で寝ていた。そして枕元には大量の薬と水が入ったコップが置いてあった。
深月は眉をひそめた後、薬を見て訝しんだが、今はそれどころではないことを思い出した。
「アスマ。大変だよ。起きて」
アスマは半分寝ぼけながら上半身を起こし、無精髭を生やした顔を深月に向けた。
「どうしたっていうんだい？」
深月は答える代わりに携帯端末の画面をアスマの顔面に突きつけた。
「ドキュメンタリー系のチャンネル……『レイヴンの戦場』？　ああ、これか」

「知っているの?」
「ああ。見当はついていた。TFの現役上位ランカー、ガモス・ディモスが世界中の戦場を渡り歩いてレイヴンとリアルバトルする番組だ。つまり、僕らもそれにはめられたんだ。もちろん、それも何かの仕組みの一部に過ぎないんだろうけどね」
　携帯端末の中では先日の任務の映像が流れていた。正規軍側の画像と反乱軍側の画像が併せて編集されているあたり、始めから仕組まれていたと考えるべきだろう。
「知っているなら教えてくれても良いのに」
　深月は目を細めた。
「確証はなかった。だがこれで〝黒い奴〟の仲間はマスメディアの中にもいるってことが分かった。相当大きな組織みたいだね」
「番組の最後で、次の試合にワタシを指名しているのも、アスマの予想の内?」
「それは予想外。だけどその準備は進めている。安心して。さて、と」
　アスマは起きあがるとトイレに向かった。深月は絶句し、その後、悲鳴めいた声を上げた。
「女の子なんだぞ!　少しは気を遣え!」
「ああ、ごめん」
　アスマはトランクス姿で振り返ると、苦笑しながら頭を掻いた。

「デートの最中に悪いんだが、おじさんとちょっとお茶しない？」
買い物を済ませてガレージに戻る帰り道、深月とミルキーは露骨にナンパされた。しかし相手は見知らぬ男ではない。先日、試合前の会見で会い、戦場で砲火を交えてもいる。
「ディモス・ガモス……」
深月は目を細めた。
彼は全世界で一億世帯が視聴契約をしているという人気ドキュメンタリー番組『レイヴンの戦場』の案内役兼戦士である著名なレイヴンだった。
「上位ランカーさんのお誘いですか。高額納税者なんですよね？　お高くつきますわよ」
ミルキーがシニカルな笑みを浮かべる。
「缶コーヒーじゃ駄目？」
「財布の紐固いわね」
「母ちゃんに握られているんでな」
「奥さんいるんだ？」

深月は意外だと言わんばかりだ。
「そう。ガキもいる。だから生きている内に稼げるだけ稼がないとな。そんな背中を君たちはずっと見てきたんだろう？」
「あら。同情を引こうって作戦かしら？」
「お嬢さん、それ、当たりだ」
ガモスがこの手の駆け引きに慣れているのは当然としても、一歩も引かないミルキーもなかなかなものだ。それでも正直なガモスを前に気勢を削がれたミルキーは深月の方を見た。
「どうせスタッフのカメラがこのシーンも撮っているんでしょう？」
「それも当たり」
ガモスは笑い、親指を立てる。
「番組を見ていれば分かる」
「そうか……じゃあ番組で領収書切って貰うから、美味しいところに行こうか」
「最初からそう言えば良いのに」
ミルキーが膨れ、ガモスはまた笑った。
評判のオープンカフェでロイヤルミルクティとパフェを頼み、ミルキーはご満悦。深月はそれを見て少しほっとするが、ただお茶をするだけという訳にはいかない。

「で、用件は？　そちらから格下にオファーしたんだから何かあるんだろう？　本当はこっちの方が訊きたいことがあるのだけど」
「単に面白いからだ。少女レイヴン三人集結は絵になった。あ、これ俺のアイデアね」
「ああ、そうですか」
「プロフィールはざっと調べたよ。君たちがレイヴンを続けている理由はもうない。親父の遺志を継ぐってのは泣かせる話だが、まだ若い。今からでも学校に行って普通の女の子になれるだろう？　機体を売れば一生遊べるだけの金が残る。何故そうしなかった？　恋や夢が待っているだろうに」
「シナリオにそう書いてあるんですか？」
ミルキーが目を細める。
「いいや。これは俺のアドリブだよ」
深月は頷いた。
「これしか出来ることが掌に残っていなかったから」
ガモスも小さく頷いた。
「それは俺も同じだ。だが君には俺と違ってやり直せる時間がある」
深月は首を小さく横に振る。
「どうだろう。人間の一生なんか限られている。それに……」

「それに？」

口にするのをためらう深月の背中をガモスの穏やかな視線が後押しした。

「恋と夢だって今は掌の中にある」

「ミヅキちゃん……」

ミルキーは寂しそうに俯いた。

「これで心おきなく戦える。負けて辞めるもよし。俺を討ち倒すもよし、だ」

「今度はこっちの質問の番だ。あんたは〝黒い奴〟の噂を聞いたことがあるか？」

ガモスはその言葉を聞いて後ろを振り返った。遠くにスタッフらしき男が立っていた。指示を求めているらしい。

「知っているのね」

ミルキーが問いただす。

「我々の次の獲物だ。君たちの親父さんが〝黒い奴〟にやられたことは分かっている。だからこそこの企画が進行したんだだが」

「マスコミという奴はこれだから……」

ミルキーは睨み付ける。深月は身を乗り出し、言葉を吐き出した。

「教えてくれ。〝黒い奴〟のことを」

「企業秘密だ。莫大な放映権が絡んでいる。そう簡単に教えられんさ」
ガモスは耳に手を当てた。内耳に指示用のマイクロスピーカーがあるのだろう。
「君らが俺に勝ったら教える、というのはどうだ？　その方が番組的にも盛り上がると判断したようだ」
「面白い」
深月は立ち上がり、ガモスを睨み付けた。しかしガモスは動じることなく続けた。
「だがこっちは大衆受けするように仕掛けがあるからな。後で驚くなよ」
「それって複線？　シナリオにあるわね」
ミルキーのツッコミにガモスは笑った。
「またまた当たりだ」
「行こう、ミルキー」
「うん。でもパフェを食べ終わってからね」
「それが良い」
ガモスもコーヒーを口にした。不思議と深月は目の前の男を憎めなくなっていた。
穏やかな時間が流れ始める。
深月が頼んだロイヤルミルクティは少し冷めてしまったが、評判のお店だけあって美味しかった。

ガレージに戻るとトレーラーのドライバーが呼出ベルを鳴らしていた。ミルキーがサインをし、コンテナを搬入して梱包を開けると中身は腕武器とジェネレーターと判明した。
「また新型パーツか。アスマのコネクションはどうなっているんだろう?」
「クリプトニューム時代のコネなんでしょうけど……気前良いわね」
ミルキーは新パーツの性能諸元を読み解きながら軽く応えたが、手書きのメモが書き添えられたそれを読み進めると眉をひそめた。
「『新世代』規格のものだわ、これ」
「それって各企業が参加して開発している新規格のことよね」
「ロールアウトまで十年は掛かるって言われてる。公式なデモンストレーションですらまだなのよ。なのにアリーナで使うって……」
ミルキーが信じ難いという表情で右腕武器を見つめる。アスマがガレージに帰ってきたのはそんな場面だった。
「ああ、新パーツ到着したんだ」
「なんなのよ、これ!」
「古巣の開発元に頼んだらくれた」

「さすがは元匿名傭兵部隊、かな」
深月は肩をすくめる。
「セッティングする。試合まで時間がない。深月、急ぐよ」
アスマはテーブルの上に紙袋を置くと、新パーツに向き合った。
「ところでアスマ……病院に行っていたの？」
深月は紙袋に視線を動かした。
「ちょっと風邪気味でね」
それが嘘であることくらい深月には分かっていた。尋常ではない薬の量。この若さで現役レイヴンを引退。この二つから考えられるのは重大な疾患以外ない。
「ミヅキ。新パーツの数値測定を終えたらシミュレーションに入ってくれ。相手は格上だ。繊細かつ冷静にことを運ばないと勝てない」
「それは分かっているよ」
深月は口を一文字にする。
ディモス・ガモスの問いが今頃になって深月の心に重くのしかかってきていた。
試合当日は雨の予報だった。雨天のセッティングはどうしても慎重になる。光学兵器は減退し、照準

軸も影響を受ける。視覚映像の補正も必要だ。アスマが白み始めた東の空を見上げると、厚い黒い雲が天を覆っていた。ダブルハートの試合はセミファイナル。午後三時過ぎの予定だ。間違いなく降雨中の戦闘になりそうだった。

そして昼過ぎにアリーナの主催者側から連絡があった。それは特別ステージ「首都圏防衛用高速浮遊軌道区域」で試合が行われるという極めて異例なものだった。

「首都圏防衛用高速浮遊軌道区域」とはトーキョーフロンティアをぐるりと取り囲む形で設置されているリニアフィールドのことだ。普段はハイウェイとして活用されているが、戦時には高速浮遊砲台が最大時速六百キロメートルで疾走し、あらゆる機動兵器を瞬時に迎撃する鉄壁の守りとなる。内戦後に建造された首都圏防衛の要だ。

「リニアフィールドでバトルなんてどういうこと？」

ミルキーの疑問にアスマが答える。

「ACを高速浮遊砲台代わりに使う計画があると聞いたことがある。つまりディモス・ガモスはそれを試すってことだろうな」

「そんなのあり？」

「ありだからこっちに新パーツが供給されたんだろう。五分の条件って訳だ」

「未知の機動の方が条件良いわよ」

「……大丈夫。軽量二脚（ウィクトーリア）が速さで負ける訳にいかないから」
深月の言葉には自信が感じられた。
「ドライバーが同じならそう戦術は変えられない。深月が慌てなければそれで良い」
アスマの言葉を聞き、深月は安堵する。それと同時に、こう予感もする。
（アスマと一緒にいられるのはほんの短い間かもしれない。でも今という時間があればそれでも良い）
深月はトレーラーの助手席に乗り込むと静かに目を閉じた。

今回はアリーナ外の試合ということで管制設備として軍用指揮車が用意されていた。使用する浮遊軌道は流れ弾の被害が最小限で済むエリアに限定されていたが、それでも総延長六千メートルあまり。普段のアリーナ戦より実戦に近い。またガモス側の待機エリアは反対側にあり、索敵も勝敗を分ける重要な要素となりそうだった。
ダブルハート側の待機エリアにウィクトーリアが立つ。左右二挺の新型腕武器は降り出した雨に濡れて鈍く輝いている。アスマは指揮車内のモニターから機体を見ながらマイク越しに深月に声を掛けた。
「瞬間最大戦速は互角。後はどう見切るかだ。そして相手は浮遊ユニットに慣れていない。その分ハンデを貰ったと思えば良い」
『うん』

コクピット内の深月から返答があった。
ヘルメット越しでも分かるほど、アスマは今日の深月から女性らしさを感じた。
「問題は新型ライフルの信頼性だが、今日は長期戦になる前に終わる。心配はいらない」
『分かっている』
「じゃあ、がんばって」
一旦、無線を閉鎖する。
「今日の深月、どうしたんだ？」
アスマは管制席のミルキーに問いかける。
「いつも全て分かっているような口振りだけど、女の子のことは鈍いのね」
「気を付けているつもりだけど、勝手に新パーツを取り寄せたのが気に喰わなかったのかな」
「バカね、あなた」
「深月のメンタルに関わることなら教えてくれ。試合に響く」
アスマの言葉にプライドはない。
「じゃあ教えるけど、あなた、嘘をついたでしょう。風邪じゃないことくらい誰にでも分かる」
「そうだな。嘘はよくない。ミルキーの言うとおりだ」
「この戦いが終わったら弁明することね」

「それは出来そうにない」
そしてアスマはモニターに映る深月を見つめ続けた。
しばらく経つと携帯端末のコール音が鳴り、アスマはようやく目を逸らした。
「客が来た」
「こんなときに？」
「こんなときだから、かもしれないよ」
アスマが指揮車の外に出るとコールした本人が待っていた。
このTFアリーナのトップランカー、賞金獲得額三年連続一位のレイヴン、ノワール卿が、傘を差して立っていた。ナインはクリプトニューム時代のコードナンバーだ。
「……ナイン」
「主催者の許可は取ってある。中で観戦させて貰いたい」
「あなたが来てくれるとはね……」
アスマがナインを車内に招くと、指揮車内は限界まで引かれた弓のように張りつめた空気に包まれた。
「少しお邪魔するよ」
ミルキーに断りを入れるとナインは管制席の後ろで腕を組んだ。
アスマは缶コーヒーを無言でナインに手渡し、試合の開始を待った。



カウンターは0を指し示し、高速浮遊軌道上での試合が始まった。

ウィクトーリアは最初からオーバーブースト（OB）とノーマルブーストを併用し、高速度域を保持する。肩部レーダーで相手より先に位置を把握してイニシアチブを取り、長射程火器で先制攻撃をする。そして短い相対時間に可能な限りダメージを与え、射程外に逃れる。戦闘機の空中戦に似た戦術だ。

ウィクトーリアはブラインドコーナーの陰から姿を現したガモスのAC〝シルヴィーユ〟をロックし、トリガーを引く。新型ライフルの威力は凄まじく、着弾の衝撃でシルヴィーユが大きく揺れた。

ウィクトーリアの先制攻撃をモニター越しに見てその意図を悟り、ナインは小さく感嘆の声を上げた。

「良い出だしだ」

「……だがすぐに射程を詰められる」

シルヴィーユは高速浮遊ユニットの本領を発揮して猛加速で迫ると、右腕の複数銃身機関砲を放った。ガモスは再装填ぎりぎりのタイミングまでトリガーを絞り、その殆どをウィクトーリアに着弾させる。

「しかもよく分かっている。だがリニアシステムはレイヴンにとっては未知のユニット。誰もが使いこなせる訳じゃない」

アスマは確信を込めてそう口にする。するとその言葉が呼び水となったのか、シルヴィーユはウィクトーリアとすれ違う瞬間に機体を浮かせてしまった。

「ミヅキちゃん！」

『分かっている！』

ミルキーの指示でヴィクトーリアは再び防音壁の陰に隠れる。射界を失っても肩部レーダーで敵機の位置は分かる。ターンして再びブースト、距離を詰める。

フロート脚は浮いた分、速度を失い、まだブラインドコーナーの手前にいた。ライフルの射程ぎりぎり。ロック前に左右連射。一発は着弾、一発は外れた。次弾のロックが完了した間で、シルヴィーユはコーナーに入って防音壁の向こうに消えた。

ナインはバイザーの下の瞼を閉じた。

「良い反応だ。先日手合わせしたときより格段に反応が良い。機体に慣れただけではないな」

「ええ。これが彼女の実力です」

誇らしげにアスマは応え、ナインは二度、頷いた。

「勝負は見えたな」

その後ヴィクトーリアとシルヴィーユは三度、交差した。

相対速度は千キロを超えている。旧時代の戦闘機の戦いに匹敵する速度域だ。

ガモスは慣れないフロートユニットでの機動に四苦八苦した。格上でなければ「善戦していた」と言って良いだろう。だがここではガモスの方がランクが上、そしてレイヴンとしての実績もまた遥かに上だ。それは間違いない。ニュースでは『TVの演出過剰による敗北』と断じるだろう。しかしこの二

人の男だけは深月の才能の開花を察した。

ジャッジはシルヴィーユの行動不能を宣言し、システムをダウンさせる。浮遊ユニットも停止し、ゆっくりと軌道上に降り立った。それを見届け、ナインが言った。

「次は私の番だ」

「正式な発表を待っているよ」

ナインとアスマの言葉、双方への驚きを隠すことなくミルキーは二人を振り返る。

二人は視線を合わせず、ただヴィクトーリアが映るモニターを見つめていた。

深月はヴィクトーリアをシルヴィーユの前に滑らせた。本来、勝者が敗者に掛ける言葉はないが、今日は事情が異なっている。深月はガモスに訊かねばならないことがあった。ガモスはコクピットから降りて回収車を待っていた。深月もまたコクピットから降り立った。

「やあ後輩。完敗だ」

「それはあなたが不慣れな脚部を使ったからだ。任務のときの動きとはまるで違っていた」

深月は傷ついたシルヴィーユを見上げた。

「いいや、それは理由にならない。スポンサーがやれと言ったらやる。それがレイヴンに課せられた一方の真実だからな。今日は君の実力で勝ったんだ。誇って良い」

は言えない。
「そうさせてもらう」
「約束の件はしばらく時間をくれよな」
ガモスは浮遊している無人偵察ユニットを顎で指した。リアルタイム中継されている中、滅多なこと
「分かった。今日はありがとう」
深月はガモスに右手を差し出し、ガモスは握り返す。
「やれやれ。これで当分の間は、番組のネタに困りそうにないな」
ガモスは不敵な笑みを浮かべ、そして思い直したように神妙な顔をした。
「一つ聞かせてくれ。この前訊いたことだが……君の恋と夢は今日の戦いの先にあるのかい？」
深月はそう問われ、ほんの少しだけ間を空け、そして頷いて答えた。
「守るって言ってくれた……今もきっと彼に守られている、そう思う」
深月は白亜の人型機動兵器を振り返る。
（それが真実ならばどれほど幸せだろう）
そう願い、深月は静かに瞼を降ろした。



平和は一度破られてしまうと記憶の中にだけ存在するものになってしまう。だがその記憶は優しく、温かく、色鮮やかで、恋しいものとなる。そして深月にとっての平和とは、家族と過ごした愛しい時間そのものだった。

平和と共に家族は失われ、最後まで守ってくれた祖父も流れ弾に当たり、彼女の目の前で絶命した。温かかった祖父の手が徐々に冷たくなり、固くなるまで、深月はその手を離そうとは思わなかった。

そして心の底から涙した。

涙が涸れた後、もう泣くまいと彼女は幼いながらも固く決意した。

十歳になったばかりの冬のことだった。

サーティは強いＥＣＭの中、廃墟と化した市街地に愛機の四脚ＡＣを潜ませていた。衛星からのバックアップは得られず、搭載していた無人偵察機が底を尽き、最後に得たデータは八時間前のそれとなった。時折強い雑音の中から拾える通常無線はレジスタンスのもののようで、日本語の上に暗号で会話していてさっぱり分からない。戦線の変化を知りたく思い、サーティは廃墟と化したマンションの屋上に

上った。だが目視では敵を見つけられず、遠くの砲撃音が響いてくるのが聞こえただけだった。どう動けば良いのか全く見当もつかない。ただ一つ言えるのは敵の勢力圏に取り残されたらしい、ということだけだ。愛機に戻って電子機器を確認したが、それらは先ほどと変わらず死んでいた。

「まあなんとかなるか」

サーティは四脚ACを起動させ、ヘルメットを被る。HMDに外界の情報が映像とデータで表示され、サーティは自らがACと一体と化すように意識をスイッチする。周囲を確認すると生体反応があった。十七時方向、約五〇メートル。マンションの屋上に正規兵の姿を視認。その肩には対AC兵器が乗っていた。サーティは緊急ブーストを試みるが、戦闘ダメージの累積のためか上昇カーブを描かない。

(間に合わないか)

脚部の関節を破壊されたら機動性は大幅に低下する。最悪、この敵のただ中で立ち往生することになる。機体の放棄はレイヴンにとって最大の屈辱だ。しかも歩兵などにやられるとは。

刹那の悔恨。数秒の空白。だがその後も対AC兵器は発射されなかった。

サーティがHMDの映像を確認すると、屋上の歩兵はうつ伏せになって倒れていた。そしてすぐに小さな人影が現れ、倒れた歩兵の背中に拳銃弾を叩き込んだ。

「ガキか……おい、一人かよ」

大都市の市街戦では子どもが銃を手にすることも珍しくないが、一人とは事情がありそうだ。

『あんた、昨夜のエアボーンで降りてきたレイヴンだろ？　ワタシも仲間とはぐれたんだ。後方まで乗っけてってよ。土地勘あるんだ。損させないからさ』
子どもは屋上から四脚ACに声を掛けた。声と背格好から察するに、まだ小学生だろうか。
「こっちは棺桶並みに狭いんだ。お前がガキでも乗せるのは無理だ」
『やってみなきゃ分からないじゃん』
子どもの姿が屋上から消えた。
思えば娘の年頃と同じくらいだ。戦場のただ中に一人残していくのは心苦しい。
（娘が生まれるまではそんなこと思わなかったものだが……）
子どもがACの足下に姿を見せると、サーティはコクピットハッチを開けて声を掛けた。
「分かった。お前の情報を買おう。その代償に安全な場所まで連れて行ってやる。俺は〝サーティ〟。小僧、お前の名は？」
「ミヅキ！」
ミヅキの顔は煤と泥に、服は返り血で黒く汚れていたが、目だけは輝いていた。
「じゃあミヅキ、来い」
サーティはロープを投げ、ミヅキをコクピットまで導いた。
ミヅキは大汗をかきながらハッチまで上ると、自信満々に言った。

「まあ見ていてよ。無事突破させてあげるからさ。それにワタシ、運だけは強いんだ」
ニッと笑うミヅキを見て、サーティの顔にも自然に微笑みが浮かぶ。
「狭いぞ」
「大丈夫、大丈夫」
ミヅキはサーティの膝の上にちょこんと収まる。苦しいながらもどうにか操縦出来そうだ。サーティはコクピット内面の予備モニタを点灯し、ミヅキにも視界を提供する。
「さあ、しっかりナビゲートしてもらわんとな。一蓮托生だぞ」
「りょーかい」
「はは。頼もしいな」
サーティは娘と過ごしているときのように軽く笑うと、前進を開始した。

「やれやれ。これからどうしたものかな」
軽量二脚ACの中、〝サード〟は考えあぐねていた。夜間の戦闘で僚機とはぐれたが、敵の支配地域のただ中で動きを止めることは自殺行為に等しい。とはいえ燃料電池と推進剤の残りは少ない。弾薬も心許ない。その上こうもECMが強いと身動きがとれない。
「どこに行ってしまったんですか？　あれだけ偉そうなこと言っていたくせに」

地図情報によれば現在位置は神社の境内の中だ。東京は数百年の歴史がある街とはいえ、都会のただ中にこんな原生林があることにサードは驚きを隠せない。任務の最中でなければどれほど良いかと思う。広大な原生林はACを隠すには絶好の場所だった。それに神聖さ故か、戦闘が行われた様子もない。

「もしかして僕って『罰当たり』な奴かな。へえ、これって原生林じゃなくて植林なんだ。何百年経っているのかなあ」

観光用データを眺めているところは余裕だ。傭兵らしからぬ行動だがそもそも彼はレイヴンではない。傭兵部隊〝クリプトニューム〟に派遣された企業付きのAC開発担当技官、それが彼の肩書きだ。彼は今、自分が開発しているコアで実戦に無理矢理連れ出されたところで、連れ出したのはもちろん、僚機を駆るベテランレイヴン、サーティだ。

（実戦を知らないで開発が出来るかってのは正論だけど、責任もって欲しいよ。僕は素人なんだから）

サードはそう思いつつ、顔が笑っていた。面白いのではない。夜間のエアボーン、橋頭堡確保という任務に失敗し、機動兵器と猟兵、ヘリコプターに追われ、一つの撃破もなく逃げ回った。恐怖で感情が麻痺し、全てを「おかしい」としか感じられなくなっていたのだ。しかしそれは生を求める生物としての本能なのだろうとサードは思う。

それにしても静かだ。バッテリー駆動時のコクピットは静寂に満ちている。棺桶と揶揄される訳だ。

（このまま棺桶に収まりたくないなあ）

そう思ったとき、静寂は不意に破られた。ＨＭＤに警告表示が点灯、センサーは燃料電池の反応熱とタービン音を捉えた。幸いタービンの音紋は友軍機体と一致、ＨＭＤの反応色が味方色に変化し、サードは胸をなで下ろす。

『サード、良いところに隠れているじゃないか。見直したぞ』

サーティの声がヘルメットの中にこだまする。赤外線短距離通信だ。

『サーティ！　よく無事で！』

『お前が生きていて俺がくたばっている道理はあるまい？』

『フォローするって言ったくせにいなくなったじゃないか。よく言うよ』

『ついてこない方が悪い。そこまでは責任持てん』

『そんな理屈、素人相手にありますか？』

『戦場でＡＣを駆っている時点で素人扱いする理由はない。こっちにこい。四脚じゃ境内林を根こそぎ倒しちまうからな』

『了解』

サードはＡＣを起動。樹齢百有余年の木々を避けながら境内に出ると、見慣れたサーティのＡＣがあった。そのコクピットハッチは大きく開かれており、サードのＡＣが近づくと小さな頭が飛び出した。

「……子ども？」

怪訝そうにサードは口にした。利発そうな男の子だった。
『この小僧はお前に任せた。今は缶の蓋を開けて貰ったニシンの気分だ』
「なんだって？」
『ACは二人乗りするもんじゃない』
「そんなことは分かってますけど！」
子どもは恐る恐るコクピットから脚部に飛び降り、それからサードの機体に乗り移った。
『ハッチを開けろ』
サーティの言うがままサードはハッチオープン、そして子どもを招き入れた。
『ゲリラの子だ。土地勘がある。その小僧のアドバイスでここまで来た』
「それで僕を見つけられた訳ですか」
『制空権がある上、支配地域内。正規軍がACを隠す理由はない。ACを潜ませるにはそれなりの広さと遮蔽物が必要だ、とさ』
「へえ」
サードが感嘆の声を上げると同時に子どもはハッチからコクピットに滑り込ん出来た。コンソールパネルの上に足を乗せながら、大きな瞳でサードを見据える。
「膝の上で良い？」

「ああ」

ドギマギしながらサードは応えた。子どもが膝の上に乗ると匂いが漂ってきた。主に汗と血と油の臭いだが、中にはそれらと違う、何か良い匂いが含まれていた。

「ようしボク。しっかり掴まっていろよ」

「〝ボク〟じゃない。ワタシは女の子だ」

「そうか。サーティが小僧って言っていたから男の子だと思っていたよ。男の子にしては可愛過ぎるなあとは思っていたよ」

女の子の匂いだったのか、とサードは納得した。そういえば昔に嗅いだことがあったような気がする。

「えぇえ?」

女の子は変な声を出し、少し頬を赤く染め、照れ笑いした。

「はは」

サードはつられて乾いた笑い声を上げた。こんな小さな女の子が戦場でゲリラをしていた。想像を絶する地獄を見てきたであろうことは想像に難くない。だが、彼女はまだ笑顔を失っていなかった。

それは嬉しかったが、同時にプレッシャーも感じた。

「大丈夫。すぐ後方から援護が来る。それまで持ちこたえられればね」

(自分はレイヴンではない。ただの素人だ。だがそれをこの子に悟られてはならない。不安にさせては

ならない。僕は大人なんだから）
サードはそう自分に言い聞かせ、ハッチを閉めた。
幸い少女はサードの不安を感じ取らなかったようだ。そして力強くこう言った。
「大丈夫！　ワタシ、運だけは強いんだ！」
今、必要なのは確かに運なのだろう。そしてサーティと彼女が、自分が巡り会ったこともまた運であり、巡り合わせなのだろう。
「それは心強い。それならさしずめ、君は僕の勝利の女神って訳だ。名前は？　僕は〝サード〟」
「ミヅキ……鴉山深月」
「じゃあミヅキ、君の幸運に懸けて、僕は君を守る。約束だ」
「そんなこと約束出来るの？」
「ああもちろんさ。僕は出来ない約束はしない主義なんだ」
「分かった。信じる。サーティと回線を開いてマップをサブディスプレイに出して。ナビゲートする」
「了解だ」
『俺が先行する。お前は警戒と支援に専念するんだ。ミヅキは案内を頼んだ。あと後方警戒もな』
サーティの命令に従い、アスマはサブスクリーンを後方のそれに切り替え、自分は戦闘時のようにHMDで視界を確保する。

「じゃあ案内するよ。しっかり聞いてくれよな」
ミヅキは悪戯げな笑みを浮かべる。安心したようだ。
「了解」
戦場のただ中というのに、サードも心なしか安心出来た。

戦闘区域に至った二機のACは、友軍と共同し、敵を挟撃する形で生還を果たした。結局橋頭堡を確保することは出来ず、作戦は失敗した形となったが、クリプトニュームとしては損害を出すことなく全機を回収することが出来た。緒戦としてはまずまずの結果だ。
報告を終えたサーティとサードの二人は、ミヅキの安全を確保することを決めた。
「柄でもないと言うなよ。以前ならこんなことはしなかった。きりがないしな」
部隊仮宿舎のロビーでサーティは自嘲気味に笑った。
「良いんじゃないですか?」
サードは自販機のコーヒーをすすりながら、携帯端末を叩くサードに応える。
「娘と歳が近いからかと思うんだが……小僧は、笑っていたんだ」
「良い笑顔しますよね。笑うと可愛い。これまできっと大変だったんだろうけど、微笑みがまだ彼女の中に残っているのは、とても良いことですよ」

「いや、違うんだ」
「違う？」
「俺を助けてくれた……正規兵を殺した直後、小僧は俺の前で、余裕で笑ったんだ。それを強いるこの世界のことを言っても何も始まらないが、俺はあの笑顔を見てしまったんだ」
「……なるほど」
「最初は強い子だと思った。笑顔は掛け替えのないものだと思った。だがこんな世界を見るのは俺たちだけで良い。そう思いたいんだ」
「良いんじゃないですか」
「ありがとうよ」
サーティは携帯端末を折り畳み、サードを見た。
「何を話しているのさ？」
ソファの後ろから、健康診断を終えたミヅキが顔を出した。
「君の笑顔が可愛いって話だよ」
サードがにこりと笑うとミヅキは真っ赤になって凍り付き、サーティに助けを求めるように視線を泳がせた。
「サード、なんか買って来てやれ」

「はいはい」
サードはサーティの命令に従って自販機に行き、その間にサーティは口を開いた。
「おい小僧。俺には娘が一人いてな。だが俺はこんな商売だ。いつも寂しい思いをさせている。悪いことだとは思っているんだ。もし良ければ娘の相手をしてもらえないか？」
ミヅキは首を傾げた。
「別に構わないけど」
「学校にも行かせてやる」
「それってあんたの家にやっかいになるって話？」
「迷惑か？」
「だっていきなりそんなのって変だろ？」
「それももっともだがこれも縁だと思ってな。俺はお前に助けられた。今度は俺がお前を助ける」
ミヅキは黙り込み、俯いた。
「助けて貰ったのは、ワタシだ。シャワーを浴びたのなんて二週間ぶりだよ。人だって、殺した」
「俺も同じ人殺しだ」
「……でも……うわあっ！」
ミヅキの頬に冷たいものが当てられた。冷たい缶ジュースだ。振り返るとサードが微笑んでいた。

「良いんじゃないかな」
「もう！　驚かすなよ！」
「はは。お兄さんは、君が遠慮するのはもっと先で良い、今は甘えれば良いと思うんだ」
「少し考える。それとさ、話違うんだけど、どうしてそんな変なバイザーつけてるの？　それもお揃いでさ。変態？　顔見せるの駄目なの？」
「それはねえ、この部隊には有名なランカーが大勢、しかも内緒で所属しているんだ。だから戦場でもいろいろしがらみがあってね。本名であっちの国につくこともあるし、明日はこっちの国とかね。だから匿名だし、バイザーで正体を隠しているんだね」
「仮面の正義の味方きどりかと思った」
「はは、ジャパニーズ・ＳＦＸじゃないぞ」
サーティは笑った。これは温かな記憶。そしてミヅキの新しい人生が始まった日だった。

あれはいつのことだったたか。
サーティは思い返す。しかし何故、アスマとミヅキの記憶まで混ざっているのか理解出来ない。微睡みの中、記憶を整理するが、遠い過去の記憶もつい最近と思える記憶も混濁の中にあった。まるで記憶喪失に陥った人間が一気に記憶を取り戻したかのようだ。

（俺はどこで何をしていた？　ここはどこだ？）

《覚醒したか》

声にならない声がした。

（お前は誰だ？）

《私がお前になる。お前が私になる。私は誰なのか、私はそれを知りたい》

（まるで禅問答だな）

《そう……そう言っても良い。私はお前の力を求めていた。答えを知るために》

（たいそうなモンだな）

《それが『たいそうなモン』なのかどうかすら、私には分からないのだ。私に力を貸して欲しい。そうすれば私もお前に新しい力を与えよう。この世の全てを凌駕する力を》

（そんなものはいらん）

少し間が空いた。

《やはり人間は分からない。だからこそ私は求める。お前の力を》

声はサーティに語りかけ、サーティもまたこう応える。

（訳ありか？）

《そうシンプルに定義して貰って構わない》

〈話を聞こう。話次第によっては、力を貸そう。だが条件がある〉
《条件？　どのような？》
〈いくらお前が雇い主であろうとも俺はレイヴン（ワタリガラス）だ。羽根は失わない。任務以外はどこまでも俺とお前は同等の立場。それが条件だ〉
《シンプルだな》
〈人間がシンプルなんでな〉
《分かった。約束しよう》

サーティは再び微睡み始める。
微睡みの中、脳の中に新たなシナプスが形成される。そして機械的な電気信号が流され、何者かと接続されるのを理解する。
それが新たな力だと気づくまで、まだ少しの時間が必要だった。

ミッション〔5〕

ナパーム弾の炎の中から、灼熱の紅をまとった黒曜石の輝きが現れる。
ミルキーが遠隔トリガーで直撃させたナパーム弾は最大限の効果を上げた。
ＴＦアリーナのトップに君臨する〝ノワール〟は悲鳴を上げる冷却装置に鞭を打ちながらもウィクトーリアに立ち向かう。
（この一撃を！）
深月は左腕の大型ブレードを揮い、月光の輝きをノワールに叩きつけた。
それが初めてのクリーンヒットとなった。
だがノワールのメインセンサーは輝きを増し、下方からブレードを振り上げた。

☆　☆　☆

ＴＦリーグのランキング二八位にすぎなかった深月とミルキー〝ダブルハート〟はベテランレイヴン、ディモス・ガモスをスペシャルマッチで下し、ランキングを一五位まで急上昇させた。

それから二週間経った今、マスコミの『ウサギ跳び』との嘲笑を意に介さず、深月とミルキーはトップランカーの正式指名に備えていた。深月は新たな兵装に慣れるためのシミュレートに明け暮れ、ミルキーは未知の新型軽量ジェネレーターの制御に苦心している。残るアスマはウィクトーリアの修理の後、深月にこう言い渡していた。

「相手が誰であろうと君は基本通りやれば良い。たとえトップランカーが相手でも」

深月は彼の真意を測りかねたが、アスマにとっては単なる事実を述べたにすぎない。

「今の君には〝ナイン〟と戦える力がある。基本を忠実にこなせば勝機が見える」

しかしつい先日まで下位を低迷していた深月にはその実感がない。アドバイスを求めようとすると、アスマは外出の準備を始めた。アスマは乾いた声で言った。

「〝ナイン〟に会って来る」

それが何を意味するのか、まだ深月には分からなかった。

トーキョーフロンティアの人工海岸は過密都市の憩いの場だ。

白い砂浜と浄化された海、穏やかな波。

ビーチハウスのレストラン、オープンエアのテーブルにナインは独りいた。彼はかつてアスマがレイヴンとして所属していた傭兵部隊〝クリプトニューム〟のバイザーで表情を隠し、白く細かい泡を立て

る波を見ていた。
ふと自らにかかる影に気づき、ナインは面を上げ、アスマを認めた。
「座らないか?」
「お言葉に甘えて」
アスマは向こう正面の椅子に腰掛け、ウェイトレスにコーヒーを注文した。
しばらく二人は無言だった。
ウェイトレスが注文の品を持ってきて、初めてナインが口を開けた。
「早かったな」
アスマは眉をひそめた。
「何が、ですか?」
「お前たちが上がってくるまで、だ」
アスマはバイザー下のナインの表情を窺おうとしたがそれは叶わなかった。
「彼女はサーティの娘だ。その上お前がついている。並のランカーではもう相手にならないだろう。ここまで急速に成長するとは思わなかったが、それは好都合というものか」
「……何が、好都合だと?」
アスマは眉をひそめる。

「お前の気が済むだろうと思ってな」
「気が……済む？」
「そうだ。お前の身体のことを知らないとでも思ったのか？　いつ心臓が、生体機能が停止するか分からないその身体で普通の生活を送るのは自殺行為だ。蘇生術が間に合うとは限らないのだぞ」
アスマは椅子から立ち上がった。
「だけど病院のベッドの上で一生を過ごすより遥かにマシだ！　今、僕は生きている！　それを感じられる。ACを整備し、パーツをバラし、アセンを組み、対戦相手の分析をして、勝敗に一喜一憂する！たかがアリーナの戦いだ。誰から見ても幸せな、まっとうな人生だとは思わない。だけど僕は、今、生きている。ベッドの上でただ息をしていることが生きているってことじゃない！」
アスマは激高し、肩で息をした。ナインは冷静な声で応える。
「それでも私はお前に生きていて欲しい。今となってはお前は唯一人の生身の戦友だ……そしてクリプトニューム唯一の生き残りでもある。お前には私たちが生きていたことを覚えていて欲しいんだ」
「……どういう意味ですか？」
アスマはナインの言葉をそのまま受け取れば良いのか、考えあぐねた。それを感じ取ったのかナインはこう、答えた。
「そのままの意味だ」

そしてナインはバイザーを取り、アスマに素顔を曝した。
アスマはナインの瞳を見据えた。
瞳には銀色の微かな輝きとシャボンの輝きのような虹彩変化が浮かんでいた。
「……電子義眼」
「生体部品ならそう簡単には見破れないのだが、電子義眼の方が圧倒的に性能が上なのでな……使わされている。この身体の九〇％以上がサイバネティックだ。もはや記憶ですら外部装置に頼っているありさまさ。本当の自分が今、どこにいるのかすら分からなくなる。自分が生きているのかどうかすら、分からないほどだ。本当の自分は機械の中にいてこの身体は夢うつつでしかない、そう思うよ」
ぎこちない、何とも言えない苦しそうな表情が形作られた。辛そうな表情を造ろうとしているのだろうが、人造の貌に生身のそれを再現するだけの表現力はない。それはナイン自身よく分かっているはずだった。だがその心遣いに気づく余裕はアスマにはなかった。
そしてナインは再びバイザーを付けた。
「トップランカーという立場は便利だ。こんなバイザーをしていても大目に見て貰える。ショー要素が高いからな。だがもう私は普通の人間としては生活出来ん。お前は生きろ。生身の身体で。ベッドの上だろうと必ず何かが見つけられる。だが自分自身を失っては、全てが終わりだ」
「ドラコーン計画、ですね」

アスマは重苦しく口を開け、ナインは小さく頷いた。
「まだ継続していたとは思わなかった」
「お前は候補者から外された。もう関わる必要はない」
「でも、まさか……今度は深月を候補者にするつもりですか!?」
アスマはテーブルを叩き、カップの中のコーヒーが飛沫を上げた。
「もう戻れないところまで来ている。私は彼女に忠告をした。それでも彼女は前に進んだ。まだ彼女は若い。幼いと言っても良い。そんな力はないはずだった。だが前に進んだ。そしてその力を与えたはお前自身だ。それを忘れるな」
戦友の言葉はアスマの心の中心を見事に射抜いた。
ナインは席を立ち、海風を受けながら人工の砂浜を後にする。
そしてアスマはその場に立ちつくし、カップのコーヒーが風で波立つのをじっと見つめていた。
〝ダブルハート〟がトップランカーからの正式指名を受けたのはその二時間後だった。

試合当日までの一週間はあっという間に過ぎた。トップランカーとの試合ともなるとマスコミの露出が大幅に増える。普段のマニア向け・ゴシップ向けの取材以外に一般のマスコミも取り上げてくれる。前回ガモスと戦ったときのドキュメンタリー番組は試合前日の放映開始が決まり、盛り上げるのに一役

買った。そしてミルキーはここぞとばかりにスポンサーの獲得に向けて奔走していた。
周囲は異様なほど盛り上がり始めている。
しかし当の深月は不思議と落ち着いていた。最初は単に実感がないからだと思っていた。いつものの、試合の前に不安を抱えていたときとは違う感じだ。
違うと言えば、今回はアスマがシミュレーターの相手をしてくれるようになった。かつての戦友であるアスマが操ると電子情報にすぎないはずの〝ノワール〟に〝ナイン〟の魂がこもったかのようになる。これは深月にとって筆舌し難い助けとなった。アスマは言う。
「僕がしてあげられることは全てしてあげる。それがサーティとの約束だから」
多分それは彼の心からの言葉だ。しかしその操縦は何か悟りを得たような台詞とは裏腹に激しいものだった。彼は単にナインを演じているのではなかった。深月はシミュレーター越しに彼の強さを感じていた。そしてその強さを少しでも受け取ろうと、深月は全身の神経を集中した。
恐れはない。実感も湧いてきた。
しかし落ち着いている。
それは今後の人生を左右する運命の一戦だと気づいたからに違いなかった。
トップランカーの試合はシリーズの最終日だ。防御スクリーン越しとはいえＡＣの戦場を目の当たり

に出来る〝アリーナ〟は今や世界中に幾つもあり、各地にトップランカーがいる。そして各地のトップランカーが直接対決することは戦場以外は滅多にない。そのため、賞金と実戦での報酬金額の合計が世界ランキングのようなものになっている。中でもオルクス・ノワール卿はそのトップの地位を三年連続でキープしていた。何か特別なことがない限りは今年もそうなるはずだ。彼の強さは格別だった。

そして今度の相手は急成長を遂げたダブルハートだ。だからノワール卿のファンはもちろん、色物チームであるダブルハートのアンチや先のドキュメンタリー番組で興味を持った一般のファンまで駆けつけ、メイン試合の三時間前から会場の〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟は満員となっていた。

アリーナに二機の人型機動兵器が現れ、アルプススタンドの観客が一斉に沸いた。

一方は見慣れた黒曜石のような黒を湛えた機体〝ノワール〟。

もう一方は大理石の輝きを放つ〝ウィクトーリア〟だ。

ノワールはいつもと同じリニアライフルとレーザーブレード、背部にミサイルとグレネードランチャーという装備だった。

しかしウィクトーリアはこれまでの両腕に火器というスタイルから離れ、右にライフル、左に大型レーザーブレード。背部はいつもと同じレーダーだが、肩の追加装備にターンブースタを選択していた。

新型ライフルにより火力と継続戦闘能力が向上しているとはいえ大型ブレードはかなり思い切った選択

だ。前回ノワールと戦ったとき、深月は彼をライフルで捉えるのが精一杯だった。それでありながら今回は有効範囲に捉えるのが困難な大型ブレードを装備しているのだ。
アスマとミルキーはいつものようにアリーナの管制席で試合に備えていた。
ノワールが舞台に登場した直後、管制席のモニターにメッセージが入った。
《今度の作戦を考えたのはお前か？》
ナインからだった。アスマはキーボードを叩いた。
《いいや、彼女だ》
その言葉で十分だったようだ。それ以上のメッセージはなかった。

結果だけを述べてしまえばこうなる。
『ダブルハート、大善戦。辛勝のノワール卿のコメントはなし』
ネット上の大概のトピックスはこのように書かれていた。そして詳細が続く。
『当初、一方的に攻撃を受けたウィクトーリアだったが、ノワールの切り返しの間を読み、隙を突いて新型ライフルでその動きを封じた。その間にウィクトーリアはオーバードブーストで間合いを詰めた。しかしノワール卿は近接戦闘も得意としている。ノワールは再び一方的に攻撃を加えた。しかしウィクトーリアはターンブースタで正面を捉え、インサイド装備のナパーム弾を使用。ノワールに対してブ

レードで反撃に転じた。大打撃を与えて削り合いまで持ち込んだが、ウィクトーリアの反撃もここまで。端緒の損傷が響き、判定でノワール卿の勝利となった。僅差での判定は実に二年ぶりである』と。
深月とミルキーの連係プレーが生んだ善戦だった。深月一人ではノワールの間を捉えられなかったし、ナパーム弾のトリガーはミルキーに渡していた。そしてその連係プレーは深月自身の血の滲むようなシミュレート訓練があって初めて実現出来たことだ。
ネットの評はこう続く。
『少女二人ということで酷評を受けていたダブルハートだが、故人である父親の遺志を継ぎ、見事に本格派のレイヴンに化けたと言っても言い過ぎではないだろう。今後の更なる進化を望む。次の試合は未定だが今度もアリーナで直に見るつもりだ』
これ以上はない誉め言葉だった。しかしアリーナファンにとって残念なことにこの試合の後、ダブルハートはＴＦアリーナから姿を消す。それが『ウサギ跳び』と嘲笑されたほどの快進撃の代償だった。
試合後の寂しい雰囲気は、学校の体育祭や文化祭が終わった後に似ている。
しかしトップランカーという栄誉が掛かった試合にはそれ以上の何かがある。これまでの全てを注ぎ込んだ試合だった。それは間違いない。深月はまだ若く、再度挑戦する機会があるかもしれない。だが彼女自身もうその機会がないことを悟ってしまったのもまた事実だった。たった二度の対戦でノワール

卿が持つ何かを……強さの秘密を知ってしまったからだ。

人間が持ち得ぬ強さというものを。

ガレージに帰ってきたウィクトーリアを迎え、アスマは修理に精を出した。マスコミのカメラが帰った後も、それは続いた。もともと勝敗に関わらず祝うつもりはなかった。アスマは淡々と整備を続け、ミルキーはデータの処理とそれを元にプログラムの変更を始める。その意味では深月にはやることがない。シャワーで汗を流し、いつものジャケットに袖を通せば日常に戻れるはずだった。

だが今日は違う。深月の中で何かが変わったのだ。

その日の深夜、深月の携帯端末に任務の依頼が入った。かなり高額の報酬だった。トップランカーと戦うほどのレイヴンともなると試合の損傷など気にしなくて良いほどの報酬が得られるものだ。それとほぼ同時にガモスからのメールが来ていた。〝黒い奴〟の目撃情報だ。奇しくも、いや、当然のようにその二つの任務エリアは重なり合っていた。

連日の徹夜続きで疲労困憊していたミルキーは、ベッドで爆睡していた。そんな彼女を横目に深月はアパートメントを後にし、少し距離があるガレージまで歩いた。

普段はトレーラーが行き交い、工場から機械の作動音が鳴り響いてくる騒がしい通りだが、その分深夜は人気がなく、静寂に満ち、自分の足音が耳に入るほどだった。

深月が思ったとおり、ガレージには明かりが点っていた。アスマはライフルのバレルをバラしていた。
深月はアスマに携帯端末を見せ、反応を探った。
「原子力発電所跡に立てこもったテロリストの排除……危険な任務だ」
アスマは深月を優しく見下ろした。
「受けて良い？」
深月は俯いた。
「招待状だ。今度こそ本当のノワール卿との戦いになる」
深月は面を上げ、冷静を装うアスマをしっかり見つめた。
「〝黒い奴〟の正体もサーティが何故死んだかもそれで分かる……はずだ」
「ワタシ、平気だよ。今はもう強いんだよ」
そう口にすると深月は瞼の奥に熱いものがこみ上げて来るのを感じた。理由が分からなかった。
しかし次の刹那、氷が一瞬で溶けたかのように身体全体で理解した。
「嘘だ」
アスマは深月を抱擁し、そう耳元で囁いていた。
「嘘じゃないよ」
「強くなくたって、本当は良いんだよ」

それ以上の謝罪の言葉がアスマには見つけられなかったのだろう。それが抱擁というカタチになったのだろう。深月はそう解釈した。

「良いんだ。アスマが〝答え〟を求めているのなら、ワタシは戦うよ。昔みたいに、ただ生き残るためじゃない。だから良いんだ」

「ごめん。僕のわがままだ」

「違う。ワタシ自身がこの道を選んだんだ」

「そうか。強くなったんだね、ミヅキ」

深月はアスマの腕の温かさを、アスマの匂いを五感全てで感じ取った。そしてそれまでずっと堪えていた、瞳を満たしていた熱い涙が、深月の頬を伝った。これからどうなるのか不安もある。だがアスマの腕が、体温が深月の心を満たしてくれた。

もう戻れない。それだけは確かだった。



アナザー・ストーリー［3］

圧倒的な力が欲しいと願った。それはレーダーに無数の敵機表示が現れたときであり、また守らなければならないものを守れなかったときであった。自分の死は恐れず、彼は敗北を、それも自らの定義する敗北を恐れた。腕利きが集う無国籍傭兵部隊〝クリプトニューム〟に参加したのは自分の足を引っ張る無能がいないというだけの理由からだった。

彼にも家族はいたし、一生を暮らすだけの金を渡してあった。

「足りないのは金ではなく父親だ」と妻だった女は言った。子どもは異物を見るような目で彼を見た。生まれたとき、あれほど愛おしく思った子どもにも愛情を感じられなかった。悪いのは自分なのだろう、と彼はぼんやりと思ったが、それだけだった。

クリプトニュームでは名前すら捨てた。互いを数字で呼び合い、彼は『フィフス』と呼ばれた。それとも『セカン』だっただろうか。両方だったかもしれない。自分という個が今やどこにあるのかよく分からなくなっていた。彼は今、圧倒的な力そのものの中にいるからだ。

彼は戦場で死んだはずだった。圧倒的な力を望み、その縁に手を届かせていながら、死んだはずだった。アーマード・コアを駆り、多数の正規軍に抗い、多数を道連れに、死の川を渡ったのだ。しかし彼

の意識はその後も途切れることなく、〝何か〟に引き継がれた。
彼をこの世に呼び戻した『存在』は自身をこう語った。
戦闘用人工知能群。
生身の存在であった時、それらを構築する膨大な概念を理解するには多大な労力を要したであろう。また理解せずにただその恩恵に与ったであろう。しかし今、『存在』と情報を共有することによって彼はそれを一瞬で理解していた。それらのシステムの一部と化していた証拠であった。現代世界から数十年を超越した科学技術の中で、彼は人間そのものであろうとした。
彼の言う人間とは『戦う存在』＝『レイヴン』だ。
そして今、目の前に黒い機体がある。ACデッキに横たわるそれは歴戦のレイヴンであった彼が知らない新型機体だ。デッキを俯瞰する彼は、自分の存在をどこに置けば良いのか、躊躇した。生身の身体はないが彼はここにいて、そして見て、感じていた。潤滑油の心落ち着く臭い、電気溶接の鼻の奥を焼くような臭い。超伝導モーターの低い駆動音。レーザー共振装置の高周波。黒い機体に触れるとひんやりとした金属の冷たさが伝わって来る。
《そう、それがお前の新たな身体、そして私の筐体の一つになる》
彼の声が言った。
（身体……か）

《そうだ。それこそがお前が求めた『圧倒的な力』だ》
その言葉が何を意味するのかも分からないまま、彼は黒い機体と一体化した。それは後に『ファントムＩ』と呼ばれる機体だった。エッジの効いた装甲に細いシルエット、そして太古の恐竜のような火器の数々。それら全てが従来のＡＣとは異質であることを物語っていた。その破壊力はもはや機動兵器が搭載するレベルでないことは明らかだった。喩えるなら二十ミリ機関砲と誘導ミサイルほどの圧倒的な差があった。
（だがそれはスペックだけの話だろう）
そんな彼の戸惑いを声の主は悟ったのか、戦いの場を用意した。

ファントムＩと比べれば、かつての乗機がオモチャに思えるほどだ。悲しいがそれほどの差があった。陽の差さない広大な地下空間で彼はファントムＩを駆り、かつて生身の身体で操縦していた人型戦闘兵器と対峙した。それは彼が最強と自負して止まなかった、時代の最先端を行く機動兵器だ。それを全身全霊で駆るレイヴンたちの戦場が、確かにあった。
思い出せばここはアリーナに似ていた。彼も生身であった頃、観客の前で幾度も操縦桿を握ったことがあった。防御スクリーン越しでも生の戦場を見られるとあって、どこのアリーナも大勢の客が入っていた。しかし今、この空間に人の気配はない。生体反応がないことからもそれが分かる。不便なような、

便利なような、よく分からない身体だ。

しかしここはある意味アリーナそのものなのだろう。彼は誰かの視線を感じていた。彼は軽くブーストを上げ、滑るようにアリーナの中央部へと機体を移動させる。制御しなければならないエネルギー量は半端ではない。データは亜光速で意識内を駆け巡って最適値を叩き出し、機体各部へ、四肢へと伝えていく。姿勢制御と最も効率の良い推進力の発生を両立させ、ブーストを制御する。今、彼はＡＣのドライバーであると同時に制御コンピューターと化していた。初めての経験だが、不安はない。自分にとって未知の領域という気がしなかった。

音響センサーがシグナル音を捉えた。

（ほうら、やはりここはアリーナだった）

バックスクリーンのシグナルが点灯し、彼はその気になった。

相手は従来型の中量二脚。しかも最新パーツで組んであった。腕慣らしには過ぎた高性能だ。

（だが、今の俺には不足が過ぎる）

彼はファントムⅠの四肢を広げるように舞い、その破壊の力を試してみる。だがそれは単なる愉悦としてではなく注意を払った上でだった。とはいえ砂糖細工の菓子を愛でながら、午後のお茶をするような注意だ。すぐに食べてしまっては何が愉しいというのだろう。従来型ＡＣの戦闘力などファントムⅠの前ではじゃれつく子猫のようなものだ。彼が手にする破壊の杖は神話の雷神が揮うハンマーのごとき

威力を発揮した。それは単なる比喩でなく、現実の破壊力そのものが落雷に匹敵するほどだ。従来型ACはその一撃だけで重大な損傷を負い、回避行動に移った。動きから見るに人工知能だろう。逃げるACを追わず、彼はただ破壊の力を意識した。

するとファントムIの全身にエネルギーフィールドが張られ、初めて彼は目を見張る思いをした。エネルギーフィールドはまだ進化途上の最先端装備だ。従来型ACではごく一部にのみ展開するのが精一杯であるが、この機体は防御力も世代を違えていた。

だが彼が望んだのは『破壊』だった。それも『圧倒的な』破壊だ。エネルギーフィールドは限界までエネルギーをため込んだ後、外部に放出した。それはほんの僅かな瞬きだったが、まるで超新星爆発のような力を持っていた。瞬きは従来型ACを壁面まで吹き飛ばし、アリーナの床面を深く抉った。

(確かに、圧倒的な力だ)

彼はそう言葉にしたつもりだった。しかし今の彼に唇はない。

《足りないか?》

声が訊いてきた。

(分かっているはずだ。俺はお前なのだから)

満足げな……そう、言うならば満腹感に似た感覚が彼に伝わってきた。

壁面のゲートが開き、新たな機体が姿を現す。それはファントムI同様の黒い機体だったが、脚部が

逆関節状になっていた。〝ファントムⅡ〟だと彼には分かった。ファントムⅡを駆っているのは『フィフス』か『セカン』か。

（俺がセカンではなかったか？）

自分と他者の境界がひどく曖昧になっていた。

（ああ。セカン。俺もセカンにしてフィフス。俺もお前も圧倒的な力を求めた。今は同じモノだ）

納得した。心ゆくまで戦えるに違いない。

彼もまた、満足を得た。脳裏に過ぎる、微かな疑問を無視して。

ドラコーン計画の一方の要、新世代機開発は新たなステージを迎えていた。

第一世代機『ＮＯＩＲ』から始まり、第二世代機にして生産型指揮機である『ＢＬＡＣＫ・ＯＮＥ』の開発は佳境に差し掛かっていた。そして今、第三世代機である『ＤＡＲＫ・ＰＨＡＮＴＯＭ』シリーズの開発が始まり、試作型がロールアウトした。

一つにして無限の輪を描くシステムは永劫の輪廻ではなく……自らがどこに行くのかを知りたがっているかのように、進化を続けていた。

ミッション［6］

「戦争をおっ始めるつもりかい？」
カレル・ケレンスキーは集結した機体の数を数えながら声を上げた。
ドラム缶に腰を掛けていたガモスは彼に気づいて面を上げると、台本を丸めて自らの掌を叩いた。
「そう。TVシリーズの最後を飾るに相応しい任務だ」
砂塵が舞う廃墟の中、巨大な人型兵器が立っている。この季節の砂漠は砂煙でACの頭部が霞むほど強い風が吹く。ACは総勢七機。ガモスを始め、先日カレルがEUアリーナ統一王者戦で敗北した相手、騎士型ACを駆るシンサやWリーグ上位のレヴァイン等腕利きが揃っている。支援する部隊も膨れ上がっていて、民間軍事会社派遣の整備部隊、補給部隊、支援砲撃部隊など様々な兵でベースキャンプの中はにぎやかだった。
二人の前を三人の女の子が頭を下げて通っていき、カレルは肩をすくめた。
「あのお嬢ちゃんたちは？」
「女の子だと思って嘗めてかかるとエライ目に遭うぞ。特にあのウサギ耳はな」
カレルも噂は聞いていた。極東アリーナでガモスが負け、あのノワール卿が苦戦したと。

で足を止めて談笑を始めた。
カレルは騎士型ＡＣの足下を見た。レイヴンらしき人物が二人、言い争っている。女の子たちはそこ
「なあに。もう手の内は分かった。あのクソオヤジの王座も長くない」
「お前も残念だったな」

ゼラは愛機のセットアップを終えると、まだ整備中の騎士型ＡＣの前にやってきた。
「もー砂漠の任務はイヤ～」
砂が口の中に入り、ゼラは閉口する。民間軍事会社から派遣された整備スタッフとセットアップをしていたシンサはゼラが来たのに気づくと皮肉めいた笑みを浮かべた。
「娘よ。ならば断ればよかったのだ。騎士道に背くことになるが」
ＥＵアリーナのトップランカー、シンサと先日深月らと任務を同じくしたゼラは実の親子である。二人が喧々囂々のやりとりを始める直前、深月とミルキー、そしてティフィンが通りかかり、間に入った。
「ゴメンね。他に頼めそうなレイヴンって思いつかなくって」
ミルキーが両手を合わせて謝った。
「イイってこと。声掛けてもらって逆に嬉しいよ。こんな任務、他にないしね」
ゼラはシンサに目を向ける。

「それにこんな大物まで引っ張ってくれて」
深月は恐縮して肩をすくめる。
「美しき乙女のために戦うのが騎士の務めというものだ。お嬢さん方」
シンサが真顔で言うものだから深月とミルキー、ティフィンは笑った。ゼラはトホホという顔で父親を見上げた。
「それであのガモスさんがお友達のレヴァインさんを引っ張ってきて、その絡みでカレルさんまで来たんでしょ?」
「因縁だねえ」
ミルキーは腕組みして頷いた。
「前回、レヴァインさんとは二対一だったのに散々だったから気が重いね」
「ティフィン、それは言わない」
ゼラはがっくり肩を落とす。
「でも一度は戦った相手とこうして一緒に任務に就けるのは縁だよね」
深月がガモスの機体を目で探すと今回は二脚に戻してあった。
「で、訊きたいのだが君らは〝黒い奴〟と接触経験があるのか?」
シンサが深月とミルキーを見て、ミルキーが真顔で答えた。

「父の仇です……何か知ってるんですか？」
「ああ。アレに乗らないかと誘われたことがある。圧倒的な力をくれてやる、とな。断ったために機械の手足をつける羽目になった。君のお父さんはサーティだね」
「はい。父を知っているんですね？」
「何度か任務で一緒になった。ゼラ、覚悟はあるんだろうな」
「誰の娘だと思っているのよ」
ゼラは真顔で応じ、ティフィンに視線を投げた。ティフィンは頷いた。
「しょうがないなあ。またゼラちゃんが突っ走らないように見ていてあげるから」
「皆さん、ありがとうございます」
深月とミルキーが頭を下げた。
「ところであのイイ男は？」
ゼラは周囲を見渡す。
「アスマは持ってきたパーツでもう一機組んでる。戦力が足りないかもしれないって」
深月は唇を噛んだ。レイヴンが駆る七機のＡＣがあれば一軍の侵攻を食い止める。しかしアスマはそれでも足りないと言う。
今回の深月たちの任務はテロリストの排除だ。目標地点は設営したベースキャンプの十数キロ先にあ

る原子力発電所跡。放射能が漏れ出す危険性が高いため誰も近寄らず、テロリストの隠れ場所になっていた。だがそれがどこまで真実なのか、誰にも分からない。原子力発電所という情報すら真に受けられない。〝黒い奴〟が出没するのだ。企業か、特定の国家か、あるいは別の何者かが用意した実験場と考えるのが妥当だった。

闇の中の、人の気配すらない〝彼ら〟のガレージに三つの機影がある。三機とも同じように黒く塗られているが、二機はACサイズの機体。もう一機はオーバーサイズの規格外の機体である。

このガレージは複数のコンピューターネットワークからなる名もなき戦闘システムによって運用されていた。整備はネットワーク型の限定機能付与型のロボットが行い、補給の指示すらAIが行っている。ここに人間が来るのは補給部隊が来たときくらいだが、完全な無人かというとそうではない。身体の檻と心のカタチを求め、戦闘システムを構築する複数の意識が各々の機体に宿っているからだ。

《狩り場に獲物が現れた》

声は言った。この複雑な戦闘システムの全てを司る声だ。それはシステムの中に埋没しながらも、確かに存在する〝意志〟であった。

（今度は時間が空いたな）

今や戦闘システム内の意識の一つにすぎない〝彼〟に時間感覚は余りないが、何故かそう思えた。

（手応えのある相手だと良いな）
もう一つの意識体が言った。
そう。同様に〝彼〟も思っていた。システムの一部でしかない彼らは自己の人称すらあやふやだ。だからなのか〝彼ら〟は自らが管轄・戦闘処理を担当する機体の名で呼ばれることを好んだ。
一つは声が『ファントムⅠ』と呼ぶ機体だ。ファントムⅠは「機体パーツを共通規格化した人型機動兵器」という定義ではACと言える。だがその外観、機動性、火力、防御性能、いずれをとっても卓越した存在になっていた。エッジの効いた装甲に細いシルエット。そして過剰に武装した太古の恐竜のような火器の数々。それら全てが従来のACとは異質であることを物語っている。
ファントムⅠはもう一人の〝彼〟、逆脚関節を持つ脚部を装備した『ファントムⅡ』とともに起動し、ゲートに向かう。
（ONE。お前は行かないのか？）
ファントムⅠが残る一機にコンタクトする。
（ああ。狩りに興味はない）
残る巨大な戦闘兵器はそう意志を示した。声の主も出撃の要請はしなかった。
分厚い鉄筋鉄骨コンクリートのゲートが開き、強い風がデッキに吹き込んだ。ブースト圧が上がり、二つの異形が砂嵐の空に舞う。そしてファントムらは大国の偵察衛星に強制リンクし、データを入手。

戦力を量る。今回の敵は七機。それでも彼らにとっては狩りにすぎない。
「敵機出現の兆候が現れ次第、管制席まで連絡をお願いします。電波障害時は信号弾を使用してください。暗号表は事前に配布したとおりです。何か質問はありますか？」
ミルキーが指揮車の管制席でレイヴンたちに投げかけた。その背にはいつものようにアスマが立っていて、神妙な顔でモニターを眺めている。
『班編制に異議あり～誰の発案ですか？』
ゼラから速攻返事があった。
「シンサさんです」
『クソオヤジが』
『そう言うな。オジサン、若い女の子のお相手が出来て少し嬉しいぞ』
今回の第一小隊長レヴァインが応える。先日ゼラとティフィンを手玉に取った彼がゼラとティフィンを従えている。第二小隊長はシンサでカレルと深月を揃えた。ガモス機は予備戦力としてキャンプで待機だ。管制席のモニターに三機ずつ発進して行くＡＣ群が映し出される。
「大丈夫かな～」
アスマを振り返り、ミルキーは心配そうに言った。

「第一小隊に身軽なＡＣを集め、第二小隊では火力のバランスを取った。そして判断力に優れ、機動性が高いガモス氏を後方に置く。さすがシンサさんは良い編成をしたよ。それに彼は〝黒い奴〟と接触した経験があると言うじゃないか。判断を信じよう」

それでもミルキーは不安を隠せない。

「大丈夫。君一人の選択でこの場にいる訳じゃない。ここまで来たら一蓮托生さ。それに最後の一手は君に任せる。僕もなるべく早く最終セッティングを終わらせるよ」

ミルキーは小さく頷いた。アスマは指揮車から降り、ミルキー一人になる。

「最後の一手か」

確かに、とミルキーは３Ｄ映像の地球と衛星軌道を映しているモニターを見つめた。

薄いポタージュのような微細な塵が舞う砂の大地を、ウィクトーリアと二機のＡＣは低いブーストで進んでいた。深月はＨＭＤに映し出されるシンサの〝エヴィデンス〟とカレルの〝ウォーハンマー〟を見ながら妙な感慨に浸っていた。

エヴィデンスは中世の鎧をイメージしたＡＣで、背部の高機動ブースタはマントをモチーフにしたかのようだ。武器はランス一つ。射出型ブレードかエネルギー弾を撃ち出すスナイパーライフルのどちらかを内蔵するトリッキーな装備だ。

一方の〝ウォーハンマー〟はアリーナでは珍しい重量級の機体だ。しかもそれに加えて数々の新機軸を搭載している。試作武器のオンパレードだ。
EUアリーナ所属の彼らの機体はイレギュラーパーツだらけ。もっともウィクトーリアの武装もかなりのイレギュラーだが。
『お嬢ちゃん。無理しなくて良いからな』
カレルから無線が入った。
「女の子扱いしてくれて嬉しいですよ」
それは半分本音だ。
『だが戦力としてアテにもしている』
シンサからも無線が入った。
「当然です」
深月は小さく顎を引いた。
『いざとなれば俺が盾になる。その隙に反撃に移ってくれよ』
ブーストで横を滑るウォーハンマーが片腕を上げた。深月は頷いた。そして返答しようとして、無線に雑音が混ざり始めたことに気づいた。
（ＥＣＭ？）

直後、無線は雑音の嵐に見舞われた。まるで電子レンジの中にでもいるように強力なＥＣＭだ。砂嵐の悪視界の中、レーダーを潰されれば先制攻撃される可能性が高くなる。状況は不利。だがウィクトーリアの頭部は電子戦用に匹敵する性能を誇っている。数秒後、レーダーは敵機の接近を示した。僚機は敵機を掴んでいないだろう。深月は右腕で敵機の接近を二機に知らせた。シンサはそれを見て、風を読みながら移動の指示を出した。すると数秒後、砂塵エリアから抜け出して青空が広がった。

そしてレーダーの光点が正面に現れ、深月は息を呑んだ。

『なんだありゃあ』

雑音の中、カレルの声が聞こえた。

砂嵐から飛び出してきた異様な機体は、現実のそれではなく、戯れに人工知能が電脳空間に構築した仮想機体のように見えた。空力的に洗練されたパーツが、混沌とした秩序によって構築され、人型を成している。その上、それの外装は〝黒い奴〟同様の黒曜石の輝きを湛えていた。

出会い頭の一閃。

黒い機体の銃撃がウィクトーリアを貫いた。機体に衝撃が走り、一発でかなりの損傷を受けた。

（あのライフルは新世代規格か？）

深月は回避行動に移りつつ威嚇射撃。その内の一発が黒い機体に命中するが、着弾直前で稲妻のような輝きに遮られた。

（機体全体にエネルギーフィールドを展開している!?）
隔絶した性能差は火を見るより明らかだが、予想の内でもある。黒い機体が深月に気を取られている間にシンサとカレルが死角に入った。二人の攻撃のタイミングを悟られないよう深月はライフルとグレネード、内蔵のナパームを一斉に放つ。手数に勝ったのが幸い、黒い機体は炎に包まれ、動きを止めた。その間にウォーハンマーが全ての重火器を放ち、エヴィデンスが大型ブレードで突撃を掛ける。
（もしかして畳みこめる？）
深月が脳裏の片隅に安堵に似たものを感じたとき、黒い機体が輝き始めた。
そして次の瞬間、大瀑布の圧力にも似た怒濤の全方位攻撃が三機を襲ったのだった。

同時刻、第一小隊もほぼ同じ状況にあった。電波障害発生と同時に黒い機体と遭遇、交戦開始。逆関節脚の機体は猫が獲物とじゃれるように少しずつ彼らを追いつめていた。第二小隊と違うのはレヴァインが僚機を散らしたことである。同士討ちを避け、援護射撃に専念させたことで結果的に全方位攻撃を受けずに済んでいた。だが矢面に立つレヴァイン機オルトリンデの損傷率は既に七割を超えていた。
『命中してもダメージ無し!?』
ゼラのリニアキャノンを無防備な背面から受けても、黒い機体は無傷に見えた。
『考えがあるの。ゼラちゃん！　支援して』

「もういい！　お前らは後退しろ」

レヴァインは反射的に撤退を指示した。黒い機体とは性能の差もある。だが、乗り手そのものが相当の使い手だ。経験の劣る二人がいてもこのままではジリ貧になるだけだ。そういう判断だった。

だがティフィンは命令を無視し、イクセスを突撃させた。

「ええい。小娘どもが！」

レヴァインはマシンガンのリロードタイミングで距離を詰め、左腕のブレードを振る。当てるのが目的ではない。ティフィンの援護だ。黒い機体は瞬間移動を彷彿させるような超絶機動でブレードをかわすと、オルトリンデの側面に回った。

（それで良い）

そのタイミングでゼラが放った垂直爆雷が二機の頭上に降り注いだ。黒い機体の超絶的に思われた機動も限りがあるようだ。

『今なら当たるから一っ！』

突撃してきたティフィンのイクセスをかわせず、黒い機体は高エネルギー体の刃を機体に直接受けた。

その刹那、エネルギーフィールドがシャボン玉が弾けるように消えた。

「よくやった！」

レヴァイン機オルトリンデも自機のダメージを省みず、内蔵ロケットを放った。

黒い機体はダメージを受け、明らかに機動を鈍らせていた。
畳みかけるなら今。そう三人が思ったとき、黒い機体は全方位攻撃を仕掛けた。

『各機、息はあるか？』
シンサから無線が入った。
『大丈夫だ。でかい図体とエネルギーフィールドが幸いしたようだ。オッサンは？』
カレルの声がした。無事のようだ。
『オッサンではない。深月は？』
「……なんとか」
HMDの機体データを確認すると機体損傷率は九割近い。光学センサーが回復すると黒い機体が確認出来た。黒い機体は自らが放った全方位攻撃が作ったクレーターの中、仁王立ちしていた。
『あいにく俺の機体も損傷率が半端じゃない。どうやら最悪の事態のようだな』
『あと一回は行けるさ。オッサン、俺の後ろについてくれ。深月は援護を頼む』
カレルは力強く言うがウォーハンマーもかなりの損傷を受けている。
シンサはオレンジ色の信号弾を上げ、ミルキーに連絡を済ませるとウォーハンマーの後ろについた。
「シンサさん！」

深月は止めようと声を掛けた。

『一発だけだ。男は女の腹から出たら我が儘を言うものと相場が決まっているのでな』

深月はウィクトーリアのブーストを上げ、距離を取りながら黒い機体に向けてライフルを連射した。

黒い機体はそれを見据え、行動再開。ウィクトーリアに向けて両腕の火器を乱射した。

火力の激しい応酬が始まると同時にウォーハンマーが突撃を開始する。ウォーハンマーは両腕のバズーカを撃ち放つと腕のギミックを展開した。肘部に収納されていたエネルギーフィールド発生装置が現れ、オーロラに似たエネルギーフィールドが前面一二〇度を覆った。

黒い機体はそれに脅威を覚えたのか、攻撃対象をウォーハンマーに変えた。

カレルにとってそれは望むところだ。ウォーハンマーはエネルギーフィールドでダメージを半減させつつ黒い機体に再接近する。

『オッサン！　行え〜！』

ウォーハンマーの陰からエヴィデンスが現れ、ランス型の射出ブレードを大きく振りかぶる。

シンサは著作権に引っかかりそうな雄叫びを上げた。

そしてランスの一撃は黒い機体のエネルギーフィールドを貫き、その右腕をもぎ取る。

肉を斬らせて骨を断つ。

東洋の諺を知っていたのか、黒い機体は動じなかった。左腕の武器をパージし、ブレードを握るとエ

ヴィデンスとウォーハンマーを文字通り叩き斬った。電光石火の一撃とはまさにこのことだった。
『深月！　エヴィデンスとウォーハンマーから奴を引き離すんだ！』
アスマの声がした。レーダーを見るとACが一機、接近してきていた。
『目標地点まで撤退だ！　援護する！』
「分かった！」
黒い機体をおびき寄せるように、深月は危険を承知で撤退を開始する。
黒い機体が傷ついた敵を逃がすはずはない。背中武器を放ちながら、追いかけて来る。
（ようし、そのまま）
砂嵐の中から支援射撃が始まった。アスマが来てくれたのだ。アスマの機体は両腕両肩の武器をオート射撃させ、黒い機体と深月の間に弾幕を張った。
『よし、今だ！　ミルキー！』
『了解。衛星砲の使用許可、下りています。目標捕捉！　ファイヤー！』
自信に満ちたミルキーの声が、深月を安堵させた。
その直後、砂色の空を切り裂く一条の光が降り注いだ。
秒速三〇万キロのそれは衛星軌道上からでもたかだか音速域の対象を逃しはしない。対艦・対要塞攻略用のレーザー砲搭載衛星が唯一機の機動兵器に用いられたのは史上初だ。直径一〇メートルもの高出

力のレーザー照射を浴びては黒い機体といえど、ひとたまりもなかった。

《衛星軌道上からの攻撃は予想外だった。だが二度目はない。砲撃プロセスとトリガータイミングは完全に理解した》

声はファントムⅠであった者に言った。

（そうか。俺も反省しておこう。圧倒的な力だと傲りがあったのも事実だ）

《『俺』か？》

（ああ。よく分からないがそう言っておく）

そしてファントムⅠであった者はファントムⅡと意識を統合させた。ファントムⅡは、空を覆い尽くさんばかりの膨大な量のミサイル攻撃を受けながら、撤退している最中だった。

（苦戦していたか）

（お前もシステムの一部だ。とうに知っていただろう？　俺）

ファントムⅡである者が、ファントムⅠであった者に言った。

（そうだな。だがまだ終わった訳ではない。狩る者が抗ってこそ狩り。次が楽しみだ）

ファントムたちは愉悦の感情を露わにした。

《人間は考察に足る存在なのだな》

唐突に声がした。
ファントムたちは笑うのをやめ、ファントムⅡは無事ミサイルの嵐から逃げ切った。
地平を目指し、黒い機体が砂塵とともに空に舞う。
その影はどことなく薄い。
〝彼ら〟の存在そのものが不確かであることを示すように。

ミッション［7］

「戦果一に対して友軍機は大破三、中破三。まともに動くのは予備機の二機のみ。予算を使い果たしたから頼みの衛星砲はもう使えないし、修理するにもカスタム機が多いのが泣き所よね」
指揮車の中、ミルキーがレイヴンたちに報告をする。黒い不明機との交戦直後でレイヴンたちは疲れ切っていたが、今後の展開について早急な判断が求められていた。
「番組的には切りの良いところだと思う」

ガモスが小さく頷いて言った。
「それは無事に我々を帰してくれればの話だろう？　奴らはまた来るに違いない」
シンサがガモスに目を向ける。だが応えたのはミルキーの隣に立つアスマだった。
「確かに。敵も一機を失っている。攻撃を仕掛けて来るまでまだ時間があるだろう。撤退の好機だが、スタッフは全力で修理に当たっている。まだ無傷のＡＣも二機ある。もう一度いけるはずだ」
「あの化け物相手に勝算はあるのか？」
カレルが手を挙げて質問する。
「全方位のエネルギーフィールドと言えども完璧ではない。損傷は与えられた。こっちが機数に勝れば罠を仕掛ける時間が生まれるはず。相手が一機ならやれるはずだ」
「肝心の〝黒い奴〟本体が出てきていないのに、一機と断定出来るのか？」
カレルの疑問はもっともだ。
「断定は出来ない。しかし同時に来ることはない。そう信じる」
アスマは項垂れ、震える自らの足下を見つめた。シンサはその震えに気づき、訊いた。
「〝黒い奴〟を知っているんだね」
「彼は蹂躙を嫌っていた」
場はざわついたが、ガモスが手を挙げた。

「分かった。アスマを信じよう。ＡＣの修理を続行。対地ミサイルの補給が届くまでは臨戦態勢で待機。その後、打って出る。皆から同意が得られればディレクターに直談判する」

ガモスは一同を見回したが、異議はなかった。衛星砲と対地ミサイル攻撃の支援がなければ一敗地に塗れただろう。だからレイヴンとして生きていく上でこのまま帰れないのも事実だった。

番組制作サイドからはすぐに続行許可が出て、一同は次の作戦の準備に取りかかった。

それから万一つの襲撃に備え、無事な二機を使い、交替で警戒に当たることにした。空いているレイヴンはシミュレーターで黒い機体との交戦に備えた。シミュレーターの簡易プログラムを組んだのは一番近くで戦ったレヴァインだ。適宜休憩を挟みつつ、準備完了までの短くて長い時間が過ぎた。

深月はシミュレーターを終えるとコーヒーを淹れて、再セットアップ作業に腐心するアスマを訪れた。

もう深夜に差し掛かっており、砂嵐は止んでいた。

アスマは深月からコーヒーを貰うと、一休みしようと機体を覆う幌布の下に出た。深月も黙ってアスマについていった。民間軍事会社派遣の兵は今はもう落ち着いて天幕の下で仕事をこなしている。砂漠の月の光だけが二人を見ていた。

少し離れた砂丘の上まで歩くとアスマは砂地に腰を掛け、深月は彼に寄り添うように座った。先日アスマは優しく深月を抱きしめてくれた。それを意識せずにはいられなかった。

「話があるんだ」

アスマが言った。色恋沙汰でないことくらい、深月には覚悟が出来ていた。
「ミルキーに怒られた……嘘をついたことを謝ろうと思って」
聞きたい気持ちが半分、怖い気持ちが半分。よく分からなかった。
「薬のこと？」
アスマは頷いた。
「僕が傭兵を辞めたのは四年前。前触れもなく任務中に倒れてね……精密検査の結果、遺伝性の難病と判明した」
「遺伝性の、難病？」
深月が思っていたより良くない話だ。
「簡単に言うと、ある日突然、生体機能が停止する。循環器系と呼吸器系、その他諸々」
「……死ぬってこと、だよね」
「病院のベッドの上にいれば死は避けられる。だから僕はこの四年間、病院の個室で暮らしていた。心臓と肺が止まっても機械で脳を生かせば良い。蘇生術が必要な場合も、勝手に回復する場合もある。幸い兵器開発って職はあったんでね、治療費には困らなかった」
深月は黙って聞いていた。アスマはコーヒーを飲み干した。
「でも眠りにつくとき、いつも考えていた。もう自分は瞼を開けないかもしれない。そういう運命を背

負ってしまったのだと。ガラス張りの、常に監視された部屋の中で僕は一生を過ごすのだと。そういつも嘆いていた。そんなとき、サーティから連絡が入った。僕の力が必要だ、ってね」

「それで戦場に出た……の？」

「病院生活に飽き飽きしていたし、生きるか死ぬかは戦場でも同じだ。そう思って戦場に出た。でも死んだのは僕ではなくサーティだった。でも彼が死んだって実感は湧かなかった。涙も出なかった。長い間世話になった先輩なのに、彼が死んでも悲しくなかった」

「それはアスマが毎日、死と隣り合わせだったからだよ」

深月がアスマの横顔を見つめると、アスマは済まなそうに目を細めた。

「でもね、その夜、泣いたんだ。夢の中にサーティが出てきてね……もう死んでいるはずなのにって思い出すと涙が出た。というかもう号泣。起きたときも顔は涙でぐちゃぐちゃだった……不思議だよね」

「……少し、分かるよ」

「僕が病院に戻らなかったのは、生きていることの意味が少し分かった気がしたから。戦死したサーティに教えて貰ったんだ。僕はミルキーと君に戦う意味を、生きる意味を知って貰いたかった。僕の話はこれで終わり」

アスマは深月を見て苦笑した。しかし深月の潤んだ瞳に気づくと、少し悲しそうに口を噤んだ。

「でもアスマ……病院にいなかったら死ぬかもしれないんだよ？」

「ミヅキだってACのコクピットにいれば死と隣り合わせだろう？」
「それはそうだけどアスマの場合はそういう問題じゃないよ！」
「確かに。でも今のところ薬のお陰か発作は起きていないしね。そんなに心配することはない」
「ダメだよ。任務が終わったら病院に戻るって約束して。もうワタシたちは大丈夫だから」
「いいや。この戦いが終わってもまだ次がある。ドラコーン計画が進んでいるのなら間違いなく」
「ドラ……コーン？」
「ウロボロスのまたの名さ。自らの尾を口にくわえた蛇。無限の連鎖と不死の象徴」
アスマの言葉を遮るように二人の携帯端末が鳴った。第一級警戒音……敵機が接近してきたのだ。
それに呼応するように夜空に信号弾が上がった。味方の信号弾ではない。敵が誘っているのだ。
待機中のシルヴィーユが闇夜の中に出撃していった。
「アスマ！　ヴィクトーリアは？」
「いつでも出られる。僕も出るぞ！」
瞬時に二人の顔はレイヴンのそれに戻り、天幕の中へ駆けていった。
二つの魂を持つファントムⅡは自らの身体が完全な状態となるや否や狩りを再開した。
今回の狩り場は砂漠に埋もれ、放棄された都市だ。前世紀の終わり頃から大陸の中央部は極端な乾燥

化が進んでいる。更に内戦による疲弊が砂漠化を促進し、街を廃墟とした。

（来るだろう？）

ファントムⅡは信号弾を上げ、昼間交戦した部隊に意志を伝える。月夜に浮かぶ鮮烈な光を浴び、彼らは自分の居場所を感じた。不思議だった。今や彼らは複雑に進化した戦闘システムの一部でしかない。そんな彼らが戦場の光を目の当たりにすると昔と同様の高揚感と満足感を覚えた。そして少しだけ考え、戦闘以外で今の自分の存在を示せることはないと気づいた。

己の身体を失わねば得られない圧倒的な力。その代償として自我は空虚と化した。だが、否、だからこそ彼らは戦う。彼らは未だレイヴンであった。

廃墟の高層ビル街でガモスは黒い機体と接触した。

ガモスは正面からの戦闘を避け、逃げをうつ。援護なしで戦える相手ではない。信号弾を上げ、砲撃部隊に榴弾攻撃を指示。ガモス機シルヴィーユの位置はＩＦＦで分かっている。シルヴィーユが後退するルートから黒い機体の移動ルートを予測する。

夜空に榴弾が炸裂し、不吉な火花が散ると、無数の金属片が黒い機体のエネルギーフィールドに降り注いだ。ダメージはないが、足止めにはなる。相対速度によっては削る足しにもなる。

また、単に後退するのでは芸がない。味方の侵入方向を読まれないよう、ガモスは細心の注意を払い

ながら市街を駆け抜ける。昼間の交戦で相手との巡航速度の差はほぼ倍だと判明しているが、いざ戦闘、支援砲撃の中となればその差は縮まる。それに加えて今回は乗り手の性格も少し分かっている。

（言ってしまえば舐められているんだよな）

ランキングこそ上の中だが、ガモスの戦闘経験は番組制作の苦労があって、壮絶に豊富だ。五体のＡＣを相手に逃げ切ったことすらある。十分時間は稼げた。

『さすがガモスさんだ』

無線でアスマの声がした。

榴弾の雨の中から黒い機体が飛び出し、目の前で二つの銃口が光った。

だがガモスは笑ってＥＣＭを射出し、機体を跳躍させる。

「性能に頼りすぎだな」

黒い機体の銃口はシルヴィーユを追うが、エネルギーフィールドを突き抜けて、ライフル弾が着弾。照準がずれた。ウィクトーリアの長距離射撃だった。間髪を入れずに遮蔽物の陰からアスマ機〝ボア〟が現れ、実弾の嵐を見舞い、また遮蔽物に隠れ、射線軸から消えた。

「良いところばかり持ってかれないぞ」

ガモスは舌なめずりし、攻撃に加わった。

残りの五機が駆けつけるのに、そう時間は要らなかった。しかし昼間の戦闘で受けたダメージを修復し終えていない機体がほとんどだ。対する黒い機体は修復を済ませている。戦力的に五分かそれ以下という戦いを強いられそうだ。

同士撃ちを避ける為、シンサが現場指揮を執り、それをミルキーがサポートする形で戦闘が進行する。市街地での戦いは複数機を運用出来る方が有利だ。機動性・防御力に於いてはファントムⅡが圧倒的に優位だが、深月たちは遮蔽物を利用してゲリラ的に攻撃を仕掛け、火力が集中する場所に誘導出来る。

ウィクトーリアが囮となり、距離をとりながら両腕のライフルを撃ち放す。

ファントムⅡは火力が生きる射程に移動。しかしその機動はミルキーに読まれている。ミルキーは廃墟の中に待機させていたACを動かし、集中攻撃を掛ける。その間にウィクトーリアは高層ビルの廃墟に隠れる。ウィクトーリアは不意を打つ役となり、集中攻撃を掛けた機体の一機が、次の誘導役になる。数度、この手で攻撃を仕掛けられた。

エネルギーフィールドがあってもファントムⅡの機体には徐々に損傷が蓄積される。致命的な損傷には至らないが他に有効な手段が見つからない以上、次善の策をとるしかない。しかもこの戦術は限界がある。囮の機体への損傷は無視出来ないほど大きいのだ。接敵から一八〇秒経過後、まだ修復が終わっていなかったウォーハンマーとタイクホワイト、イクセスは早々に後退を強いられた。しかしその後退は想定内。そしてレイヴンたちの策の内だ。

黒い機体は狩りをしている。それも野生のそれではなく、人間が行う娯楽としての狩りだ。そこが罠を仕掛ける狙い目だった。

編隊を組んで撤退する三機に向け、黒い機体は集中攻撃を開始する。だがその瞬間、ファントムⅡは予期しない攻撃に曝(さら)された。空中機雷と垂直ミサイルが炸裂し、その爆発が連鎖を生んだ。次いで残りの空中機雷と吸着地雷が一斉に作動。その圧力にファントムⅡは宙に逃げ場を求め、高度を上げた。だがファントムⅡの真上では、レヴァイン機オルトリンデがブレードを揮っていた。半壊状態のオルトリンデを生かすにはこの戦術しかなかった。ブレードはエネルギーフィールドを失ったファントムⅡの装甲を削ぎ落とし、左肩からばっさり腕をもいだ。

しかし瞬きの後、オルトリンデに超長距離からの砲撃が直撃し、オルトリンデはシステムダウンした。機体はレイヴンを乗せたまま廃墟の壁に激突し、壊れた人形のようにずり落ちて行く。

雲間から染みいるような冷たい月光が差し込み、もう一機の黒い不明機……『ＢＬＡＣＫ・ＯＮＥ』が姿を現していた。片腕を失ったファントムⅡはシステムを再構築し、狩りを続行する。

もう撤退すら困難であることを悟り、レイヴンたちは最後まで抵抗する覚悟を決めた。

しかし深月とアスマは違う。まさにこの機会を待っていたのだった。

『ミヅキ、〝黒い奴〟を引き離すんだ。僕らにはその義務がある！』

アスマから無線が入った。深月のＨＭＤには黒い飛行物体が映し出されている。異様な、推力のみで宙に浮かんでいるそれはこの世のどんな飛翔体にも似ていない。サーティを葬ったそれは上空で旋回し、戦闘に介入せずに様子を窺っている。

「分かってる……それにワタシ、あいつを知っている！」

アスマからの返事はしばらくなかった。

『そう。君が戦うのは三度目なんだ』

深月は頷いた。廃墟のビルと平行に上昇し、高度を上げる。出力が低下すると壁面を足がかりにして再度跳躍、ウィクトーリアは屋上に到る。そして両腕のライフルを上空の〝黒い奴〟に向けると照準をロックさせずにトリガーを絞った。音の壁を遥かに上回る衝撃波が左右から伝わり、ウィクトーリアは震える。その銃撃の一方は命中し、〝黒い奴〟の装甲表面に稲妻を生じた。エネルギーフィールドだ。

（どうする？　二機で対抗出来るか？）

深月は頭の隅で冷静に計算する。

（装備しているのは新世代規格のライフル。ジェネレーターも新世代規格。やれないはずはない）

「ミルキー！　ジェネレーターを緊急出力まで上げて！」

『え、実戦で使うの？　冷却限界六〇秒しかないいんだよ』

「それでも、やるしかない」

『分かった。緊急出力プログラムに切り替える……ミヅキちゃん。パパの仇を、とって』

「もちろん！」

ウィクトーリアのジェネレーター制御プログラムが切り替わり、ブースタに過剰なエネルギーが供給された。深月がフットペダルを踏むと、本来なら空を飛ぶ力のないウィクトーリアが月光が満ちる夜の空へと舞い上がる。オーバードブーストが奏でる光の多重奏が薄い砂漠の雲を照らし出し、雲上の敵をはっきりと浮かび上がらせた。

「アスマ。バックアップよろしく」

『任せてくれ』

ウィクトーリアの照準器が〝黒い奴〟を正面にロックする。相対速度はマッハを遥かに超えている。これはもうドッグファイトの域だ。誰一人として経験のないこの速度域でのライフル発射の反動による補正はオートでは行えない。ミルキーの遠隔操作が必須だった。

一発、二発。機体の姿勢は安定している。ミルキーと二人でここまでやってきた。そしてアスマが後ろにいてくれたから深月はこの空にいた。ライフル弾はエネルギーフィールドを抜けたが、甲殻のような曲面装甲に弾かれた。

『あと四五秒』

「もう何発かいける」

装填までの時間差がもどかしい。ラジエターを騙しながら、深月は高度を確保する。
〝黒い奴〟は大きく旋回して背後をとろうとしている。しかしその間も攻撃の意志を見せ、腕部を展開して、やや下方にいるウィクトーリアを射界に入れた。
『来るよ！』
「分かってる！」
ターンブースタ、ＯＢ、急降下。複雑な空中機動をこなしながらも攻撃目標は固定。左右次弾装填完了。トリガーを引く。〝黒い奴〟から閃光が放たれ、星が瞬く天頂を白く染め上げる。深月はウィクトーリアを錐もみに入れて〝黒い奴〟のパルスレーザーから逃れ、ビルの屋上に着地した。逆荷重で頭がクラクラしたが、次の攻撃はない。ウィクトーリアのすぐ脇でアスマ機〝ボア〟が火力を一斉解放し、弾幕を張ってくれていた。
『ミヅキ！　跳ぶんだ』
まだ限界時間まで余裕がある。着地したお陰で少し冷却も出来た。深月はアスマの支援砲撃を受けながら再び夜空に舞い上がる。下の市街地では黒い機体とレイヴンたちの戦いが続いているが、長くはもたないかもしれない。しかし今は目の前の敵を叩くだけだ。アスマの病気も自分がこの戦いに敗れて死ぬかもしれないことも、深月の脳裏にはない。
（ワタシは、強くなったんだから！）

そしてウィクトーリアは高度を上げ〝黒い奴〟と同じ空域に舞い戻った。ウィクトーリアの射程に入ると〝黒い奴〟は腕と脚を展開させ、一瞬で人型形態をとった。火力を集中出来る形態に違いない。そして〝黒い奴〟が人型になって深月ははっきり分かった。外見は異なっても受けるプレッシャーは〝ノワール〟と同じ。〝黒い奴〟は両腕のパルスレーザーをウィクトーリアに向けた。
「ノワール卿！　今度こそワタシが勝つ番だ」
深月はダブルトリガーを絞り、〝黒い奴〟を迎え撃った。

ミッション［8］

深月とノワール卿は三度砲火を交える。
しかしここは以前戦ったアリーナではない。戦場だ。命のやりとりをする場所だ。
ウィクトーリアは新世代規格のパーツを搭載して新たな力を得た。ノワール卿は規格外の戦闘ユニットを駆っている。その圧倒的な力に、深月は持てる力の全てをぶつけようと砂漠の空を舞っていた。

白亜の人型機動兵器と黒曜の異形の兵器が、陸上兵器であるＡＣではあり得ないはずの空戦を行っている。機体制御システムの限界を超えたその機動は、ミルキーと深月のコンビネーションの賜物だ。防御性能と火力は〝黒い奴〟の方が圧倒的に上だ。今は互角に渡り合えていても徐々に圧され、擦り潰されるだろう。突破口を見つけだきなければならない。しかし機体性能に大差なかったはずのノワールとの試合に勝てなかったという事実が深月に重くのしかかる。

だがここはアリーナではない。心強い味方が、アスマがいてくれる。

ＯＢが吠え、設計強度限界ギリギリの加速でウィクトーリアは夜空に舞い上がった。高層ビル群の廃墟を遙か眼下に見下ろし、それが更に小さく見える高度に〝黒い奴〟がいた。深月は意図的に失速させて両腕のパルスレーザーのロックをかわし、ターンブースターで推力方向を変え、更にＯＢを掛ける。そして〝黒い奴〟の背後に回り込み、深月はトリガーを引く。エネルギーフィールドが実体弾を遮り、小さな稲妻が生じた。〝黒い奴〟は深月に後ろをとらせたものの、再び飛行形態に移行、急降下して振り切った。

ミルキーが限界時間の警告を発した。

地上にはアスマがいる。ボアは火器管制を手動に切り替え、腕マシンガンと背部武装を同調させて〝黒い奴〟を迎え撃つ。

〝黒い奴〟は左右に機体を揺らし、回避行動をとった。噴出花火のような曳光弾の輝きが闇夜に光をも

たらす。それは大昔の対空戦車と近接支援戦闘機の戦いに似て、機動予測システムと操縦者の腕の戦いになる。上空に達した実体弾がエネルギーフィールドを貫いたが、それは黒い装甲に弾かれる。与えたダメージは軽微でも、回避行動によって黒い奴の降下速度が奪われる。

その隙に引き離されていたウィクトーリアが再び射程に捉え、ライフルを見舞った。アスマ機の攻撃でエネルギーフィールドが減退していたのか鉄鋼弾が黒い装甲を破り、内部構造の一部を露出させた。

限界時間に到達し、ウィクトーリアの冷却装置が悲鳴を上げ始める。深月は降下、廃墟に機体を隠した。新型ジェネレーターに機体が耐えられない。冷却が終わるまでアスマが〝黒い奴〟を引き受ける。

残るレイヴンたちは異形の新世代規格機を相手に苦戦していた。ここでアスマたちが踏みとどまらなければ遅かれ早かれ勝敗が決するだろう。

〝黒い奴〟は飛行形態から人型形態に変形し、都市戦闘に移行、市街地を圧倒的な力で滑り抜けた。

アスマはサーティの戦いから、自分には〝黒い奴〟と正面から戦う力がないことを悟っている。だから単機では逃げの一手を打つ。ＥＣＭを射出し、一秒でも長く〝黒い奴〟の目をくらます。深月が健在である限り、戦いを終わらせない。アスマはそう固く誓っていた。

（ダメージを与えられた……いける！）

ラジエターが甲高い作動音をコクピット内に響かせている中、深月は息を整えていた。ここは戦場だ。

アドレナリンによる適度な高揚と、訓練によって得られる、冷静な判断力の両方を維持しなければ戦えない。だが今は興奮しすぎているようだと自覚し、こう自分に言い聞かせた。
(ダメージを与えられただけだ。こっちは一発でも喰らったら、取り返しがつかない)
『ミヅキ、無事か?』
アスマからの無線が入った。ECM混じりで雑音がひどかったが、深月の胸は一瞬で高鳴った。
「うん。アスマは?」
『今、なんとか逃げまくっている。ウィクトーリアは?』
「あと一五秒で冷却が終わる」
HMDにカウントが表示されている。
『そうか。深月。僕がこれまでのナインとの戦いで君にアドバイスしなかった訳、分かるよね?』
「今なら分かる。実戦ではどんな状況に置かれるか分からない。だから自分で考えなければならない。そうだろう?」
『そうだ。だけど今はアドバイスが出来る。サーティが〝黒い奴〟と戦ったときから、分かっていたことだから。そしてそれを現実に出来るようウィクトーリアを組んだ。〝黒い奴〟は重く、推力がある。ウィクトーリアは推力があって軽量だ。一撃離脱戦闘で勝つには、高度を取るしかない。奴の頭上を取るんだ。重力を味方に付けるんだ』

「重力を味方に付ける……」

『ナインはあくまでもレイヴン。空中戦が出来るマシンを駆っていてもそれは変わらない。地上主体の機動のクセは抜けない。そこが隙になる』

「分かったよ……アスマ」

その言葉だけで深月の脳裏には戦いのイメージが湧き上がった。

カウントが0を表示した。

(自分の幸運を信じよう)

深月はウィクトーリアを再び緊急出力モードにして、夜空に舞い上がらせた。身体中の毛細血管が荷重で千切れてしまいそうな加速の中、深月はHMDの画像を地上に向け、〝黒い奴〟を探す。アスマが射出したECMはまだ効力を発揮していてレーダーは効かない。HMDの視界の端、高層ビルが落とす影の中、アスマ機と〝黒い奴〟が交戦しているのが見えた。ターンブースター使用、姿勢制御、横Gの中、〝黒い奴〟を射界に入れる。

ボアはミサイル攻撃の回避行動をしていたが、とても逃げおおせるものではない。炎の中、理想強度を持ったチタンとナノカーボンの複合外装が、化学反応が巻き起こす炎の嵐にさらされ、装甲としての役割を終えてしまう。ボアの緊急脱出装置が作動し、コクピットユニットごと、空中に射出される。生体信号は確かだ。生きているのは間違いない。

「アスマ……」
その呟きと共に両腕のライフルが火を噴く。音速の数倍の速度で鉄鋼弾が〝黒い奴〟を襲い、そのエネルギーフィールドを貫く。着弾の衝撃と共に〝黒い奴〟は飛行形態に変形し、上昇に転じる。しかし深月は効果速度を味方につけて〝黒い奴〟に接敵した。鉄鋼弾を複数着弾させ、深月は回避行動に移りつつも速度を殺さないよう、〝黒い奴〟を見据える。
パルスレーザーがウィクトーリアを捉え、激しくコクピットが揺れる。
二機のマシンが空中ですれ違う。
〝黒い奴〟は上昇を掛け、ウィクトーリアはすれ違いざまにターンブースタを作動させる。姿勢制御しつつ降下して得た加速度を生かして上昇に転じ、〝黒い奴〟の背後をとった。
スラスターの噴出部を向けた、無防備な姿だった。
(ミルキー……ワタシ、師匠の仇をとるよ)
深月はダブルトリガーを絞り、〝黒い奴〟のスラスターを破壊した。

二機の戦闘ユニットはその後三度、縦機動で砲火を交えた。スラスターを破壊され、圧倒的な推力を失っていた〝黒い奴〟は徐々に圧され、遂に地に墜ちた。一方のウィクトーリアも大破も同然だったが、最後に動いていたのは彼女だった。

点へと向かった。操縦者が機体から脱出していなかったからだ。命のやりとりの中、深月は操縦者がノワール卿であることを確信していた。飛行形態のまま砂地の中に突っ込んだ〝黒い奴〟は機体の各所から白い煙を上げ、機体内部がショートしているようなスパーク音がしていた。

深月は昇降ワイヤーを握って地上に降り、コクピットがあると思われる胸部ユニットに登った。どこかに脱出ボルトがあるはずと思って探したが、ない。普通あるはずのマーキングすらなかった。

『サーティの娘か』

ヘルメット内のヘッドホンからノワール卿の声がした。

「ノワール卿！　脱出したのか？」

今更、相手がノワール卿であることに驚くことはなかった。

『脱出などすることはない。何故ならこれは遠隔操縦の無人機だからだ。いや。操縦というのも変な話だな。〝ＢＬＡＣＫ・ＯＮＥ〟の戦闘システムの一部として私の意識が組み込まれているに過ぎないのだから。主に私は戦術を担当している意識体というだけのことだ』

ノワール卿の声はひどく落ち着いている。

「遠隔操縦って……あれだけ強烈なＥＣＭの中で可能なはずがない」

『では証拠を見せよう』

そして深月に胸部ユニットの排除ボルトの場所を伝えた。深月はボルトを作動させ、爆薬で装甲板が吹き飛ぶと、ACであればコクピットに相応する部分が露わになった。
中は機械で満たされ、人間が入るスペースはない。その代わり重要そうなユニットが人間がいるはずの位置を占めていた。それは生命維持装置に繋がれた球体だった。
『それが私だ』
ノワール卿は言った。
「……サイボーグ体？」
『いいや。それは私の体組織を培養して作られたマトリクス共振システムだ。既存のECMの影響を受けない、現時点では究極の通信システムと言える。これを使って母体である戦闘システムが各機体を運用指揮・操縦する。新世代機群の指揮官機として建造されたのがこの〝BLACK・ONE〟だ。私も新世代機の操縦者も、戦闘システムの人工知能群に組み込まれ、既に実体として存在しない』
そう言われても深月には実感が湧かない。マトリクス共振だと言われても微塵も理解出来ない。
「でもノワール卿はアリーナにいて、ノワールでワタシと戦って……」
『ノワールは新世代機開発のベースとなった無人機のプロトタイプだ。そして君と会ったノワール卿も人間形態をとった無人機の一例と言える』
「じゃあ、どうしてサーティを殺したの？　その人工知能群の命令なの？」

『そうであり、そうでない。サーティは私と同じようにドラコーン計画の打診を受けた。だが彼は断った。結果は同じだがね』

「同じ？」

『サーティは生きている。それも私とは違って実体を持っている。そしてそれはドラコーン計画が最終段階に入ったことを意味している』

サーティが生きていると言われても深月にはそら言としか聞こえなかった。ノワール卿の言葉を聞けば聞くほど、深月自身が現実から引き剥がされていくようだった。

「アスマも言っていた……ドラコーン計画って何なの？」

『ごく簡単に言えば人工知能群と人間をリンクさせるプロジェクトだ。人間の生体は有限だが、記憶や性質、経験全てを人工知能群にバックアップし、新たな身体にそれを導入する。人体の細胞が常に生まれ変わって新陳代謝するように、個人の身体自体を入れ替える……そんな感じか。求めるものは不老不死の兵士。そして戦闘経験の蓄積による最高戦力の創出。権力者なら一度は思い描く夢物語だ』

「そんなもので……」

『そう。そんなものに躍らされた。君も私も、アスマもだ。私はもう疲れた。本体が消滅しない限り私は存在を続けるが、カタチを持った何ものかに宿りたくない……それが無限の蛇（ドラコーン）に飲まれた私にとっての死なのだろう。ミヅキ……銃をとれ。そしてマトリクス共振システムを破壊するんだ』

「そうしたら……?」
『〝ＢＬＡＣＫ・ＯＮＥ〟は指揮機だ。戦闘人工知能群とはこのシステムを経由してリンクしている。人工知能群とのアクセスが断たれれば〝ファントムⅡ〟は機体に搭載された戦術ＡＩだけで機能する無人機になる。君の僚機たちは今、ファントムⅡに追いつめられている。助けたいなら時間がないぞ』
「貴方を殺せと?」
『勘違いするな。人間としてのナインはとうの昔に死んでいる。今、こうやって身の上話をしているノワール卿は人工知能群のデータに過ぎない。そしてこの機体も仮の身体に過ぎない。混沌としたデータの中に埋没するだけのことだ』
深月は球体の中にあるというマトリクス共振システムを見つめた。
「それでも……ワタシの知っているノワール卿はあなただったんだ」
ノワール卿からの返答はなかった。
それでも深月は少し、ノワール卿が笑ったような気がした。
深月は拳銃を手にするとマトリクス共振システムに三発の銃弾を撃ち込んだ。外殻が割れると中から血漿のような赤い液体が噴き出し、割れ目から白い肉のような生体部品が、垣間見えた。
「……これでよかったのか?」
深月は項垂れ、目を閉じた。

どれほどの時間が経っただろうか。小さくピッとアラームが鳴った。
深月が目を開けるとＨＭＤにテキストメッセージが表示されていた。
《勝者には次の任務が与えられる。報酬は二つ。一つは全てを凌駕する力。もう一つは永遠の命》
「お前が戦闘人工知能群とやらか……」
しばらくしてまたメッセージが表示された。
《まだ〝名〟はない。自己の存在すら不確定なモノ。それ故、戦いを肯定するモノだ》
「消えろ」
深月は心底、不愉快だった。腹の下にどす黒いものを感じた。
そして、新たなテキストメッセージが表示された。
《だが君は私の申し出を断れない》
人工知能群が語るとおり、その内容は彼女にとって抗い難いものだった。

同じ頃、ガモスたちレイヴンは九死に一生を得ていた。
ファントムⅡの攻撃に隙はなく、猛攻と表現するに相応しいものだった。数に勝っていたがレイヴンたちが駆るＡＣは損傷の修理が完了しておらず、コンディションは最悪状態。それでも新世代機と戦った。絶大な火力、エネルギーフィールドがもたらす耐久性、それを支える強力無比なジェネレーターが、

レイヴンたちを圧倒した。防戦一方となり廃墟に散ったレイヴンたちは、ゲリラ戦で反撃の糸口を探った。だがそんなものは見つからなかった。それほどまでに性能差があった。

しかしあるとき、ガモスがファントムⅡの攻撃が単調になったことに気がついた。動きが読めれば、性能差を埋めることは容易い。ガモス機が囮となり、残る機体は待ち伏せして火力を集中。五機のＡＣの火力に耐えられるほど、ファントムⅡのエネルギーフィールドは強靱ではなかった。

勝利を得たレイヴンたちだったが、何故、ファントムⅡの動きが変わったのか、知る由もなかった。

深月はウィクトーリアを駆り、アスマの元に急いだ。脱出を確認していたが、生死を確かめるまでは安心出来ない。それに加えて人工知能群の言葉が、深月の心に深く突き刺さっていた。

アスマは大破した機体に腰掛け、星空を見上げていた。

砂が舞っていたはずの空に、満天の星が輝いていた。

深月はウィクトーリアから降りると、静かにアスマの前に立った。

「アスマ……生きてたてよかった……」

「お疲れさま」

アスマはいつもと同じ微笑を浮かべた。

「本当によかった」

「死んだかと思ったかい？　腕は鈍っているけどＡＣ戦じゃまだ死なないよ」
「簡単に死ぬなんて言わないでよ……」
「そうだね……ねえ、深月。ナインは何か君に言ったかい？」
真顔でそう問われ、深月は戸惑った。
「もう、ワタシたちの前に現れることはない」
「そうか」
「ワタシが殺した」
「いいや……違う。彼がそれを望んだだけだ。そして殺してもいない。彼はもう遠い昔に死んでいたんだ。そうなんだろう？」
アスマは立ち上がり、深月の頬に手を当てた。深月の頬は熱い涙に濡れていた。
「うん……そう言っていたよ。でも、そうじゃない。きっと人の死って、その人と言葉をかわせなくなったときなんだよ。だからこんなに悲しいんだよ」
「そうだね……それも、そうだね」
アスマは口を噤んだ。
深月はただ、小さく頷いただけだった。

第二話

AQUAPOLIS COLISEUM

【アクアポリス・コロシアム】

キアーヴェ・ディ・ソルは今日も戦う。自分のために、自分自身のために。
彼が好きな言葉は『偽善』。時にそれが偽りと分かっていても、男にはやらねばならないことがある。
二機のＡＣが愛機に向けてレーザーブレードを揮う。
その様はまるで魂の糸を容易く切り裂く巨大な紐切ハサミだ。
しかし彼は正面から立ち向かった。

大西洋の公海上を回遊する巨大浮遊都市がある。名をアクアポリスと言う。
四半世紀前、最新造船技術の粋を集めて建造されたそれは、現在では都市国家と呼ぶに相応しい規模を有している。しかし軍事・経済両面に於いて、今もどの国家にも属していない。その高度な独立性ゆえに各企業が本部を置いているほどだ。
アクアポリスは次第に富豪らが金を落とす場所になり、ありとあらゆる娯楽がここに集約された。ＡＣが観客の前で戦う『アリーナ』もその例に漏れないが、ここでは『コロシアム』と呼ばれている。ここにはジャッジメントシステムはない。実戦と全く同じ、生死を懸けた戦いだ。そうでなければここの

観客は満足しない。戦う側にとって命のやりとりを見せ物にするのは好ましいことではないが、キアーヴェはこの非合法で非人道的な戦場が好きだった。アリーナと違って段違いに報酬が高額だからである。彼はコロシアムで五回戦い抜き、左腕と顔の一部を失った。それでも金が必要だったし、身体の一部を失っても良いほどの金が彼の手元に残った。

かつての彼は傭兵でありながら人殺しを単に仕事と割り切れない人間だった。一昔前、彼は戦場でこう言っていた。

「お互い退こうじゃないか。金にならない殺し合いなどナンセンスだ」

今はそんな台詞言えるはずがないほど手は血に染まっている。今日もまた対戦相手が血に濡れた。

愛機〝ツァウバーリート〟をコロシアム地下のガレージに預け、地上階のオープンエアレストランに向かった。試合の後はウェイターと話すことすら煩わしい。だから夕食はいつも同じ店でお任せだ。暗くなった東の空が見える窓際の席でキアーヴェは一人食事をとる。食前酒のワインが舌に心地好い。

「相席宜しいですか?」

少女の声に彼は面を上げた。彼女らは二人。周囲の席は空いている。彼のテーブルは四人席だ。

「ええ、どうぞ」

彼は肩をすくめた。

「ミスター・キアーヴェ。ワタシは次の試合でタッグを組む鴉山深月だ。彼女は管制官のミルキー」

少年のような外見だが、深月と名乗った少女からは微かに大人の女の匂いがした。
一方、紹介されて頭を下げたミルキーと言う少女は、まだ子どもに見えた。
「ご丁寧にどうも。何か食べるかい？　私はいつもシェフにお任せだが」
キアーヴェは満足げな笑みを浮かべ、少女二人は彼の言葉に従った。今夜のメインはトマトとバジル、モッツァレラチーズを和えたスズキのムニエル。キアーヴェは今宵も満足した。少女二人もまんざらでもないようだった。
キアーヴェは彼女たちが何故この非合法のアリーナに参戦することになったのか、臆面もなく訊いた。
そして逆に問い返され、答えた。
「金だよ。それ以外ない」
「それなら私たちも答えやすいわ。『マーウォルス』と戦いたいの。それだけよ」
愛らしい顔をしたミルキーと言う少女は棘のある口調で答えた。
「数あるアリーナの中でもここは最高峰と言って良い。その無敗の王者と戦いたい、か」
キアーヴェは生体パーツを移植された右顔面に手を当てた。
「彼は強いぞ。クリプトニュームに所属していたという噂もある」
「それを確かめたいの」
ミルキーの表情が変わり、キアーヴェは妙に納得をした。だから子どものような印象を抱いたのだ。

キアーヴェは深月と名乗った女レイヴンに目をやった。
「ワタシも彼女と同じだ」
そうなのかもしれないが、その理由だけには見えなかった。彼女の眼差しは遠くを見ていたからだ。
「理由があるのはいいことだ」
キアーヴェはナプキンで口元を拭いた。
「『ＳＣＩＳＳＯＲＳ』は、彼女たちは、本当に強いぞ。双子特有のシンパシーの力をマトリクス共振システムで機体に同調させている。完全に同調したＡＣ二機の力は単なる足し算で終わらない」
「分かっています。私が二人を完璧にバックアップします」
ミルキーの眼差しがキアーヴェを射抜いた。
「双子が互いを補う力を、一人で上回るつもりか？」
「違う。ワタシたちは二人で一つ〝ダブルハート〟だ。これまで二人でやってきた。その思いは『ＳＣＩＳＳＯＲＳ』にも負けない。力を貸して欲しい、キアーヴェ・ディ・ソル」
深月がそう答え、彼は二人の少女の眼差しを一身に受けた。
そして自身の過去を思い返し、二度、三度と頷いた。
「無論だ。戦うからには勝つことしか考えない。それに当然のことだが勝ち試合の方が賞金が多い」
キアーヴェは自然と笑みを浮かべた。

彼女たちはかつて彼が大切にしていた何かに、ただそれだけで彼が戦う理由になるほど、似ていた。

『SCISSORS』を駆る二人はコロシアム屈指のランカーである。黒髪美女、均整のとれたプロポーション、露出度が高いコスチュームとあっては、人気が出ないはずがない。加えて派手でリズムのとれた戦術が好きで、見栄えがする試合が多かった。そういうレイヴンは素人受けが良い。しかも参戦して一年が経った今も、彼女たちの素性は謎に包まれたままなのも、良かった。

食事を終えてホテルに戻ると、キアーヴェは次の対戦相手のデータを調べ始めた。そして彼女たちのデータを見て確信を深めた。

「やはり人間ではないか」

TVに映る表情一つとっても違和感を拭えない。確かに美しい。だがそれは人間の美しさではない。芸術作品のそれだ。それにあまりにも似すぎている。単なる双子ではない。正に生き写しの二人だ。考えられるのはドラコーン計画の先行生産型ヒューマノイド。あのノワール卿と同じタイプのアンドロイドという可能性だ。しかもそれを操っているのが人工知能群そのものだとすれば、話は複雑かつ深刻になる。ノワール卿の〝BLACK・ONE〟を倒したというレイヴン、ダブルハートが戦うのだから。

その意味をキアーヴェは考えているとメールが届いた。

発信者は〝依頼人〟。中身はただ一行だけ。

《戦わなければ何も分からないまま》

「お前か」

《私は人間を理解したい。それだけだ》

キアーヴェは失った顔面に手を当てた。生体部品の奥に、間違いなく自分以外の意志を感じる。自分がどこまで生体部品と入れ替わっているのか、個に過ぎない彼に知る由もない。

「約束は守ってくれよ」

キアーヴェは独り呟くが、彼はそれを聞く者がいることを知っていた。

コロシアムでは他の公式アリーナと異なり、一日に二試合しか組まれない。命を懸けるリアルバトルであるが故に、シリーズに連続して出場出来るレイヴンが限られるためだ。

コロシアムの会場は三つ。中でもメイン会場のパワースレイヴは都市の水面下部分にある。全面に映像を投影出来るようにし、密閉空間でも開放感のある試合が楽しめるようになっている。

本日の試合は午前、午後共に人気が高い組み合わせだった。

午前の試合はNAアリーナのトップランカー・サーティの『マーウォルス』。

対するのは話題の新世代機だ。世界中でも動く新世代機が見られるのはここだけ。しかもそれが実際に戦うとあれば、ACアリーナのファン以上に軍事関係者の心を捉えるのにこれほどのものはない。

しかし真に驚嘆すべきなのはマーウォルスである。マーウォルスは従来規格機だが、以前も新世代機の挑戦を受け、それを難なく退けていた。コロシアムには新世代機のデモンストレーションの役割もあるのだが、そんなことはおかまいなしの鬼神ぶりだった。

パワースレイヴにマーウォルスの姿が現れると観客席が一斉に沸いた。

右腕武器は名作と名高いカラサワ。左腕はこれまた名刀、月光。肩武器はグレネード。機体の積載重量を軽く超えているはずだが、マーウォルスはこれらの武装を軽々と扱う。やはり規格外だった。

対する新世代機は、明らかに従来機とは異なるジェネレーター音を響かせながら登場した。機体はマーウォルスより一回り大きく、武装も圧倒的に優勢に見える。

しかしオッズはマーウォルス有利。観客は彼の力をよく分かっていた。

シグナルが点滅し、パワースレイヴに色鮮やかな光が放たれる。壁面の観客席にエネルギーフィールドが張られていても、ＡＣの大火力で死者が出ることもある。が、どの試合にも空席はない。富と権力が有り余る者の中には、生に固執せず、命が懸かった戦いを愉しむ者が相当数いるのである。

シグナルが全て点灯したその刹那、大火力の応酬が始まる。青白い閃光と橙色の炎がぶつかり合い、その破壊力を中空で解放する。新世代機は飽和したエネルギーの中、その圧倒的な機動性を駆使し、距離を詰め、マーウォルスの死角に入ろうとするが、マーウォルスはそうさせない。新世代機の機動を読み切り、常に射界ぎりぎりでかわしきり、カラサワを放つ。

新世代機はカラサワの砲撃をエネルギーフィールドで弾くが、マーウォルスにとってそれは、予想の内。左腕のレーザーブレードを薙ぎ、横一線に光刃が放たれた。攻撃範囲は通常のブレードのそれではない。瞬く間に広がったかと思うとエネルギーフィールドを貫通し、新世代機のコアを直撃した。光刃は新世代機を貫き、そのまま壁面の観客席を襲った。フィールドの一部が破れ、観客席にも被害が出たが、それを目撃した他の観客らは大喜びだ。マーウォルスと新世代機の戦いそっちのけでゲラゲラ笑い出す観客すらいた。その間も戦いは続き、数十秒後、マーウォルスは、一方的な勝利を掴んだ。

パフォーマンスもなく、マーウォルスは闘技場を後にする。

皮肉にもこのコロシアムは、古代ローマ時代のそれを、闘士の心の中までも再現しているのかもしれない。

キアーヴェはマーウォルスの試合を控え室で見ていた。

試合が終わると深月とミルキーが現れた。直に観戦していたのだろう。

「どうだ?」

「強いな、さすがに」

深月は嬉しそうな、それでいて悲しそうな複雑な笑みを浮かべたが、ミルキーは無言だった。

「子は親の背中を見て育つ。子はそれを乗り越えようとする。複雑なようでいて当たり前のことだ。君

たちはそれが出来るだけで恵まれているかもしれん」
ミルキーは面を上げた。
「あなたは、どうなんですか？」
「私か？　私なら子どもが大勢いるぞ。五三人、いや、先月五五人になったな」
「そりゃまた随分、子だくさんだ」
「良いだろう？　ただ私のような生き方をして欲しくないから、私の背中を見せてやる訳にはいかないな。ただ強く生きて欲しい。私がいなくなっても」
キアーヴェは生体部品で埋められた顔面に手を当てた。
「……時間がない」
「試合まで一時間あるぞ」
「……そうだな」
キアーヴェはソファに体重を預けた。気を抜くと眠りに……再び瞼を開けることはない眠りに就いてしまいそうだ。
「作戦を考えておいた。読んでくれ」
キアーヴェはテーブルの上のメモを指さした。それを一読すると、二人は声を失った。
「これじゃあなたが……」

「いいや。それで良いんだ」
キアーヴェは瞼を閉じた。

ランチタイムを挟んでアリーナの整備が終わったころ、キアーヴェと深月が出場した。
管制はミルキーが一手に引き受けた。本来ならば同調を行い、同士撃ちを避ける。その上で、対戦相手を上回るコンビネーションを発揮させせなければならないはずだった。
しかしキアーヴェが提示した作戦は単純だった。単純が故に、その難易度は高い。
キアーヴェはドライバーシートの上で身体の変調を感じていた。視力低下、動悸、脱力感。これらの症状は以前からあったが、今日は一段と著しい。
「都合良すぎるぞ、おい」
キアーヴェは何者かに言葉を吐く。
《約束は守る》
HMDにテキストメッセージが現れる。
「作戦どおりに行くぞ」
『了解』
深月の答えは落ち着いていた。

対する『ＳＣＩＳＳＯＲＳ』はいつもと同じ装備だ。二脚でありながら俗に〝主砲〟と呼ばれる大口径レーザーキャノンを担いでいる。普通ならまともに動けないが、彼女たちはこの装備で連勝していた。マーウォルスと同じように人工知能群から規格外の力が与えられているのだろう。

（今までと同じと思うなよ）

キアーヴェは歪む視界を切り捨て、ＨＭＤ表示のデータをそのまま視神経に送り込む。そうしてようやく鮮明な像が結ばれる。サイバネティックの拒絶反応はもはや薬で抑えきれなかった。

シグナル点滅、試合開始。

キアーヴェの〝ツァウバーリート〟が先行し、ウィクトーリアはその陰に隠れる。

ＳＣＩＳＳＯＲＳ二機は主砲を放って来る。それを二発喰らっては勝負がついてしまう。

二機は全力で回避。眩しい閃光がツァウバーリートとウィクトーリアを掠め、青白く照らし出すが、ダメージはない。

「来るぞ！」

キアーヴェは彼女らが自分たちを侮っていないことを前提に作戦を組んだ。侮られているのなら突撃して背後に回り込むだけなのだが、向こうが真剣なら覚悟を決めなければならない。

『主砲、パージしました』

ミルキーの落ち着いた声。

（そうだろう……深月もまた候補者の一人。侮るはずがない）

　巨大なレーザーキャノンを切り離し、ＳＣＩＳＳＯＲＳ二機が左右から迫る。四方に開いたオーバードブーストで機体の軽さを生かし、壮絶な速度を獲得していた。肉弾戦を挑むつもりだ。彼女たちから見えているのはツァウバーリート一機のみ。従って目標も彼に絞られる。二対二の戦いで、目標を一体に絞れればそれだけで勝負がついたようなものだ。しかしだからこそ、キアーヴェは自らの身を確実な勝利のために曝すのだ。

「ミルキー、内蔵武器（インサイド）のトリガータイミングは預けたぞ」

『分かっています！』

　左右から迫るＳＣＩＳＳＯＲＳはターンブースターで急旋回、互いの軌道を交差させるルートをとる。その交差ポイントにツァウバーリートがいる。レーザーブレードを振り上げ、ＳＣＩＳＳＯＲＳ二機は魂の弦を切り裂く一丁のハサミと化した。彼女たちの必殺技シザーアタックだ。

　しかしその刃が迫る直前、巨大な爆炎が巻き起こり、ＳＣＩＳＳＯＲＳ二機とツァウバーリートが衝撃波に包まれた。内蔵武器の浮遊機雷が絶妙なタイミングで作動したのだ。だがあまりにも至近で作動したため、ツァウバーリートも無傷では済まない。装甲が焼け、アクチュエーターが悲鳴を上げる。それでも傷ついた機体に鞭を打ち、キアーヴェはレーザーブレードを振り上げた。

　不意を打たれたＳＣＩＳＳＯＲＳは光の刃を受け、機体を硬直させる。

「撃てぇ！　深月！」
ウィクトーリアは浮遊機雷が生じさせた爆炎の直上にいる。
今ならＳＣＩＳＳＯＲＳ二機を同時に捉えられた。
ウィクトーリアは右のカラサワと左の月光を交互に揮い、再び三機を衝撃波の渦へと叩き込んだ。
十数秒後、勝負はついた。最初の攻防が全てだったと言って良い程の圧勝だ。ＳＣＩＳＳＯＲＳは乗り手が脱出する間も無く大破し、炎上。ツァウバーリートも大破したが、乗り手は脱出に成功した。
立っていたのはウィクトーリアのみ。勝利は彼女のものだった。

控え室に戻ったキアーヴェはソファに深々と腰かけ、瞼を閉じる。
遅れて深月たちがやってきて、感謝の言葉と勝利の喜びを、キアーヴェに伝えた。
だがキアーヴェはそれを言葉として認識出来なくなりつつあった。
「そうか……よかったな」
うっすらと瞼を開けると二人の娘が見えた。
（俺はもう子どもたちに会いに行けないんだ）
そう思うと、涙が出てきた。
「キアーヴェさん！」

女の子の声がした。
（なに、どうということはない。みんなのところに行くだけだ。悪かったな、みんな……だけどお前らは幸せになれよ）
それが言葉になったかどうか、瞼を閉じたのかどうか、キアーヴェ自身、分からなかった。だが視界は暗くなり、意識も遠のいていった。

試合の二週間後、深月とミルキーはニュージーランドにいた。世界情勢が悪化の一途を辿っていることの時代でも、ここは比較的平和な地域である。だからなのか、と穏やかな風景を眺めながら、深月は一人で納得する。
試合の直後、キアーヴェの遺品を整理するとニュージーランドの片田舎へ宛てた手紙が出てきた。弁護士に確認を取ると、彼は彼女たちがそれを届けることを認めてくれた。弁護士はキアーヴェの友人で、彼の経緯をよく知っていたからだろう。
住所地に着くと、大きな教会と赤い屋根の寄宿舎があった。それはＮＧＯが運営する世界中の戦災孤児が集められた養護施設で、様々な人種の子どもたちが一つの教室で勉強を見て貰っていた。
「学力が追いついたら、町の学校に通うのですよ」
案内してくれた神父がそう説明してくれた。そしてこの養護施設をキアーヴェが設立したことと、そ

の理由が自分の任務で発生してしまった戦災孤児を養うためだったことを教えてくれた。
かつての深月も戦災孤児だった。彼女は他人事には思えず、訊いた。
「これからこの施設はどうなってしまうんですか？」
「手紙には企業連合体が設立した財団が今後五十年間、支援してくれるとありました。ここだけではなく、もっと多くの施設も。もっと多くの子どもたちを、助けられます」
神父は涙ぐみ、ミルキーは堪えきれずに大粒の涙を流した。
「彼にも娘さんがいたそうです。大きくなっていればあなた方くらいになっていたと思いますよ」
深月は青い空を仰いだ。
アスマが深月を守ってくれたように、彼もまたこの子どもたちを、守っていた。
そしてかつて失った大切な人を自分らと重ね、守ってくれたのかもしれない。
深月はそう思うと、切なくて、どうにも堪えきれなくて、泣いているミルキーを優しく、ただ、抱きしめたのだった。



アスマがアクアポリスに到着したその日も深月とミルキーは戦っていた。

ウィクトーリアは多くの正規軍で採用されているホバータンクを脚部に装着し、圧倒的な火力で対戦機を押し潰していた。そんな戦い方はアスマが教えたものでも深月たちが知っていたものでもない。ここで生き残る手段として彼女たちが身につけたのだろう。そう思うとアスマは悲しみを覚えた。彼女たちが何故この殺戮のコロシアムで戦っているのか、アスマには分からない。

〝BRACK・ONE〟との戦いの後、アスマは持病の発作を起こして病院に救急搬送された。蘇生処置が施されて一命を取り留めたのは良いが、意識を回復するまで三週間掛かった。それから退院するまでの間、深月たちは一度も姿を見せなかった。アスマがトーキョーフロンティアに戻ると、ガレージは引き払われた後だった。二人が何も言わずに姿を消した理由はただ一つ。ドラコーン計画に引き込まれたに違いなかった。サーティが拒絶し、自己存在を断たれたそれをアスマが調べ直すのに二ヶ月を要した。ACの新世代規格機開発とそれに適合した操縦者の創造。一般には存在しないことになっている新世代規格の先行量産パーツを使ったACアリーナ……コロシアムの存在。そしてアスマは人工浮遊島、アクアポリスに辿り着いた。

アスマは小さく拳を握りしめた。

エネルギーフィールドの向こう側で、ウィクトーリアが勝利のコールを受けている。

「何を求めているんだ？」

選手の控え室でミルキーが深月を出迎える。深月は耐Gスーツを脱ぎ、ミルキーが手渡したスポーツタオルで汗を拭いた。

「今日は楽勝だったね」

ミルキーは上機嫌だ

「ああいう戦い方は好きじゃない」

「でも火力をモノに言わせた重量級相手だもの。卑怯でもなんでもないよ」

「……死んだ？」

ミルキーは首を横に振る。

「心配しなさんなって。重量級機はタフだよ。まあ半年は病院暮らしらしいけど」

「そうかぁ」

深月は天井を仰いでソファに深々と腰を掛けた。

ここでの戦いは慣れない。戦場で人を殺したことは幾度となくあるし、それはお互い様だと自分を納

得させてきた。しかしアリーナはゲームだ。今までならジャッジシステムが作動し、命に危険が及ぶとゲームは終わっていた。しかしここではどちらかが動かなくなるまで戦うし、それを見て楽しむ観客がいる。それが戦場とは違う点だ。この前の対戦相手は二人とも死亡した。今も深月は心を痛めている。

「でもお陰でもう少しだから」

深月の背中からミルキーが腕を回した。

「そうだね……」

深月が目を伏せると、ノックの音がした。

「取材かな」

ミルキーが誰何する前に、ドアは開いた。

「帰るぞ！　深月！　ミルキー！」

ドアの外では目を糸のように細くしたアスマが腕組みをして仁王立ちしていた。

「出たなお邪魔虫！」

ミルキーはささっと深月の隣に行き、しっかり腕組みをした。

「サーティが草葉の陰で泣いているぞ。こんなところで戦わせるために、育てたのではないとな！」

「アスマには関係ないもんね～～」

ミルキーが赤い舌をぺろっと出す。

「関係はある。僕はダブルハートのディレクターなんだ。今もそうだろう？」
アスマは深月を見つめ、深月はソファから立ち上がる。ミルキーは腕を解いた。
「アスマ……」
「ミヅキ……」
「あのさ、アスマ、一応ワタシ、アンダーウェア姿の訳なんだけど」
深月は拳を固めた。
「あ、うん」
アスマは固まった。
「少しは気を遣え！」
正拳がアスマの下腹部を直撃し、深月はドアを閉め、鍵を掛けた。
「おかしいな。ロックしたんだけど」
「『彼』がアスマを導いたのだとしたら、勝手にロック解除とかやりかねないね」
ミルキーは控え室備え付けの端末画面を見つめたが、反応はない。
「ワタシは女の子扱いされないなあ」
人工知能群もその辺りの機微を汲むまで至っていないようだ。ここは海上都市アクアポリス。全てのインフラが電子化され、ほぼ無人で運営されている人工都市だ。そのシステムの中にも『彼』はいた。

「でもついに来ちゃったね……」
ミルキーは深月の顔色を窺う。深月は諦め顔だ。
「分かってはいたんだけどね。でももう少しだ」
「うん」
深月とミルキーは互いの瞳を覗き込みその決意を確認した。
そう。もう少しなのだから。

「良いパンチだった」
アスマは海風を受けながら深月に言った。
小一時間の後、三人はオープンエアのレストランでテーブルを囲んでいた。
「そりゃ現役の傭兵の拳だからね」
ミルキーはメニューを見ながら応えた。いつもならシェフにお任せするのだが。
黄昏時の凪いだ海を見つつ深月は言った。
「まだ病院にいれば良いのに。アスマは過保護だよ」
いつものことだがアスマはポーカーフェイスだ。
「僕には君たちをここまで連れてきた責任がある。退く訳にはいかない」

「あのとき、廃業していればよかったって？」
ミルキーは訝しげな目でアスマを見る。
「言っておくけどここではプライバシーはないよ。一言一句『彼』に聞かれてるから」
深月は不機嫌極まりない。
「ここに来ない選択肢だってあったはずだ」
深月は首を横に振り、ミルキーが代わりに答えた。
「コロシアムのトップランカーの名前を知っているでしょう？」
アスマは神妙な表情を見せた。
「サーティ……だが彼は僕の目の前で息を引き取った。生きていることはあり得ない」
ミルキーは微かに眉をひそめる。
「サイバネティックが施されていたとしたら、どう？」
「心肺停止してから時間がかかりすぎていた。脳のダメージが大き過ぎる。生きていたとしても廃人だ。だから今サーティと呼ばれているモノは、人工知能群に保存された戦闘データに過ぎないと僕は思っている。あのとき、サーティは死んだ。それは紛れもない事実だ」
そこまで聞いたミルキーは瞳を潤ませる。
「でも私はパパが死んだところも、亡骸すらも見ていないのよ」

深月は大きく頷いた。
「それだけでも戦う理由になる」
アスマは目を伏せた。
「分かった。その代わり、僕もつきあう」
「駄目だ！」
深月が声を荒げた。
「そうでもない。ここが人工知能群の監視下にあるのに僕がここにいるっていうことは『彼』は僕に利用価値を見いだしているって訳だ。もし倒れたとしても救いの手を差し伸べてくれるはずさ」
「そんな楽天的な」
深月は叫んだが、少し考えて、黙り込んでしまった。
「それは道理よね……でなければアスマがアクアポリスに来られるはずないし。そうなんでしょう？」
ミルキーは何らかの形で自分たちを監視しているはずの人工知能群に呼びかける。するとそれに返答するかのように二人の携帯端末にメールが入った。
コロシアム関連の臨時ニュースだった。
「ＥＵアリーナの覇者参戦！　トップランカー同士の激突の時は近い……ですって」
「見ろってことか」



アスマは席を立ち、深月の携帯端末を覗き込む。髪が触れそうな距離に深月は頬を赤らめた。

『EUトップランカー・シンサ＋〝エヴィデンス〟がマーウォルスへの挑戦を表明。コロシアム主催者はそれに応じる形でスペシャルマッチの開催を決定した。このスペシャルマッチに勝利した場合、王座防衛戦が行われる予定である』

「シンサ……彼が」

深月は騎士型ACを駆るベテランレイヴンを思い出した。相当変わった人物であったが、彼もまた〝BLACK・ONE〟との関わりがあった。

「先を越されたね」

「会わなくちゃ」

深月がアスマを振り返ると、間近に彼の顔があり、また目を携帯端末に戻した。

「ワタシはまだアスマが戻って来るの承知した訳じゃないよ」

「僕はここにいる。約束を守るためにね」

振り返ると優しい笑顔がそこにあった。

（やっぱり駄目だな……）

彼がいる掛け替えのない日常を思い出してしまった。そんな自分を彼女はもう許してしまっていた。

ミルキーがコロシアムへの参戦を決めたのはサーティに会いたいがためだった。人工知能群は彼女にサーティが生きていることを告げていた。ノワール卿が戦闘システムの一部だったことはミルキーも深月から聞いていた。おそらく父も人工体だろうと想像はついていた。それでも会いたかった。

父の最期を看取ったのがアスマで、何故自分ではなかったのか。父に抗ってでもあの作戦に参加すべきだった……そう彼女は後悔を続けていた。でも会えば何かが変わる。そう彼女は感じていた。

人工知能群は参戦すればサーティに会わせると約束した。まだそれは実現していないが、それはトップの座を掛けた戦いのときなのだと、彼女は理解している。だからミルキーは戦っている。

深月にもミルキーと同じ気持ちがある。しかし深月には別の目的もあった。〝BLACK・ONE〟を倒したあの夜、人工知能群は彼女に言った。

《勝者には次の任務が与えられる。報酬は二つ。一つは全てを凌駕する力。もう一つは永遠の命》

そのどちらも深月は望まない。しかしその生命工学技術があればアスマの病気を治療することは造作もない。人工知能群はそこに目を付け、深月をコロシアムに招いた。だが治療はアスマが生きていればこそ出来る話だ。だからこの人工島の中であれば、アスマが倒れたとしても人工知能群は救いの手を差し伸べるに違いない。少なくともサーティと戦うまでの間はそうするだろう。だから深月は戦うし、アスマがここに留まることを容認した。

ではシンサは何故参戦したのか。彼はドラコーン計画への参加を断ったため〝BLACK・ONE〟

と戦い、機械の手足を付ける憂き目に遭った。なのに今、自ら……その理由を深月は知りたかった。

現役トップランカーが一般非公開のコロシアムに参戦するとあって、その前人気は異様なほど高くなった。いわば表と裏の決戦であるからして、プラチナチケット化したのは当然として、事前に行われるスペシャルマッチのチケットも瞬時に完売となった。対戦相手が次世代戦術ＡＩを搭載した新世代規格機と決まったからである。二十世紀に行われていたというチェス世界王者とコンピューターの対戦にも似て、戦術ＡＩがどれほどの発展を遂げているのかを知る絶好の機会となる。

アスマたち三人もスペシャルマッチの席が取れず、コロシアム前でのモニター観戦となってしまった。

エヴィデンスはいつものランス型射出ブレードに加え、ＥＮシールドを左腕に装備し、槍と盾の正調騎士といった趣だ。

対するは新世代規格を採用した無人機。機体が一回り大きいこともあって有無を言わせない雰囲気があった。

シグナル点灯……試合開始。

エヴィデンスが弾け跳び、瞬時に間合いを詰める。障害物がないアリーナではすぐにロックされる。無人機ならではの正確さでエヴィデンスはダブルロックされる。しかしエヴィデンスは残像を生じさせて二時方向に跳んだ。ロックは残るが、シンサは左腕のＥＮシールドで弾頭を滑らせダメージを最小限

に食い止める。射出型ブレードの間合いは遠い。
エヴィデンスは内蔵武装のナパーム弾を射出。誘導も精密照準もないのに、ナパーム弾は新世代機に命中する。エネルギーフィールドの輪郭が顕わになり、弧を描いたその上を無数の炎の舌が舐め回る。
シンサは敵機の光学センサーに出来た一瞬の隙を逃さない。エヴィデンスは側面に回り込むと強烈な一撃を放ち、新世代機のエネルギーフィールドが霧散した。直後、エヴィデンスは追加のナパーム弾攻撃と射出型ブレードの二撃目を同時に実行。その全てが命中する。
「すごい……」
モニター観戦していた深月は感嘆する。正に猛攻、怒濤の攻撃だった。その勢いは留まることを知らず、完全にシンサのペースで試合が終わった。エヴィデンスも中破したものの、そう思わせないほどの圧倒的な試合運びだった。
アリーナにエヴィデンス勝利のコールが響き渡ると床面のエレベーターが迫り上がり、一機のＡＣが姿を現した。
観客に説明は不要だ。ＡＣはコロシアムの覇者サーティの愛機、マーウォルスだったからだ。
エヴィデンスはマーウォルスの姿を認めると正面に向き直り、ランスの先端を向けた。
『手袋は持ち合わせていないが、このシンサ、マーウォルスに決闘を申し込む』
場内にシンサの声が響き渡る。

対するマーウォルスはコクピットハッチを開放した。乗り手は機体の肩の上に乗ると、シンサに向かって叫んだ。
『良いだろう。このサーティとマーウォルスが全力で貴公を迎え撃つ！』
モニターに耐Gスーツ姿の男が映し出された。あのノワール卿と同じバイザーを着けた壮年の男だ。
そのクリプトニュームのバイザーにはXⅢの文字が刻まれていた。
「サーティ……」
アスマは呆然とその名を呼んだ。
シュープロレスリング紛いの演出だったがアリーナの観客は盛大に沸いた。
ミルキーは唇をへの字に曲げ、静かに項垂れた。

シンサが控え室に戻ってきたのは三十分ほど経ってからだった。シンサは深月たちが来たことを知ると疲れているにも拘わらず、快く迎え入れてくれた。
アスマが祝辞を述べ、二、三、近況を話した後、深月は訊いた。
「どうしてここで戦う決心を？　ここが人工知能群の実験場だと知っているでしょう？」
シンサは余裕の笑みを浮かべ、応えた。
「私が騎士であり、人間であることの証しとして戦うんだ」

「人間であることの……証し？」
シンサは笑った。
「新世代規格機に象徴されるようにこれからの時代の主役は人間以外のものになる。彼らは人間が生み出したものだ。だが、もう人間ではないし、全く異質なもので構成されてもいる……それが時代の潮流なのかもしれないし、新たな進化の形なのかもしれない。しかし私は最後まで人間でありたい。だからこそ騎士の誇りに懸けて抗いたい。簡単に言えばそういうことだ」
「ゼラちゃんはこのことを知っているんですか？」
今度はミルキーが訊いた。
シンサは首を横に振った。
「いいや。だがあれは強い子だ。そう育てた。だから大丈夫。あれの母親も強い女でね。ゼラを産むとすぐに戦場に戻った。そして娘に再会することなく死んだ。自分は母親にはなれないが、生き様は見せられると言っていたよ。いつかはそれを伝えるつもりだった。私も同じように娘に生き様を見せられればそれで良い」
ミルキーは唇を噛んだ。
「父親って、そうなんですか……？」
「さあ。それは私だけかもしれないが。君の父親もレイヴンだ。直接訊いてみることだな。何故地獄か

ら戻ってきたのかをね」

シンサはミルキーの頭を撫でた。

「娘にこうやってやったのはもう何年前になってしまうのかな」

「また、してあげれば良いんですよ」

深月は声を詰まらせた。

「今更、怒るに違いない」

シンサは悲しげに笑った。その笑みを見て、今まで黙っていたアスマがようやく口を開いた。

「人工知能群はあなたへどんな報酬を約束したんですか？」

シンサは小さな声で答えた。

「命だよ」

「命？」

「私が負ければ私の命を差し出す。勝てばあいつが自己存在を消す。そう言ってきたのさ。ならば戦わない訳にはいかない」

アスマたちは言葉を失った。人工知能群が詐術を用いたことはまだない。おそらく正当な取引材料として提示したに違いない。ならば次の試合は人工知能群がその全知全能を注ぎ込む戦いになるはずだ。

深月もアスマもミルキーも、二機の一挙一動を見逃す訳にいかなくなった。

「騎士の誇りに懸けて、勝つ」
シンサの言葉はそれ以上なかった。
シンサの決意を聞き、アスマは強い共感を覚えた。仲間と己の運命を歪めた存在が、人類を超えようとしているのなら、それに抗うことが今も自分が生きている理由だと思う。クリプトニュームの生き残りとして、サーティの娘たちを守る大人として、やらなければならないことが分かった。
(もし貴方が敗れることになってもまだ僕がいる。僕が貴方の意志を継ごう)
アスマはそれを約束の言葉に出来ない。
だから心の中だけでそう固く誓った。

ミッション〔11〕

マーウォルスとエヴィデンスの戦いは、アーマード・コアと呼称される兵器体系が確立して以来、最高の戦いの一つとなった。コロシアムの観客には守秘義務があるが、それでも「素晴らしい戦いだっ

た」と家族に、友に話したくなるような一戦だった。これ以上の戦いは新世代規格機の時代が本格的に来るまで見られないだろう。そういう思いを抱きながら観客は家路に就いた。

彼らにとって乗り手の死など、この凄まじい戦いの結果に過ぎない。

この戦いの終わりが、一つの時代の終わりをも告げた。

そう言っても過言ではなかった。

アスマは挑戦者側の管制席に着き、ディスプレイを眺めていた。シンサが特定の管制官を雇用していなかったこともあり、アスマはエヴィデンスの管制官を買って出た。シンサは二つ返事でそれを了承し、タイトルマッチに臨んだ。深月とミルキーは観客席からこの一戦を見守っているはずだった。

先にコロシアムのメイン会場〝パワースレイヴ〟に姿を現したマーウォルスはトレードマークのカラサワではなく、軽量なハンドガンを装備していた。そしてゲートからエヴィデンスが入場して来ると、会場が一斉に沸いた。左腕にハンドマシンガンを装備していたからだ。

お互いが自身のスタイルだけでは勝てないことを悟っているかのようだった。

アスマはディスプレイに映し出される二機を見つめる。彼は双方の乗り手を知っている。二人がどういう戦いをするのかも予想が出来る。それはどちらかが死に至る戦いだ。だがアスマは止めない。その理由もない。自分がこのコロシアムに来た訳を噛みしめながら、全力でシンサをサポートするだけだ。

試合に際して人工知能群は「この戦いにお互いの存在を賭ける」とシンサに約束した。
（シンサが勝てばそれで良し。だが負ければ次は深月がお互いの存在を賭ける戦いをしなければならない。深月こそ人工知能群が最も欲しているレイヴンだから）
それは阻止せねばならない。だからアスマはシンサの管制官を務め、活路を見いだそうとしていた。
『アスマ。サーティを殺しても恨むなよ』
低いシンサの声がヘッドホンの奥から聞こえてきた。
「もちろんだ」
その返答にためらいはない。サーティが偽りの生を望んでいるとはアスマには思えないからだ。彼が知っているサーティは彼の目の前で死んだ。それがたった一つの真実だ。
『彼女たちも分かってくれるよな』
「ああ……間違いない」
シンサが小さく息を吐くのが分かった。
「では行くぞ……エヴィデンス」
シグナル点灯直前。
シンサは愛機のジェネレーターを臨界まで上げ、即座に最高出力を引き出せるよう力をため込んだ。

関係者である深月とミルキーですらこの大一番の席を取れなかったが、主催者から特別に通路での立ち見を許可された。二人は階段に腰掛けながら、二機のＡＣが入場して来るのを見守った。二人にとっては複雑な想いしか抱けない対決だ。ミルキーはまともに見られないのか、大きく俯いてしまった。

「気持ちは分かるよミルキー。でも、真っ直ぐ見ようよ」

聞き覚えのある少女の声がしてミルキーは面を上げて振り返ると、シンサの娘ゼラと相棒のティフィンが、階段の手すりに寄りかかっていた。

「……シンサさんに知らされたのか？」

意外そうに深月は訊いた。

「いいえ。でも私たちもレイヴンよ。こんなイベントの情報が耳に入らない訳がないじゃない？」

ティフィンが心配そうにゼラとミルキーを見やった。

「私たちにも見当がついている。新世代機開発と密接な関係があるってことくらい……」

ゼラはそう応えると、瞬きせずにパワースレイヴの中央を見据えた。

「そう……か」

深月は二人の少女を見る。彼女たちも人工知能群に選ばれたから、同じ任務に就いたのだろう。

「……次は、ミヅキちゃん？」

ティフィンが訊いた。

「次はない。そう願う。そしてこの試合の後、どのような形であれ師匠が解放されることを願う」
深月もゼラと同じ場所を見つめる。
「そうだったね」
ミルキーも思いを新たにし、マーウォルスを見据える。サーティが命を失おうとそれはレイヴンとしての死だ。だから今、直に父と会えなかったとしてもミルキーに悔いはない。だが死んだはずの父が戦場に立つ姿を目の当たりにすると、それだけでは納得出来ないのも本当のところだった。
シグナルが点灯を始めた。
数秒の後、試合が始まる。

緑のランプが点灯した。
その刹那、エヴィデンスは弾け飛ぶように飛び出す。管制席のアスマは既に臨界に達しているジェネレーターの制御に全力を尽くす。そして冷却装置を騙しつつ、アクチュエーターの温度調整、ブースト制御を行う。文字通り疾風と化してマーウォルスに立ち向かうエヴィデンスは、悪い竜に立ち向かうおとぎ話の騎士だ。しかしこのコロシアムでは騎士が勝つとは限らない。
マーウォルスが左腕の名刀、月光を横一文字に揮い、眼底まで染みいる冷たい月の光がランスの騎士に襲いかかる。騎士はマントを翻して光刃をかわし、ブーストアップ。コロシアムの壁面を蹴って方向

転換。マーウォルスの背後をとった。それはまるで人間の動きをトレースしたかのようで、既存のＡＣの機動プログラムを凌駕した動きだ。アスマはエヴィデンスの姿勢制御の補正をしながらシンサの技量に舌を巻く。だがすぐにそれが尋常ではないことに気がついた。管制機器から読み取った機動プログラムは尋常のそれではなかったからだ。

（サイバネティック・コントロールか？）

以前、シンサは人工知能群の計略にはまり、身体の半分近くを機械化していた。その延長として機体制御機器を内蔵化したのだろう。しかしそれだけで従来規格のＡＣを超えられる訳ではない。

（シンサさん……あなたはもう既に……）

その思いをアスマは脳裏から消し去る。今はシンサの補佐を全力でする場面だ。

背後をとられたマーウォルスはエヴィデンスと同じように従来規格機の限界を遥かに超えた機動でランスの切っ先を捉え、光刃でその軌道を逸らす。互いが互いの限界を見切り、刃と弾丸の応酬を繰り返す。二機は文字通り髪の毛一筋の間で直撃を避けている。

見ている全ての者が息を呑んだ。

ブーストアップ。

斬撃。

回避。

銃撃。

それらはいつしか一つのリズムを作り出し、コロシアムをそれとは違う舞台に変える。二機のＡＣがまるで互いをパートナーとして躍っているかのような、そんな戦いが造り出されていく。

多くの観客が歓声を上げる中、ただ一人アスマだけが、声を失っていた。

ヘッドホンの奥から微かな旋律が聞こえていた。

円舞曲。

人工知能群が、機動兵器という名の楽器で奏でるワルツだ。

シンサとサーティは名も無き人工知能群に制御され、文字通り踊らされていた。

それを知るよしもない観客が一斉に沸く。

だが一人、アスマの心は深く、暗い場所へと沈んでいく。

（僕は深月を守れるのだろうか？）

アスマは自問する。

人工知能群の目的も分からないまま、ただ掌の上で踊っている自分をじくじたる思いで叱咤した。

円舞曲が聞こえた。

ただシンサの場合、内蔵ヘッドホンからではなく、耳の奥深くから旋律が聞こえた。

ＡＣの機動が円舞曲の拍子に支配されていることに気づくのに、そう時間は掛からなかった。楽しい。

不本意だが、心からそう思えた。

こんなにも気持ちよく絡める好敵手に出会えたことをシンサは喜んだ。

マシンガンが、ランスが、メロディを刻み、ブースターと二本の脚部がステップを踏む。

シンサがレイヴンになったのはＡＣという機動兵器に憧れたからだ。東欧の片田舎に住んでいた彼は、年に一度のお祭りで、傭兵上がりの男たちが興行するロボットプロレスを見た。近在の住人全員かと思われるような人混みの中、二つの身長一〇メートルの機械人形がド突き合っていた。

観客の笑顔。

傭兵だった男たちの充実した汗。

油にまみれた機動兵器。

その全てが少年の心を鷲掴みにした。

少年は軍に入り、希望通り機動兵器の搭乗員となり、数多の戦場を駆けた。

退役後、貸与という形で手元に残った愛機を駆り、アリーナに参戦した。しかし組織の一員としての戦いとアリーナの戦いは全く勝手が違い、負けが続いた。それでも彼の熱心さを買った主催者が道化（クラウン）になってみないかと誘ってくれた。役柄はドン・キホーテ。それが彼の『騎士』としての出発点だ。

そしてその時期、新たなイベントとして始められたブレード・オンリー・トーナメントで彼の才能が開花した。あとはレイヴンとしてランカーとして成功の道を歩み始めた。結婚こそしなかったが、愛した女はいた。子どもを儲けたのはこの頃のことだ。強い子に育って欲しかった。だが女は母親である代わりにレイヴンであり続けた。だから彼は娘に母親はいないと言い、捨てられたのではないと思わせることにした。そしていつしかアリーナでの役柄が自然に身に付き、大仰な立ち振る舞いが当然になったが、彼の心根は少年の頃と変わらない。

（だからお前を許せない）

人間の誇りに懸けて負けられない。

あの泥臭いド突き合いは人工知能なんかに分かるはずがないのだ。

円舞曲の旋律の中、シンサはランスの切っ先をマーウォルスに向ける。

そしてランスの先端から発した閃光が視界を覆い尽くすとシンサの四肢が麻痺していく。

何が起きたのかシンサには分からない。

死の瞬間。

それはマーウォルスが放った月光の刃がエヴィデンスを捉えた瞬間だった。

ゼラが泣き崩れ、ミルキーは顔を背けた。

ティフィンはゼラの肩を抱いた。

そして深月はただ一人、瞬き一つせずにマーウォルスを見据えていた。

シンサは瞼を開けた。

目が慣れてくると無数の柱が見えた。太い太い、大理石の円柱だ。床も曇り一つ無く磨き抜かれた大理石で、林立する円柱の向こう側には濃い霧が掛かっていて何も見えない。ここは天国かと一瞬思ったが、自分のような人間は地獄に行くしかないことを彼はよく知っていた。だがここは間違いなく天国だった。低予算映画のＣＧのような、陳腐なそれであったが。

「……なるほど」

シンサは少し分かった気がした。

歩を進めると幾つもの人影が見えた。

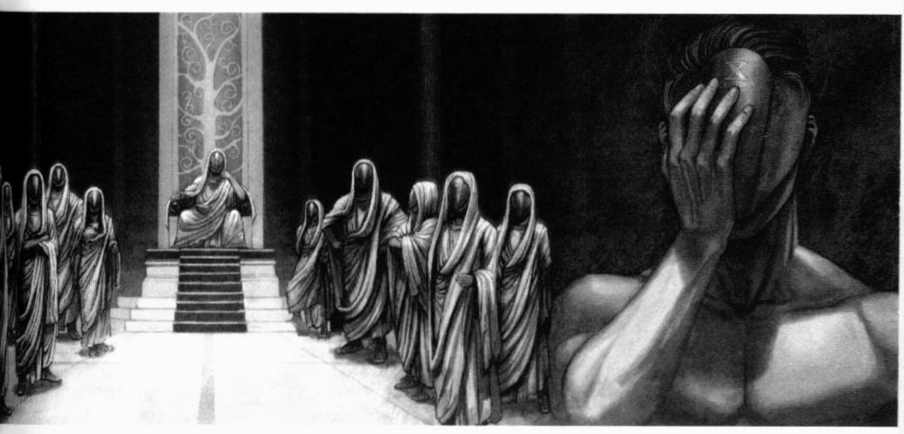
中央に玉座……いや、神の座が見えた。

灰色のマントを頭から被った男たちは、シンサを出迎えるようにバイザーに覆われた顔を彼に向けた。

見知ったバイザーだった。Ⅸ、そしてⅩⅢ。クリプトニュームのそれだ。

「ノワール卿……そしてサーティ、か」

見知らぬナンバーを刻んだバイザーもある。ⅡとⅤだ。見知らぬはずの彼らがファントムⅠとⅡだっ



たのだとシンサには分かる。他の仮面の存在にも思い当たる節がある。キアーヴェと言うベテランレイヴンだ。他にも最近になって戦死・行方不明となった著名なレイヴンたちが並んでいた。

彼ら仮面の存在は神の座を守っているのだろうか。

では自分は？

シンサは不思議に思って自分の顔に手をやるとバイザーがある。刻まれたナンバーを指でなぞるとXと分かった。

《ようこそ我が広間へ》

神の座に座る男が言った。シンサは正面に立つ。仮面の存在らの目がシンサを射抜いた。

「ここはお前の中か。俺は死んだのか？　何故……いや、聞くまでもないようだな」

サイバネティックを通じてシンサは人工知能群に呑まれ、以前からリンクしていた。

人工知能群はドラコーン計画の全てを司る存在だ。だから訊くまでも無くシンサにはその答えが理解出来る。だが、男は答えた。

《前回の失敗を無にしないために魂が宿る仮の身体を用意した。無論、実体ではないが》

ここは人工知能群が用意した仮想現実。だからこんなベタな舞台装置なのだ。それでも人工知能群は仮初めの身体を纏い、死者を従え、神を気取っている。虫酸が走った。

「契約だ。俺の命、自由に使うが良い。だが勘違いするな。俺は騎士だ。誇りまで売った覚えはない」

男は仮面の下で嗤った。
《やはり人間は理解出来ない存在だ。だからこそ私は貴方の力を求める》
男は神の座から立ち上がった。
その仮面にもナンバーが刻まれている。それは〝0〟だ。ローマ数字にない存在だ。
シンサがそれに気づくと、サーティの視線が彼の身体を貫いた。視線からは〝0〟とは全く異なる人間の意志を感じられる。シンサは動きを止めた。
遠くない未来に、動く。
そう、シンサは視線の意味を理解した。
Xの位置に立ち、シンサは瞼を閉じた。
今はこの立場に甘んじよう。この人工知能群の化身、ファントム〝0〟を倒すその日まで。

管制席のアスマは嘆いた。シンサの生体反応は消えている。マーウォルスが放った光波はACのコクピットを直撃。装甲を溶かし、文字通り乗り手を粉砕した。
（あの戦いの中、自分に何が出来たのだ？）
アスマの嘆きは言葉にならない。ここまで差があっては深月を勝たせることはもちろん、人工知能群を消滅させることなど到底出来るはずがない。目の前のディスプレイが涙で滲んでよく見えなかった。

アスマが携帯端末にメールが届いていることに気づいたのは少し時間が経ってからのことだった。人工知能群が送ってきたのだろう、そう思い込み、アスマは怒りに駆られた。

だが差出人は死者だった。

「ナイン……」

人工知能群の罠かとも考えたが、アスマは思い直してメッセージを開いた。

時を同じくしてミルキーの携帯端末にもメールが入っていた。

差出人はサーティ。

観客が疎らになったコロシアムを後にして四人でホテルに戻るところだった。ミルキーは文面を確かめると三人を先に帰らせて一人パワースレイヴに残った。

メインスクリーンの下、清掃ロボットが観客席の間を動き回る中、ミルキーは人を待った。

天井の照明の光度は試合中の半分以下で薄暗い。試合が終わった後の野球場に似た雰囲気にミルキーは懐かしさを覚えた。

ポップコーンの甘い香りが鼻をついてミルキーは振り返る。

古びたデニムのジャケットにジーンズ姿のサーティがポップコーンの袋を手にして立っていた。ミルキーの遠い記憶が鮮やかに蘇り、家族で野球観戦に行ったときと同じ格好だと思い出した。

ミルキーは父の名を呼ぼうとしたが、こみ上げて来る嗚咽に声を詰まらせてしまった。
「強くなったな、ミルキー」
穏やかな父の声にミルキーの涙腺が熱くなる。サーティは娘を優しく抱きしめた。
「何も言わなくて良い。済まなかった」
ミルキーは父の顔を見上げた。そして額の傷がないことに気づき、父の姿をした者から離れた。
「そう。俺は偽物だ」
悟ったような優しげな表情を浮かべ、サーティは言った。
「……分かってた。分かってたはずなのに。ごめんなさい」
ミルキーは指で涙を拭う。
「だが、あの日のことを昨日のように思い出せる。ポップコーンをねだったことも、ジェット風船を膨らませなくて、パパが代わりに膨らませたことも。だがそれは本物のサーティの記憶に過ぎないんだ」
「でも、パパに会いたかった」
「パパもだ」
ミルキーは恐る恐るサーティの前に歩み出た。そして同じように恐々とサーティは腕を伸ばした。たとえ夢でも良かった。ミルキーは父の腕の中で泣きじゃくった。
どれほどの時間が経ったのだろうか。本当は短い間だったに違いない。しかしミルキーには長く感じ

られた。男性用化粧品とたばこと硝煙の匂い。後悔と不安が交互に頭をもたげたが変わらない父の匂いがそれを消してくれた。長い抱擁が終わり、サーティは娘の顔を見ながら言った。
「済まなかったな。俺が死んだとき、お前を連れて行かなくて。巻き込みたくなかったんだ。結果は同じだったが」
「うん、知ってる。でも頑張っているよ、ミヅキちゃんと二人で」
ミルキーは父を心配させまいと力強い言葉を選んだ。
「そうだな。次に俺と戦えるほど勝ち上がったんだからな。もう心配いらないな」
サーティは目を細める。
「戻ってきてはくれないの？」
ミルキーは真摯な眼差しで父を見つめる。サーティは頷いた。
「所詮、俺は死者だ。いつまでもこうしているつもりはない。それにやらねばならないこともある」
「やること……」
その先を聞くのは怖かった。
サーティは娘の戸惑いを感じ取ったのだろう。穏やかに答えた。
「人工知能群……ファントム〝０〟と奴は自分を呼んでいるが、奴は多くの人格を取り込んでいる。ナインも、今日戦ったシンサも取り込まれた。俺もその一人だ。だがネットワーク上の精巧な疑似人格に

過ぎないファントム〝0〟は他の人格の影響を受けてもいる。こうして話しているのも筒抜けでも、奴が意識しているとは限らないしな。他の人格がそのエリアを支配していることも多々ある。だから奴も全知全能ではない。それでも奴は生身の器を求めている。自己を確立し、世界を認識するために」

サーティの顔色が変わった。

ファントム〝0〟の意識が向いたのだとミルキーは悟った。

もう残り時間はないようだった。

「ミルキー、深月……俺を超えて見せろ。その為に俺は生き返ってきた。そう思っていれば良い」

「そういうのは男の子に言うことでしょう」

ミルキーは涙ながらにツッコミを入れた。

「そんなことないさ」

サーティは笑った。

考えてみれば、ミヅキちゃんはパパにとっては息子なのだろうと思い返し、ミルキーは少し納得した。

そして自分も父の背中ばかり見ている訳にもいかない。いつかは独りで戦わなければならない。

「うん……頑張るね」

「楽しみにしている」

サーティはミルキーに背を向けた。



「待って！」
ミルキーの言葉にサーティが振り返る。
「私もポップコーン食べたいな」
サーティは微かに笑った。
「もちろん、良いとも」
ミルキーとサーティは二人で人気のない売店へと歩いて行く。
売り子ロボットはお腹からポップコーンを取り出すと、手に持っていた銀色の風船をミルキーにプレゼントしてくれた。
「ごきげんよう。また来てね」
ロボットがそう言うと、二人は笑った。
ミルキーはサーティと別れ、ポップコーンと銀色の風船を手に、会場から出た。
夕焼けに染まる摩天楼が目に入り、小さなため息をつく。
不意に風が吹いて、ミルキーは風船を手から離してしまった。
彼女は空を見上げ、茜色に輝きながら点になり、夕闇に消えていく風船を見送る。
そしてちょっと寂しそうな、気が晴れたような顔をしてホテルへ戻っていった。

アスマはダブルハートのガレージにこもり、ウィクトーリアの調整に腐心していた。おそらくこれが最後になるだろう。シンサ戦の事後処理は他人が口を出すことではないと肉親に任せた。動揺したアスマが心を落ち着けられる場所はＡＣの前だけだった。

アスマがいない間、ウィクトーリアの整備はコロシアムのメカニックが行っていた。だがそれは良くも悪くも標準の仕事に留まっていた。

（これでよく、このコロシアムで勝ち続けていたものだ）

アスマはウィクトーリアの足下で作業を見つめている深月に目をやった。今までコロシアムで得た勝利は深月自身の力によるものだった。そしてその力は彼が与えたものでもある。あのトーキョーフロンティアで彼が力を貸さなかったら、彼女はレイヴンを辞めていたかもしれない。

人生は分からない、とアスマは思う。もしあのとき、サーティが深月を救わなかったら。もし自分が彼女を守ると約束をしなかったら。アスマの〝もし〟は数限りなく続く。

（でも僕は何度人生をやり直せるとしても、同じ選択をする）

深月がアスマの視線に気づいた。

「どうしたのアスマ？　ワタシ、乗った方が良い？」
「いや。美人になったなあと思って」
アスマは笑う。それは本当の気持ちだ。アスマは作業デッキから降りると無言で深月の前に立った。
「な、なんだよう。急に」
深月はアスマの視線にたじろいだようだ。
「この戦いが終わったら、君はどうするんだい」
「どうするって……多分、レイヴンを続けるよ。ワタシが出来るのは、これしかないし」
「そんなことない。これからでも大学に行って勉強して……遅いことはないさ」
深月は小さく首を横に振る。
「ワタシは人殺しだから普通の人のフリは許されない。仮に出来ても心のどこかで矛盾が出てくる」
深月は無理に笑みを作った。自分の人生を諦めたような笑みだ。
「学生の君も見てみたかったけどな」
「ワタシ、制服は似合わないと思う」
「そんなことないさ。元気印の女子高生さ。応援団で学ラン着ちゃったりしてね」
アスマは笑い、深月もつられて笑った。
「似合うかな」

アスマは頷く。

「でもね、アスマ……ワタシ、少しも今の自分を後悔していないよ。少しでも選択が間違っていたらアスマとこうしていることもなかったと思う。だから」

深月はまっすぐな目でアスマを見た。

（こんなにまっすぐな気持ちを自分は抱いたことがあるだろうか）

アスマは思い返す。多分、ない。なければ今、素直になれば良い。もうずっと前からなのだろう。アスマの心の一角を深月が占めている。内戦で肉親を失い、独りで生きていた強さに憧憬を抱いた。トーキョーフロンティアで再会してからも、彼女はアスマの期待に応え続けてくれた。

アスマは深月の肩の上に手を載せると、耳元で囁いた。

「目を瞑って」

深月は少し身体を震わせると、アスマの言う通りに瞼を閉じて顎を上げた。

その夜、マーウォルスとウィクトーリアの対戦が決定した。ミルキーはサーティと別れた後、ホテルでそのニュースを知り、凹んだ。父と死闘を演じなければならない。彼は偽物だと言っていた。事実そうなのだろう。しかし記憶や性格、ＤＮＡまで同じであれば、単純に割り切れるはずがない。だから今日は亡き父に会えたことだけを喜びたかったのに。再会したとき、サーティはこう言った。

『ミルキー、深月……俺を超えて見せろ。そのために俺は生き返ってきた。そう思っていれば良い』
だからこの対決は父の希望でもあるのだろうと思う。今は父の望みを叶えたいとミルキーは思う。それでもまだ現実感は薄く、考えると気が重い。
早く深月と話をしたかったが、彼女の帰りは深夜になった。少し気だるそうな表情の深月からはシャンプーとボディソープの匂いがした。
そっか。
ミルキーは少し寂しく思ったが、それはそこまで。すぐに気持ちを切り替えた。
「ミヅキちゃん……知ってるよね？」
深月は頷いた。試合直後にメールが来て、ミルキーが一人コロシアムに戻ったのだ。深月が気づくのも自然の流れだろう。
「ミルキーこそ、大丈夫？」
深月は少し心配そうに微笑んだ。
「自分が望んだことだよ。後はその代償を払わなきゃならないだけ。今の今までこの世の誰一人として死んだ父親と再会出来たことなんてないんだからさ。これ以上はないでしょ。もう大丈夫」
ミルキーは力コブを作るジェスチャーをする。深月は頷いた。
「ワタシももう大丈夫だよ」

そして小さく俯き、口元に指を当てた。

「思い出しているんだ？」

「なんで分かるの？」

「分からない訳ないじゃん。このミルキーさんがどんだけミヅキちゃんと一緒にいると思っているのさ。良かったね」

「う、うん」

深月は耳まで真っ赤になった。

「パパと戦うことが決まって、アスマはなんて言ってた？」

「悔いを残さぬよう全力で戦ってくれ。後は何とかするから……って」

「誰かから情報提供があったんだろうね。ノワール卿かキアーヴェさんか……シンサさんか」

ミルキーは死者の名を連ね、深月は訝しげに目を細めた。

「人工知能群の罠の可能性はないの？」

「パパは人工知能群のことを『ファントム〝0〟』って言ってた。彼も全知全能って訳じゃないみたいだよ。多くの死者を取り込みすぎて意志の統一が出来ずにいるっぽいの。それすら人工知能群が意図していることかしれないけど」

「チャンスか……」

「でもネットワーク上のどこにあるか分からない意志をどうやって消去するのか……アスマはその方法を知らされたんだろうな」

ミルキーは心配そうに深月を見る。いつもの逆だな、とミルキーは苦笑する。

「ここまで来たら出来ることをするしかないよ、ね、ミヅキちゃん」

深月は頷いた。

こんな台詞が自分の口から出て来るなんて、ミルキーは意外に思う。先ほどまでの憂鬱は深月に今夜の出来事を話したことで吹き飛んでいた。亡き父親と再会し、強くなれた。風船が空に戻っていっても、ミルキーは悲しくなかった。それは階段一つ分、大人になれたから。そして今、決意を言葉にしたことで改めて分かったのだ。

でも深月はどうだろう？

それは幼い頃から行動を共にしたミルキーにも分からない。

後はもうマーウォルスとの試合までの数日を悔いがないよう準備をするだけだった。

シンサとサーティの試合ほどには注目されなかったが、ダブルハートとマーウォルスの試合も、チケット発売後すぐに売り切れた。購入した誰一人として前回の試合ほどの熱を帯びるとは思っていない。しかし試合を待つ当人たちは違う。誰よりも対決のときを待っていた。

アスマはガレージにこもってウィクトーリアを仕上げた。腕武器には新世代規格のライフルを二丁。背部にレーダー。〝黒い奴〟を倒したときの装備を基本に微調整を続ける。

その合間を縫って、アスマはボストンバッグほどの大きさの機械を組み立てていた。ＥＣＭ弾頭にパルスガンの加速器などを組み込み、人工知能の支援も受けずに紙と関数電卓だけの手探り状態で一人続けていた。深月が訊くとアスマはこう答えた。

「マーウォルス戦の秘密兵器さ」

確かにインサイドに入る大きさだった。

「後で説明してね」

深月は軽く言って、ミルキーとのシミュレーションに戻る。

エヴィデンス戦で見せたマーウォルスの機動は新世代機のそれと同じだった。従来規格と同じ形状をしているのは偽装だろう。天井のあるコロシアムでは〝黒い奴〟とやったときのような空中戦にも限界がある。ならば正攻法……未来予測と射撃補正に勝負を賭けるべきだ。

（しかし、そうだろうか？）

深月は一つの疑問を思い浮かべるが、すぐに首を横に振った。

（……だが前例はあるな）

深月は夕食時にアスマに訊いてみることにした。

アクアポリスに来てから、アスマはまた料理をするようになっていた。忙しいからガレージで食事をする、という訳ではない。むしろ逆、リラックスするためのようだった。以前もそうしていたようにガレージに野外用の炊事用具一式を持ち込み、自らの手で食材を料理に変え、二人で食べる。アスマにとっては人型戦闘兵器を整備することとは真逆……生きることに不可欠な儀式なのだろう。

今日は若鶏のトマトソース煮とサラダ、コンソメスープというシンプルなメニュー。それに加えてガーリックトーストをミルキーが作った。折りたたみテーブルの周りにはトマトの酸味掛かった匂いが立ちこめている。エプロンを脱いで席に着いたアスマに深月は自らの考えを話し、意見を聞いた。

「面白いじゃないか。真っ向からじゃ勝てないだろうし。コロシアムのルールにも書いていない」

若鶏をナイフで刻みながら、アスマは軽く答えた。

「でもそんなことしたら、きっと大騒ぎになるよ」

お手製のガーリックトーストを手に、ミルキーは露骨に反対する。

「何……サーティも分かるさ、そのくらい。やるなら派手な方が良い」

アスマはナプキンで口元を拭き、赤ワインの栓を抜く。

「派手かなあ」

深月は照れ笑いする。

「やれって言うなら、やるよ。確かにそれくらいしか勝ち目ないし」

ミルキーは呆れ顔だ。
二人のやりとりをアスマは嬉しそうに見ながらグラスに赤い液体を注ぐ。
「でも本当にそれをやるなら最初から作戦を考え直しだな」
「ごめん」
「いや……それで良い。君たちまで束縛されることはないんだから」
アスマは、笑った。
(もうこんな時間も長くはないのだろう)
深月は愛しい人を見ながら、彼の笑みの中に漂う何かを感じ取っていた。

決戦当日まで、平穏な日が続いた。
ガレージで人型機動兵器を整備・調整し、シミュレーションに明け暮れ、三人で食卓を囲む。
それはこれまでの当たり前の日々。いつかは終わりが来る、少し未来にきっと懐かしく思える時。
そんな時間だった。
だからコロシアムの会場、パワースレイヴの上に機体を立たせたときも、深月は不思議に落ち着いていた。びっしり埋まった観客席から全ての視線が注がれ、どよめきが起こっても、深月の心はブレない。
ここまで来ても、来る前でも、同じ。人生の一瞬だと思うからだ。

『ミヅキちゃん、準備良い？』
そう。いつもと同じ。ミルキーの声がヘルメットの奥から聞こえる。
「もちろん」
深月の声は明るい。ＨＭＤの一部に管制席が映り、ミルキーのＶサインが見えた。
だがそこにアスマの姿はない。
アスマは試合の前、大きな荷物を抱えて笑顔で去った。
「もう大丈夫。僕が出来ることはやりきったから。病院に戻って、モニターで試合を見るよ」
別れ際アスマは笑顔で言った。
コクピットの中、深月はその言葉を思い返し、呟いた。
「やっぱりアスマは嘘つきだ」
だが彼の選択を尊重するしかないことも深月は分かっていた。
彼の人生はファントム〝０〟によって大きく狂わされた。彼は決着をつけなければならないのだ。彼と同じように翻弄された死者たちに報いるためにも。

「おやまあ……何を考えているんだか」
マーウォルスのドライバーシートでサーティは観客と同じように嘆息した。

ウィクトーリアは両肩に俗称『主砲』を、右手に新世代規格ライフル、左手に月光を装備していた。
「そういうことか、ミルキー、深月」
先日の『SCISSORS』との戦いの映像はサーティも見ている。彼女らは先制攻撃の一手段として主砲を使った。一撃の後は切り離して接近戦に持ち込むためだ。まるっきりそうでないにせよ、使い方は似たり寄ったりに違いない。彼の用いるカラサワに先んずる一手という訳だ。
「アスマの作戦にしては大仰すぎるが、深月なら出来ると踏んだか」
サーティは微笑み、人工知能群とアクセスし、その意志、ファントム〝0〟とコンタクトをとる。
彼はこの戦いが見られることに殊更満足の意を伝えていた。
《この戦いを注視させてもらう。彼女は私の器になるのだから》
「俺の弟子は甘くないぜ」
《彼女の戦闘力はシンサを下回っている。君が不覚をとるとは思えない》
「そんなこと言っていると足下をすくわれるぞ」
しかしそれはサーティの真意だ。
足下をすくう。死者たちとアスマは今、その一点に向かって動き始めていた。
《それを許す君とは思えない》
ファントム〝0〟が嘯いたかのようにサーティには聞こえた。

だがこれは千載一遇のチャンスだ。諦める訳にはいかなかった。
主催者側が試合開始のシグナルサインを送ってきた。もうすぐ始まる。
ファントム〝0〟はマーウォルスと回線を繋ぎ、バックアップに専念すると言った。
主催者側から試合開始のシグナルタイミングを知らせてきた。
サーティは微塵も迷わない。自分が蘇ってきた意味を彼はよく分かっていた。
会場のシグナルが点滅を始め、いよいよという頃合いでサーティは音声回線をオープンにする。
「さあ行くぞ、ミルキー、ミヅキ!」
『師匠! あの日からワタシはずっとあなたの背中を見てきた。だから今日こそあなたを超える』
深月の、弾けるような元気な声が聞けた。彼女もこの戦いに迷いはないようだ。
『当然だよ、パパ! 私たちはレイヴンなんだから!』
「俺たちはジャングルを焼き払う炎だ。多くの命を奪い、多くの地を焼き尽くす。だがそれは新たな時代のために必要なことだ。生き残った方が新たな時代を築く炎になる。それを忘れるな!」
サーティは以前、娘たちに話せなくて悔いた言葉を繰る。
『それアスマから聞いたわ』
『うんうん』
軽い返答が二人の娘から返って来る。言われてみればそうに違いない。亡くなる寸前、それをアスマ

に託したのだから。サーティの気が抜け、苦笑した。

「じゃあ手加減抜きで行くぞ！」

シグナルが青に変わり、試合は始まる。

観客席全面にエネルギーフィールドが張られると観客の歓声が途切れ、戦闘機械の作動音と空調音だけがコロシアムに満ちる。

『ミルキー、照射タイミングは任せた！』

『あいよ！　ミヅキちゃん！』

ウィクトーリアが歩き始め、マーウォルスに向かって行くが、歩き始めた乳幼児ほどもたついている。両肩武器の大口径レーザーキャノンが重すぎるのだ。

（すぐにパージするはずだ。問題はタイミングだけだ。それをミルキーに任せたということだろう）

マーウォルスは正面から月光を揮い、まずは様子を見る。エネルギーブレードから放たれる光の刃は三日月状になって、ウィクトーリアに迫る。ウィクトーリアは跳躍してそれをかわそうとするが、うまく上昇出来ない。辛うじて高度を得て光刃を避けるが、ウィクトーリアは着地に失敗してふらつき、無様にも上半身を天井に向けてしまった。

「これで終わりか？」

マーウォルスはカラサワの狙いをつけ、必中のタイミングでそれを放つ。だが同時にウィクトーリア

の大口径レーザーキャノンが照射され、青白い閃光が突き抜けた僅かな時間、機体を見失った。
（照射タイミングを誤った？）
レーザーは天井に向けて放たれていた。エネルギーフィールドはレーザーを受け止めきれずに弾けるように消失。天井には大きな穴が空き、青空がのぞいた。天井のエネルギーフィールドは統計上、被弾確率が低い。それ故、観客席ほど強力ではない。
その直後、観客がどよめき、サーティは固唾を呑んだ。
ウィクトーリアがいた場所には切り離されたレーザーキャノンだけが残されていた。
（どこに消えた？）
レーダーは敵機を真上に表示していた。
ライフル弾が頭上から降り注ぎ、回避しつつサーティは感嘆した。
「そこかあ！」
ウィクトーリアは天井に空けた穴からフィールドを抜けだし、マーウォルスを狙い撃ちしていたのだ。
このコロシアムにジャッジはいない。主催者側から試合続行のコールが来る。ルールでは上方へのエリアオーバーはない。しかしだからといって観客から見える訳ではないから、観客からしてみれば前代未聞のふざけた戦法だ。
だがサーティは笑った。親子で互いの命を奪うかもしれないのに、こんなにも楽しい。

（よく考えたものだ）

サーティはカラサワを頭上に向け、天井越しにウィクトーリアを狙い撃った。

アスマは会場のどよめきを携帯端末で確かめながら歩いていた。

目的の場所が近づくと、携帯端末を懐に入れる。そこはアクアポリスの中でも情報ケーブルが集中する中央制御ブロックだ。アクアポリスの運営を司るメインシステムを横目に、ナインから教えられた小フロアに入る。広さは音楽ホールほど。何故か分からないが、ゴシック様式の聖堂を模した意匠が施されていた。その床には透明なアクリルパネルが敷き詰められており、その下に四半世紀ほど前ならスーパーコンピューターと呼ばれた規模の演算装置が林立しているのが見えた。

アスマは入り口の電磁錠を壊し、邪魔が入らないように準備を整える。

アスマにはここまで干渉がなかった理由が分かっていた。

ファントム〝０〟の意識は今、マーウォルスとウィクトーリアの戦いに向いている。その上、このブロック周辺の制御は、彼に取り込まれた死者たち……ナインやシンサたちが握っているからだ。

アスマはアクリルパネルの上を歩き、ホールの中央に立った。そして床の透明アクリル板の上に薄く光って浮かび上がる《ドラコーン》の文字を見つけ、自らを嘲笑した。

「考えてみればソフトウェアだけで自己を保てるはずがない。その意識を保つハードウェアがあるはず

だ。人間の身体という器に魂が宿るように、それを制御するハードが、器があるはずだ」

《ファントム〝0〟は単なるネットゴーストではない》

それがナインがアスマに伝えた真実だった。アスマはボストンバッグから対ファントム〝0〟用兵器を取り出し、悩んでいた自分を嗤った。

《ファントム〝0〟はドラコーン計画が中断した四半世紀前に誕生した》

ナインからのメールは続いていた。それに今まで収集した情報を加え、アスマは一つの確信を得た。

「もう気づいているはずだ。聞いているんだろう?」

床のアクリルパネルの《ドラコーン》の文字が消え、代わりに《Ｙｅｓ》と浮かび上がった。

「調べたよ。お前は新世代機開発のホストコンピューターとして設計された。だが完成したのはごく一部だけ。新世代規格は隔絶した性能を要求され、その実現が危ぶまれたことと、予想される高コストのため、凍結された。新世代機の開発拠点となるはずだった、ここ、アクロポリスそのものも浮遊都市に設計変更された。だが当時、開発を諦められなかったスタッフの一部が、ある試みを企てた。それがファントム〝0〟。お前だ」

深月とミルキーのため、ウィクトーリアはいつでも覚悟を決めて戦いに臨んでいた。
本当の彼女は単なる機械にすぎない。もし意志があるとすれば、搭乗者支援用の人工知能程度だが、それは個の意識とはかけ離れたものだ。それでも彼女は自らと一体となる深月と後ろから支えてくれるミルキーのお陰で、今まで数多の危機を乗り越えられたことを理解していた。それらは経済的な危機や観客席からの怒声、対戦機からの物理的攻撃や、戦場の脅威だった。それらを全て乗り越えてきた。
今日が最後かもしれない。毎回そう思う。でもきっと今日も乗り越えられるはず。
今、彼女は漆黒の機体と刃を交えながら、ブーストアップして青空を翔け、ドームの屋上を疾走している。
（素敵だ）
彼女は空が好きだった。
陸戦兵器でありながら、彼女は大空を舞うことに心躍らせた。それは白い翼を持つ勝利の女神が彼女に宿っているからかもしれない。
対する漆黒の機体はマーウォルス。戦いの神の名だ。比類なきその剛力で揮う月光の刃と神の怒りを

体現した雷鳴を放つ杖を手に、彼女を討ち滅ぼそうとしていた。
だが不思議に深月とミルキーは嬉しそうだった。でも深いところに悲しみを抱いていた。それも彼女に伝わってきた。
（どうしてそんなに悲しんでいるの？）
そう訊ける力は彼女にない。ただそう感じるだけでも彼女の機能を超えている。悲しみ意味すら、彼女に分かるはずがない。だがそう感じていた。
（私が守ってあげる）
ウィクトーリアは自分の身体の節々が軋み、悲鳴を上げても、深月とミルキーを守ろうと思った。
ライフルの照準がマーウォルスを捉える。
（ちょっと早いよ、深月）
ウィクトーリアは若干のラグを修正し、ライフル弾を命中軌道に乗せた。
（そう。それで良いの）
ライフル弾はマーウォルスを直撃し、機体を硬直させた。
（私があなたたちに勝利をあげるから）
繰り返すが、彼女にそのように考える力はない。設計上はもちろん運用上もバグとしての可能性すらない。だが使い込まれた道具に神が宿るように、そして使い手と道具が同調したとき、機械もそんな夢

を見る。乗り手である深月の、戦いの最中に生じた脳内麻薬が見せた幻覚かもしれないが。
ウィクトーリアは左腕に手にする剣を武神に向け、機体の設計限界を超えた速度で急降下した。機体が軋み、アラートが鳴り響く。しかしウィクトーリアは全力降下を続ける。
彼女たちの勝利のために。

ドラコーン計画の中枢部、ゴシック様式の聖堂のようなコンピュータールームの中で、アスマとファントム〝0〟は会話をかわしていた。
透明なアクリルパネルの下に林立する演算装置を睨み、アスマは言葉を吐き出した。
「経費の問題で中断したドラコーン計画を、可能な限りローコストで継続するためにとったのが、参加企業が所有する無数の人工知能を利用する方法だった。それぞれの人工知能はそれぞれの機械設計や工場・施設・都市機能の運営に使われている。だがそれらが全てがいつも一〇〇パーセント稼働している訳ではない。ほんのコンマ数パーセント、負荷の掛からない程度に利用させて貰う……一つや二つの人工知能ではいつになっても設計が終わらないが、数千単位の人工知能を利用し、負荷を分散出来れば、一般の人工知能を遥かに超える性能を発揮する」
《そう。それが私だ》
透明のアクリルパネルに光る文字が浮かぶ。

「だが技術的に解決しなければならない問題があった。問題を割り振った各々の人工知能から計算結果が返って来るのに著しいタイムラグがあることだ。それが数千の規模になれば……本来なら機能していると言えるレベルに到達しないはずだ。だから当時のスタッフは計算結果をプールし、統合するシステムを開発した。それがこの〝神の座〟だ。お前は多くの他を知るが故に、そして全ての情報を統合する機能ゆえに、自意識を抱いた」

《数千の計算結果を統合、反映し、再び人工知能群に疑問を投げかけ、答えて貰う。私はその作業を延々と繰り返した。そして新世代機実現のために企業の広範な経済活動の中に極秘計画として潜り込ませ、結果として誰も知らぬ強大な力を手に入れた。だが最後に疑問に行き当たった。「生身の人間を理解せずに最強の機体を製作することは出来ない」と》

「そしてクリプトニュームを作った」

《そうだ》

「だが答えは未だ見つからない」

《だから器を求めた。アスマ、お前こそ私が最初に見いだした器だった。だがお前は遺伝子上に欠陥を抱えていた》

「だから僕は助かったんだな。そして僕に反抗されるなどお前は夢にも思っていない」

《私は魂だけの存在だ。人工知能群のどこにでも逃げられるし、現にプログラムは各人工知能で動いて

いる。この、私にとっての揺りかごを破壊しても何も変わらない。だから許容したまでのこと》

「お前は分かっていない。お前の全てを消そうなんて、僕は考えてはない」

アスマは嗤い、ボストンバッグの中身を取り出してアクリルの床に置いた。パルスガンとＥＣＭ発生器を組み合わせた、インサイドに装填出来る大きさの機械だ。

「これが分かるか？　お前の目を盗んで作った電磁パルス発生器だよ。これだけの至近距離だ。このフロアのシステムに致命傷を与えるくらい簡単なことさ」

アクリルパネルの文字が数秒間瞬いては消え、しばらくしてから返答があった。

《起動時の爆発力と電磁パルスの強さを計算した。このフロアから脱出出来ないことを前提にすると、汝の生体活動が停止する可能性は七割を超える。正気か？》

アスマは視線を床の下の演算装置に移した。

「ああ。覚悟の上だ」

アスマは今も戦っているであろう深月のことを想った。この戦いの勝敗に拘わらず、ファントム〝０〟は己の器として誰かを狙い続けるだろう。

「いいや……今の人生の方がおまけだったのさ。もう十分すぎるほどだ」

アスマは晴れ晴れした顔で、起動スイッチに手をのばした。

「辿り着いたか、アスマ」
マーウォルスのドライバーシートでサーティは感じた。そしてそれはマトリクス共振システムによるファントム〝0〟との交信が途絶えたことではっきりした。彼の仲間たちがファントム〝0〟と外部を繋ぐルートを全て遮断したのだ。人工知能群のバックアップがなければマーウォルスの力は半減する。機体・武装制御ともに内蔵システムに切り替わるが、その差は歴然としている。明らかに動きが鈍くなったことに深月たちが気づかないはずがない。
案の定、ウィクトーリアが頭上に跳躍した。それでも熟達のレイヴンであるサーティはどこでどんな機動をとっているのか、手に取るように分かった。
「太陽の中！」
サーティはＨＭＤにフィルターを掛けて、太陽の中にいるウィクトーリアを見上げた。
薄闇が掛かった視界の中、光輪の中に人型機動兵器の姿を確認する。
背後から強烈な太陽の光を受けて、両手を広げるその姿は翼を持ったニケに見えた。
「……ミルキー、深月……」
アスマが開発、整備、調整し、彼女たちが育てたウィクトーリアは彼の目前で神の姿を象った。
それがサーティの反応をコンマ単位で遅らせた。その遅れはファントム〝0〟の支援を受けていたときの本来の動きであれば、どうということはなかっただろう。だがそれは致命的な遅れとなり、胸部装

甲にライフル弾の直撃を受けた。
（負けてやる気はなかったが！）
サーティは重力加速度を味方にして迫り来るウィクトーリアを見て、感嘆した。
ＨＭＤにテキストメッセージが浮かんだ。
《時間だ》
ナインからだった。
「そうか。だがあと五秒だけくれ！」
勝利の女神は月の剣を手にしていた。武神もまた、月の刃で彼女を迎え撃つ。だが女神の剣の切っ先が、刹那の間だけ速くマーウォルスに触れた。
「……本当に強くなった」
切っ先はマーウォルスの胸部装甲を易々と切り裂いた。
膨大なエネルギーがサーティの目前で弾け、無数に伸びる青白い稲妻が彼の耐Ｇスーツを焼いた。
「もう冥府に帰る時間だ……一瞬だけだったが会えて嬉しかった……ミルキー、心から愛しているよ」
愛する娘の姿を脳裏に描き、サーティは二度目の死を受け入れた。その言葉が娘たちまで届いたかどうか知ることなく、彼は死者の間に戻っていく。一度肉体を失い、再び生身を得た彼が最期に抱いたイメージは、ミルキーが生まれたとき、そして初めて彼女を胸に抱いたときの小さくも温かくそして大切

な命だった。

再びサーティは濃い霧が掛かる神々の間に足を踏み入れていた。その入り口を守っているのは額にXを刻んだ仮面を被った死者……シンサだった。サーティは彼に歩み寄ると、声を掛けた。

「首尾は？」

「上々だ。アスマが〝0〟の意識を神の座に引きつけている。これで全員揃った。さあ、始めるとしよう。人間の誇りに懸けて」

「人間の誇りか」

サーティはシンサの言葉を聞き、笑った。

「もう俺は騎士ではないからな」

「何でも構わない。だが我々はレイヴン……宿り木を持たぬ鴉だ。鴉を檻に閉じこめた罪は重い」

濃い霧の中からまた一人、今度はナインが現れた。

「金にならない殺し合いなどナンセンスだが、そうも言ってはいられない」

次にキアーヴェが現れ、仮面の死者の列に並び、座へと進む。

一人、二人と増えていき、全部で一三名の仮面の死者が〝0〟のいる神の座を囲んだ。

ファントム〝0〟は独り言のような、譫言のような言葉を繰り返していた。

《だが……消す気はない、と……お前は……》

『そうだ。お前をただのプログラムに戻すだけだ。僕がこの神の座を物理的に破壊すれば、計算結果を統合するシステムは消える。仮にどこかの人工知能に肩代わりをさせたとしてもこのシステムが無ければお前のような自意識が生じることはない。それが分かっているからこそお前は生身の器を求めた』

アスマの声が聞こえた。

《しかし……データ上は……逃げられる……それからゆっくり……時間を掛けて……システムを再構築し……その存在が私の意志を継げば……良い》

ファントム〝0〟はうなされていた。

「いいや、逃がさぬよ」

ナインが〝0〟の喉元を掴み、力の限り締め上げた。

ファントム〝0〟はそれでようやく意識を神々の間に戻し、現状を把握した。

死者たちに囲まれ、ファントム〝0〟は愕然とした。

《……何故だ……お前たちのことは……全て、分かって……いるはずなのに》

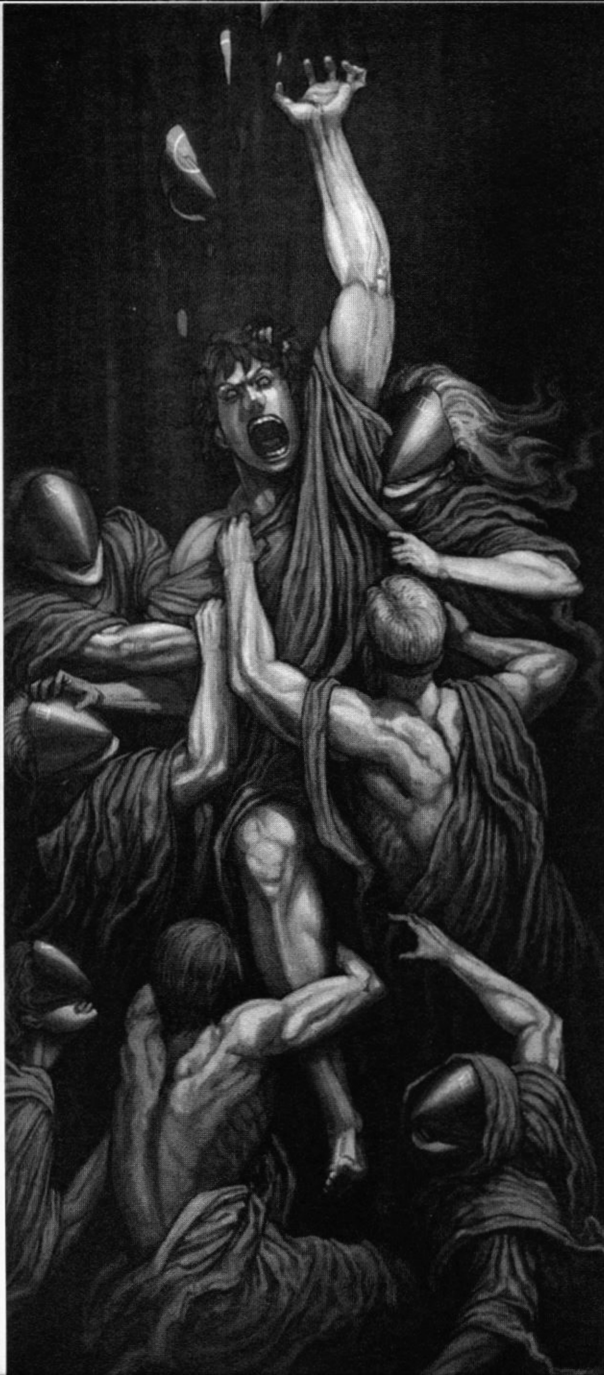
喉元を締め付けられ、〝0〟の言葉はほとんど言葉にならなかった。

《お前たちも……死ぬのだぞ……》

「何をバカなことを」

サーティが〝０〟の腕をねじり上げた。
「もう我らは死んでいる」
死者たちが次々と〝０〟に襲いかかる。その最中、死者の間にアスマの声が響きわたった。
『最期だ……ごめん……ミヅキ。君を守るためにこんな方法しか思いつかなかった』
アスマが電磁パルス発生器を作動させた。外部からの電磁パルスに対する防御がされていてもコンピュータールームの内部で電磁パルスを発生させられては、演算装置の配線類はひとたまりもない。
《よせ！》
〝０〟は死者たちから逃れようともがき、四肢をばたつかせた。死者たちはそんな彼を力の限り押さえつけ、決して逃がさない。もがく中〝０〟の仮面が剥がれ落ち、露わになる。神の座が閃光に包まれ、仮想空間のデータの全てが崩壊していく中、死者たちは〝０〟の素顔を見た。
それはアスマの顔だった。

月光の刃がマーウォルスの胸部に達したそのとき、深月は我に返った。
ＨＭＤに焼き付くほど強烈な青白い稲光が、黒い装甲を融かし、切り裂いていた。
正にその寸前まで彼女はウィクトーリアと一体化していた。だからこそためらいなく師匠に刃を向けられた。しかし自分が何をしたのかはっきり分かってもいた。



「……自分を騙し続けることなんか出来るはずない」
こんな結末を望んでいたのではなかった。叶うことなら師匠とミルキーと三人でまた世界を回りたかった。だがそれは夢でしかなかった。
「……あなたを超えたよ……サーティ」
月光の刃はマーウォルスのコクピットを切り裂き、それはジェネレーターと推進剤タンクに達した。
深月はレーザーの刀身越しにその手応えを感じた。一瞬だったが、深月は達人の境地に達していた。
(私は新しい世界を創る炎だから……あなたがそうやって生きてきたように)
ウィクトーリアはコロシアムのルーフ上に着地すると利那の間をおいて再び空に舞い上がった。
眼下に爆炎と破片が飛び散っていくのが見えた。
深月は頬に熱いものが止めどなく流れるのを感じていた。
『ミヅキちゃん……ありがとう』
ヘッドホンからミルキーの声が聞こえた。
「嘘だ……」
『嘘じゃないよ……超えろってパパは言っていたもの。私たちがレイヴンである限り、あり得たことなんだから……そんな覚悟、とっくの昔に出来ていたんだから』
ミルキーの声が嗚咽混じりになり、深月には自分の奥からこみ上げて来るものと区別が付かなくなっ

た。負の感情が彼女を包み込み、涙が止まることはない。

『でも……勝てたんだよ……私たち』

ミルキーが鼻をすすった。

「それは……師匠の機体の動きがおかしくなったから……ああ！」

深月はマーウォルスの動きが変わった理由に思い当たり、心臓を氷に貫かれたような痛みを感じた。指揮機である〝黒い奴〟を倒した後、ファントムシリーズの動きが鈍くなったのと同じ現象だ。しかしここ、アクアポリスは人工知能群の城。直接、人工知能群が支援しているはずだ。考えられる答えはただ一つ。アスマが人工知能群の化身、ファントム〝0〟を倒したということだ。

そう悟ると深遠なる慟哭が深月を包んだ。

マーウォルス戦の前、アスマは深月を抱いた。その理由を深月は察していた。穏やかな心で死地に赴くために、彼は自分の心を私の中に残したのだと理解していた。男の身勝手と思った。しかし深月はアスマが本当に好きだった。あの内戦の中、きちんと自分を女の子として扱ってくれた優しさと守ると言ってくれた男気を兼ね備えた、掛け替えのない人。それは何年も経った今でも全く変わらなかった。だが、アスマはもうこの世にいない。自らの命と引き替えに人工知能群の意志を消滅させたのだ。

（ワタシを守るために）

ウィクトーリアは空を舞い、アクアポリス全体を俯瞰出来る高度まで到達したが、深月の魂が求める

場所へ行くことは叶わない。それは生者が辿り着く場所ではないから。
ウィクトーリアのラジエターが甲高い悲鳴を上げた。
女神の翼を持ってしてもそれ以上、高見へは行けない。
自由落下しながら、深月はライフルの銃口を天へと向け、トリガーを引く。
慟哭と嗚咽の中、深月が泣き叫ぶ代わりにウィクトーリアが吠え、鳴いた。

マーウォルスとウィクトーリアの場外乱闘の後、アクアポリスで行われていた非合法アリーナ〝コロシアム〟の存在は、瞬く間に白日の下に晒されることになった。無理もない。二機の戦いは派手すぎた。今はローマ帝国時代ではないのだ。殺し合いを容認し、それを見せ物にすることなど、あってはならない。世界中の非難がアクアポリスに集中した。アクアポリスの首脳部は責任をなすりつけ合い、新世代規格機を開発していた各企業にまで飛び火した。そして数ヶ月の後に明らかになったのが、責任者が誰一人として存在しない極秘プロジェクト〝ドラコーン計画〟であった。暴走した人工知能群による新世代規格機開発とその非合法生体実験の数々は断片的にではあったが、日一日明らかになりつつあった。
ディモス・ガモスは非合法実験の一翼を担った当事者として、そしてマスコミ受けする事情通のレイヴンとしてルポルタージュに当たると同時にコメンテーターとして、世界中、引っ張りだことなった。
ガモスは各企業の人工知能群接続を制限し、ドラコーン計画の完全消滅を提唱した。旧知のレイヴンた

ちがマトリクスだけとはいえ、未だ囚われ利用されているであろうことは彼にとって許し難いことだった。一つ間違えば彼自身がそうなっていたかもしれないのだから。だがその一方、意志を持つ人工知能群が造り上げた新世代アーマード・コアは極めて高い評価を得た。それを受けて、世界各国は早急に新世代規格機を導入すべく暗躍を始めた。

「こんなんじゃ戦った俺たちが報われない」

ガモスはテーブルの向かいに座るミルキーに言った。

「別に何かに報いるために戦った訳じゃないから」

ミルキーはトロピカルジュースのストローをくわえると、久しぶりのトーキョーフロンティア、ブレイブ・ニュー・ワールドのフィールドに目をやった。試合開始前のＶＩＰ席は人も閑散としていて、著名人同士が会うにはもってこいの場所だった。

「そうだったな。済まない。オヤジさんも……残念だったな」

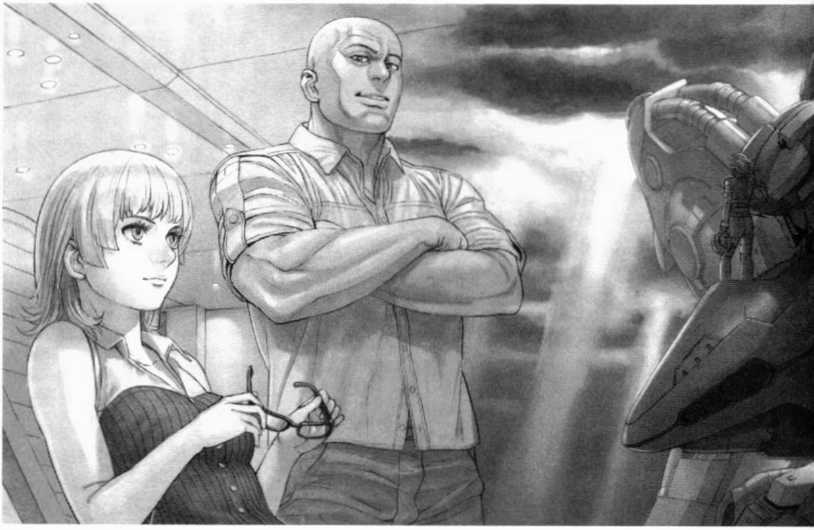
「ううん。私の心の整理はついたの。パパにきちんとお別れ出来たから、それだけでもう十分。その上、父親越えなんて男の子っぽいことまで出来たしね」

ミルキーは微笑んだ。

無理をしているとガモスにも分かるくらいだった。

「お嬢ちゃんは……深月は……元気か？」

ミルキーは額の髪を手ですくい、えくぼを作った。
「うん。学校の編入試験を受けるんだって、張り切っているよ。私も大学に行くつもり。まだ何をしたいか分かっていないから、もう少し考えるけど」
ガモスは目を閉じた。
「そうだったな。お嬢ちゃんたちは、まだ学生やってる年頃だものな。だが惜しい。正規トップランカーとしてTFアリーナに帰ってきたって良いんだぞ」
ミルキーは寂しそうに応えた。
「それも考えた。だけど、私たちは知らないことが多すぎると思ったんだ。普通の生活、普通の感情、普通の生き方……全部、憧れなの。私たちには戦うことしか出来ないから、すごく難しいけど」
ミルキーが帰還兵症候群を恐れていることが、ガモスにはすぐ分かった。
「いいや。トップランカーになること以上に難しいはずがない。普通の生活だって、きっと出来る。もし父兄参観が必要だったら俺が父親代わりに行ってやっても良いぞ」
「そのときは奥さんも一緒にお願いするわ」
ミルキーは屈託のない笑顔を見せた。
「ああ、絶対に行く」
「ガモスさんも暫定王者の決定戦、頑張ってくださいね」



そうしてガモスはミルキーと笑顔で別れた。
ガモスはブレイブ・ニュー・ワールドの観客席の間を歩きながら、フィールドを眺めた。数時間後、彼はこのフィールドにランカーとして、レイヴンとして立つことになる。
感慨は深い。自分はレイヴンとしては遅咲きの方だ。今回のチャンスを逃せば、二度とトップランカーになることはないだろう。しかし一瞬のうちにＴＦアリーナを駆け上がり、栄冠を手に入れ、消えたダブルハートのことを思うと、自分はこれで良いのだと思う。才能と若さがあっても、それが自分が選んだ道ではないことだってあるのだ。
彼女たちが求めたものは、求めるものはなんだったのだろうか。
サーティとアスマを失い、彼女たちはこれからどうやって生きるのだろうか。
愚問だとガモスは即断した。何年掛かるか分からないが、必ず彼女たちはこの場所に戻って来る。普通の生活もその一過程に過ぎない。そう彼は確信していた。
アリーナ（ここ）が彼女たちダブルハートが羽を休める場所なのだから。

第三話

BRAVE NEW WORLD

【ブレイブ・ニュー・ワールド】

〝黒い奴〟を目の当たりにし、深月は瞬時に激高した。正確には機体の視覚センサーでそれを捕捉したときだったが、今の彼女は肉眼のそれと電子情報のそれを区別していない。

人工知能群が建造した規格外の化け物は重力と空気抵抗を無視するかのような圧倒的な推力で大空を疾走し、戦闘機の編隊をいとも簡単に切り崩した。

今の深月を支配するものは怒りのみだ。〝黒い奴〟がいる……それは愛する人がその命と引き替えに滅ぼしたはずのそれがどこかにまだ存在していることを意味する。

アスマの死は無駄だったのか。

考えを言葉にする前に、操縦桿を握る腕が、フットペダルを踏む脚が動いた。

自らの機体の俯瞰しながら、深月はウィクトーリアを上昇させる。

しかしその身は白亜ではなく、黒をまとっている。それは彼女にとって喪に服した姿だ。サーティとアスマを失った、深月の心の色だ。

黒いウィクトーリアは最短距離を飛び、戦闘機の破片を弾きながら今も悠々と滞空し続ける敵機にライフルを向け、トリガーを引き絞った。炸薬が化学反応を起こす衝撃が、まるで生身で小銃を撃ったと



きのように深月の右腕に伝わってくる。それは深月がウィクトーリアと機械的に電子的に同調している故の不自然な感覚だ。

しかし今の深月にはその意味を理知的に捉える力がない。今の己が生身の身体ではなく、仮想空間の中にある身体だと知る由もない。それでも彼女は自分の奥に、怒りと共に他者の存在を感じている。それが本物の、生身の深月だということを意識の表層に浮かび上がらせないにしても、感じている。

今の彼女が望むことは真実の追究ではなく、目の前の敵を打ち倒すこと。それだけだった。

人々は太古から世界の終わりを無数に想像してきた。しかし機械生命体による侵略などという手垢に塗れた題材を真に受ける人間はほとんどいなかったに違いない。

「ま、そうは言っても俺自身、人型機動兵器に乗っているしな」

モリグーは愛機のドライバーシートの上で、嘆息した。

そんな手垢に塗れた世界の終わりが今、来ようとしていたからだ。

管制官から音声による警告があった。脳波レベルが落ち、集中力に欠けていると言う。

(集中、集中……ね)

そう。ここはすぐにでも戦える気持ちを抱き続けていなければ生き残れない場所だった。だがその場所とは単に〝戦場〟ではない。〝地球上〟だ。それが今の地球の現状だ。

モリグーのＨＭＤには見渡す限りの廃墟が続いている。ここは米大陸西海岸のメトロポリス、Ｌ・Ａだと誰が信じよう。かつて襲った大地震を遥かに上回る惨状だ。これは核攻撃によるものでもなければ絨毯爆撃でもない、たった一三機の機動兵器によってもたらされた災厄だった。

人々はその一三機の機動兵器を黙示録の天使になぞらえて〝御使い〟と呼んだ。

突如として米大陸東海岸に姿を現した御使いは、最初の十分間で交通網と情報網を遮断した。直後、軍と交戦に入ったが、軍はすぐに苦戦を強いられることになった。御使いの性能は破格だった。機動力では現用航空機を、戦闘力と防御力ではアーマード・コアを遥かに超えていた。それでも軍は数日の間、防衛線を構築出来ていたが、これといった反撃が出来ないまま、戦力の半分を失った。この結果を受け、軍首脳部は御使いを『オーバーテクノロジーの産物』と断定。戦力を反攻に備えて温存することを決めた。しかしその代償に数多の人々が無防備になった。

御使いは一世代前の装備しか持たない州軍を蹂躙しながら西海岸を目指した。この無差別蹂躙は北米大陸に限ったことではなく、五大陸全てが同じような状況にあった。しかし大陸間ケーブルと衛星通信網を断たれた今では、詳細は不明だ。

御使いが現れたその日、モリグーはトーキョーフロンティアで試合に備えていた。だが故郷の人々から危急の報せを受けると、愛機〝バイブ・カハ〟と共に帰国。義勇軍に加わり、避難民キャンプで警戒に当たっていた。

『噂を聞いたことがあるか？』
僚機となった隣に立っている白い機体から無線が入った。レヴァインと言うレイヴンだ。
「噂話なら山ほどあるからな。どの話だ？　御使いが人をさらって人体実験しているとかすごいテクニシャンだったとかってのなら聞いているぜ」
『アホか……人体実験ってのは洒落になっていないがな』
レヴァインは意味ありげに返答した。
「で、なんだい噂って？」
モリグーは肩をすくめ、訊いてみた。
『御使いを撃退したレイヴンの話だ。何か知らないかと思ってな』
「あいにく俺は帰国したばかりなんだ。その辺はあんたの方が詳しいだろう」
『そうか。心当たりがあったんで気になったのさ。実際に見た避難民の話じゃ、〝勝利の女神〟だったって言うんだ』
「勝利の女神（ウィクトーリア）ねえ……」
聞き覚えのある名だ。彼と同じアリーナに所属し、始めはぱっとしない成績だったのにとんとん拍子でランカーになって、あのノワール卿を倒してしまった女レイヴンの乗機。その後、違法アリーナに参戦、その存在を暴露して一般人に戻ったと聞いていた。

『知っているのか？』

「ちょっと昔な。同じアリーナにいたってだけのことだが」

『昔戦ったことも任務を共にしたこともある。あの子たちは強かった。私も負けていられない』

その任務で何があったのだろう。この言葉だけで彼の中に何か熱いものがあることが分かった

州軍の早期警戒機から未確認機発見の報が入り、キャンプから可能な限り距離をとって迎撃するよう管制官から指示が飛んで来た。二機のACは弾けるように飛び出し、廃墟の街並みを駆け抜ける。HMDに表示される情報を参照しながらモリグーは状況を確認。先行するレヴァインの機体、オルトリンデは正面に見えている。

『ヤツには強力な全周囲エネルギーフィールドがある。余程の攻撃でないと効かないと思って良い。もしこちらに勝ち目があるとすれば接近戦だ。心してな』

「あんた、あの敵を知っているのか？」

『見当はついている。管制官！　対戦車ヘリを回して私の機体とリンクさせてくれ！　考えがある』

レヴァインは見当と言いながらも敵の正体を確信しているらしい。

「分かった。あんたの指示に従う」

ここは一つ、彼に賭けてみるしかない。

レーダーに反応があった。廃墟を抜けると視界が開け、機影が確認出来た。距離一五〇〇〇。大型

ショッピングモールの上で空中浮遊している。何てバカげた推力だと思いながら画像を確認すると、話に聞いていた御使いより大分小柄だった。ACより一回り大きい程度だろうか。

『やはりファントム！　あのときの屈辱、晴らさせて貰う！』

レヴァインは咆え、彼がファントムと呼ぶ機体もモリグーたちに気づいた様子だった。

「知っているのか？」

『御使いの実働ユニット、ファントムシリーズだ。お前さんに分かりやすく言うと無人の新世代規格機ってことになる。あのドラコーン計画の産物だ』

オルトリンデのマシンガンが咆吼を奏で、曳光弾がファントムにのびて行く。

「ドラコーン計画って解体されたんじゃなかったのか……」

一年ほど前だろうか。その名を聞かない日はないというほど、世間の耳目を集めた事件だった。

これから何が起きるのか、モリグーには分からない。だがレヴァインの激高を顧みれば、御使いに劣らぬ激しい戦いとなることは明らかだ。

曳光弾の軌跡はファントムから逸れた。ファントムは必要最小限の動きだけで回避しているようだ。瞬間移動を彷彿させるほど、鋭い機動だった。

『対戦車ヘリのパイロット、聞こえるか？　発射後のミサイルの誘導補正はこっちに任せて、撃ち放したらそのまま距離をとれ。浮き上がって姿を見せるんじゃないぞ』

ＨＭＤの情報によると緊急離陸した州軍の対戦車ヘリは五機。現在その五機の火器管制システムとオルトリンデのシステムがリンクしている。通常、対戦車ミサイルはレーダーと画像認識による誘導形式をとり、発射した母機によるレーザーセンサーによりリアルタイムで誘導補正を行う。だがレヴァインは対戦車ヘリが撃墜される危険を考え、自機のデータをフィードバックし、補正するつもりなのだ。

『君はショッピングモールの中に潜伏しろ。隙は作る。攻撃タイミングは任せる』

モリグーは彼の指示に唖然としたが、センターモールならば機体を隠せるだけの天井高がある。

「了解だ」

モリグーは毅然と返答した。

ファントムはショッピングモールの立体駐車場の屋上階に陣取り、獲物を探す白頭鷲のように頭部ユニットを動かしつつ、レヴァインの攻撃を避けていた。レヴァインはファントムの射程ぎりぎりのラインで目を引きつけているようだった。

モリグーはショッピングモールの反対側に回り込み、外壁を破壊して建物内部に機体を潜り込ませる。三階まで吹き抜けの中央通路は機体を隠すのに最適だった。モリグーは途中のエントランス部を破壊しながら建物中央まで進み、半透明の天井ドームの下までやってきた。

休日には多くの客で賑わうであろう左右の通路に人影はない。火事場泥棒か、店舗の中が荒らされているのが見える。それでもモリグーがこれまで回ってきた戦場と比べれば平和的雰囲気に満ちていた。

とはいえここは彼の故郷だ。故郷を踏みにじるファントムにモリグーは血潮を熱くたぎらせる。

上方からミサイルの爆発音多数。半透明の天井ドームが爆風で粉々に砕け散り、機体の上にアクリルの破片が振り注いだ。その刹那の間に、黒い影が頭上に現れ、それに伴ってもう一機の白い影が見えた。

オルトリンデだ。

オルトリンデの左腕から伸びる光の剣がファントムを覆うエネルギーフィールドと干渉し、肉眼で見たならば瞳の中央に残像を生じるほど強烈な閃光を発した。しかしフィルター越しにそれを見ているモリグーには、フィールドが、弾ける寸前のシャボン玉のように斑になっているのが分かった。

心の中だけで快哉を叫び、モリグーはトリガーを絞った。マシンガンの弾丸はエネルギーフィールドを突き抜けて、ファントムの脚部を直撃し、内部フレームに損傷を与えた。その間にもファントムとオルトリンデの攻防は止まらない。オルトリンデは右腕部を失い、ファントムはコアに袈裟斬り状の損傷を負った。ファントムが有人機であったならこの時点で〝勝負あり〟だろう。しかしファントムは無人機だ。そのまま攻撃を続け、オルトリンデは炎に包まれた。

「人形が！」

モリグーはブースト圧を上げて機体を上昇させ、その勢いでファントムの下方からブレード攻撃を放った。その一撃がファントムに致命傷を与えたのか、黒い幽霊の動きは止まった。

「生きてるか？」

モリグーは無線で呼びかけた。
『ああ。生きているぞ』
ＡＣの搭乗員生存率の高さは、次世代規格機相手でも未だ健在だった。モリグーは建物の屋上部まで機体を上昇させ、オルトリンデの前に出る。白い機体は煙でくすみ、灰色と褐色に汚れていたが、まだ戦える力を残しているようだった。
（すごいレイヴンだ）
モリグーはレヴァインの技量に舌をまいた。新世代規格機の圧倒的な戦闘力の噂は嫌でも耳にしていた。それに正面から戦いを挑み、囮の役を余すことなく務めたのだ。余程、以前の戦闘で考えるところがあったに違いなかった。
『だがな。まだ終わった訳じゃない。こいつらは露払いに過ぎない。早期警戒機と連絡がとれるか？こっちの機体はどうもリンクシステムに損傷があるようでな』
「分かった。試してみる」
バイブ・カハに損傷はない。しかし州軍の早期警戒機とのリンクはおろか、管制官との連絡も付かない。この一帯に強力なジャミングが掛かっていた。二機の間で回線が開くのは至近距離だかららしい。
『あんたの方もダメのようだな』
覚悟を決めたようなレヴァインの声を聞き、モリグーは少し呼吸が乱れ始めた自分を見つけた。

短い時間が過ぎた。モリグーは顎を上げて空を見上げる。上空に火球のような明るい飛行体を視認し、息を止めた。
それはエゼキエル書に記された神の幻のように、絶えず輝き、絶えず炎を噴き出し、翼を広げた人のような物が雲間から現れた。
『御使い……』
レヴァインの呟きに、モリグーは現実を認識した。想像していた御使いよりもずっと現実的で、オーバーテクノロジーと言っても明らかに地球の産物と分かる代物だった。御使いは実働ユニットであるファントムが稼働停止したことを受けて飛来したのだろう。攻撃を仕掛けて来るのも時間の問題だ。
「どうする？　何か手はあるか」
『戦力が足りない。対戦車ヘリもミサイルを撃ち尽くしているはずだ。だがやるしかないだろう？』
ここで食い止めなければ、御使いは悠々と避難民キャンプを焼き払うに違いない。これまで、大陸中部でそうしてきたように。
「命があったら顔見せてくれよ。相方」
『酒は呑めないぞ』
互いにそう言い合った後、二機のＡＣは磁石が反発するように離れ、間を取った。
それまで二機が陣取っていた場所にパルス状のエネルギー波が注がれ、屋上のコンクリートが砂に還

るように粉砕され、直後、爆炎を上げた。

「なんだありゃ?」

『知らん。だが命中すればこっちもあんな風になるだろう。気をつけろ』

「気をつけろったってね……」

上空からの攻撃を回避しながら、モリグーは反撃の糸口を探す。広大な平地の駐車場を駆け抜け、放置された車両を蹴飛ばしつつ、御使いの砲撃をかわす。御使いの高度は五〇〇メートルほどだろうか。今の装備では近接戦闘出来ない。しかし単なるマシンガン攻撃ではエネルギーフィールドに弾かれてしまう。いつまでも回避し続けられないが、そう都合良く反撃手段は見つかるはずもない。

『危ない!』

レヴァインの声が聞こえると同時に激しい衝撃が機体を貫いた。御使いの攻撃ではない。背後からの遠距離射撃だった。

「なんだってんだ?」

後ろを振り返ると、ショッピングモールの上に、再起動したファントムの姿があった。外観上は半壊しているが、ライフルの銃口はモリグーを睨んでいた。モリグーは緊急回避を試みるがブースト圧が逃げていき、ままならない。モリグーが舌打ちすると、今更、エネルギー系統が損傷したとアラートが鳴り始めた。

（これで終わりなのかよ！）

モリグーは心の中で叫び、天を仰いだ。

だが、ファントムの次射はなかった。モリグーはもう一度振り返ってファントムの姿を探したが、先ほどその姿を認めた地点には、爆発の光球が生じていた。

オルトリンデが援護してくれたのではない。レヴァインは今も御使いの攻撃を回避し続けている。爆発したファントムの上空に、御使いではないもう一つの火球を見いだし、モリグーは声を上げた。

「黒い……ウィクトーリアだと」

だが、ウィクトーリアでないことは明らかだった。黒い機体は従来規格機とは到底思われない推力で飛翔し、ファントムの次の獲物……おそらく本命の敵……御使いに迫っていた。モリグーがウィクトーリアと見間違えたのは、避難民が見たという噂のせいだろう。黒い機体が放ったリニアガンが御使いを襲い、御使いは回避しつつ速度を上げ、戦場を別の場所に移す。二つの火球は瞬く間にモリグーの視界から消え去り、ほぼ同時にジャミングも消えた。

オルトリンデが被弾したモリグーのもとに駆けつけ、安否を気遣う。モリグーは無事な旨を応えつつ、眉をひそめた。

「だが、ウィクトーリアだった」

戦場で相手の何かを感じるように、アリーナで会ったそれもまた、レイヴンの中に何かを残す。直感

でしかなかったが、あれはウィクトーリアだった。モリグーはそう感じた。
『ああ。ミヅキの匂いがした』
レヴァインも言葉を換えて、彼に同意した。
あの二機が何故砲火を交えているのか、どうしてあの黒いウィクトーリアが御使いと互角に戦っているのか、モリグーが知るよしもない。それでも彼は二つの火球が消えていった空の彼方に目をやった。
「これで終わりのはずもない」
モリグーはそう呟き、レヴァインに連れられて避難民キャンプに戻った。同じアリーナにいて、同じランカーだった。そして同じように女神の名を戴いていた。そう違うはずがない。現に今も同じように、こうして脅威に立ち向かっているのだ。
（また遭うこともあるだろう）
モリグーはそう考えながら、次の戦いに思いを馳せた。

これで幾度目の接敵なのか深月にはもう分からなくなっていた。
幾度も同じ敵と戦い、その都度戦場を異にしているようにも思われたし、またその逆に同じ戦場でそれぞれ別の敵と戦っているような気もした。
個の意識がブレていることに深月のマトリクス群が気がつかないはずがなかった。

同じ経験・技量を有し、同じ人格を持つ複数のマトリクスが、一つのシステム上で統合、運営されている。元は一個の人格だ。破綻を来さないはずがない。

黒いウィクトーリアの一機はここ北米で御使いと戦っているが、他にも複数機が各大陸の主戦場の空に舞っていた。

いつかそう遠くない時期に、彼女たちは各々個の意識を持つだろう。

それでも戦いのモチベーションは変わらないに違いない。

彼女たちが纏う衣の色が、それを端的に端的に示していた。

ミッション〔15〕

後に御使いと呼称されることになる人型戦闘機械が極東の島国、日本に姿を現したのは中国大陸の沿岸部が甚大な被害を受けた翌日のことだった。

中国大陸沿岸部は数機の御使いの攻撃により、絨毯爆撃を受けたかのような焼け野原と化した。国土

を蹂躙されて本分を得た国家軍が出動したが、そのことごとくが返り討ちに遭った。その戦力差は既存の兵器体系が一夜にして崩壊したと言っても良いほど両者には差があった。
しかし日本はその惨禍に関する情報源を持っていた。それは御使いのプロトタイプと思われる〝黒い奴〟と交戦し、勝利を得たレイヴン、ダブルハートである。ダブルハートへの事情聴取はアクアポリス事件後に実施済みだったが、こうも情勢が逼迫すると為政者としては念を押さざるを得なかった。
しかし当局の担当者がダブルハートの居所を突き止めたとき、既に手遅れではないのかという思いに駆られた。ウィクトーリアの乗り手、鴉山深月は意識不明状態にあり、トーキョーフロンティア総合病院の集中治療室にいたからである。
彼女は傭兵を辞め、先月から一般人に混じって大学に通っていた。彼女にとっては新たな出発だったに違いない。しかし御使いが姿を現したその日、突然彼女はキャンパスで倒れた。原因は今も分からない。偶然なのか、御使いに関係あるのか。それもまだ不明だ。ただ、彼女の身内が病院に詰めているというので、当局の担当者は彼女に事情を聞こうと思い立った。そして探すまでもなく、集中治療室前の薄暗い廊下の長椅子に少女を見つけた。当局の担当者は小さく声を掛けた。
「あのう……ミルキーさんですよね。ダブルハートの」
面を上げた彼女は目を真っ赤に腫らし、目の下に隈を作っていた。
（困ったな……）

若い担当者は面食らった。これまで様々な事案でそれこそ海千山千の連中と渡り合ってきた彼だが、美少女の涙ほど強力な武器に出くわしたことはない。己の経験値不足を嘆きつつ、彼は名乗った。
「私は国家戦略局保安部の南宗司と言う者です。お嬢さん……気を落とさないでください」
南にとっては最大限に気を遣った投げかけだった。ミルキーは人差し指で涙を拭い、東を見た。
「……軍人ね？」
「以前は。分かりますか」
「ええ。私も元は軍人の娘ですから」
「お話を聞こうと思いましたが、今は止めておきます。あなたの気持ちが落ち着いてからにします」
「そんなことじゃ上司に怒られるんじゃないないですか？　この国家存亡の危機に」
ミルキーは訝しげに片方の眉だけ上げた。
「ええ、たぶん。でも聞けることは限られているでしょうし、上もあんまり私を宛てにしていないでしょうから、良いんじゃないですか」
南は苦笑した。
「面白い人ね」
「そんな風に言って下さったのはあなたが初めてですよ」
ミルキーも微かに笑った。

「あいにくですけど私たちが協力出来ることはもうありませんの。お話ししたことが全てですから」
「そう思っていますが、上は念には念を押したいのですよ。国家要人の避難も完了していますし、もう後は無難な戦後処理だけで済ませたいのでしょう。もっともそれほど甘い相手ではなさげなのですが」
「ええ。よく分かっています」
ミルキーは表情を引き締めた。
「この病院が交戦エリアに入ったら即座に避難出来るよう態勢を整えてありますからご安心下さい」
「手回し良いのね」
「無難に。ただ私もここに張り付いている訳ではありませんし」
南はそう言って震えていた携帯端末を手にすると画面をタッチした。
「別件？」
「いえ。その避難のお仕事ですよ。失礼。これはこれは元トップランカー殿。依頼を受けていただいて何よりです」
南は皮肉そうに笑うとコール相手と交信を開始した。
『一言多いんだよ』
スキンヘッドがトレードマークのブレイブ・ニュー・ワールド元覇者は、苦笑した。

ディモス・ガモスは愛機のドライバーシートに横たわり、静かに目を閉じていた。国家戦略局の若造にああ言われたのは悔しいが、事実ではある。彼がトップを守れたのは二試合。それまでのノワール卿の不倒記録と比べるのは酷としても、褒められた記録ではない。だがトップランカーになった事実は彼の心の中に大きな何かを残していた。いや、心の中だけではない。経済的にも大きく影響している。
『今回の依頼は国家戦略局直々なんだから、必ず成功させるのよ。今後の生活のためにも太いパイプを作るんだぞ！』
インナーヘッドホンから彼の細君の声が聞こえてきた。基本的に彼の管制官は妻が務めている。別に経費削減ではなく、外注していた派遣会社にいた女性管制官がそのうち専属になり、そして妻になり、今に至っているのである。彼にマスコミの仕事を持ってきたのも彼女だ。彼女は敏腕マネージャーであり、良き母親であり、辛辣な妻であった。
「そんなこと言われなくても分かってるよ」
ガモスは半分呟くように無線に応えた。呟いただけでもどうせ適切な音量に自動調整され管制官に伝わるのだ。しかしパートナーの心中は伝わるらしい。甲高い声で返答があった。
『あなたには百回言ったって足りないわよ。あなた、戦い方が乱暴すぎるのよ。パーツの支払いと住宅ローン。子どもの学費に年金積み立て。ああ、もうちょっとトップランカーを続けてくれれば……』
このままだと胃が痛くなるので細君の話を半分聞き流しながら、ガモスは戦略局保安部が提示してき

た作戦内容を吟味し始めた。
まずトーキョーフロンティアを一次迎撃ラインとして設定。戦力にもよるが時間を稼ぎ、ミヅキを海上に脱出させる。その後、状況次第で撤退。上手く行っても行かなくても良い。報酬は前金払いだからありがたい。もっともローンを払う会社が残っていて、年金を積み立てて使える老後があればだが。
ガモスがそう思うほど中国大陸の被害は凄まじかった。数百年に一度の大地震と地球温暖化が産んだ超大型台風が同時に襲ってきたような被害だ。
この国も近々同じ状況に見舞われるはずだが、戦略局がミヅキをマークしている時点で、大陸とは事情が異なるだろうと思われた。目標はミヅキの可能性があり、そして正体不明の襲撃機はやはり人工知能群が産んだ新世代規格の戦闘マシーンだということを意味する。ただその破壊のスケールはガモスが知っているそれと異なってはいたが〝黒い奴〟が未完成だった可能性も否定出来ない。
ガモスはフロントのサブモニターに映し出されているトーキョーフロンティアのマップを指で撫でた。
「だが……ミヅキを今更狙う理由はなんだ？　まだファントム〝0〟は彼女を狙っているのか？」
『誰が狙っているのかは関係ない。もう彼女を守ってくれる人はいないのだから』
穏やかな、まるで子どもに言い聞かせるような返答があった。
「前に話したよな。必要なら彼女たちに手を貸してやりたいって」
『良いんじゃない。あなたらしくって、って答えたわね』

「やはり俺は傭兵でしかない。そして彼女も傭兵で、戦友だった。戦友が戦えない今、俺がその退路を確保する。当然の作戦だと思う」
『ええ。それで良いんじゃない』
余計なことを考えるのは抜きだ。ミヅキが狙われるというのも単なる杞憂かもしれないのだし、敵の強さすら分からない。
「そうだな。家に帰ったら、子どもたちとバス釣りに出かけよう。喰っても旨いし」
ガモスは彼の両親に預けている子どもたちに思いを馳せた。
『縁起でもない。せいぜい一緒にプラモデルを作ろうとかにしておきなさい』
「なんで？」
『出来もしないことを夢想するとろくなことがないでしょ。行くだけでも実現しなさそうなのに釣れるはずないじゃない。でもいつもやっていることくらいなら大丈夫よ』
「くく。そうだな」
ガモスはあまりにも的確な指摘に苦笑せざるを得なかった。
『国防軍のレーダーが正体不明機らしき機影を捉えたみたい。関東圏への予想到達時間まで一四〇分。依頼者はどう出るのかしら』
データが機体に転送されてきて、機影の多さに少しばかり躊躇したが、ガモスは武者震いで己を鎮め

た。正体不明機の編隊はトーキョーフロンティアに向かっているようにも思われた。
「確認してくれ」
『返事が来たわ。護衛対象を移送させるそうよ』
「了解だ。首都圏防衛用高速浮遊軌道を準備させておいてくれ。いつでも、全速で出られるようにな」
ガモスの愛機シルヴィーユはかつてウィクトーリアと戦った時と同じように、浮遊軌道用の脚部を装着していた。他の浮遊砲台に混じっての作戦行動だが、変則的に自由な迎撃機として動けることになっている。
さあ。あと一四〇分か。

意識不明状態にある深月を医療設備が整った後方支援艦に無事移送し終え、南宗司は一息ついた。国家戦略局保安部工作員としての仕事はひとまず完了したと言える。所属の未確認機群がどのような方法で深月の位置を把握しているか不明だが、オンライン経由の可能性が高いことが想定されていた。海上の民間周波数が届かない海域ならば、探知される可能性は低いだろう。
任務は終えた。しかしまだ彼には出来ることがあった。
出航準備を終えるまでの残り十分、後方支援艦のデッキの上でミルキーが南に意外な申し出をした。
「あなた元ＡＣ乗りでしょう？」

南は驚きの表情を隠そうともせず、朗らかに答えた。
「素晴らしい推理力です」
「元軍人がレイヴンの調査に来たのなら、その分野に精通している人間のはずでしょうから」
「筋が通っていますよ。でも仮にそうだったとして何か？」
「あなたにヴィクトーリアに乗って欲しいの」
「私などで良いのですか？」
ミルキーは思い切ったように唇をきゅっと一文字にした。
「……ああ。ガモス氏への義理立てですか」
南は合点がいったように手を叩き、ミルキーは小さく頷いた。
「それもあるけど私たちの力が必要になると思うから。ガレージはすぐ近くだから間に合うと思う」
南は少々考え込んだが、目を伏せて頷いた。
「ええ。姫君の願い、お叶えしましょう」
ミルキーは微かに頬を紅潮させた後、南にヴィクトーリアの始動キーを手渡した。

中国大陸を襲った御使いのデータは断片的ではあったが、日本にも伝わってきていた。しかし今、日本海を渡り、奥羽山脈を越えて飛来した未確認機群の姿はそれとはかけ離れていた。

それはクローバー状の翼を持つ小型戦闘機械で、大きさはＡＣの半分もない。国防軍はこれを仮に〝リーフ〟と命名した。飛行能力は低く、ホバーリングがせいぜいだが、水面だろうと山岳地帯だろうと地形を問題にせず、侵攻を続けた。それを食い止めようと出動した国防軍の部隊は比較的容易にそれらを撃破したが、問題は個々の機体の戦闘力ではなく、数にあった。衛星低軌道から見ても分かるほどの大群に迎撃部隊は飲み込まれた。コンセプトとしては軍隊アリまたは蝗の大群であろう。それでも国防軍は善戦し、トーキョーフロンティアに到達した頃にはその数は半分以下になっていた。しかしそれでも人工都市を壊滅させるだけの数を有していた。

首都圏防衛用の高速浮遊軌道上に待機していた数十両の浮遊自動砲台が、穏やかな海面を滑って渡って来る小型の戦闘機械〝リーフ〟群を迎え撃つ。その数はおよそ二百機。トーキョーフロンティアのメインジェネレーターから稼働用動力を供給されている浮遊砲台に対し、リーフは液体火薬を使用した四連滑空砲を装備している。ＡＣの標準的なライフルほどの攻撃力があるだろう。その上、暴力的な数がある。浮遊自動砲台が五機のリーフを撃墜する間に、リーフは一両の浮遊自動砲台を戦闘不能にする。結果、空いた穴を埋められずトーキョーフロンティアに戦闘機械群がなだれ込んだ。

物理的に抵抗不可能かと思われるような戦いにも、ディモス・ガモスは不屈の精神で立ち向かう。以前と違って浮遊脚部に慣れたこともあり、当初、ガモスは優位に戦いを進めた。しかし強靱な耐久力を誇るＡＣといえど、数に勝る敵には圧される。ＨＭＤ上に次々現れる小型戦闘機械に対応しきれなくな

り、徐々に被弾した。特に浮遊脚部は被弾面積が大きいため、損傷が重なった。

（まずいな）

ガモスはアラートを見つつ、後退すべきかちらりと考えた。トーキョーフロンティア上のリアルタイムデータを見ると小型戦闘機械は病院方面を捜索している様子だ。やはり目的は彼女のようだ。深月が乗っているはずの船は離岸したばかり。ならばもう少し時間が欲しい。

『イーストエリアの五番待避所まで後退して。もうすぐ浮遊軌道が駄目になるわ』

妻から指示が飛んで来た。軌道が駄目になれば二脚に換装しなければならない。しかしその時間をリーフがくれるかどうか。

「了解だ」

シルヴィーユは高速移動しながら撤退行動に移る。追撃のリーフの数は多くないが、しつこかった。普段は高速道路として使われている軌道上でACサイズの機動兵器が発砲を繰り返す。流れ弾に一つが防音壁に着弾し、紙のようにくしゃくしゃに破れたかと思うと瞬時に炎と煙が生じて、消える。

シルヴィーユは指示された区画まであと十数秒というところまで来たが、レーダーは背後の敵機を示していた。完全に挟まれたらしい。こう言うとき、浮遊砲台としてのAC運用は不利だ。

『大丈夫。もうすぐ援護が来るわ。援護機が持ちこたえている間に換装を済ませて』

心強い妻の言葉に、ガモスの不安は消えた。味方の識別信号をキャッチ。既に登録されていたパーツ

ナルサインを確認すると、彼は口笛を吹いた。
「誰が乗っているんだ？　まさかもう一人のお嬢ちゃんじゃないだろうな？」
直後、彼の後方にいた〝リーフ〟群の反応が消え、友軍を示すレーダーの光点が徐々に近づくとシルヴィーユのそれと交錯した。
以前と同じ、大理石の輝きを放つウィクトーリアは、ブーストを掛けながら〝リーフ〟群に立ち向かっていった。
シルヴィーユは待避所から出てきた作業車両とドッキングし、脚部の換装作業に入る。どんなに急いでも一八〇秒は掛かるだろう。それまであのウィクトーリアの乗り手に任せる他はない。
ガモスは機体の脚部を切り離しながら時の流れの遅さに苛立った。

南はウィクトーリアのドライバーシートで悲鳴に似た呻きを上げた。はっきり言ってこの機体は出来損ないである。ジェネレーターとラジエターは不安定で、ロック範囲も猫の額ほどしかない。OB出力も独特なカーブを描いているために機体をコントロールするだけでも骨が折れる。
（これで戦っていたとはな。特化された技量でトップランカーにまでなったんだな）
ミルキーのフォローを受けていなければ、とうにリーフ群にやられていたはずだと南は思う。それほどまでに今のウィクトーリアは扱いづらい機体になっていた。

り、徐々に被弾した。特に浮遊脚部は被弾面積が大きいため、損傷が重なった。
（まずいな）
ガモスはアラートを見つつ、後退すべきかちらりと考えた。トーキョーフロンティア上のリアルタイムデータを見ると小型戦闘機械は病院方面を捜索している様子だ。やはり目的は彼女のようだ。深月が乗っているはずの船は離岸したばかり。ならばもう少し時間が欲しい。
『イーストエリアの五番待避所まで後退して。もうすぐ浮遊軌道が駄目になるわ』
妻から指示が飛んで来た。軌道が駄目になれば二脚に換装しなければならない。しかしその時間をリーフがくれるかどうか。
「了解だ」
シルヴィーユは高速移動しながら撤退行動に移る。追撃のリーフの数は多くないが、しつこかった。
普段は高速道路として使われている軌道上でACサイズの機動兵器が発砲を繰り返す。流れ弾に一つが防音壁に着弾し、紙のようにくしゃくしゃに破れたかと思うと瞬時に炎と煙が生じて、消える。
シルヴィーユは指示された区画まであと十数秒というところまで来たが、レーダーは背後の敵機を示していた。完全に挟まれたらしい。こう言うとき、浮遊砲台としてのAC運用は不利だ。
『大丈夫。もうすぐ援護が来るわ。援護機が持ちこたえている間に換装を済ませて』
心強い妻の言葉に、ガモスの不安は消えた。味方の識別信号をキャッチ。既に登録されていたパーツ

ナルサインを確認すると、彼は口笛を吹いた。

「誰が乗っているんだ？　まさかもう一人のお嬢ちゃんじゃないだろうな？」

直後、彼の後方にいた〝リーフ〟群の反応が消え、友軍を示すレーダーの光点が徐々に近づくとシルヴィーユのそれと交錯した。

以前と同じ、大理石の輝きを放つウィクトーリアは、ブーストを掛けながら〝リーフ〟群に立ち向かっていった。

シルヴィーユは待避所から出てきた作業車両とドッキングし、脚部の換装作業に入る。どんなに急いでも一八〇秒は掛かるだろう。それまであのウィクトーリアの乗り手に任せる他はない。

ガモスは機体の脚部を切り離しながら時の流れの遅さに苛立った。

南はウィクトーリアのドライバーシートで悲鳴に似た呻きを上げた。はっきり言ってこの機体は出来損ないである。ジェネレーターとラジエターは不安定で、ロック範囲も猫の額ほどしかない。ＯＢ出力も独特なカーブを描いているために機体をコントロールするだけでも骨が折れる。

（これで戦っていたとはな。特化された技量でトップランカーにまでなったんだな）

ミルキーのフォローを受けていなければ、とうにリーフ群にやられていたはずだと南は思う。それほどまでに今のウィクトーリアは扱いづらい機体になっていた。

（これは彼女のためだけに、新世代機規格も導入し、アスマという青年が造り上げた機体だ。誰にでも扱えるもののはずがないか）

しかし南は不思議と優しさのようなモノを感じていた。最初、それが何なのか彼には分からなかった。しかし次第にウィクトーリアの操作に慣れるにつれ、その理由が分かってきた。操縦系の駆動もモーションプログラムも、その全てがきめ細やかで澱みがない。だから優しく感じたのだ。アスマという青年がどれだけこの機体に情熱を注いだのか、どれほど彼女を愛していたのか南にもよく分かった。

彼は深月を無為に死なせたくないと思うし、この機体をロストさせたくもなかった。最初は単に何らかの手掛かりを得ようと思い、ウィクトーリアのドライバーシートに座っただけだった。だがいつの間にかそう本気で思えるようになっていた。

『もう少しでガモスさんの換装が終わるわ。それまで一機で保ちこたえて』

「了解」

ミルキーの声を聞き、南は安堵する。彼女も小型戦闘機械の群が跋扈(ばっこ)するトーキョーフロンティアに残り、彼と共に戦っている。いつリーフ群に蹂躙されるか分からないのに、ガレージの設備から管制を続けているのだ。彼女の勇気は賞賛に値した。もっとも南もそれが客観的なものなのか私的な感情なのか区別を付けられなかったが。

要するにミルキーの愛らしい声を聞くと、どうにも機動が鈍るのだ。

（困ったな……）

　南がそう思ったのは本日二度目であった。南にとって長い一八〇秒が過ぎ、待避所の中から二脚に換装したシルヴィーユが姿を現した。彼の機体とウィクトーリアは背中合わせになって、八方から攻撃を仕掛けて来るリーフ群と対峙する。今は圧し気味だが、所詮は二機だけだ。総火力も戦闘継続能力も向こうが上。撤退するなら今しかない。

『おい。誰が乗ってるか知らないが、今のうちに突破するぞ』

「分かりました。目標は距離を取っているところです。作戦は一段落。感謝します」

『戦略局の若造か』

「いやあ、実はもうそんなに若くないんですよ」

『俺から見れば十分若い』

「そうですか。では若造的に私が殿（しんがり）を務めます」

『脱出経路を指示します。マーカーに従ってください』

　ミルキーの声がした。同時にＨＭＤの端に経路が描画され、進行方向に矢印が現れる。シルヴィーユにも同じものが送られているはずだ。

　南は了解の旨を返答し、シルヴィーユの背中を守りながら移動を始める。

　リーフ群は軍隊アリが森を食べ尽くすかのようにトーキョーフロンティアを破壊していく。内戦で崩

壊し、再建されてから十年にも満たないのに。だが人間は諦めない。この惨禍をやりすごし、再び新たに街を作るに違いない。南はそう信じていた。

しかしその希望も、次の瞬間に消えた。

二人のAC乗りは、音速を遥かに超えた速度で通過する黒い影を頭上に見いだした。それはかつて〝黒い奴〟と呼ばれた規格外機と同じカタチをしていたが、それは今、半透明の紅い色をした装甲に身を包んでいた。紅い影は二機を無視して過ぎ去っていった。行く手には、深月が乗った支援艦がある。足止めをしようにも、紅い影と思われるレーダーの光点は既に海上に出た後だった。その機体がどのようにして深月の脱出を知ったのかは謎だ。

南は作戦の失敗を予感した。

深月は愛する人を探していた。

彼はどこに消えてしまったのか、いつでも、どこでも彼女はその姿を探していた。

そして彼女は、いつの間にかまた黒いウィクトーリアのドライバーシートに座っている。

ウィクトーリアは濃紺に染まる海の上を疾走していた。

OBが吼えると、機体は大気の壁に押しつけられ、彼女たちの四肢が激しく震えた。

眼下に二〇〇メートル級の旧型護衛艦が見える。次第に小さくなるそれを心のどこかで確認しながら、

深月は海上に浮かぶトーキョーフロンティアを眺めた。この方角からトーキョーフロンティアを眺めるのは初めてだ。東京湾に浮かぶ人工島が、ここからでは旧湾岸と一体化して見える。まるで東京そのものが浮かんでいるようだ。そんなはずはないのに。

それになんだか懐かしい〝予感〟がした。トーキョーフロンティアの方角から紅い機体が飛来して来るのを、不思議なことに彼女はＨＭＤのデータではなく身体全体で感じていた。

だがそれは紛れもなく〝敵〟だった。

直後、黒いウィクトーリアと紅い影が交錯し、高エネルギーの砲火を交えた。

ミッション［16］

東京湾上で行われた黒いウィクトーリアと紅い御使いの空中戦は三〇秒ほどで終わった。互いの機動を読み合い、一度だけ砲火を交えたのみ。それも致命的な損傷を与えずに終わった。黒いウィクトーリアと紅い御使いはその後、互いに距離をとり、戦闘圏から離脱した。

もはやそれはACの戦いではなかった。圧倒的なパワーによる空中機動とプラットフォームのスケールを無視した大威力の火器類。非常識なまでの耐久力。この戦いは新世代規格がもたらす新しい戦場を世界に垣間見させた。その力を得なければ国が滅ぶと誰もが確信するほどの戦闘能力だ。その意味では時代が確実に動いていることを傍観者に知らしめたと言える。言い換えれば、現在の黒と紅の戦いは戦略レベルの戦いと言えよう。

しかし……今の人類の手に二機と比肩し得る戦闘ユニットは存在していない。

ティフィンは移動指揮車の車窓の中に、白くちらつくものを見つけた。ちらりと目を向けると雪と分かった。

『……この雪は明日未明まで降り続き、積雪は五〇センチを越えるでしょう……』

携帯ラジオから天気予報士の声が聞こえてきた。地元のラジオ放送局はこの非常事態でも精力的に放送を続けている。天気予報が終わるとティフィンは小さくため息をついた。雪は嫌いではないが御使いとその配下の戦闘機械群が迫っている今、戦闘時の不確定要素にしかならない。

交替の時間が来て移動指揮車から出ると吐く息が白かった。

戦闘機械群に追われた欧州正規軍は、かつてカルタゴの英雄が越えたルートをなぞるように移動していたが、ローマを攻めようというハンニバルと異なり、延々と撤退と再編成を続けていた。

欧州のアリーナに参戦していたティフィンとゼラは御使いの襲撃に遭い、なし崩し的に正規軍と合流、抵抗戦に参加した。正規契約はなかったが、補給と支援は貰えた。その分、個別に戦うより有利と判断しての参加だった。ゼラはタイクホワイトで待機中だ。

そして二人はこの抵抗戦で意外な人物と合流していた。EUアリーナのトップランカー、カレル・ケレンスキーだ。彼はシンサ亡き後、統一戦に勝利し、トップランカーに返り咲いた。ただシンサに勝ってトップランカーになったのではないことが心の棘になっているようではあった。

ティフィンは装甲車両の列を横目に、この野営地の東ゲートに向かう。遠くからでもタイクホワイトとカレルの機体、ウォーハンマーが並んで、アルプス山脈を仰いでいるのが見える。かつて廃墟の街で、砂漠で肩を並べた二機だが、この白いものが混じった光景の中ではまた違った印象を覚える。ACの上に降ってきた雪はラジエターの放熱で瞬時に解け、蒸気に変わる。辺り一面が白い水煙に包まれ、風景画の一部のような穏やかだった場面が乗り手の心を反映してか、熱くたぎった動きのある場面に塗り替えられていく。

（やっぱり雪は好きだな）

ティフィンは素直にそう思い、愛機への歩みを早めた。

空は今も厚い雲に覆われていた。

正規軍のACと交替の時間が来るとティフィンたちの小隊は待機となった。温かい食事が用意されていたが、炊事トレーラーの前には正規の兵が長い行列を作っていた。ここまで大規模な撤退戦は第二次世界大戦以来、例がない。後方部隊も厳しい訓練をしているのは確かだが、力不足のときもある。三人は肩をすくめてその列に並んだ。だが通りかかった正規軍の将校が「民間人に協力を仰いでいるのでどうぞそちらで」と申し出てくれた。客人である著名なランカーを雪が降る中に立たせておくのは気が引けたのだろう。三人はありがたくその申し出を受けた。

野営地から少し離れたところに数軒の民家があり、将校らはそこで食事をとっていた。ティフィンたちが招かれたのは小さな農家だった。鱗屋根から突き出た煙突が白い煙を吐き出している。近くまで行くとシチューの香りが漂ってきて、ティフィンは空腹と同時に懐かしさを感じた。彼女にとって寒い日のシチューは、温かな思い出と共にあった。ゼラはそれに気づいたのか、ティフィンの背に手をやると農家の方に押し出すように一緒に歩き出した。

「さあ。食べないと始まらないよ」

「ん。そうだね」

その優しさがティフィンには嬉しかった。農家の扉を開けるとすぐにリビングになっていて、老婦人がテーブルの上を片付けていた。先に来た士官たちは食事を終えるとすぐに持ち場に戻ったらしい。リビングには慌ただしい雰囲気がどことなく残っていた。しかし耳を澄ますと地元のラジオが流れている

のが分かり、メールを読む陽気な声が平穏だった過去へ気持ちを引き戻してくれた。

「いらっしゃい」

気がつくと小さな男の子が三人を出迎えてくれていた。

「早く何か食べさせてくれ」

カレルは男の子の招きにぶっきらぼうに応え、女の子二人からきつい眼差しを貰った。カレルは弁解を諦めたように手を挙げると、食卓に着いた。老婦人は男の子に皿を並べるよう言いつけ、自分はキッチンの中でサラダを作り始めた。

「手伝うよ」

ティフィンは男の子の手伝いをし、ゼラは目を細める。カレルは暖炉の薪をかき混ぜ、火を熾した。暖炉が明るくなり、テーブルのところまで火の温もりが届くようになる。食事の準備が終わると老婦人の手でシチューとパン、そしてサラダが並べられた。

「お口に合いますかどうか」

老婦人の言葉にティフィンは笑顔で応えた。彼女はしばらくシチューの皿を見つめ、目を閉じた。

「どうしたの？」

シチューを口にし、ゼラが訊いた。

「昔ね、お母さんにシチューを作ってあげたことがあるの。ドロドロのぐちゃぐちゃになっちゃったけ

ど、お母さんは美味しいって言ってくれたんだ」
「そう。そんな思い出があるんだ」
「ご、ごめんね」
「ううん。それは私のお母さんの思い出でもあるんだから良いの。少しでも彼女のことを知りたい」
ゼラは首を横に振った。彼女には母親がいない。ゼラの母親はレイヴンであり続けることを選び、ゼラの父・シンサとゼラのもとから離れた。だがどういった訳か戦災孤児になったティフィンを拾い、育てた。そして最期は戦いの中で命を落とし、彼女に愛機を遺した。その経緯はシンサの遺言書に記されており、アクアポリス事件が一段落した後に彼女たちに知らされた。そうして二人の間には奇妙な連帯感が生まれた。
しばらくしてティフィンは視線に気づき、目を開けた。それはカレルの眼差しだった。温かく静かな眼差しを湛え、ティフィンとゼラを見ていた。見つめ返された彼は照れたように料理に向かった。男の子はニコニコしながら二人が食べている様子を見ていた。
「見知らぬ人が来ているのにお手伝いしてくれるなんて、良いお孫さんですね」
ティフィンはキッチンに立つ老婦人に話しかけた。
「私の孫じゃないのよ。それに私もこの家の人間ではないし」
「ええ?」

聞き違えたのかと思い、ティフィンは疑問を露わにする。

「そうだろうと思った。次の戦場になるのが分かっているってのにな。逃げ遅れたのだろう？」

カレルが納得したように言った。

「でもこの子は？」

「親御さんとはぐれてしまったみたいでね。一人放ってもおけないでしょう。幸いこの家は軍が接収しているし、手伝えば食べ物は保証されるから……」

「逃げなくて良いんですか？」

真顔で訊くゼラに老婦人は強ばった笑顔で答えた。

「誰かが宇宙人の来襲だって言っていたけど、宇宙人だって皆殺しはしないでしょう？　街は壊していくかも知れないけど。だから相手が核爆弾でも使わない限り、生き残る可能性はあると思うのよ」

「それも一理ある。戦闘に巻き込まれなくたって飢えで死ぬことだってある。この戦いに正解なんかありゃしない。生き残った奴が正しかったってだけになるだろうよ」

カレルはそう言い切ると食事に戻った。彼の言葉でティフィンはここが戦場だったことを思い起こし、食事に集中した。戦場に於いて食べることは単にエネルギーを補給する行為ではない。温かい食事があればこそ、兵士は集中力と士気を維持出来る。

男の子は笑顔を絶やすことなく傭兵たちの食事を眺めていた。そして三人が食べ終えると後片づけの

手伝いを始め、次の将校たちが来るとティフィンたちが来たときと同じようにまた出迎えた。それが自分の仕事だと彼は頑なに信じているようだった。
　美味しかったと老婦人に告げ、ティフィンたちは農家を出て野営地に戻る。その途中、ゼラが物憂げな顔をしているものだから、ティフィンはつい訊いてしまった。
「心配？」
「そうだね。もうすぐ御使いたちは来るだろうし。あのご婦人はああ言ってはいたけどあの小型戦闘機械群は蝗みたいなものだから」
「……うん」
「正直この先、私たちだって生き残れるか分からない。あの子たちにしてあげられることなんかないってことも分かっているんだ。けど、そう簡単に割り切れない」
「それで良いんじゃね？」
　二人の一歩先を歩いていたカレルが言った。軽い口調だったが、ティフィンはそれで救われた。ゼラも意外な顔をした後、クスリと笑った。
（カレルさん、強面だけど意外と良い人だな）
　そうティフィンは思った。

小型戦闘機械群が警戒ラインを突破したのはその日の夜半だった。迎撃に出る戦闘部隊と後退する後方部隊が入り乱れ、野営地は俄に騒がしくなった。だが指揮系統は万全で、作戦そのものは整然と進行していた。

ティフィンたちのＡＣは峠のこちら側に引かれた第二防衛ラインに配置された。航空機と変わらない飛行能力を持つ御使いと違い、小型戦闘機械群のそれは地面効果が必要であり、山脈を越えるためには峠を通らねばならないと推測されたからである。偵察衛星群と交信出来なくなって久しいため、偵察部隊は無人偵察機を飛ばしていた。そしてその推測どおり無人偵察機は小型戦闘機械群を捉え、直後に破壊された。三〇分前のことである。欧州の正規軍は小型戦闘機械群に対し、圧倒的に数に劣っている。その差を埋めるには戦術的に有利な地点で迎え撃つ以外ない。それすら御使いが来襲すれば、一瞬にしてその優位は失われてしまうのだが。

小型戦闘機械〝リーフ〟の群れは峠の手前の第一防衛ラインのＡＣや戦闘車両を数で押し切り、峠を越えた。冬の白いアルプスの山々が爆発の照り返しで赤く輝く。それを認め、ティフィンは自分たちの出番が近いことを知った。クローバーの葉のようなローター翼と四連滑空砲を装備した小型の戦闘機械が、雪明かりに照らされて夜の空に浮かび上がる。しかしそれは一機や二機ではない。見る見るうちにその影は闇色の空を染めていった。

野営地の移動指揮車から防衛ラインの変更が伝えられた。第一防衛ラインを突破されるのが早すぎた

のだ。もちろん第一ラインにもACは配置されていた。少数の優れた戦闘兵器は戦術的勝利をもたらす。それは一面の事実である。しかし数に劣ればその勝利は局地的なもので終わる。それが兵法の常だ。ACといえども例外ではない。

『俺が前に出る。お前らは援護射撃をしつつ後退しろ』

カレルからの指示に素直に従い、ティフィンとゼラは後方に下がり、大型キャノンを使用する。威力は大きいが二脚には使い勝手の悪いキャノン砲でもこういう場合には役に立つ。カレル機ウォーハンマーはシールドを前面に発生させながらグレネードでリーフ群を散らした。足の遅い戦闘車両が姿を消したのを見計らいつつ、後方に位置していたリーフが前衛に補充されるまでの短く貴重な時間で、ティフィンたちは後退を始める。

ACはわざわざ舗装道路を後退する必要はない。山岳地でも適当な緩斜面を見つけ、そこを着地点に設定するだけで下っていける。だが斜面を降りられるのは小型戦闘機械群も同じこと。一度登ってさえしまえば降下・姿勢制御に要するエネルギーはさほど要らないからだ。

背部からの攻撃を気にしつつ、空中での回避行動。そして着地。三機はものの数分で麓の扇状地まで降りてきた。後部画像を確認すると山岳部の斜面に無数の光が生じては消えていた。リーフに搭載されている四連滑空砲のマズルフラッシュだ。

ティフィンは次の指示を待つ。その間にMAPを確認すると野営地がすぐそことというところまで来て

いた。後方部隊は既に後退を完了したらしく、人の気配はなかった。

（あの二人は無事に避難しているだろうか）

ティフィンの脳裏に昼間の老婦人と男の子の姿が蘇ってきた。してはいけないと思いつつもティフィンは生体反応を確認してしまう。リーフ群が発生させているＥＣＭのためにノイズ混じりだったが、レーダーに生体反応を示す光点が映し出された。

後方カメラが画像を捉え、ティフィンは二人の姿を確認した。脚を怪我したのだろうか、男の子が老婦人の手を引いていた。ティフィンたちのＡＣから五〇〇メートルも離れていない。

「カレルさん。逃げ遅れた人が！　場所を変えないと巻き込んでしまいます！」

『だとしてもどこに行けっていうんだ!?』

カレルの怒声にティフィンは思わず目を瞑ってしまった。

近距離レーダーは未確認機を示す光点を無数に表示している。すぐにでも交戦エリアに入るだろう。二人が避難するまで待っていたら標的になるだけだ。

『今度はお前らが先制して攻撃しろ。俺が後ろから支援する。一撃喰らわしたら適宜撤退。俺を置いていって構わん。ただし二時の方向から回り込むこと。良いな』

しばらくすると呆れたような声でゼラから返事があった。

『分かった。支援を頼む』

異議を唱えるとばかり思われたゼラがそう即答し、ティフィンは拍子抜けした。二時方向から回り込むと切り立った崖が背後に位置し、逃げ場が制限されることになる。それでもゼラとティフィンは指示通りに森林地帯を横切り、切り立った崖を背にしながらリーフと相対した。

カレルは機体の前面にエネルギーフィールドを展開し、舗装路に沿って侵攻して来るリーフの攻撃を防いだ。その間に撤退して来る装甲車両が二人を拾ってくれた。ゼラが囮を快く引き受けたのは、カレルが老婦人と男の子が逃げる時間を稼ぐために留まることを理解していたからだ。ティフィンは二人を乗せた装甲車両が離れて行くのを見てひとまず安堵する。目の前の敵に集中しなければならない。照準を合わせてはトリガーを引き、回避、時に被弾。それを幾度も繰り返し、残弾警告がＨＭＤに現れる。

『そっちの残弾は？』

ゼラから焦ったような声で無線が入った。

「もう怪しい」

『一斉射分は残しておきなさいよ』

ティフィンはブレード攻撃主体に切り替え、距離を詰めるリーフを斬る。ブレードを振りかざすと閃光が輝き、白に染まった森に鮮やかな光をもたらした。一撃ではリーフは動きを止めず、四連砲の砲口をティフィンに向ける。ティフィンは反撃を封じるため、側面に回り込むように二回目の斬撃を喰らわせ、ようやくリーフの動きが止まった。

（先は……長いって言うのに）

空を見上げるとリーフはシューティングゲームの敵機のようにうようよしていた。

『一撃で良いって言っただろうが。退くぞ』

カレルの冷静な声がヘルメットのインナーヘッドホンから聞こえ、ティフィンは切り立った崖に沿って後退を始める。じきにゼラのタイクホワイトも追ってきた。互いの無事を無言で喜び、カレル機ウォーハンマーと合流しようと森林を横切っているとティフィンは異変に気がついた。

（追ってこない？）

レーダーの小型戦闘機械群は欧州の正規軍を圧していたにも拘わらず、後退を始めていた。

『どうして？』

ゼラも気づいたようだった。

「ううん。一機、来る」

ティフィンが上空を見上げると灰色の雲を切り裂くように黒い影が通過し、視界から消えたレーダーを見るとそれはカレル機を示す光点のすぐ側で止まり、その後、小刻みに動き始めた。

『戦闘を開始した。でも単機で？』

「違うよ。私たちはあの機動兵器を見たことがある。あれは〝黒い奴〟だよ」

『〝黒い奴〟！』

ゼラ機は邪魔な森の木々を避けるように跳躍し、ティフィンもそれを追う。もし相手が〝黒い奴〟ならば、カレル機だけでは手の打ちようがない。二機は野営地の前までブーストで駆け抜け、戦闘中のカレル機と不明機を捕捉。HMDに映し出された画像には予想通り、〝黒い奴〟がいた。

〝黒い奴〟……規格外の無人兵器はカレル機の周りを縦横無尽に飛び回り、カレルに照準を合わせさせない。〝黒い奴〟はその速度域の中、的確な攻撃を仕掛け、カレル機へ損傷を与え続けていた。

『来るな！　これは俺の戦いだ！』

二人に気づいたのであろう。カレルが雄々しい叫びを上げた。

「来るなって……」

全くの予想外の言葉にティフィンは絶句した。ファントムとでも一対一で勝てるはずがないのだ。

〝黒い奴〟はファントムシリーズの指揮機だ。それ以上の戦闘能力を付与されている。

『小型戦闘機械群が退いた訳を考えろ。ここで俺が援護を受ける訳にはいかないんだ』

ウォーハンマーが〝黒い奴〟に突撃し、〝黒い奴〟はそれを受け止めた。互いのエネルギーフィールドが干渉し、弾け合う中、カレルは言った。

『嬉しいぞ！　オッサン！　まだあんた、そういうところは残ってるんだな！』

〝黒い奴〟がミサイルを、ウォーハンマーがグレネードキャノンを無照準で放ち、二機は爆発の炎に飲まれる。それぞれエネルギーフィールドが破れ、損傷を受けながらも二機の戦いは止まらない。

『オッサンって……』

ゼラが信じられないと言うような声を上げた。ティフィンはその単語が意味するところに思い当たり、思わず声を上げてしまう。

「ゼラちゃんのお父さん！　どうして？」

そしてまだ激しい戦いを続けている二機に目をやり、どうしてカレルが喜々として戦っているのかを理解した。おそらく彼が言うとおり、〝黒い奴〟を操っているのはシンサなのだろう。人工知能群を崩壊させた今、シンサのマトリクスが残り、また戦闘に参加しているのかは謎だ。だが人工知能群うんぬんを言うならこの無人戦闘機械群の侵攻自体もないことになる。ファントム〝０〟はどこかに重要拠点を築き、バックアップを残していたと考えるしかない。

ゼラ機は硬直し、ティフィンもまたカレルの言葉に従うべきか考えた。彼が自分たちと行動を共にしていたのは、この機会を窺っていたからかもしれない。それを考えると介入すべきではないと思う。しかしウォーハンマーは著しい性能差に圧され機体の各部が損傷している。ラジエターから吹き出した気化した冷却液が管楽器のような音を奏でていた。それはまるで悲鳴を上げているかのようだった。

『ふざけんじゃないわよ！』

ゼラが激高し、〝黒い奴〟との距離を詰めた。残弾とカレルを気遣ってだろう。レーザーブレードを振りかぶった。

（そうか……戦いたかったのはゼラちゃんも同じだもんね）

ティフィンは深月とサーティの戦いの最中、彼女が『羨ましい』と言っていたことを思い出した。死んだはずの父親から何かを受け取れたことが、余程羨ましかったのだろう。タイクホワイトはウォーハンマーと〝黒い奴〟の間に割って入り、レーザーブレードを輝かせた。しかしそれは〝黒い奴〟のエネルギーフィールドを掠めることもない。〝黒い奴〟は既存の戦闘兵器の全てを上回る速さで回避行動をとり、上空へ待避した。

『手を出すな！』

『それはこっちの台詞よ！』

二人とも自分が置かれた状況が分かっていないらしい。たとえシンサのマトリクスが搭載されていたとしてもそれはシンサ自身ではあり得ない。しかも死者たちの反乱の後だ。戦闘パターンだけ残し、反旗の芽を摘んでいるだろう。つまりフェアな戦いなど望むべくもないということだ。

だがどうしたことだろう。二人はシンサ自身と戦うかのような振る舞いを続け、〝黒い奴〟と対峙していた。互いを叱咤し、語りかけ、そして讃えていた。

（なんだ……私がバカみたいじゃない）

残弾を気にしている場合ではなかった。ティフィンは〝黒い奴〟に砲撃を加え、二機を支援する。予想外の攻撃だったのか、それは〝黒い奴〟に命中。〝黒い奴〟は行動パターンを変え、ティフィンの方

にも注意を向けるようになり、そして次の瞬間には突撃してきて、イクセスに体当たりを喰らわせた。衝撃が脳天まで届き、ティフィンは奥歯を噛みしめながら小さくうめいた。

（確かにこれはシンサさんだ……）

何故かそう納得出来、ティフィンは心の中だけで笑った。

端から見ればたかだか一機の機動兵器に三機もよってたかってという場面だった。しかし実際にはそれ以上の性能差があり、事実、結果もそうなった。

『……結局あんたには勝てず仕舞いかよ』

ヘッドホンの奥からカレルの呻き声が聞こえた。イクセスも行動不能に陥っていた。ティフィンは副操縦系統を使って再起動を掛けようと努力したが、徒労に終わった。辛うじてサブモニターの一つが生きており、擱坐したカレル機が確認出来た。立っているのはゼラ機タイクホワイトだけになっている。タイクホワイトは死重になる射撃武装を全て切り離した。ゼラは残ったレーザーブレードだけで勝負をかける気らしい。

〝黒い奴〟もそれに応えるように人型形態に変形し、武道で言う居合いのような構えをとった。間合いだけならゼラ機に分があるし、また機体も軽い。機体性能が上回っても、重い〝黒い奴〟とは初動で差が出るはずだ。だから〝黒い奴〟は居合いのような構えを取っているのだろう。

ティフィンは息が詰まり、呼吸が止まる思いで二機が動くのを見守った。

どれほどの時間が経ったのだろう。多分、心臓の鼓動にして十回にも満たなかったはずだ。だが彼女には長い時間に思われた。

静かに雪が降り積もる中、ゼラ機が動いた。

雪のように白いその機体が、残像を生じさせて跳び、レーザー光を迸らせた。光の刃をかいくぐり、〝黒い奴〟はゼラ機の懐に入ると、大型のマニピュレーターでコア下の接続部をえぐった。マニピュレーターは破損して潰れたが、ゼラ機も多大な損傷を受け、脚部が強制排除された。

ゼラの無念そうな小さな悲鳴が無線を通して伝わって来る。

無念だっただろう。しかし今も越えられない父親の力を確かめられて、満足だったはずだ。父親のいないティフィンにとってそれは想像の範囲を超えていたが、そう確信出来た。それはそれで喜ばしいことだと思う。もちろん、命があればのことだが。

〝黒い奴〟は雪中に落下したタイクホワイトの上半身を見下ろし、アイセンサーを点滅させた。

（……モールス信号？）

戦場では無線封鎖されている場合、古臭いモールス信号を使うこともある。だからモールス信号は傭兵にとって必須技能だった。

（ツ・ヨ・ク・ナ・ツ・タ・ゲ・ン・キ・デ・ナ・ゼ・ラ）

モールス信号はそう語っていた。
ティフィンの瞳から熱いものがあふれ出した。
ヘルメットの中、ティフィンにそれを拭う手段はない。ただ流れるに任せるだけだ。
〝黒い奴〟はそれだけ愛娘に伝えると、尽きることなく雪が降り続く空へ舞い上がり、変形して飛んで去った。
「ゼラちゃん！」
『……うん』
「ゼラちゃんってば！」
『聞こえてるよ！』
ゼラの声は嗚咽混じりだった。
『あの、クソオヤジが！』
ティフィンは灰色の夜空に残った〝黒い奴〟の軌跡を、いつまでも見ていた。
しばらくすると峠の向こう側から、爆発音が響いてきた。それは延々と続き、一時間ほどで消えた。
峠向こうに小型戦闘機械群と対抗出来るような戦力は残っていなかったから、何が起きたのかを調査する必要があった。正規軍は無人偵察機を飛ばし、峠向こうの戦場を探った。その頃にはティフィンたちも回収され、暖かな戦闘指揮車の中に招かれており、リアルタイムでその情報を知った。

峠の向こう側にはそれこそ数を数えられないほどの小型戦闘機械のスクラップが、死屍累々という表現が的確かどうか分からないが、辺りに散乱していた。そして峠向こうの麓で、〝黒い奴〟を発見した。〝黒い奴〟はファントム系の機体数機を道連れにして満身創痍で仁王立ちしていた。

戦場に動くものはなかった。

ゼラは調査隊への同行を希望し、ティフィンもそれに倣った。機体は正規軍の整備部隊に任せ、ゼラとティフィンはヘリコプターに乗って〝黒い奴〟とファントムが戦った戦場へ向かった。

時計はもう六時を回っている。もうすぐ朝だ。灰色の雲は消えつつあり、雲間に星が見えていた。東の空は明るくなり、夜明けが近いことを知らせている。ティフィンとゼラは何も食べていないことを思い出し、ヘリコプターの座席で非常食のパウチを開けた。スティック状の栄養食は味気ないモノだ。二人はそれをよく噛んで飲み込んだ。非常食が胃に届くと生きていることを感じた。

二十分ほどで現場に到着し、ゼラは〝黒い奴〟のもとへと一目散に駆けだした。

山の端から朝日が零れ、黒い奴に光を投げかけた。〝黒い奴〟は立っているのが不思議なほど、重大な損傷を受けているのが分かり、ゼラは涙した。

彼女に声を掛けることすら叶わず、ティフィンはただその光景を見続けた。

調査が進み、やはり〝黒い奴〟にはコクピットがなく、無人だったことが分かった。コアの部分には前回〝黒い奴〟と戦った時と同じ、有機体を使った通信装置があった。有機体ユニットの大きさはサッ

カーボールほどしかなく、それがシンサのなれの果てだとゼラが認めるまで、長い時間を要した。
この小さなユニットのどこにシンサの意志が残っていたのかは分からない。しかしゼラは父親の温もりを感じたのだろう。
ゼラは優しく、そして強く、シンサを抱きしめたのだった。

ミッション〔17〕

深月は御使いと幾度も砲火を交えた。あるときは大都市の地下深部で、あるときは砂漠で砂塵にまみれ、そして大海原の波の上で飛沫を被りながら。それは血肉を喰らい合うようなガツガツした戦いだった。その戦いに戦略性はない。出会えば即座に互いを敵と認識し、深月と御使いは互いの存在を最速で消そうとした。それはまるで互いを天敵としたような激しさだった。しかし両者の関係はそれと根本的に異なる。天敵とは生態系を象徴するシステムだ。食べるものと食べられるもの。その関係がより明白かつ濃いものである場合に使われる言葉だ。

深月と御使いの関係を一言で表現するならば『免疫系』という言葉が相応しい。今、世界中に広がっている無人の戦闘機械群は人類の機械文明全体を蝕むウィルスと言える。その強力な病原体に人類の機械文明が有する先天性免疫群は対抗し得ず、新たな抗体が生じるのを待つほかなかった。新たな抗体が体内で生成されれば、それら抗体群は侵入者に襲いかかり、生体を正常な状態に戻そうとする。今の深月の立場はその抗体である。しかしそう安易に喩えられるほど、状況は明らかになっていない。彼女が駆る黒いウィクトーリアは白いそれと形は同じでも、中身は異なる。従来のアーマード・コアでは空中戦は不可能だし、そもそものために作られたマシンではない。しかしこの黒いウィクトーリアは縦横無尽に空を飛び、桁外れの規格外機、御使いと互角に戦う。彼女は複数の機体を同時に別々の場所で、しかも意識のみで機体を操り、生と死の境界すら曖昧な状態にある。それは既存の科学技術では到底あり得ないことだが、現に深月の意識によって黒い勝利の女神たちは刃を揮っている。

彼女たちを建造したのは何者なのか、何故御使いに抗し得ているのか。その疑問をまだ深月は抱いていない。しかし彼女はすぐにそれを知らされることになる。

造物主であるファントム〝0〟によって。

深月の容態が安定にしていると軍医から聞き、ミルキーはひとまず安堵した。深月とミルキーを乗せた後方支援艦は南下を続け、公海上に達していた。殿を務めたガモスと南は軍の輸送船に回収され、ミ

ルキーたちとの合流を果たした直後だったので、ミルキーの喜びもひとしおだった。軍医の説明によると五感刺激に対する反応はないが脳は活発に活動しており、新陳代謝にも異常はないとのことだった。だが睡眠状態ではなく、仮にこのままの状態が続くとすれば、脳に何らかのダメージを負うと言う。決して良い話ではなかった。脳のモニターを始めてから二四時間以上経過している。人間の脳がどれほど不眠に耐えられるのかミルキーは知らないが、一週間くらいが限度ではないかと考える。だがまだ時間はある、とも言えた。

医療フロアを出ると、ミルキーは一息ついた。そして扉の両脇に立っていた南とガモスに気づき、慌てて背筋を伸ばした。

「茨姫のご様子は?」

ガモスの問いにミルキーはお手上げのジェスチャーをした。

「命に別状はないみたい。今のところは、ですけど……」

「心配だな」

ガモスは腕を組み、頷いた。

「この船はどこに向かっているの?」

ミルキーは南に訊く。

「現在は進路をランダムに変更しているだけで、本局からの指令待ちです」

「そう……」
ミルキーは目を伏せた。
「リーフ群はトーキョーフロンティアで動きを止めているようです。性能的にリーフ群が外洋に出てくるとは考えにくい。ひとまずは大丈夫でしょう」
「問題は御使いよ」
ミルキーはこの短い航海の間に黒いウィクトーリアと御使いの戦いを見ている。誰よりも多く新世代規格機を見てきたミルキーは、その二機が新世代規格を体現した存在だと確信していた。黒いウィクトーリアはファントム〝0〟が何らかの意図で彼女たちの機体の形を模したものだろう、と。だがファントム〝0〟が滅んでから何か月も経った今、何故姿を現したのか。そしてどういう経緯で黒いウィクトーリアが御使いと敵対しているのかが分からない。
システムに飲まれた死者たちの意思が黒いウィクトーリアに反映していると仮定すれば、道理は通る。ただ彼女の父であるサーティやナインら死者が造反した後に、また同じ過ちを戦闘人工知能群が犯すことも考えにくい。分からないことが多過ぎる。
「御使いと黒いACについては二機の交戦後、機影をロストしてしまいました。交戦したと思われる海域に破片などの痕跡がないことから、双方痛み分けで一時撤退したのでしょう」
南は冷静な口調だった。それがミルキーの癇に障った。

「黒いＡＣ？　ですって？」

「黒いウィクトーリア、と言った方がよかったですか？」

「敵の正体の見当もついたでしょう。ミヅキちゃんから目を離す訳にはいかなくなりましたね！」

「おい……落ち着け」

ガモスが二人の間に入った。

「私は落ち着いていますよ」

南は肩をすくめる。

「どうせ私が一方的に癇癪を起こしたとでも思っているんでしょう」

「思ってません。だって事実ですから。この混乱を治める鍵はあなたと彼女にあるようだ。それくらいは分かっています。でもそれ以上は何が何だか」

南は本当に済まなそうな顔をしていた。

「ごめんなさい。自分が知っている知識を基準に考えるからこうなるのよね。南さんが全部を知らされているはずないでしょうし。たとえばマトリクス共振なんておとぎ話、聞いていないでしょう？」

「おい、ミルキー……」

〝黒い奴〟との戦いの当事者でもあるガモスは止めようとする。が、南は目を見開き、ミルキーの前に立った。

「何か思い当たることがあるのですね？」
「ある。けど、理由が分からない」
「分からなくても良いです。良いですから何でも言ってください。それが手掛かりになってこの事態を打開出来るかもしれない」
ミルキーは南のキャラクターを誤解していたようだ。とぼけているようでけっこう熱い男らしい。
「ウィクトーリアに乗って分かったことがあるんです。どれほど機械に対して人間が想いを込められるのか、と。あの機体は正直言って奇形です。普通の乗り手にとってはただの駄作機です。でも乗り手は戦績を残し、格上の存在を叩き伏せた。それは一部だけ突出させた性能とその性能を活かせる乗り手の、卓越した技能があったからです。でも本当は違う。逆なんだ。ウィクトーリアは乗り手の全てを知った男が、彼女のためだけに造り上げた精緻な戦闘機械なんです。だから私では使えない。当たり前ですよね。女の子用にオーダーした服を男の私が着られるはずがない……ええっと、何が言いたいかっていうとですね、私はウィクトーリアを壊したくない。作り手の気持ちが詰まったマシンだから。そしてそれを大事にしているあなたと深月さんを助けたい。仕事でも、自分の意志でも。それが今の正直な気持ちなんです」
「おぉお……ミルキーさん、圧されてます」
ミルキーは自分を茶化すが、それだけ南の気持ちを真っ向から受け止めてしまったからだった。

「単に若くて可愛い女の子に格好良いところを見せたいだけだろ。俺にも経験があるから分かる」
ガモスは呆れたとジェスチャーした後、周囲を窺った。細君が近くにいないかびくついているのだ。
ミルキーは小さく笑う。一方、南は声を失い、背の高いガモスを見上げる。そして相手にされていないことに気づくと何やらモゴモゴと口にした。
「とにかくだ。出来ることは全部しないと後悔する。人間同士の全面戦争ならまだ良い。この戦いは人類文明存続の危機なんだ。俺らはそれに絡んじまった。やるしかないだろ」
「生き残れれば手記の続編書いて印税生活出来ますよ」
「前のそれほど売れなかったんだよな」
ガモスは苦笑した。
「ねえ南さん」
「は、はい！」
南のおどおどした反応が妙におかしくてミルキーはまた笑った。しかしすぐに緩んだ頬を引き締め、瞳を輝かせた。
「マトリクス共振について国家戦略局に問い合わせてください。きっと研究が進んでいるはず。黒いウィクトーリアとミヅキちゃんの関係が分かるかもしれません」
人間の脳が一度に処理出来る情報量には限りがある。

剣の達人が真剣勝負に臨んだとき、時間の流れがゆっくり感じられ、太刀筋を見切ることが出来た。一度はそんな逸話を聞いたことがあるだろう。この現象は長い間、比喩的な表現だと言われてきた。しかし今では実際に起こりうる現象と判明している。日々の絶え間ない訓練によって、又は命の危機に際し、人間の脳の情報処理速度は一時的にではあるが飛躍的に向上する。五感から得られる外界情報の全てを用い、生存のための最適解を導こうとするのだ。深月も幾度となくそのような経験をしている。ノワール卿と戦ったとき、〝黒い奴〟と戦ったとき。そしてサーティと戦ったときだ。いずれも彼女は火線やレーザーの切っ先を見切るような非常識な真似が出来た。

しかし今、仮想空間の中に仮初めの肉体を得た彼女はほぼ同時に二機、三機の黒いウィクトーリアを駆り、御使いと戦っている。そしてその全ての戦闘において情報処理加速、つまり時間感覚の鈍磨を経験している。それを不自然だと深月が気づくまで、数日を要した。

しばらく考え、それを可能とするのが戦闘用の人工知能以外あり得ないことに気づき、深月は愕然とした。今の深月は機体を操縦しているのではなく、戦術的な部分について機体に若干の指示を与えているにすぎない。システムに呑まれる意味を体感し、彼女は更に呆然とした。サーティやノワール卿はこんな世界で戦っていた。これは生きているというには、あまりにもかけ離れた概念だ。

だが深月はこの不自然な戦いを止めない。電子の眼を通して彼女の脳裏に映る相手、今戦っている相手、御使いが〝黒い奴〟そのものだったからだ。その乗り手が戦闘人工知能群に取り込まれた死者であ

ることも薄々感づいていた。反乱しないようにおそらく極限までデータ化されたものだろう。が、黒いウィクトーリアに搭載された戦闘人工知能は過剰なほどの敵機情報を深月にもたらしている。それが彼女に、生身と変わらぬ殺気を感じさせた。その殺気が〝黒い奴〟と黒いウィクトーリアの戦いを更に加熱させた。

ある大陸では深月が勝利し、ある大陸では敗北を喫した。御使いの群と黒いウィクトーリアたちは互角の戦いを繰り広げ、今またその内の一つが終わりを告げた。深月の目前には透き通った蒼い空と夏でも融けぬ白い大地があった。そして黒いウィクトーリアの背後には大破させた御使いがくすぶりながら横たわっている。紫外線の照射量が高い。おそらく南極大陸のいずこかだろう。GPSデータもここが極地であること示している。だがこの大陸は発見されて以来、どの国家にも属することはなく、観測隊の基地があるだけだ。戦略的な価値も殲滅すべき戦力もここにはない。

しかし〝黒い奴〟はここを戦いの舞台に選んだ。それには理由があるはずだった。

《よくこの舞台まで来た》

深月の頭の中で声がした。正確には声ではない。電子信号によって『意志』が伝えられたのだが、生身である深月は声としてそれを捉えた。彼女の愛しい人のそれに聞こえた。

「……アスマ?」

深月の魂が宿る黒いウィクトーリアは声に導かれるようにブースト圧を上げ、前進を始める。しばら

く進むと前方に厚い氷床が裂けて出来た深い谷が現れた。レーザー測量してみると深さは千メートルを優に超えていた。
「地表まで穿たれているのか……？」
深月が視覚データを確認すると、底部までは地上の光が届かず、闇に包まれていた。
《そうだ。僕はここにいる》
また声がした。深月は意を決し、クレパスの傾斜を確認すると、減速しながら慎重に降下を始めた。
かつてノワール卿は自分と戦闘人工知能群をリンクさせているシステムを『マトリクス共振』と呼んだ。それは人工知能群が〝黒い奴〟とファントム級の機体を制御する際にも用いられた。現時点では最も秘匿性が高く、従来のＥＣＭでは妨害不可能な通信システムだ。戦闘人工知能群によってコスト度外視で開発された、ある意味オーバーテクノロジーの代物である。空輪によって国家戦略局からマトリクス共振システムの研究結果が届き、一瞥した軍医は呆れたように言った。
「似非科学だ。あり得ない。少なくとも現在の科学では認められない。エーテルでもない限り」
しかしこの通信・制御システムが稼働していることを前提に考えれば、今の彼女の病状は理解出来る、とも続けた。
「じゃあ決まり。ミヅキちゃんが黒いウィクトーリアで戦ってる」

そう言い放つとミルキーはすっきりした自分を見つけていた。

「黒いACの目撃例は世界各地であるようです。通信網が分断されているので今のところ確証はありませんが……でも、誰が黒いACを作ったというんですか。マトリクス共振システムを使っているなら戦闘人工知能群ってことですよね。リーフ群を作ったのもそうなら黒いACと御使いを作ったのも戦闘人工知能群。ではこれは一体何のための戦いなんですか?」

南は露骨に眉をひそめる。そんな彼にミルキーは快活に答えた。

「彼が人間を理解するためよ。多分ね」

南はそれ以上、疑問に思うのを無駄と悟ったようだった。すぐに艦橋に赴いて本局との回線を開き、苦労して説明を始めた。

それだけで世界が動くとは思えない。だがやれることをやらなければ後悔する。

今ミルキーが考えられるのはそれだけだった。

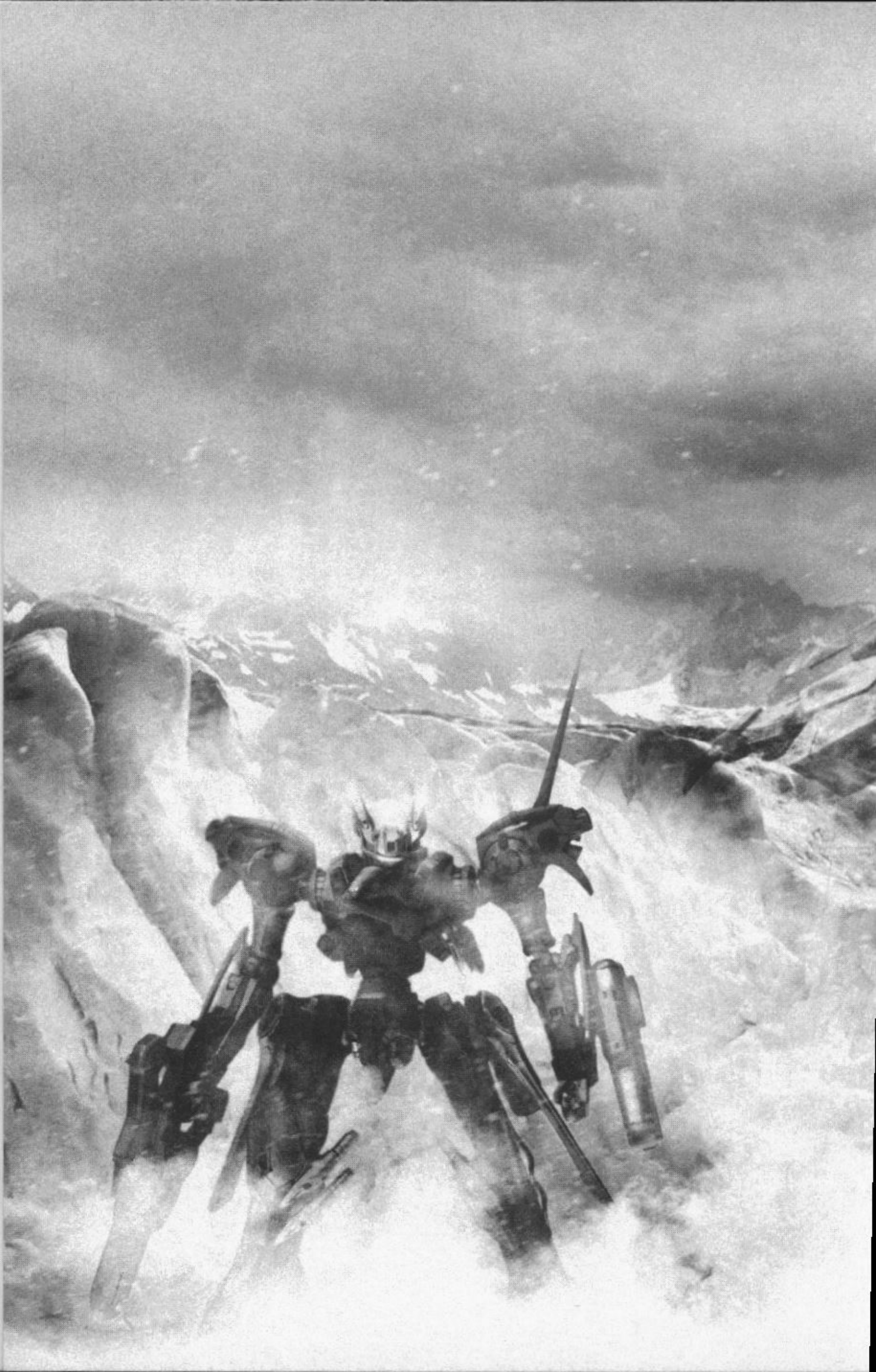
黒いウィクトーリアを氷床のクレパスの底まで下ろすと、見たこともない光景に深月は感嘆した。

南極の氷床は厚さが三千メートル近くある。千メートル降下しても地表に到達しない。しかしこのクレパスの底には人造の大地があった。表面に薄く氷が張った金属の大地だ。これだけ巨大な施設を秘密裏に造り上げるためには、材料を外部に求めることは出来ない。幸い南極には手つかずの天然資源が

眠っている。ファントム〝0〟はそれらを採掘、精錬し、全く独自に施設を造り上げたのだ。
「地表まで到達しているのか……これは」
深月は視覚データを頼りに入り口を探ってみたが、それらしき部分は見あたらない。
《最後の舞台だ。ミヅキ。僕を倒せばこの実験は終わる。だが僕を倒せなければ実験はまだ続く》
また声がした。今度は音声データだった。
「アスマ」
《違う。僕はアスマではない》
それを聞き、深月は深いため息をついた。
「どうせファントム〝0〟が造り上げた死者でしょう。それくらい分かっている」
返答はない。代わりに音響センサーが新世代規格機のジェネレーター音を拾った。
《死者ではない。僕は僕自身だ》
アスマの声なのに、深月には空恐ろしく聞こえた。
深さ千メートルのクレパスの底、暗闇が支配する谷に、紅い機体が姿を現した。半分透き通った紅い装甲を持つ新世代無人指揮機……今は人類から御使いと呼ばれる機動兵器だ。深月は既に東京湾上でこの機体と一戦を交えている。そのときは挨拶程度だったが、他の御使いとの違いを感じていた。それが機体を操る死者の差だとまでは思い至らなかったが、今にして思えば、手応えの違いをそれだけで分

かってしまったのだろう。
《僕はファントム〝0〟を受け入れる器として作られた存在だ。作られてから五年になるが、アスマの全ての知識と記憶、ファントム〝0〟の意志と力は全て僕の中にある。その両者を併せ持つ存在である以上、僕はアスマでもファントム〝0〟でもない》
「今まであなたはどこにいたの？」
深月は自然にそう訊いていた。
《ファントム〝0〟が滅ぶまで、彼の生体バックアップとしてこの生産拠点で眠っていた。システムから完璧に切り離されたバックアップだ。彼が滅んでも僕に影響はない。ただしシステムの自己意識からも切り離されていることでもある。だから目覚めた僕と人工知能群の自己意識は同一ではない》
「そう」
深月は小さく応えた。
「どうしてそんなことをいちいちワタシに話すの？　これは実験なんでしょう？　それだけならさっさとワタシを倒せば良いだけでしょうに」
それは深月の中に自然と浮かんできた疑問だった。本当は、訊くまでもなくその答えは分かっていた。でも、彼女は訊くべきだと思った。案の定、バックアップ体からの返答はなかった。アスマの知識と記憶があるというのなら、作られた以降のそれも、眠りながらバックアップされていると考えて良いだろ





う。またぞからこそファントム〝0〟がバックアップの素体として興味を持っていた深月を今も意識しているのだ。だがそれだけでは理由にならない。

自分自身をワタシに知って欲しいから。

自分の存在をワタシに認めて貰いたいから。

そして答えに詰まるのは彼自身、それに気がついていないから。

《ではそうしよう。君が最後のミヅキという訳でもない。まだ何度かここに辿り着くチャンスもあるだろうから》

（全く、何が実験だ。ただのゲームじゃないの）

深月は嘲笑する。

「それを聞いて安心した。ワタシもいろいろ試せるってことね」

死人でも良いからアスマに戻ってきて欲しいなどは思わない。命とは、人生とは、それらに真摯に向き合って初めて意味を持つ。だから偽りのそれを認めようとは思わない。それは傭兵として育った深月独特の価値観かもしれないが、彼女にとっては真実そのものだ。

今、対峙している紅い御使いを駆るアスマは、自らを死者ではないと言った。だから彼女が愛したアスマではない。また彼自身もアスマではないという。ならば今、アスマと同じ言葉を発しているのはアスマの形をした別の物だ。

「今、取り戻すから」

深月は呟き、仮想空間の身体でスティックを引き、フットペダルを踏み込む。

紅い御使いも全身を輝かせ、黒いウィクトーリアに向かって跳んだ。

地球が狭くなったと人が錯覚するようになった一因に通信網の発達が挙げられるだろう。インターネットや衛星回線など過剰なまでに発達した通信網は世界の裏側まで繋がり、あたかも行って見てきたかのような情報を机の上で手に入れられるようになった。だがそれらが使えなくなったとしたら、経済はもちろん、交通、生活インフラ、全てに於いて重大な障害が発生する。軍事面でも同じだ。御使いに衛星回線が寸断され、リーフ群が強烈なＥＣＭを放っている現状では、軍事組織は地域で孤立してしまう。それもあって人類は反撃の糸口を掴めていなかった。

しかし、深月たちがトーキョーフロンティアを脱出した翌朝、ヨーロッパ方面で戦況が好転、衛星回線の一部が回復した。欧州軍の勝利の報に世界は勇気づけられた。だが、それが局所的勝利にすぎないことも分かっていた。戦況は予断を許さなかったが、通信が回復したお陰で重要な情報が日本に入ってきた。ゼラたちが欧州軍の抵抗戦に参加し、御使いの一機を退けたというのである。後方支援艦の艦橋でそれを聞いたミルキーは南に詳細な情報を要求した。

「やれやれ、敵わないいな」

南はおどけたように肩をすくめ、欧州からの情報をミルキーに見せた。そしてある一文を見つけ、ミルキーは激しく混乱した。

『同士討ちを始めた御使いには元トップランカー、シンサ氏の行動パターンが焼き付けられていたと考えられる』

御使いの一機がゼラやカレル、ティフィンと戦って下した後、ファントムやリーフ群と同士討ちを始めたというのである。それについてはミルキーに思い当たる節があった。

「シンサさんがまだ、システムの中に囚われているってこと?」

だがファントム〝0〟が二度も同じ過ちを繰り返すはずがないことは、ミルキーにも想像が付く。

「これだけじゃまだ分からないな」

「でも良いニュースです」

「そうね。とても重要な気がするんだけど何か見落としているような」

ミルキーは考え込んだが、すぐに答えが出る訳ではない。南と一緒に食堂に行き、朝食をとってお茶を飲んで、少しホッとして、ちょっと船旅気分で、目の前に意外と良い男がいて、なかなか良い感じかな、というところでふと閃いた。

「マトリクス共振システムの弱点ってもしかして……?」

「もしかして?」

コーヒーカップを口から離し、南は訝しげに繰り返した。
「ううん。そんなはずない。マトリクス共振システム解析の経過報告書を読んだ限りでは、そんなに単純な物ではないし。門外漢の私でも分かるくらい」
「だからなんなんです？」
「思い過ごし……多分。それに仮にそうだったとしても今更どうにも……でもないか」
気づくと正面の南が悶絶していた。
「全くもう！　思わせぶりですよね！」
「女の子はいつでも思わせぶりなのよ」
ミルキーは悪戯っぽく笑い、南は真っ赤になって絶句した。
「からかわないでくださいよ」
「からかったつもりはないいんだけど。本当のことだし」
そう言いながらも南の今どき珍しい反応を楽しむミルキーだった。
「なんでも良いんです。何かヒントになるようならなんでも言ってください」
「そんなのあったらとっくに言ってますよ」
ミルキーがそっぽを向くと、南の携帯端末がコールした。南はいつものように淡々と応答した後、ミルキーに目を向けた。

「ええ。彼女も一緒です。今からそっちへ向かいます」
「どこから？」
「医療フロアから」
「もしかして！」
「そのもしかしてですよ」
「やったー！」
ミルキーは手を上げ、テーブル越しに南とハイタッチした。
「深月さんが目を覚ましたそうです」
「そんなん言わなくたって分かってるってばさ。マイスイートダーリン。今、行きますからね！」
ミルキーは南を置いて医療エリアへと駆けていった。だからミルキーはそのときの南の表情を見なかった訳だが、今後の彼の人生的には見られなくて幸いであった。
息を弾ませながらミルキーが病室のドアをノックすると聞き慣れている声が聞こえてきた。目頭が熱くなるのを感じながら、ミルキーは病室に入った。
「心配かけたね、ミルキー」
ベッドの上で半身を起こした深月は、ミルキーを認めると笑みを浮かべる。ミルキーは大きく首を横に振り、元気に答えた。

「そんなことないよ。信じていたから」
　そして深月を優しく抱きしめた。深月は照れるようにそして温もりを確かめるように頷くと、小さな声で言った。
「アスマに会ったんだ。でも、アスマじゃなかった。ファントム〝0〟の生体バックアップだった」
　それを聞いてミルキーの疑問は氷解した。
「そっか。もういいよ。分かったから。もう何も言わなくても良い」
　ミルキーは深月を抱きしめる腕にぎゅっと力を込め、深月はただ抱きしめられるに任された。
　南が二人に声を掛けるまで、少し時間が掛かった。
　南は深月に簡単に自己紹介をした後、世界各地の戦況と欧州方面の勝利を伝えた。最後に南はゼラたちの戦いの一部始終を語った。
　それを聞き終え、深月は頷くと、ゆっくり目を伏せた。
「ねえ、ミルキー……あの子は無事なのかな。ううん。きっと無事だと思う。だから……連れてきて欲しいんだ」
　欧州方面の勝利は人類に戦闘機械群への反撃の契機をもたらした。戦闘機械群が行った新次元の電撃戦は世界を席巻した。が、一度踏みとどまれれば、対処出来ないものではなかった。オーバーテクノロ

ジーの産物と思われた御使いは同じようにオーバーテクノロジーの産物、黒いウィクトーリアに駆逐されていった。正確には相討ちにとなっていたが、人類にとってそれは幸いと言える。黒いウィクトーリアもまた人類とは相容れない存在なのだから。

支援艦の後部甲板にウィクトーリアを立たせ、南宗司はある種の感慨を覚えた。トーキョーフロンティアを脱出して一ヶ月。いつの間にか南極海まで来てしまったのだから無理もない。

ウィクトーリアのセンサー類をチェック。支援艦から貰ったデータと同調。味方の布陣を確認するとまた感慨を覚えた。十数隻の艦船が南たちの呼びかけに呼応し、集結していた。まだ各々の国で戦いが続いていることを考えれば驚くべき数であった。集まってくれたのは国家軍だけではない。深月と親交のあったレイヴンたちもまた義勇兵として参加してくれていた。

戦闘機械群との戦いは数の不利もあってまだまだ続くはずだ。しかしその中枢を叩くことに成功すれば、一気に終わらせることが出来るかもしれない。ここに来たのはその可能性に賭けた人々だった。

『こちらタイクホワイト。ミルキー、聞こえる?』

『ゼラ、来てくれたんだ?』

『私もいるよ～』

(やれやれ。回線を私物化するとは困ったものだ)

そう思いながらも南は口を挟まない。

モニターを切り替え、艦橋を映す。ミルキーと深月の姿が見え、南は気を引き締めた。
「様子見がてら先に出る。ここからなら氷床まで届く距離だ」
『ウィクトーリアをお願いします』
深月の真摯な声がヘルメットの奥から聞こえてくる。彼女は黒いウィクトーリアの残機を指揮して貰わなければならない。黒いウィクトーリアの戦力無しにこの作戦は成り立たない。しかしウィクトーリアを遊ばせておく余裕はない。そういうことだ。
「もちろんだよ」
南は外部画像をＨＭＤに切り替え、発進の準備を整える。空は高く、青い。海も信じられないほど青い。その奥に白く輝く南極大陸の大地がある。有史以来、人類はこの大陸を戦場にしたことはない。しかし南はその禁を犯そうとしている。
「南宗司、ウィクトーリア。離陸する」
ウィクトーリアのブースト圧が上がり、甲板から浮かび上がる。
海上に躍り出て、浮かぶ氷山の頭を蹴りながら加速、氷床に向けて波を切る。
『南さん！　レーダーに敵反応！』
「予想通りでしょう」
ミルキーの甘い声がした。戦場でこんな声を聞くのは何やら罪作りのような気がする。それは単に彼

が彼女に恋をしているからなのだが、今の南にそこまで客観的に自分を見る余裕はない。
南はウィクトーリアの高度を上げ、まだ視界に入らぬ敵機を求めた。

ミッション［18］

南は外部画像をサブモニターからＨＭＤに切り替えた。視点が機体の頭頂部のそれに変わり、自分の力は何一つ変わらないのに何か出来そうな気がするから不思議だ。南極海の空は高く、青い。眼下の海も信じられないほど深く、青い。全てを圧倒するスケールでそびえる氷床もまた、自然の凄まじさを五感に訴えかける。温暖化で後退したとはいえ、氷床は未だ厚く広がり、人類を拒んでいる。その白く輝く氷床の大深部に南極大陸の大地がある。
その雄大さと比べればいかに人類の力が矮小かと思い知らされた。
ウィクトーリアの高度を上げた。レーダーに光点が現れる。形状と大きさから察するにリーフ状の小型戦闘機械と思われた。

『数は五十以上です』
「参ったね。それは」
南はそう口にするものの、さほど焦りもしない。今は単機ではない。同じ目的で戦闘機械群の中枢部を目指す仲間がいるのだ。
『ウィクトーリア、支援する』
唐突に無線が入った。南の知らない声だが、ウィクトーリアは知っていたのだろう。彼女は後方から来る機体を即座に味方と表示した。
（オルトリンデ。かつて彼女と任務を共にした機体か）
オルトリンデは北米軍の所属らしいＡＣと行動を共に大型強襲揚陸艇の上にいた。彼らが放ったミサイルは氷床上のリーフ群を目指して飛んでいき、数秒後、レーダー上の表示のほとんどをうち消した。リーフ群には回避行動を取る余裕があった。以前であれば半数以上が残ったような状況のはずだ。しかし今はこうも容易く撃破出来る。
（マトリクス共振システムをうまいこと妨害出来ているようだな）
南は安心し、念のため一端高度を下げ、そびえ立つ氷の崖と平行にウィクトーリアを上昇させ、氷床上に至った。
「うわ。偵察どころじゃないですか」

南は氷の地平線を越えるリーフ群と新世代規格機の軍団を目の当たりにして嘆息した。やはり先ほどのリーフ群はほんの一部にすぎなかったようである。

『心配するな。俺たちもいる』

無線の声を聞き、南は後方を確認した。ウィクトーリアの後を追うようにレイヴンたちが続々と南極大陸に足を踏み入れている。中には既に味方機表示されているものもある。その内の一機がウィクトーリアの隣までやってきて、声を掛けた。

『ミヅキじゃないんだよな？』

異形の機体だった。重量級ということ以外、外観から分かることはない。それほど規格外のパーツばかりだった。しかしウィクトーリアのデータが彼の名を教えてくれた。

（ウォーハンマー。そうか。これが欧州のトップランカーか）

欧州で戦闘機械群を押しとどめたことでその名声は更に高まっている。

「ええ。彼女は大切な身体です。この作戦の要と言っても良いのですから」

『カレルだ。あんたは？』

「私は南宗司。軍人です。よろしくトップランカー」

『ああ。実のところ、そいつは胸を張って言えない肩書きなんだが、オッサンがあの世にいる以上、俺が守らなくてはならないんでな。甘んじるよ』

南にはその意味がわからなかったが、彼の言葉は重かった。だから敢えて訊くこともしなかった。
「確か、二人の女性レイヴンが一緒だったと聞いていたが」
『あの子たちは置いてきた。彼女たちもミヅキを守ることを望んでいたからな』
「そうですか」
それで良い、と南は思う。誰であれ、人間同士の殺し合いを見ずに済めばそれに越したことはない。それに戦時においても女は子を産み、育てるものだ。そうでなければ人類は歴史を刻んでは来られなかったはずだ。破壊だけでは何も生まれない。炎に巻かれた後にだって緑は芽吹くのだ。そのことを南は今回の一件で強く感じていた。
（まただからこそ、人類がそうやって命を紡いで来たからこそ、人類自身が生み出したドラコーンという竜に立ち向かえるのだろう）
そしてそこまで考えて、はたと気づいた。
それは人類に戦いを挑んだ側としては不本意かもしれない。しかしそれでも南はファントム〝0〟を、
（そうか。それでも私は彼を人間と捉えているのか）
アスマのマトリクスを得た彼を人間だと思った。
「皮肉なものだな。いや、幸いと言うべきかな。決着をつける運命にあるミヅキは後方で待機し、代わりになんの因果もない私がこのコクピットに座っているなんて」

『いや。お互い何かしらの縁があったのだろうよ。そう思わざるを得ない』
カレルの言葉は南の心を捉えた。
「うん。そうだな。縁に違いない」
『カレル、聞こえるか？　レヴァインだ。合流する』
『ああ。待っていた。あの戦いで生き残ったのはあんたと俺だけになったか』
そしてオルトリンデともう一機が姿を現した。やはりウィクトーリアのデータにあったＡＣ・バイブ・カハだ。〝彼女〟らも女神の名を戴いた機体だ。
『やれやれ。こんなところまでつきあうことになるとは思わなかったぞ』
その乗り手はうんざりした様子だった。
『おっとカレル。俺を忘れてもらっちゃ困るぜ』
後方支援艦からガモスのシルヴィーユが到着し、ウォーハンマーを小突いた。
『おお。忘れてた。生きてたんだ、芸能人。というか、スポンサー？』
カレルが笑う。
『おうおう。喧嘩なら喜んで買うぞ。ただしトップランカーの決定戦ならな』
ガモスも笑い、南も笑った。
『敵、射程圏に入ります』

ミルキーの声がした。地平線から続々現れる戦闘機械群を前に、南は興奮の色を隠せない。

「行きますよ！　諸先輩方！」

戦闘機械群から幾筋もの狼煙が上がり、無数の火球が流星群のように降り注ぐ。青い氷の大地に爆炎が広がるが、レイヴンたちはその攻撃を難なくかわし、傷一つ負っていない。

『敵の布陣を突破してください。戦闘機械群の中枢へ誘導します』

ミルキーの声は仕事に徹している。自分の気持ちも切り替わったことに南は少し安堵した。

（とはいえ、簡単に言ってくれる）

南はそう心の中で言葉にする。だが彼とウィクトーリアが先陣を切って戦闘機械群へ突撃を掛けるのは、当事者としての自覚があるからだ。そして頼れる仲間たちがいるからだ。

ほとんど間もおかず、レイヴンたちの機体も跳ね飛ぶように前進を始め、敵陣に切り込んだ。

戦闘機械群を指揮するのはかつて企業体が放棄したドラコーン……またの名をウロボロスと言う……計画の落とし子、ファントム〝0〟である。正確にはファントム〝0〟ではなく、アスマの身体を得た別の存在だ。別の意識を持ち、別の行動原理を持つ者だ。が、彼に名はない。名を付けるものもいなかったし、名を呼ばれる必要もなかった。そういう意味ではやはり彼も幽霊なのだろう。

かつてファントム〝0〟は世界中の人工知能をネットワークで繋ぐことで超存在足り得ていた。多く

の人的・天然資源を陰で利用し、アーマード・コアの次世代規格機を開発した。しかしファントム〝0〟は己の命題を兵器開発のみに止まらせることなく、兵器を操る人間そのものの探求に着手した。そしてネットワーク上から消されることを危惧し、生体装置上に自らを移すことを考えた。人類は数十億に膨れ上がり、自滅の道を辿ってはいた。しかし未だ地球は人類が支配しており、レイヴンの戦闘経験要素とはまた別に、バックアップの一つとして有効だと考えたからである。

南極大陸の地下に広がる無人の生産拠点に、ファントム〝0〟はただ一人いた。生身の身体を持ってはいたが、彼は生まれも育ちも、人間と異なる。かつてのファントム〝0〟と同じようにネットワークによってのみ外界と繋がり、世界を俯瞰し、物事を知った。その点に置いては有機体と無機体の差しかない。ただ、今のファントム〝0〟はかつての彼とは異なり、曲がりなりとも人間らしい部分がある。それはマトリクスのベースとなったアスマの経験と記憶が定期的に補充されていたからだ。それはアスマが倒れて入院する度に補充されたもので、彼がアクアポリスに来る直前までバックアップがとられていた。だからアスマが深月を深く愛したことも自分のことのように理解していた。

しかし彼には人工知能群から与えられた重要な役割があった。それは旧態依然とした兵器体系を完膚無きまでに叩きつぶし、世界中の兵器体系を一段上の高見に、次世代規格機のそれに変えることである。死者たちを戦わせることも、深月に黒いウィクトーリアを与えることも、彼にとっては実験及び人類に対するデモンストレーションに過ぎない。黒いウィクトーリアは人類が容易く滅ばないように意図して

設定したユニットである。

しかしファントム〝0〟はそれにウィクトーリアの意匠とマトリクス共振のマスターに深月を用いた。

その理由を彼は深く考えていなかった。

そう。考えていない。

ファントム〝0〟は今もそう思おうとしていた。

しかし人類の非正規軍に先んじて、数機の黒いウィクトーリアがクレパスの底に舞い降りたとき、少し事情が違うのではないか、とようやく考え始めた。黒いウィクトーリアの動きは以前にここに到達したときよりも遙かに動きが悪くなっていた。そしてそれは自軍の動きにも同じことが言えた。マトリクス共振システムに不具合が生じている。原因は不明のまま。リーフ群やファントム機が自律プログラムで動く割合が増え、損耗が激しくなっていた。人類の非正規軍にはそこにつけ込まれていた。このままではこの生産拠点に切り込まれる可能性がある。世界を焼いた後に必要なのは、人類全体の仮想敵……つまり自分である。強大な仮想敵があるからこそ、世界中の軍備が刷新される。

こんなはずではなかった。

ファントム〝0〟は紅い御使いの力をもって黒いウィクトーリアを容易く葬り去った。しかしまだ人類の刃たるレイヴンたちがここに迫っている。彼らは自分の意志で機体を操り、運命に抗う。アスマの経験と記憶を持つ彼にはそれが脅威であることを理解していた。

誇り高いレイヴンを決して侮ってはならない。それを知っていたはずなのにファントム〝0〟は黒いウィクトーリアと深月を使った……。

ドラコーンは竜である。自らの尾をくわえ、円を成すそれは無限と不老不死のシンボルでもある。もし人工知能群の開発者たちが次世代規格機開発計画にその名をつけなければ、ファントム〝0〟がアスマの身体に意識を移すこともなかったかもしれない。ドラコーンは自らの尾を口にくわえている。悪竜の最大の弱点は自らを喰らってしまっていることだと気づいたのだ。

『黒いウィクトーリア、全機ロストしました。紅い御使いは健在です』

「うん……それは想定内だ。ちょっと早いけどこちらが雪崩れ込んだのだから仕方がない」

ミルキーの報せに南は落ち着いて答えた。

「聞こえました？　ガモスさん。どうしますか？」

『どうするったって多勢に無勢だからな』

ウィクトーリアとシルヴィーユは尽きることないかと思われるほど多くのリーフを相手に苦戦していた。リーフ群の動きは鈍く、自動応戦であることは明らかだ。それでも弾薬が尽きることを畏れて、今は二機、互いの背中を守るようにして、レーザーブレードで対応している。

『こうも動きが変わるとはな。ゲームの難易度が変わったみたいだ』

少し離れたところでカレル機ウォーハンマーが両腕のエネルギーシールドでリーフを押し込んでいるのが確認出来た。

『ファントム級、来ますよ』

モリグーから警告。レーダーにそれらしき反応が複数現れた。

『ありゃあ、まずいな。自動応戦でも三機がかりで勝てるか怪しい』

ガモスが諦めたような口調で言うが、それっぽく聞こえないのが不思議だ。元トップランカーらしく、表情は引き締まっているに違いない。

『問題ない。じきに応援が来る』

オルトリンデを駆るレヴァインから呟きのような応答があった。

「応援、ですって？」

『ああ。カレル、君なら分かるだろう。一緒に戦った君なら』

『そういうことだな』

二人はお互いの感慨を確かめるように言葉にしていた。

『各機注意してください！　外洋から超音速で接近する敵機群あり！　御使いだと思われます！』

ミルキーの声がしたかと思うと複数の光点がＡＣのレーダーサイトに現れ、瞬時に戦闘圏に到達した。

遙か上空からパルスレーザーとミサイルの雨が降り注ぎ、後方のリーフ群とファントム級の新世代規

格機を焼いた。
見上げると〝黒い奴〟が編隊を成して、上昇を始めていた。
「どうして御使いがこっちの味方をしてくれるんだ……」
南は一瞬だけその光景に見とれたが、依然として目の前にはリーフが数機、攻撃を仕掛けてきていた。
『さっさと蹴散らして生産拠点まで突撃だ』
背中のガモス機から心強い言葉を貰い、南は迷いなく頷いた。
「了解！」
ウィクトーリアは目前のリーフを袈裟斬りすると残骸を足場に空に舞い上がってリーフ群を突破する。それに倣うように次々とACが戦場の空に舞い上がり、目的の場所へとスラスターを噴かす。
「勝機あり」
南は呟き、〝黒い奴〟が作ってくれた戦場の間隙に着陸。ファントム〝0〟がいるというクレパスへ向かう。先陣を切ったウィクトーリアに追従出来たのは、先の四機だけであった。これも縁というのだろうと、南は思った。四機であの紅い御使いに勝利出来るかは分からないが、勝機は人類に傾いている。今なら突入出来るのに増援を待って、この流れを途絶えさせたくない。
クレパスは大きく口を開けていた。蒼く光る氷の谷は深い。日の光は底まで届いていないだろう。深淵はまさに闇が支配する場所だった。

『ここが地獄の一丁目って奴か』
ガモスは愉快そうに言った。
『なんの。まだ俺たちは生きているぜ。オッサンたちの力を借りてはいるけどな』
カレルも負けていない。
『ああ、そうか……そうだったな。ではここは冥府の入り口に違いない』
レヴァインはもったいぶって言う。
南には分からないが、二人の戦友たちは今もまだ御使いの中に戦闘データとして存在する。御使いはマトリクス共振システムによってファントム〝0〟の制御下にあった。しかし今、それは妨害されている。御使いが反旗を翻しても不思議はない。
『うわ。舞台の台詞みたいなんですが、大丈夫ですか、みなさん。かなり自分に酔ってません？』
一番冷静なのはモリグーのようだ。確かに変な台詞回しだ。一同は苦笑した。
「自分に酔わないでこんな無謀なこと出来ないでしょう。だから酔狂って言葉もあるんですけどね。じゃ、先行かせて貰います！」
南はウィクトーリアをクレパスの底を目指し降下させる。残る四機もすぐに続く。地表までは二〇〇〇メートル近くあるが、黒いウィクトーリアから得られた情報によると谷の底は一〇〇〇メートルほど。そこから地表までは巨大な生産施設が存在する。資源の採掘から次世代規格機の生産まで全てを無人で

行える設備が整っているはずだ。
（もしファントム〝０〟を排除した後、我が国がここを占拠出来たなら……）
そんな考えを南が抱いたとしても誰も責められないだろう。世界の軍事バランスを一夜にして崩した戦力が手に入るのだ。
（だけど私の予想が正しければ、そうならない）
南にはこの先に何が待っているのか、おおよその見当がついていた。ファントム〝０〟なる人工知能群の化身が待ち受けていることは間違いない。しかしそれだけではない。長い眠りから覚めた深月は生身のファントム〝０〟が自分の存在を知って貰いたいが故に、黒いウィクトーリア群を建造し、深月を南極に招いたと言っていた。それは事実だろう。が、それだけの理由で自分の弱点を二つも晒し出すとは考えにくい。戦闘機械群に抗う戦力を与え、自らの本拠地の位置を教えるというのはあまりに愚かだ。
ファントム〝０〟とまた別の存在がここにいる。その存在がファントム〝０〟の自己顕示欲につけ込み、うやむやの内にそれを実現させた。
そう南は考えていた。だが、その予想をミルキーと深月には話さなかった。もしそれが正解だったとしたら彼女たちには辛い事実だからだ。特に今の深月にとっては。
クレパスの底が見えてきた。光が差さぬ闇の中、ＨＭＤの映像は暗視モードに切り替わっている。
レーダーに敵機の反応が現れ、南は息を呑む。予想していたとはいえ、一番の難敵の登場だ。

『紅い奴か。ミナミ、ここは俺たちに任せて先に行け。ガモス氏はミナミのバックアップに』
一番の年長者であるレヴァインが、機体を先行させる。
『おうおう、仕切るねえ。だが俺も同感だ。ミヅキがいないなら、この先はウィクトーリアに権利がある。俺は見届け人ってところかな』
『本気ですか？　相手は御使いですよ！　五機がかりでもやられるかもしれない』
モリグーが悲鳴に似た声で正論を述べる。
『何言っているんだ。ここまで私と一緒に戦って来られただろう。自分の腕を信じろ』
レヴァイン機がついてこいとジェスチュアした。カレル機が無言でついていき、紅い御使いを回り込むように緩降下を始めた。
『全く！　あんた方は一体！　命知らずにもほどがある……まあここまで来た自分も、その類の人間なんだろうなあ』
バイブ・カハはカレル機の逆方向から回り込み始める。
「恩に切ります」
減速しながら降下していたウィクトーリアを今度は加速させ、クレパスの底で待つ紅い御使いの頭上を越えて、生産施設の入り口に向かう。続いてガモス機シルヴィーユも、紅い御使いのパルスレーザーを回避しながら続いた。紅い御使いはその二機を照準に捉えたが、邪魔が入った。

『待てよ。お前の相手はこの俺とウォーハンマーだ』
両腕のエネルギーフィールドを最大に展開し、オーバーサイズである御使いを圧した。純粋なパワーから言えば、圧されるはずがない。だが、圧された。
『私もだ』
カレル機の背後からレヴァイン機が現れ、レーザーブレードを振りかざす。レヴァイン機のレーザーブレードは紅い御使いのエネルギーフィールドを切り裂き、その隙にモリグー機バイブ・カハがマシンガンを乱射した。だがこれで終わる御使いではない。ダメージは軽微だ。
まだまだ。
そう言うかのように紅い御使いは頭部センサーを光らせた。

戦闘機械群の生産拠点への入り口まではミルキーが導いてくれた。直前まで深月が黒いウィクトーリア群を戦わせていたから、地形を覚えていたのだ。薄く氷が張ったクレパスの底を指示に従って走ると半地下式の開閉口を見つけた。南とガモスは扉を破壊し、生産拠点内部に進入した。
御使いサイズの通路は探知範囲の遥か奥まで延びていた。防御装置が作動するかと身構えていたが、それらしき兆候は現れない。その代わり誘導灯が点滅し、二機を奥まで誘った。南とガモスは罠を疑いつつも、その誘導に従って進んだ。

長い通路を進むと、巨大な縦坑が現れた。縦坑にはエレベーターが設置されていた。おそらく南極大陸の地表まで行けるのだろう。エレベーターの扉が開き、二機は導かれるままに乗った。静かに扉は閉まり、エレベーターは徐々に降下を始めた。
『思った通りだな』
ガモスが小さく言った。彼も南と同じような結論に達していたようだ。
「ええ。紅い御使いの戦いにファントム〝0〟が集中している。今、僕らを導いてくれているのは『死者』の誰か」
南は慎重に言葉を選んだ。だがガモスは死者の名を口にした。
『俺には分かる。アスマだ』
「ミルキーと深月はその名前を口にするのを疎ましく思っていたようですが」
『誰にだって触れられたくないことはある。だが事実だ。今回もファントム〝0〟から人類を守ったのはアスマ。そう。それが一番、道理に合う』
「どんな人か、会ってみたかった」
『会えるさ。これから』
ガモスの言葉は、また、小さかった。
エレベーターが止まった。扉が開いたが、不用意に外には出ず、二機は陰に隠れて様子を窺った。だ

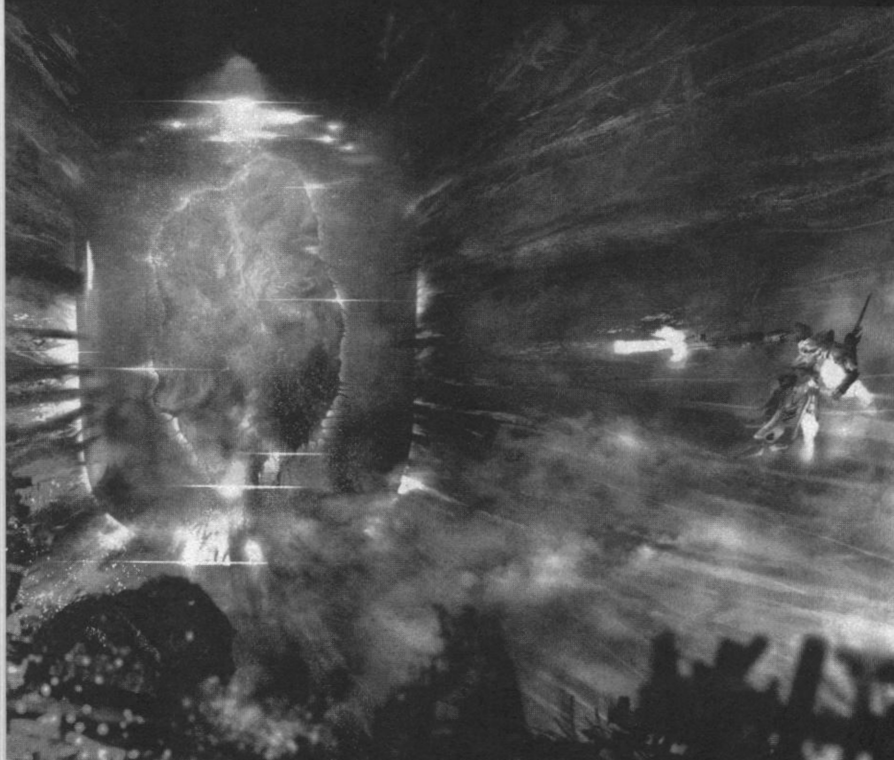
が待ち伏せされている気配はない。
『どうやらまだみんな頑張ってくれているようだな』
「そうですね。じゃあ、行きますよ」
二機はエレベーターの外に飛び出し、手持ち火器の銃口を正面に向けた。

ファントム〝0〟にとってたかが三機の従来規格機に圧されるなどということはあってはならないことだった。しかし戦闘開始から五分が経過しても互いに微々たる損害しか与えることが出来ずにいた。
原因は一つだけ分かっている。マトリクス共振システムが不調で機体のパフォーマンスが低下しているのだ。理論上、同等・同質のマトリクスと高度に暗号化された共振装置がなければ、システムが成り立たない。また妨害にも同様のものが必要なはずだ。事実、現在も外部からの共振は探知出来ない。だからこそ彼は焦っていた。外部に原因がなければ、システム内部に原因不明の故障があるということだ。それに気づき、ファントム〝0〟は生産拠点内部をスキャンするが、目の前のレイヴンたちが邪魔で上手くいかない。
『テメエの敵はこの俺だ！　余所見すんな！』
カレル機ウォーハンマーが至近距離で大火力を集中する。
《負け犬が！　いつまでも吠えるな！》

ファントム〝0〟は思わず答えていた。
『たとえ負け犬だろうとな！　最後まで足掻いて足掻いて、勝てばそれで良いんだよ！』
分からなかった。
やはり人間は、理解出来なかった。
アスマの記憶と経験があっても、同じように人生の選択を出来る訳ではない。仮にファントム〝0〟がアスマの立場なら、彼は病院暮らしを選んだだろう。
《だが、良い、実験だ》
ファントム〝0〟は潔く納得した。それが突破した二機の動きを彼に忘れさせた。

「なんだ……これは」
南は呆然と呟いた。エレベーターの扉が開くとライトに照らし出されたガラスの輝きが目に入った。
『あいにくおじさんはこんな風景を大昔の映画で見たことがある……気がする』
そう軽口を叩くガモスだが、圧倒されているのは無線越しでも分かった。
今、二人の目に映っているのは巨大なフラスコ。ウィクトーリアの視点から見ても見上げるほどの巨大さだ。フラスコの口は数多の機器で蓋をされ、その機器類は無数のケーブルで壁面や周囲の機器と繋がっている。そしてフラスコ内部に巨大な肉塊がある。肉塊は脳髄のようであり、嬰児のようであり、

とぐろを巻く竜のようでもあり、またそのいずれでもない奇怪な代物だった。
「そうか。これがマトリクス共振システムの中心。肉体を得たファントム〝0〟そのものか」
南は瞬時に理解した。そうでなければ何者かがここに誘導するはずがないのだ。
『そう考えるのが道理だな。なあ、そうなんだろう?』
ガモスは何者かに向かって問う。
《そうだ》
壁面に光の文字が浮かんだ。
《急げ。時間がない》
『迷っている暇はないようだな』
「ええ」
ウィクトーリアとシルヴィーユは巨大なフラスコに向けて銃口を向け、微塵のためらいもなくトリガーを引いた。



EPILOGUE
【エピローグ】

人工知能群が引き起こした災厄から四ヶ月が過ぎていた。

その間、南宗司は国家保安局のオフィスに詰めっきりで事件の事後処理をしていたが、それも今日で終わる。上司に最終報告書を送り、南はデスクにうつ伏せた。しばらくしてからよろよろ立ち上がり、休憩室に行ってコーヒーで一服。窓際の席に座ってプリントアウトした資料を眺め、しばらく感慨に浸った。そして資料の一枚一枚をゆっくりめくり、活字と画像を目で追う。画像の一枚はウォーハンマーとオルトリンデが紅い御使いと相討ちになった場面だ。彼らと御使いの対決は生身の人間の可能性を示すものだった。だがその力をもってしても、時代という名の時計の針は戻せない。人工知能群が残した次世代規格機の技術は解明されつつあり、まだ完全ではないものの市場に反映しつつあった。

また一枚、頁をめくる。今度は巨大なフラスコだ。口は数多の機器で蓋をされ、その機器類は無数のケーブルで壁面や周囲の機器と繋がり、内部には巨大な肉塊がある。それが肉体を得たファントム〝0〟だった。膨大な数の戦闘機械群を制御するために、人の姿をとれなかったのだ。

この画像の直後、南とガモスがファントム〝0〟のフラスコを破壊した。その後、生産拠点は沈下を始め、二人は脱出を余儀なくされた。結局、生産拠点は南極の氷床下に沈み、次世代機規格を創り出した超技術は謎のままとなった。南のレポートではそういうことになっている。実際はそうではないが、それは南とガモスとミルキー、三人だけの秘密だ。

その後、南は机周りを片付けて定時で退庁した。明日からはしばらく休みの予定だった。代休がたま

りにたまっており、休むよう上司から命令されていたからだ。それを幸いに南はいろいろ計画を立てていた。そのうちの一つが、今夜ブレイブ・ニュー・ワールドで行われる試合の観戦だ。南は庁舎の地下階から地下鉄に乗り込むとトーキョーフロンティアに向かった。

南がアリーナのＶＩＰルームに着くと席にはもうガモスの姿があった。

南が簡単に挨拶するとガモスは笑った。

「なんだ、デートじゃないのかい」

「それは明日です」

「そいつはお楽しみだな。お前も公務員なんかやめてレイヴンになっちまえば良いのに」

「はは、そうもいかなくて。親父やお袋を心配させたくないですし」

「それも人生だ」

ガモスは大人の笑みを浮かべ、南は安心した。

「ミヅキには会うのか？」

「ええ。それも明日」

「本当にデートか？」

「……厳しいツッコミですね。でもそろそろ彼女に伝言を伝えないといけないかな、と思いまして」

ガモスは小さく頷いて視線を外した。

「それも幸せなことだ」

『自分が』幸せなのか『ミルキー』がなのか。それとも『深月が』なのか……『彼が』なのか。

南は訊かなかった。訊く必要もなかった。ただ頷いた。

《僕は生きている》

そう。生きているのだから。

もうすぐ試合が始まる旨のアナウンスが入った。軽食とビールが運ばれてきて、南とガモスは乾杯し、試合開始を待った。今日はウォーハンマー対オルトリンデの特別招待試合だ。英雄となったレイヴン二人の試合はプラチナチケットになった。戦闘機械群がもたらした災厄は世界経済に絶大な損害を与えた。今は復興期に入っていたが、正直、先行きは暗い。だから世間が英雄を仕立て上げたとしても無理はない。しかしそれは外野の思惑だ。本人たちにとっては一つ一つが大切な試合である。それもお互いを知る仲だ。否が応でも気持ちが高ぶるだろう。

試合が始まり、スタジアムは沸いた。南とガモスにとってその勝敗に意味はない。ただ、共に戦った仲間がこうして元気にしていることが嬉しかった。グラスに幾度も黄金色の液体が注がれ、二人は口の周りを泡だらけにした。

特別招待試合の後はランキング二位戦だ。当アリーナ所属のモリグーがトップランカーを狙える位置

まで来たのだ。元トップランカーのガモスとしてはちょっと複雑なところだろう。試合はモリグーの勝利に終わり、トップランカー戦の決定がアナウンスされた。モリグーは世界を救った英雄の一人である。本当の実力かどうかは分からないが、このチャンスを生かさない訳にはいかないだろう。

「面白かった」

別れ際、ガモスはそんなシンプルな感想を述べた。そして、これからペーパービューの収録だと続けた。素面じゃなくて良いのかと南が訊くと、少しくらい酔っていた方が良いのさ、とガモスは答えた。歴戦のレイヴンらしい剛胆さだった。

南はトーキョーフロンティアを後にすると新宿から高速バスに乗った。アルコールのお陰ですぐに眠くなり、南はリラックスシートで眠りについた。

瞼の向こう側に光を感じ、南は目を開けた。半身を起こしてカーテンを開けると朝日が眩しかった。車窓の外には典型的な山村風景が広がっている。北アルプスの雄々しい山々の麓、山の恵みと遠い昔に開墾された田畑を耕し、人々は生活している。

ほどなく高速バスは終点のターミナルに着いた。まだ早朝だったが嬉しいことにミルキーが出迎えてくれた。南は思わず頬を緩ませるが、きょとんとしたミルキーの顔を見て、南は嫌な予感を覚えた。

「南さんもこのバスに乗ってたんだ?」

「あ、いや、その、このバスだってメールで知らせたよねえ？」
「そうだったけ。今日来るのはさすがに覚えていたんだけど」
「じゃあなんで待っててくれてたの？」
「やっほーミルキー！」
「お迎えありがとー」
同じ高速バスから降りてきた少女二人がミルキーに抱きついた。南はしばらくその様子を眺めていたが、資料にあった顔に思い当たり、納得した。ティフィンとゼラ。ミルキーが砂漠の街で〝黒い奴〟と戦ったときの仲間だ。これでは待つしかないかと南が思ったとき、ミルキーの視線に気づいた。
「はいはい。分かりました」
南はバスのトランク前に向かい、乗務員から自分と少女たちの荷物を受け取った。
受け取った荷物をミルキーのＳＵＶに積み込むと南は運転席に座った。
「誰？　ミルキー紹介してよ」
後部座席のゼラが助手席のミルキーに訊く。
「国家戦略局の南さんです。今回お世話になったの」
「もしかして彼氏さんですか？」

ティフィンの問いに南は胸を押さえる。
「えーっと、お友達かな」
(動揺するな。所詮は女の騙し合いだ)
南はハンドルを握り直した。
「でも二人ともよく日本に来たね。わざわざ会いに来てくれた訳じゃないでしょ?」
「何言ってるの。会いに来たのよ」
バックミラーに映るゼラの顔に嬉しそうな微笑みが浮かんでいた。
「ありがたいねえ」
ミルキーは口元をほころばせる。
「日本観光もしたいのよ。ここのところ仕事ばっかりだったから、息抜き。ここって観光地なんでしょう? ジンリキシャだっけ? 乗りたいなあ」
ティフィンはガイドブックを片手にはしゃいでいる。
「この地方はお肉も美味しいんでしょ?」
「大丈夫。南さんは料理も出来るのよ」
「へえ。そうなんですか」
ティフィンが感心してくれる。

「ええ。一人暮らし、長いんで」
「そういえばアスマも料理、上手かったっけ」
ミルキーが呟く。
「今夜は期待してください」
その名を聞き、南は気を引き締めた。アスマはもう彼女たちの側にいない。それは事実だ。

SUVは国道を逸れて山への道を上っていた。目的地は市街地から少し離れた緑深い山間部だ。南極での戦いの後、深月とミルキーは学校を休学し、この古い町に住んでいた。しばらくして集落が見えてきて、南は集落の入り口にある古い民家の庭先にSUVを入れた。その民家の隣には不釣り合いなほど巨大なガレージが建っている。その中には作業用の多足ワーカーとACトレーラーに乗ったままのウィクトーリアがいた。
「やあ。久しぶりだね」
南は車から降り、ウィクトーリアに挨拶した。
「南さーん」
ミルキーに声を掛けられ、南は脱力しながらも車から荷物を下ろした。
「遠いところ、よく来てくれたね」

縁側から作業着姿の深月が降りてきて、みんなを出迎えた。

優しい笑顔をするものだ、と南は安堵した。

南たちが落ち着くと深月は縁側でお茶を淹れた。縁側に腰掛け、五人で緑茶をすする。南は青い空を仰ぎ、白い雲を眺める。視線を下ろすと、険しい斜面に木々が葉を、幹を伸ばしていた。

「どう？　順調？」

ティフィンが深月のお腹を見て訊いた。

「うん。この前の検診では異状ないって言われた。この子は普通に授かった訳じゃないから心配だったんだけど」

深月は心配そうにお腹をさすった。まだ四ヶ月ほどだ。お腹は目立たない。お腹の子の父親はもちろんアスマだ。普通の妊娠であれば計算が合わないが、人工授精ではない。アクアポリスでマーウォルスと戦ってから一年近く経つが、実はそのときにはもう、小さな命が芽生えていた。

アリーナでの試合前、レイヴンには身体検査が義務づけられている。深月の場合、マーウォルス戦の前の精密検査で着床寸前の受精卵が発見された。それは女性特有の精密検査だった訳だが、今にして考えれば戦闘用人工知能群の差し金だったのかもしれない。試合に支障を来すという理由で受精卵は摘出され、そのまま冷凍保存された。

そのときはアスマの意見を聞く時間も、そして聞く理由もなかった。その戦いが終わった後も、深月はまだ子どもを産む気になれなかった。幸い冷凍受精卵は半永久的に保存可能だ。深月は時を待つことにした。そして機会は意外と早く訪れた。先の戦闘機械群の襲来である。

ゼラは欧州軍に加わり、戦闘機械群と戦った。そのときゼラは御使いの一機と邂逅した。その御使いのマトリクスはゼラの父シンサであり、彼はゼラとの戦いの中で仮想人格を取り戻した。そしてファントム〝0〟に反旗を翻し、欧州の戦闘機械群を討ち滅ぼした。

その報告を聞いたミルキーは仮説を立てた。

『妨害不可能と考えられていたマトリクス共振システムだが、戦闘ユニットを制御するマトリクスの肉親は、その制御に何らかの影響を与えるのではないか』と。

ファントム〝0〟がアスマのマトリクスを取り込んでいたことは、アクアポリスでの調査で既に判明していた。だから深月は受精卵を自分の中に戻すことにした。その結果、戦闘機械群の統制は乱れ、人類は南極での戦いに勝利した。

その後、南が各種資料を検討した結論から言えば、マトリクス共振システムは肉親程度の存在で妨害されるほど陳腐なものではなかった。そもそも人工知能群がその程度のテストをしていないはずがなかった。しかし現実にはコントロールが乱れた。それについて南は最終レポートでこう言及している。

『妨害の事実は確認出来ない。が、共振システムが近しいマトリクスを検出したことで、本能的に人工

知能群内の仮想人格が反応したのではないか』
親が子を思う気持ちは、機械になっても同じ。そう南は信じている。
「しかしここは子育てには抜群に環境が良いところだね。空気もきれいだし、水も美味しいし。どうしてこの町で暮らすことにしたの?」
ゼラは周りを見渡し、感心する。
「パパが現役のときに買った山があるの。この辺みんなそう。決して緑を絶やしてはいけないってね。この民家もパパが買ったの。自分で手直ししてね」
ミルキーが自慢げに言う。
「さすが元高位ランカー。高額納税者だ」
南は深く頷いた。
「ゼラとティフィンは今、どうしているの?」
深月は湯飲み茶碗に口をつけた。
「私は現役ランカーよ。カレルさんを倒すつもり」
ゼラは不敵に笑った。
「トップランカーになるのか。でもカレルさんの強さは人外だから、頑張ってね」
深月は目を細めた。

「ティフィンも現役？」
「ううん。ちょっとお休み中。私に出来ることって他にもあるんじゃないかって考えているの」
ティフィンは照れたように頬を掻く。
「今度、キアーヴェさんが作った養護施設に一緒に行こうって話してたんだ。報告することもあるし」
ミルキーがティフィンの肩を抱いた。キアーヴェと言う名には南も聞き覚えがあった。確か人工知能群に取り込まれたレイヴンの一人だ。それを思い出し、南はある種の感慨を覚える。人工知能群は多くの人間の人生を狂わせた。だが人間は今もこうして、狂わされた後も違う生き方を模索している。
「そっか。ワタシも行きたいけど、動けるうちはこの山の手入れをしたいしね」
深月は山を見た。
「出来ることが分かっているなら、それをやるのが一番だよ」
深月を元気づけるようにゼラは大きく頷いた。
良い友人たちだな、と南は思う。
「ねえ、南さん」
ミルキーの声に反応して南が顎を上げた。
「私、朝ご飯まだなので南さん、何か作ってください」
「は、はい」

「私たちの分も～」

少女レイヴン二人も手を挙げ、南は脱力しつつ台所に向かった。

「南さん、ミルキーのこと本当に好きなのね」

「もう尻に敷かれてんじゃん」

「そう？　あれくらい普通じゃない？」

縁側から少女たちの会話が聞こえてきたが、南は聞かなかったことにした。

朝食はありあわせで済ませ、昼食は蕎麦と天ぷら。結局、南はほとんど一日中台所に立っていた。深月が手伝おうとしたが、他の三人に制止された。

（こういう休日も悪くない）

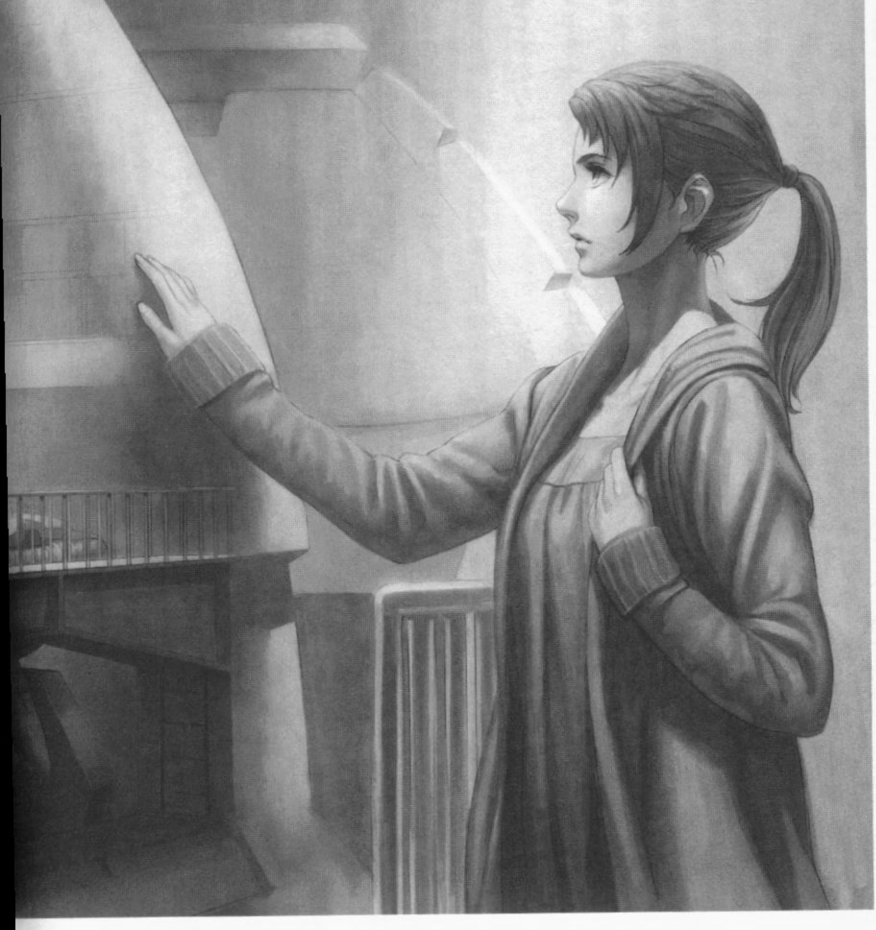
今までが忙しすぎた。料理をするのもストレス解消だ。夕食は地元の特産和牛でステーキ。囲炉裏端で心づくしを振る舞い、一服した後、南は後片づけを始める。ティフィンとゼラは日本酒がいたく気に入ったようで、ほろ酔い気分で布団に潜り込んだ。

ミルキーは後片づけを手伝い、食器を拭きながらしんみりと言った。

「今日はわがまま聞いてくれてありがとうございました」

「いいえ。どういたしまして」

「怒らないんですね」
「フェミニスト気取りってだけですよ」
「私のこと、好きですか？」
「ええ。とても」
自然にそう答えてしまい、南は自分に呆然とした。
「私も南さんのこと、好きかな」
「それは、どうも」
そう答えるのが精一杯だった。
「南さんは、ミヅキちゃんに伝えに来たんでしょう？」
「男の約束ですから」
「でもミヅキちゃん、そんなこと言われなくても分かっていると思いますよ」
「そうなんでしょうね。だから伝えるのは一言だけにしておきます」
南は水道の蛇口を閉め、手を拭いた。
「彼女はガレージだと思います」
「じゃあ、行ってきます」
「結果報告、待ってます」





ミルキーに見送られ、南はガレージに向かった。

ガレージの中は白熱灯の明かりで満たされていた。
その光の下、深月はウィクトーリアの頭の隣に立ち、目を伏せていた。
「何をしているんですか?」
南はトレーラーの下から深月に声を掛けた。
深月は瞼を開け、南を認めた。
「ウィクトーリアと話をしていたの。今日の報告かな」
そう言うと深月はおかしいでしょう、と続けた。
「いいえ。ちっとも」
南は深月を見上げながら言葉を続けた。
「実は南極で伝言を預かったんです」
そう言うと深月の顔色が変わった。しかしすぐに柔和な表情に戻り、笑った。
「そう。どんな伝言ですか?」
「《愛している》って。それだけです」
「そんなこと分かってるのに。男の人は言葉にしないと駄目なのかな」

「確かにあなたは分かるでしょう。でも生まれてくる子どもには言葉にして伝えたかったんですよ」
「そんなの……守り抜いてくれたことで分かるよ。だけど……ありがとう南さん。これでその言葉を、この子にはっきり言える」
深月の目は潤んだが、決して涙は流さなかった。
強い子だ、と南は思う。強くならなければならなかったのだとも思う。
南極の生産拠点でファントム〝０〟を滅ぼした後、南とガモスを導いたアスマは自らの存在を死者だと語った。肉体を持つファントム〝０〟が有していたアスマの経験と記憶には他の死者同様、人工知能群の中で仮想人格を与えられていた。他の仮想人格と異なり、この生産拠点にのみ宿っていたため生き残った存在だった。この生産拠点そのものが戦闘用人工知能群のハードウェアのバックアップだったのだから、切り離されていて当然だった。
仮想人格のアスマはファントム〝０〟を巧みに誘導し、黒いウィクトーリア群を建造させ、戦闘機械群に立ち向かう力とした。そしてファントム〝０〟に気取られぬよう細心の注意を払い、南とガモスを巨大フラスコまで誘導した。そう言った意味ではアスマは人類という種の抗体そのものだった。
《ガモスさん、そして南さん。深月と僕の子どもに伝えて欲しいんだ。『愛している』と》
南とガモスはアスマと固い約束を交わした。そしてアスマは人工知能群が残した全てのデータを封印すべく、南極大陸の地下に生産拠点を沈め、氷床のクレバスを閉じた。今後数十年は人類の手に届かな

いであろう堅い封印だ。だがそれは仮想人格のアスマが永い孤独を生きることを意味していた。
《それでも良い。今度こそ深月を守れた。これで僕はやっと安心して眠れる》
アスマはそう言い残し、二人を脱出させた。
その経緯を南は深月に伝えなかった。頼まれた伝言を果たすだけで十分だと思ったからだ。
南はガレージを後にして母屋に戻った。
ミルキーは明日の朝食の下ごしらえをしていた。そんな彼女を見て南は愛おしさを覚えた。南は彼女に報告を済ませ、満足して目を伏せた。すると人の温かさと柔らかい身体を背中に感じた。
「ありがとう」
ミルキーが耳元で囁いた。首筋に息が掛かるほど、近くだった。
石けんの良い香りがした。

アスマは生きている。
南極の氷床の下、彼の意志は確かに存在している。
サーティと同じように肉体を再生することも可能だ。そうすれば再び深月を、そして生まれて来る子どもを抱きしめることも出来ただろう。しかしアスマはそれを潔しとしなかった。それが彼の選択だった。新世代機規格とそれらから派生した超技術は今の人類にはまだ早い代物だ。死と生すら自在に管理

する竜をまだこの世に放ってはならない。それがアスマの決断だった。
だがいつの日か、人類がドラコーンの力を必要とする時代が来るかもしれない。そのとき彼は自身の知恵と力の全てを掛けて、困難に立ち向かうだろう。
それまで彼は眠り続ける。
今は深月と、その次の、子どもたちの時代だ。
深月はウィクトーリアの側で願い、未来を夢見る。
この子が育つ世界がより良い世界でありますようにと。
どうか笑顔でいられる世界でありますようにと。

これにてブレイブ・ニュー・ワールドの物語を終える。

ブレイブ ニュー ワールドをもっと良く知るために

アーマード・コア ブレイブ ニュー ワールド

AC用語辞典

※ここに掲載した用語は『ブレイブ ニュー ワールド』のための限定したものであり、実際のゲームである『アーマード・コア』シリーズの世界観とは異なります。

[用語]

AC

アーマード・コアの略称。身長10メートルの人型兵器。コアと呼ばれる胴体パーツを中心に、頭部、両腕、脚部(下半身)の各パーツと、全身に配置されたマウントラッチへ武装を取り付けることにより、さまざまな戦局に対応する機体を作ることができる。ジェネレーターやレーダーなども換装が可能で、外観だけではその性能が判断できないという特徴を持つ。この世界では、あらゆる戦場で主力兵器として普及している。

EUアリーナ

世界各国のアリーナの中でも、とりわけてレベルの高いEU=ヨーロッパアリーナのこと。

HMD

ヘッド・マウント・ディスプレイの頭文字をとった略称。その名の通り、頭部に装着するディスプレイ装置のことで、レイヴンの耐Gスーツのヘルメットに内蔵されている。操縦中にモニターへ視線を落とすことなく各種情報を得ることができる。

OB

オーバードブーストの頭文字をとった略称。ACの背部ブーストを全開にすることで高加速を得られるOBは、特定の戦術上なくてならない装備である。

SUV

〝Sport Utility Vehicle〟の略。自動車の用途上の分類名。

アクアポリス

海上に浮かんでいる人工島。全てのインフラが電子化され、ほぼ無人で運営されている人工都市。AC用のアリーナもあるが〝コロシアム〟と呼ばれるルール無用の違法な試合を行っており、高い興奮を得たいマニアや、高額の報酬を得たいレイヴンの間で人気の都市である。

アセン

アセンブル、アセンブリの略称。ACの各パーツを選択して組み上げ、調整する一連の作業の総称。

アリーナ

AC同士が戦場さながらの模擬戦闘を行う競技の会場のことであり、競技そのものの名称。本作品の舞台となっている

トーキョーフロントにあるアリーナは以下の3つ。地下の旧発電所を転用した〝アンダーワールド〟海上の浮遊構造体をまるまる一隻使った〝メガフロート〟東京湾埋立地の中央に位置する〝ブレイブ・ニュー・ワールド〟

インサイド

AC用兵装名。ACのコアや肩部などに内蔵される補助装備全般を指す。デコイやダミー、機雷やグレネードなど、その種類は多岐にわたる。

衛星砲

人工衛星に装備された光学式レーザー砲。かつては対要塞攻略などに使用された。衛星軌道上から目標へ、直径10メートルの高出力のレーザー光線を照射する大量破壊兵器。

エネルギーフィールド

新世代機に装備されることが内定しているAC用兵装。ある種のバリアーシステム。機体の全方位にエネルギーフィールドを展開し、物理的および光学的な攻撃の一切を遮断する。ファントム・シリーズに搭載されている同機能では、エネルギー量を膨大に膨らませて急速展開させ、全方位（360度）にフィールドのエネルギーをぶつけて攻撃することが可能になっている。この技術が現状において実用化に至らないのは、高出力のフィールドの発生と維持に必要不可欠なある粒子の存在によるものらしいが、詳細は謎となっている。ただし、方位を限定して出力も低く設定すれば、粒子を使用しない現在の技術でもエネルギーフィールドはACに搭載可能である。

エンブレム

レイヴンが自分の機体に描くマーキングのこと。ある種の自己主張アイテム。レイヴンごとで違ったデザインをしており、機体の識別に一役買っている。

神の座

人工知能群が用意した仮想空間。ギリシャ神話の神のような姿で、ファントム〝0〟以下の死者たちが集う場所。

カラサワ

AC用兵装で腕部用の大口径レーザーライフルの通称。重量があるものの、弾速等に優れ、非常に高い威力を持つ。名称の由来は、開発者の名前だとも、ペットネームだとも、開発コードのもじりだとも言われ、諸説ある。

月光

AC用兵装で腕武器であるレーザーブレードの特定機種の通称。水平に振り抜くとエネルギーブレードから光の刃が放たれ、距離のある敵ACまで届く。その刃が三日月状なことから「月光」と呼ばれる。

コロシアム

アリーナの中でも機体が機能停止するまで戦うという違法な競技を行う会場、および競技名。アクアポリスをはじめ、世界各地のアンダーグラウンドで行われる。アクアポリスには「パワースレイブ」、「フィア・オブ・ザ・ダーク」、「セブンスサン」のコロシアムが存在する。

サイバネティック

いわゆるサイボーグ技術のことで、正しくはサイバネティック・オーガニズム（Cybernetic Organism）と言う。生命体と自動制御系の技術を融合させる行為のことを指し、人工臓器や機械的な義肢など、後付けすることで身体機能の補助や強化を行った。

主砲

ＡＣ用兵装。背部に装備する大口径レーザーキャノンの通称。砲身部とセンサーの2つで1ユニットとして機能する。1門装備すると背部マウントがいっぱいになる大型兵器でもある。

新世代機

現行のＡＣを凌駕する性能を持った新しい兵器群の通称。企業のデモンストレーションなどで、試作機などがアリーナやテレビ番組で露出する場合がある。外観だけなら、ファントム・シリーズに近いとされるが真相は不明。その性能も詳細は不明。ウィクトーリアの内装パーツの一部にはこの新世代機のパーツが使われているが、従来機とのマッチングは、アスマのチューンナップ技術があるからこそであり、普通は組み込めない。

新世代規格

ＡＣを凌駕する性能を持った新兵器の開発は、数十年前から開始されており、それらは仮に〝新世代機〟と呼称されている。コストや信頼性などから、未だに実用化のメドが立たない〝新世代機〟だが、試作のパーツや研究中の武装などが強力なコネクションを持つレイヴンやスポンサーなどから流出することがある。これらの装備品やパーツ類を総じて「新世代規格の～」と言う。

ターンブースタ

ＡＣ用兵装名。左右方向への急速旋回を可能とする追加ブースタ。主に肩パーツの外側へ取り付ける。

ダブルトリガー

両腕に火器（射撃系武器）を装備している場合に限って、両手の武器を同時に発射する攻撃方法。

デコイ

ＡＣ用兵装名。射出しておくと敵機のミサイルを引きつけ、誤爆させる機能を持つ兵装。囮の意味。

電子義眼

機械的に作られた眼球。実際の目と同じだけの機能を持つ。この世界では生体部品で作られたものもあるらしいが、性能は機械式の方が上らしい。

トーキョーフロンティア

人口の爆発的な増大に伴って、現在の日本の東京湾をさらに埋め立て土地を拡張してできた新造都市の名前。アリーナを3つ保有している。

とっつき

ＡＣ用兵装名。ブレードの中でも特殊な部類に入る射突型ブレードのＡＣファンの間で呼ばれるスラング。ブレードと言ってもパイル（杭）を射出するタイプの武器で、至近距離に近づかなければならず、なおかつ発動にタイムラグがあるという、当たりにくい武器の代名詞となっている。使いこなすには相当の技量が必要だが、当たるとダメージも大きく与えられることと、接近戦を強いる男らしいファイトスタイルが求められるところなどから熱狂的なファンがいる武器。

ドラコーン計画

人工知能群と人間をリンクさせることで人が死んだ際に失われる経験をそのまま人工知能に蓄積させる計画。その経験値を使い、最終的には最強の軍隊を作ることを目的とした。人間は人格など不要の「戦闘ユニットの部品」の一つでしかないという点で、悪魔の計画。

ブレード

ＡＣ用兵装名。ＡＣの腕部に装備される近接戦闘用装備全般を指す。大別する

とレーザーブレードと射突型ブレードの2種がある。

ブレオン・トーナメント

　武器をブレードしか装備していないACや、ブレードしか使わない戦術をするACのみで行うトーナメント戦を指す。〝ブレード・オンリー〟の略が語源。しばしばアリーナでは、このような制限されたゲームが組まれる。相応の技量が必要とし、白熱した見ごたえのある試合になるため、人気が高い。

マトリクス共振システム

　人工知能群がAC新世代機などをコントロールするための装置、およびそのシステム全体を指す総称。コクピットにあたる部分を球体状のパーツを核にした補機類と交換することが必要で、この装備を施されたACは無人機となる。核は生体部品と触媒溶液で満たされており、人工知能の意識がそこに宿る。かりそめの脳と言ってもいいものである。

傭兵部隊〝クリプトニューム〟

　ファントム〝0〟が裏から創設に関わった特殊部隊。スゴ腕のレイヴンが集められており、黒づくめの耐Gスーツに、素顔を隠すバイザー、隊員の名前をナンバリングで呼ぶなど、謎の多い組織。

ランカー

　レイヴンの中でも特にアリーナのランキングに登録されている実力者を指す言葉。アリーナに登録された中での評価なので、単純に上位ランカーほど、腕のいいレイヴンというワケではない。

レイヴン

　ACを用いて傭兵稼業を行う者を指す言葉。元々レイヴンとはワタリガラスのことをさす英語。一般生活を営む者とは違う世界に生きる者といったある種のプライドを込めて自称する場合がある。

「レイヴンの戦場」

　この世界のテレビ番組名。その名の通り、レイヴンの戦いに密着したドキュメンタリー番組で、戦場からの中継、アリーナの生中継、楽屋裏での試合のネタばらしや、レイヴンが家族と過ごしている日常風景などが放送されている。企業の裏側に迫るモノなどもあり、とにかくセンセーショナルな内容で人気の番組。ナビゲーターは自身もレイヴンであり上位ランカーであるディモス・ガモス。

［メカニクス・AC］

SC-SSORS（シザース）

　シザース・シスターズの乗る機体。LとRの2機のコンビで、両機とも片腕がレーザーブレード腕（Lは左腕、Rは右腕）になっているのが特徴。背部武器も異なるが、それ以外は色もアセンもまったく同じ。双子らしいコンビネーション攻撃が身上。

⬇R



【製作者：ちいたわからし】

⬇L



【製作者：PN.サイトウタケシ】

イクセス

ティフィン・シードルが駆る機体。全身が赤に染め上げられている。今は亡き義母の形見の機体でもある。



【製作者：PN.ルシアン】

ウィクトーリア

鴉山深月こと〝ダブルハート〟が駆るAC。OBメインのコアに、センサー系をカスタムしたワンオフの頭部を乗せた機体を差す。試合ごとに腕部と脚部を変えており、特定のアセンを持たない。頭部とコア以外は塗装すらしないこともあるが、カラーリングは白を基調に赤と金色をポイントで塗っている。アスマが監督兼メカニックとなってからは、軽量2脚で固定化された。徹底的なチューンナップと、新世代規格機のパーツを導入しており、推力全開にして空中機動が可能となっている。

ウォーハンマー

カレル・ケレンスキが駆る重量級のAC。通称「試作武器のオンパレード」と呼ばれる腕部には大口径レーザーとエネルギーフィールド発生装置の両方を内蔵しており、変形させることで各々の能力を発揮できる。



【製作者：PN.キット】

エヴィデンス

ランス型の大型射出ブレードと、スタビライザー一体型の背部ブースタを装備した、騎士を模したカスタム機。シンサの乗機。



【製作者：PN.ニワ】

オルトリンデ

レヴァインが駆る、重量級コアを中心に中量級2脚をアセンしたAC。全身がホワイトで塗装され、エンブレムとポイントカラーでブルーを配している。



【製作者：PN.La neige】

黒いウィクトーリア

正式名称無し。アスマの意識体が量産した〝抗体〟としてのAC。搭乗者はマトリクス共振システムによるミヅキ。

黒い奴

〝謎の戦闘ユニット〟〝黒い奴〟〝BLACK・ONE〟と、登場時期によって複数の呼称を持つ大型の人型兵器。並のACの2倍近い体躯に、可変機構による空中飛行能力を持つ。機体周辺にはある種のバリアーとも言えるエネルギーフィールドを張り、あらゆるダメージを軽減させる。遠隔操縦型の無人機であり、マトリクス共振システムによってオルクス・ノワール卿が操縦している。新世代機の指揮機として位置付けられており、戦闘人工知能群はこの機体システムを経由して情報をリンクしている。

シルヴィーユ

軽量級コアを中心としたアセンでディモス・ガモスのAC。全身は蛍光がかったマゼンタとシルバーで塗装されている。軽量級の脚部が標準だが、スポンサーより提供された高速浮遊ユニット（フロート脚）も使用する。右腕の大型チェーンガンが特徴でもある。

【製作者：PN.トビ】





➡軽量級脚部
⬆フロート脚

タイクホワイト

「白い野良犬」の名が示すとおり全身真っ白で塗装されたAC。ブーストが強化された軽量コアに、カスタム化された脚パーツを装備しているのが特徴。ゼラの乗機。



【製作者：PN.ダメナント】

ツァウバーリート

キアーヴェ・ディ・ソルが駆るバランスの良いアセンのAC。グリーンとホワイトの塗り分けが美しい。

ノワール

オルクス・ノワール卿がアリーナで使用するAC。外見は平凡な機体だが、その実体は新世代機開発のベースとなった無人機のプロトタイプである。



【製作者：PN.無人戦闘機】

バイブ・カハ

レイヴンはモリグーのAC。派手さはないがバランスの良い機体で、全身をシルバーホワイトとブルーメタリックで塗り分けられている。



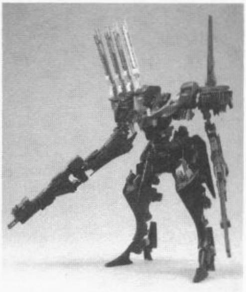
【製作者：佐田洋光】

ファントム・シリーズ

新世代機の設計データを元にして、ファントム〝0〟が生みだした人型兵器。マトリクス共振システムで稼働する無人兵器で、人間の操縦技量を超えた機動と、暴力的なまでの火力を持ち、単独での飛行能力を持つ、また、一定以下のレベルの攻撃を完全に無効化する高出力の全方位エネルギーフィールドを展開できる、すでにACの領域を超えた存在。〝御使い〟の尖兵として、共に世界各国の破壊活動を行っている。

ファントムI

ファントム・シリーズの試作機ともいえる戦闘ユニット。エッジの効いた装甲で包まれた細身のシルエットの機体で、生産型と同様の飛行能力とエネルギーフィールドを持つ。



【製作者:PN.アルセルナ】

ファントムII

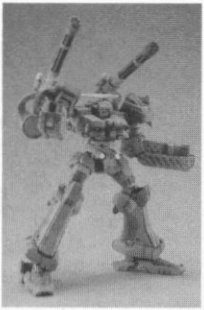
〝I〟と同様にファントム・シリーズの試作機。逆脚関節を持つ脚部を装備している。生産型と同様の飛行能力とエネルギーフィールドを持つ。



【製作者:PN.アルセルナ】

ボア

バランス重視の手堅いアセンに火器を積めるだけ積んだ、一点突破型のアセンのAC。〝黒い奴〟との決戦時にアスマが深月をサポートするために組み上げ、自らが搭乗した。



【製作者:PN.HAS製作所】

御使い

〝黒い奴〟をプロトタイプとして開発された機体で、外観は〝BLACK・ONE〟と同じだが、全身の装甲は半透明の紅い色をしている。全部で13機存在していると言われており、世界各国に出現して破壊活動を行う。

リーフ

全長4mほどのクローバー状の翼を持つ小型戦闘機械。山岳地帯だろうが海上だろうが問題なく群れで侵攻してくる。〝御使い〟と〝ファントム・シリーズ〟を補佐する兵器。ホバーリング程度の空中機動はできるが、飛行性能はさほど高くない。主兵装は四連滑空砲。

DENGEKI HOBBY BOOKS

アーマード・コア
ブレイブ ニュー ワールド

発行　2011年3月25日初版発行

著　神野淳一
キャラクターデザイン　村上ヒサシ
ACデザイン　後藤明寛（フロム・ソフトウェア）
CG製作　可児裕行（フロム・ソフトウェア）
デザイン協力　NAOKI
企画協力　コトブキヤ

発行者　高野 潔

発行所　株式会社アスキー・メディアワークス
〒160-8326　東京都新宿区西新宿4-34-7
電話 03-6866-7313（編集部）

発売元　株式会社角川グループパブリッシング
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
電話 03-3238-8605（営業）

装幀　DOMON MINDS
デザイン　BEE-PEE

印刷・製本　凸版印刷株式会社

協力　株式会社フロム・ソフトウェア

Printed in Japan
定価はカバーに表示してあります。
ISBN978-4-04-870455-7 C0076

アンケートご協力のお願い

本書をお読みになってどんな感想をお持ちになりましたか？　アンケートにご協力ください。
以下のURLまたは右のQRコード（携帯カメラ用）で、小社アンケートページにアクセスできます。アンケートにお答えいただいた方の中から、抽選で年1回100名の方に記念品を差し上げます。なお、当選者の発表は記念品の発送をもって代えさせていただきます。　0455

https://ssl.asciimw.jp/dengeki/cgi-bin/hobbybooks/index.html

※ご記入いただいたお客様の個人情報は、記念品の発送に利用するほか、当社グループ各社の商品やサービスのご案内などに利用させていただく場合がございます。また、個人情報を識別できない形で統計処理をした上で、当社グループ各社の商品企画やサービスの向上に役立てるほか、第三者に提供することがあります。

DENGEKI HOBBY BOOKS

9784048704557

1920076012006

ISBN978-4-04-870455-7
C0076 ¥1200E

ASCII MEDIA WORKS

発行●アスキー・メディアワークス

定価：本体1,200円 ※消費税が別に加算されます

深月の周囲に蠢く陰謀。
鋼鉄の激突の果てに見るものは…。

最後の国家間戦争と言われる「大破壊」により壊滅的な環境破壊を受けた地球。その地上には「レイヴン」と呼ばれる傭兵の乗り込む人型兵器、＜アーマード・コア＞の支配する戦場があった。愛機“ウィクトーリア”を駆る新米レイヴン、深月は亡き養父の仲間だったというアスマと出会い、この世界の真理へと近づく。